

市道水泥南高井線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平井遺跡2次調査

水 泥 遺 跡

－1次・2次・3次調査－

高井遺跡1次調査

南 高 井 遺 跡

－2次・3次調査－

2008

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

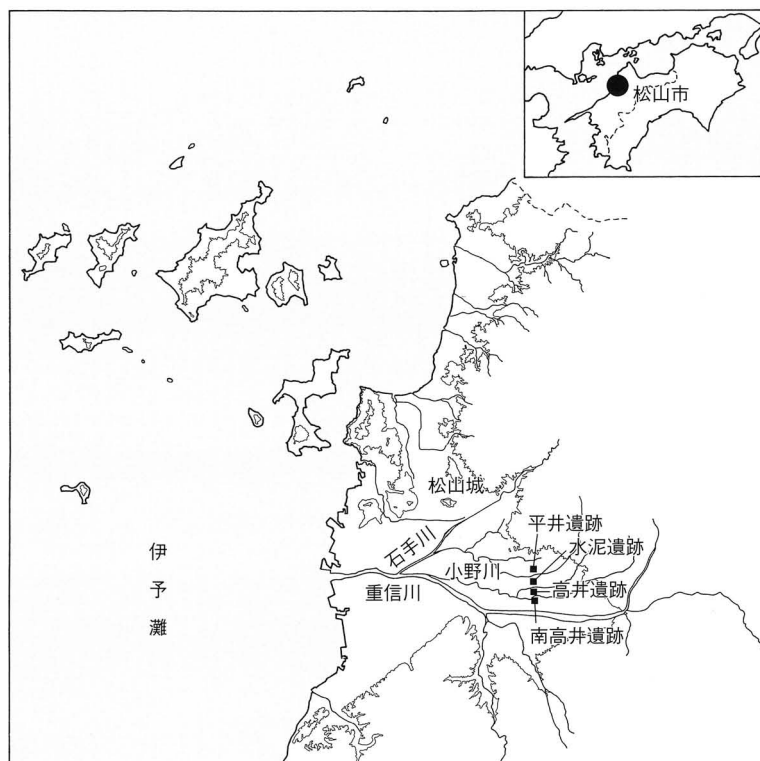
市道水泥南高井線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ひら い 平 井 遺 跡 2 次 調 査  
み 泥 遺 跡

－ 1 次 ・ 2 次 ・ 3 次 調 査 －

たか い 高 井 遺 跡 1 次 調 査  
みなみ たか い 南 高 井 遺 跡

－ 2 次 ・ 3 次 調 査 －



2008

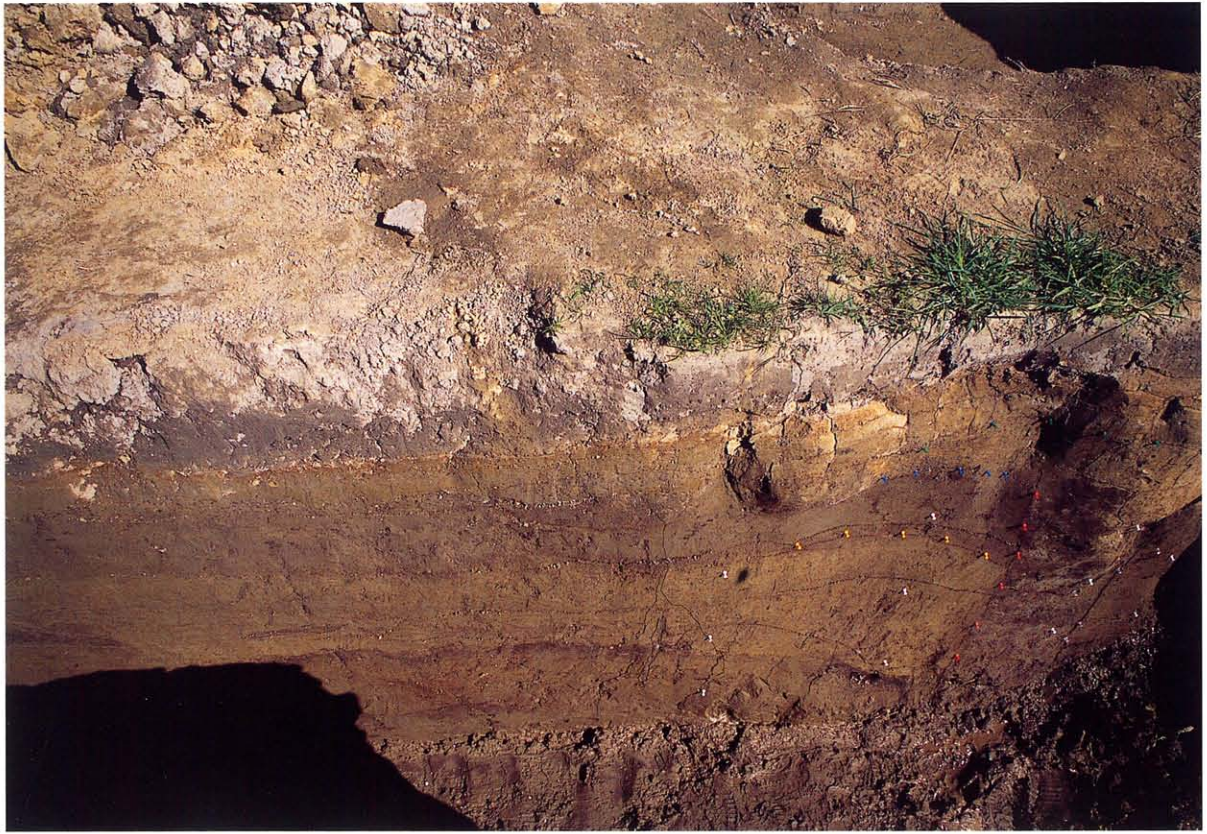
松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



▼ ▲ 巻頭図版1 調査地全景(南より)



(東壁)



(西壁)

## 序

本書は平成14年度から17年度にかけて実施した松山市道『水泥南高井線』道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

本書掲載の7遺跡が所在する松山市水泥・高井地区は松山平野東部にあり、調査区のほとんどが埋蔵文化財包蔵地外となっていますが、縄文時代の終わりから中世までの集落に関する遺跡が存在していたことが、近年の発掘調査により明らかになってきました。

今回の調査では、主に古墳時代から中世までの集落遺構や水田等の生産遺構を発見しました。古墳時代では、水泥遺跡3次調査において竪穴式の石室や土坑を検出し、古代から中世では水泥遺跡や高井遺跡から掘立柱建物址や溝、土坑のほか水田耕作に伴う畦畔や鋤址、さらには畑作に伴う畝溝等を多数確認しました。とりわけ水田や畑遺構の検出は、水泥・高井地区における古代から中世までの集落様相を解明する上で貴重な資料となるものです。また、高井遺跡からは確認例の少ない地震による活断層跡が発見されました。

このような成果をあげられましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のおかげと、心より感謝申し上げます。また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面において活用いただければ幸いに存じます。

平成20年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団  
理事長 中村時広

# 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成14年12月～平成18年3月に実施した市道水泥南高井線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書報告の遺構は、呼称名を略号で記述した。掘立柱建物址：掘立、溝：S D、自然流路：S R、土坑：S K、鋤址状遺構：鋤址、畝状遺構：畝、ピット：S P、性格不明遺構：S Xである。
3. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。
4. 遺構の測量は、担当調査員の指示のもと、調査補助員・作業員が実施した。
5. 遺物の実測・製図、遺構の作図・製図は、担当調査員の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、本多智絵、戸川安子、平岡華美、吉岡智美、大西陽子、岡崎政信、山邊進也がおこなった。
6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西がおこなった。
7. 本書報告の遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8. 第10章自然科学分析は、株式会社古環境研究所に業務委託した。
9. 調査において、国土座標軸測量をハート設計株式会社に、航空写真撮影では愛媛航空株式会社に業務委託した。
10. 調査及び報告書作成においては、広島大学後藤秀昭氏にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
11. 本書の執筆は宮内慎一・水本完児がおこなった。編集は宮内が担当し、水口、山下の協力を得た。浄書は宮内の指導のもと、平岡が担当した。
12. 本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
13. 製版 白黒図版－175線  
印刷 オフセット印刷  
用紙 白黒図版－マットコート

# 本文目次

第1章	はじめに	〔宮内〕	1	
	1. 調査に至る経緯	2. 刊行組織	3. 歴史的環境	
第2章	調査の概要	〔宮内〕	6	
	1. 調査の経過	2. 層位		
第3章	平井遺跡2次調査	〔水本〕	15	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第4章	水泥遺跡1次調査	〔水本〕	33	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第5章	水泥遺跡2次調査	〔水本〕	59	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第6章	水泥遺跡3次調査	〔水本〕	81	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第7章	高井遺跡1次調査	〔水本〕	107	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第8章	南高井遺跡2次調査	〔水本〕	161	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第9章	南高井遺跡3次調査	〔水本〕	199	
	1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第10章	自然科学分析	〔株式会社 古環境研究所〕	227	
	I. 高井遺跡1次調査における植物珪酸体分析			
	II. 高井遺跡1次調査における花粉分析			
	III. 高井遺跡1次調査における放射性炭素年代測定結果			
第11章	考察	〔広島大学 後藤秀昭〕	239	
	遺跡にあらわれた中央構造線・活断層帯・重信断層の古地震			
第12章	調査の成果と課題	〔宮内〕	245	

# 挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	遺跡分布図（縮尺1／25,000）	3
第2章	調査の概要	
第2図	調査地測量図・土層柱状図（1）（縮尺1／2,500・1／40）	9
第3図	調査地測量図・土層柱状図（2）（縮尺1／2,500・1／40）	11
第3章	平井遺跡2次調査	
第4図	調査区測量図（縮尺1／800）	19
第5図	1区土層図（縮尺1／50）	20
第6図	2区土層図（1）（縮尺1／50）	21
第7図	2区（2）・3区土層図（縮尺1／50）	22
第8図	1区遺構配置図（縮尺1／100）	23
第9図	S D101測量図（縮尺1／60）	24
第10図	S D101出土遺物実測図（縮尺1／4）	25
第11図	S R101出土遺物実測図（縮尺1／2）	
第12図	S X101出土遺物実測図（縮尺1／4）	27
第13図	S P101～106測量図（縮尺1／20）	28
第14図	第V①層・地点不明出土遺物実測図（縮尺1／4・1／2）	29
第4章	水泥遺跡1次調査	
第15図	調査区測量図（縮尺1／1,500）	36
第16図	1区土層図（縮尺1／50）	38
第17図	2区・3区（1）土層図（縮尺1／50）	39
第18図	3区土層図（2）（縮尺1／50）	40
第19図	4区・5区土層図（縮尺1／50）	41
第20図	1区遺構配置図（1）（縮尺1／200）	42
第21図	1区遺構配置図（2）（縮尺1／200）	43
第22図	2区遺構配置図（縮尺1／200）	44
第23図	3区遺構配置図（1）（縮尺1／200）	45
第24図	3区遺構配置図（2）（縮尺1／200）	46
第25図	4区遺構配置図（1）（縮尺1／200）	47
第26図	4区遺構配置図（2）（縮尺1／200）	48
第27図	5区測量図（縮尺1／200）	49
第28図	S D101測量図（縮尺1／100）	51
第29図	S D102測量図（縮尺1／100）	52
第30図	S D301測量図・出土遺物実測図（縮尺1／100・1／3）	53
第31図	S D302測量図（縮尺1／100）	54



第32図	S P 301・302・303測量図 (縮尺 1/20)	56
第33図	第Ⅱ②層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/1)	57
第5章 水泥遺跡2次調査		
第34図	調査区測量図 (縮尺 1/1,000)	62
第35図	1区・2区(1)土層図 (縮尺 1/50)	64
第36図	2区(2)・3区(1)土層図 (縮尺 1/50)	65
第37図	3区(2)・4区(1)土層図 (縮尺 1/50)	66
第38図	4区土層図(2) (縮尺 1/50)	67
第39図	1区遺構配置図 (縮尺 1/150)	68
第40図	2区遺構配置図 (縮尺 1/150)	69
第41図	3区測量図 (縮尺 1/150)	70
第42図	4区遺構配置図 (縮尺 1/150)	71
第43図	S R 201出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	72
第44図	S D 201断面図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/3)	73
第45図	S D断面図 (縮尺 1/20)	76
第46図	第Ⅲ①層・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/4)	78
第6章 水泥遺跡3次調査		
第47図	調査区測量図 (縮尺 1/1,500)	84
第48図	1区土層図(1) (縮尺 1/50)	86
第49図	1区(2)・2区(1)土層図 (縮尺 1/50)	87
第50図	2区土層図(2) (縮尺 1/50)	88
第51図	2区土層図(3) (縮尺 1/50)	89
第52図	2区土層図(4) (縮尺 1/50)	90
第53図	1区遺構配置図(1) (縮尺 1/150)	91
第54図	1区遺構配置図(2) (縮尺 1/150)	92
第55図	2区遺構配置図(1) (縮尺 1/300)	93
第56図	2区遺構配置図(2) (縮尺 1/300)	94
第57図	3区遺構配置図 (縮尺 1/150)	95
第58図	S D 202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/50・1/3)	96
第59図	S D 203測量図 (縮尺 1/50)	97
第60図	S P 201~205測量図 (縮尺 1/10)	98
第61図	S D 201測量図 (縮尺 1/50)	100
第62図	S K 201測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	101
第63図	301号経塚測量図(1) (縮尺 1/60)	102
第64図	301号経塚測量図(2) (縮尺 1/60)	103
第65図	301号経塚出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	105
第66図	包含層・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	

## 第7章 高井遺跡1次調査

第67図	調査区測量図 (縮尺1/3,000) .....	110
第68図	1D区土層図 (縮尺1/50) .....	114
第69図	1E区・1B区(1)土層図 (縮尺1/50) .....	115
第70図	1B区(2)・1F区土層図 (縮尺1/50) .....	116
第71図	2A区・2B区・2C区土層図 (縮尺1/50) .....	117
第72図	2H区・2D区・3C区土層図 (縮尺1/50) .....	118
第73図	3B区・4D区土層図 (縮尺1/50) .....	119
第74図	4E区・4F区・4G区(1)土層図 (縮尺1/50) .....	120
第75図	4G区(2)・5A区・5B区(1)土層図 (縮尺1/50) .....	121
第76図	5B区(2)土層図 (縮尺1/50) .....	122
第77図	1A・1B・1D・1E区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	123
第78図	1C・1F・2A・2B・2F・2G区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	125
第79図	2C・2D・2E・2G・2H・2I区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	127
第80図	3A・3B・3C・3D区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	129
第81図	4A・4B・4C・4D・4E・4F区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	131
第82図	4G・5A・5B区遺構配置図 (縮尺1/200) .....	133
第83図	201号石室測量図(1) (縮尺1/20) .....	136
第84図	201号石室測量図(2)・出土遺物実測図 (縮尺1/20・1/3) .....	137
第85図	掘立501測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/2) .....	138
第86図	SD202・301・302・401~403測量図 (縮尺1/50) .....	140
第87図	SD406・407測量図 (縮尺1/50) .....	142
第88図	SD408測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/3) .....	143
第89図	SK202測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/30・1/3) .....	144
第90図	SK403測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/3) .....	
第91図	SK501測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/50・1/3) .....	145
第92図	SK203・301・402・502・503測量図 (縮尺1/50) .....	146
第93図	SD101・102測量図 (縮尺1/50) .....	149
第94図	SD103・104・201・404・405測量図 (縮尺1/50) .....	150
第95図	SD409・501測量図 (縮尺1/50) .....	151
第96図	SK201・401測量図 (縮尺1/50) .....	152
第97図	ピット出土遺物実測図 (縮尺1/3) .....	153
第98図	第Ⅱ①層出土遺物実測図 (縮尺1/3) .....	154
第99図	第Ⅳ①層出土遺物実測図 (縮尺1/3) .....	155
第100図	地点不明出土遺物実測図 (縮尺1/3) .....	156

## 第8章 南高井遺跡2次調査

第101図	調査区測量図 (縮尺1/800) .....	164
第102図	1区・2区(1)土層図 (縮尺1/50) .....	167

第103図	2区(2)・3区土層図(縮尺1/50).....	168
第104図	4区・5区(1)土層図(縮尺1/50).....	169
第105図	5区(2)・6区(1)土層図(縮尺1/50).....	170
第106図	6区土層図(2)(縮尺1/50).....	171
第107図	1区・2区遺構配置図(1)(縮尺1/150).....	172
第108図	2区遺構配置図(2)(縮尺1/150).....	173
第109図	2区遺構配置図(3)(縮尺1/150).....	174
第110図	2区遺構配置図(4)(縮尺1/150).....	175
第111図	3区遺構配置図(1)(縮尺1/150).....	176
第112図	3区遺構配置図(2)(縮尺1/150).....	177
第113図	4区遺構配置図(縮尺1/150).....	178
第114図	5区遺構配置図(縮尺1/150).....	179
第115図	6区遺構配置図(縮尺1/150).....	180
第116図	S K 203測量図・出土遺物実測図(縮尺1/20・1/3).....	182
第117図	S K 204測量図(縮尺1/20).....	183
第118図	S K 205・206測量図(縮尺1/20)	
第119図	掘立401測量図(縮尺1/50).....	184
第120図	S D 601測量図・出土遺物実測図(縮尺1/80・1/3).....	185
第121図	S D 201断面図・出土遺物実測図(縮尺1/20・1/3).....	186
第122図	S D 202~204・301~303・401断面図(縮尺1/20).....	187
第123図	S K 202・301測量図(縮尺1/20).....	189
第124図	S K 201測量図(縮尺1/20).....	190
第125図	包含層・地点不明(1)出土遺物実測図(縮尺1/3).....	193
第126図	地点不明出土遺物実測図(2)(縮尺1/3).....	194
第9章 南高井遺跡3次調査		
第127図	調査区測量図(縮尺1/800).....	202
第128図	1区・2A区土層図(縮尺1/50).....	204
第129図	2B区土層図(縮尺1/50).....	205
第130図	2C区土層図(1)(縮尺1/50).....	206
第131図	2C区(2)・2D区(1)土層図(縮尺1/50).....	207
第132図	2D区土層図(2)(縮尺1/50).....	208
第133図	1区遺構配置図(縮尺1/150).....	209
第134図	2A区・2B区遺構配置図(縮尺1/150).....	210
第135図	2C区遺構配置図(1)(縮尺1/150).....	211
第136図	2C区遺構配置図(2)(縮尺1/150).....	212
第137図	2D区遺構配置図(1)(縮尺1/150).....	213
第138図	2D区遺構配置図(2)(縮尺1/150).....	214
第139図	S R 201出土遺物実測図(縮尺1/3).....	215

第140図	S K 201測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/3・1/6).....	217
第141図	S K 202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/3・1/6).....	218
第142図	S K 203測量図 (縮尺 1/20).....	219
第143図	S P 201・210～213測量図 (縮尺 1/20).....	220
第144図	S P 202～209測量図 (縮尺 1/20).....	221
第145図	包含層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3・1/6).....	223
第146図	包含層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3).....	224
第147図	地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	
第10章 自然科学分析		
第148図	高井遺跡 1次調査における植物珪酸体分析結果.....	231
第149図	植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真.....	232
第150図	高井遺跡 1次調査の花粉・孢子.....	236
第11章 考察		
第151図	四国北西部の地質と活断層の分布.....	242
第152図	重信断層周辺の詳細地形分類.....	243
第153図	発掘地点周辺のステレオ空中写真	
第154図	高井遺跡 1次調査地 5 B区東壁に現れた重信断層周辺のスケッチ.....	244

## 表 目 次

第2章 調査の概要	
表 1	調査地一覧..... 6
表 2	検出遺構一覧..... 13
第3章 平井遺跡 2次調査	
表 3	検出遺構一覧..... 22
表 4	S D 101出土遺物観察表 (土製品)..... 31
表 5	S R 101出土遺物観察表 (石製品)
表 6	S X 101出土遺物観察表 (土製品)
表 7	第 V ①層出土遺物観察表 (土製品)..... 32
表 8	地点不明出土遺物観察表 (土製品)
表 9	地点不明出土遺物観察表 (石製品)
第4章 水泥遺跡 1次調査	
表 10	検出遺構一覧..... 50
表 11	S D 301出土遺物観察表 (土製品)..... 58
表 12	第 II ②層出土遺物観察表 (土製品)
表 13	第 II ②層出土遺物観察表 (石製品)
第5章 水泥遺跡 2次調査	

表14	検出遺構一覽	72
表15	S R 201出土遺物觀察表 (土製品)	80
表16	S D 201出土遺物觀察表 (土製品)	
表17	第Ⅲ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表18	地点不明出土遺物觀察表 (土製品)	
表19	地点不明出土遺物觀察表 (石製品)	80
第6章 水泥遺跡3次調査		
表20	検出遺構一覽	95
表21	S D 202出土遺物觀察表 (土製品)	106
表22	S K 201出土遺物觀察表 (土製品)	
表23	301号経塚出土遺物觀察表 (土製品)	
表24	第Ⅲ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表25	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (土製品)	
表26	地点不明出土遺物觀察表 (土製品)	
表27	地点不明出土遺物觀察表 (鉄製品)	
第7章 高井遺跡1次調査		
表28	検出遺構一覽	112
表29	201号石室出土遺物觀察表 (土製品)	158
表30	掘立501出土遺物觀察表 (装身具)	
表31	S D 408出土遺物觀察表 (土製品)	
表32	S K 202出土遺物觀察表 (土製品)	
表33	S K 202出土遺物觀察表 (鉄製品)	
表34	S K 403出土遺物觀察表 (土製品)	
表35	S K 403出土遺物觀察表 (石製品)	159
表36	S K 501出土遺物觀察表 (土製品)	
表37	ピット出土遺物觀察表 (土製品)	
表38	ピット出土遺物觀察表 (鉄製品)	
表39	第Ⅱ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表40	第Ⅱ①層出土遺物觀察表 (鉄製品)	
表41	第Ⅳ①層出土遺物觀察表 (土製品)	
表42	地点不明出土遺物觀察表 (土製品)	160
表43	地点不明出土遺物觀察表 (鉄製品)	
第8章 南高井遺跡2次調査		
表44	検出遺構一覽	166
表45	S K 203出土遺物觀察表 (土製品)	196
表46	S D 601出土遺物觀察表 (土製品)	
表47	S D 201出土遺物觀察表 (土製品)	
表48	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (土製品)	

表49	第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）	
表50	第Ⅰ層出土遺物観察表（土製品）	197
表51	地点不明出土遺物観察表（土製品）	
表52	地点不明出土遺物観察表（石製品）	
表53	地点不明出土遺物観察表（鉄製品）	
第9章 南高井遺跡3次調査		
表54	検出遺構一覧	209
表55	S R 201出土遺物観察表（土製品）	225
表56	S K 201出土遺物観察表（土製品）	
表57	S K 202出土遺物観察表（土製品）	
表58	S K 202出土遺物観察表（石製品）	
表59	第Ⅲ③層出土遺物観察表（土製品）	
表60	第Ⅲ②層出土遺物観察表（土製品）	
表61	地点不明出土遺物観察表（土製品）	226
表62	地点不明出土遺物観察表（玉類）	
表63	地点不明出土遺物観察表（石製品）	
第10章 自然科学分析		
表64	高井遺跡1次調査における植物珪酸体分析結果	230
表65	高井遺跡1次調査における花粉分析結果	235
第11章 考察		
表66	放射性炭素年代測定結果	244

## 写真図版目次

巻頭図版1 調査地全景（南より）

巻頭図版2 高井遺跡1次調査地 断層写真

### 第3章 平井遺跡2次調査

図版1 1. 調査地全景（北より）

2. 東壁土層（西より）

図版2 1. 遺構検出状況（北より）

2. 完掘状況（南より）

図版3 1. S D 101検出状況（東より）

2. S X 101検出状況（西より）

図版4 1. 出土遺物（S X 101：7・11・19、S R 101：6、第V①層：23・24、地点不明：33）

### 第4章 水泥遺跡1次調査

- 図版5 1. 調査地全景（北より）  
2. 3区東壁土層（南西より）
- 図版6 1. 1区完掘状況（北より）  
2. 2区完掘状況（南より）
- 図版7 1. 3区完掘状況（南より）  
2. 4区完掘状況（南東より）
- 図版8 1. 出土遺物（S D301：34～36、第Ⅱ②層：38・39・41～49）  
第5章 水泥遺跡2次調査
- 図版9 1. 調査地全景（北より）  
2. 4区西壁土層（東より）
- 図版10 1. 1区完掘状況（南より）  
2. 2区完掘状況（南より）
- 図版11 1. 4区遺構検出状況（南より）  
2. 4区完掘状況（南東より）
- 図版12 1. 出土遺物（S R201：50・52、第Ⅲ①層：54、地点不明：58・61・62）  
第6章 水泥遺跡3次調査
- 図版13 1. 調査地全景（北より）  
2. 1区東壁土層（西より）
- 図版14 1. 1区完掘状況（1）（北より）  
2. 1区完掘状況（2）（北より）
- 図版15 1. 2区完掘状況（北より）  
2. 301号経塚検出状況（東より）
- 図版16 1. 301号経塚半截状況（南より）  
2. 301号経塚最終面検出状況（南西より）
- 図版17 1. 出土遺物（S D202：63、301号経塚：65～67・70・71・骨1、第Ⅳ層：74、地点不明：79）  
第7章 高井遺跡1次調査
- 図版18 1. 調査地全景（北より）  
2. 1D区東壁土層（西より）
- 図版19 1. 1B区完掘状況（北より）  
2. 1D区完掘状況（南より）
- 図版20 1. 1E区完掘状況（南より）  
2. 1C区完掘状況（北より）
- 図版21 1. 2A区完掘状況（北より）  
2. 2D区完掘状況（西より）
- 図版22 1. 3A区完掘状況（南より）  
2. 3B区完掘状況（北より）

- 図版23 1. 3 C区完掘状況（北より）  
2. 4 F区完掘状況（南より）
- 図版24 1. 4 G区完掘状況（南より）  
2. 5 B区完掘状況（北より）
- 図版25 1. 201号石室検出状況（北より）  
2. 201号石室遺物出土状況（北西より）
- 図版26 1. 掘立501検出状況（北西より）  
2. 掘立501耳環出土状況（北東より）
- 図版27 1. 出土遺物（201号石室：80、掘立501：81、S K202：84～87、S K403：89、S K501：90、S P305：93、第Ⅱ①層：97～99、第Ⅳ①層：101・107）
- 図版28 1. 出土遺物（第Ⅳ①層：113・115・117・118、地点不明：123・127・130・131・133・134）

#### 第8章 南高井遺跡2次調査

- 図版29 1. 調査地全景（南より）  
2. 1区東壁土層（西より）
- 図版30 1. 1区完掘状況（東より）  
2. 2区完掘状況（南より）
- 図版31 1. 3区完掘状況（北より）  
2. 4区完掘状況（北より）
- 図版32 1. 5区完掘状況（南より）  
2. 6区完掘状況（北より）
- 図版33 1. S K203検出状況（南より）  
2. S K301検出状況（南より）
- 図版34 1. 出土遺物（S K203：135、S D601：137・138）
- 図版35 1. 出土遺物（第Ⅲ層：148・152・153・155、第Ⅰ層：156・157、地点不明：163・164・169・170）
- 図版36 1. 地点不明出土遺物

#### 第9章 南高井遺跡3次調査

- 図版37 1. 調査地全景（北より）  
2. 2 C区東壁土層（西より）
- 図版38 1. 1区完掘状況（東より）  
2. 2 C区完掘状況（北より）
- 図版39 1. 2 D区完掘状況（北より）  
2. S R201遺物出土状況（東より）
- 図版40 1. S K201遺物出土状況（東より）  
2. S K202遺物出土状況（南より）
- 図版41 1. 出土遺物（S R201：173、S K201：176・177、第Ⅲ③層：186、地点不明：220・221）
- 図版42 1. 第Ⅲ③層出土遺物



# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2001（平成13）年と2003（平成15）年に、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地北側には松山市道小野3号線関連遺跡として古市遺跡や五楽遺跡があり、弥生時代前期から中世までの集落関連遺構や遺物が確認されている。

これらのことから、文化財課と道路建設課は工事予定地内の埋蔵文化財調査について協議をおこない、事前の試掘調査を実施することが決定した。

試掘調査は道路建設課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが試掘調査契約を結び、2003（平成15）年1月より実施した。なお、試掘調査は平成14年度から平成17年度までの4年間で8回おこなった。試掘調査の結果、ほぼ申請地全体の8割の範囲に弥生時代から中世までの遺構や包含層の存在を確認した。

この結果を受け、埋文センター及び文化財課と道路建設課の三者は協議を重ね、埋蔵文化財を確認した地域を対象とした発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成14年度から17年度までの約4年間で4遺跡7次の調査を実施した。調査は埋文センターと道路建設課とが調査契約を結び、埋文センターが主体となり、弥生時代から中世までの集落構造や生産域の確認を主目的として実施した。

なお、発掘調査における遺跡名については現在の町名を踏襲し、申請地北側から南側へ向けて、平井遺跡、水泥遺跡、高井遺跡、南高井遺跡とした。

## 2. 刊行組織（平成20年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居 貴美
事務局	局長	石丸 修
	企画官	仙波 和典
	企画官	田中 郁夫
	企画官	田浦 雅文
文化財課	課長	家久 則雄
	主幹	森川 恵克
	主査	栗田 正芳
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村 時広
	事務局長	吉岡 一雄
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松 幹雄

次長兼調査担当リーダー	田城 武志
主任調査員	梅木 謙一
調査員	宮内 慎一
調査員	水本 完児
調査員	大西 朋子 (写真担当)

### 3. 歴史的環境 (第1図)

ここでは、調査地北方にある小野・平井地区、及び西方の来住・久米地区に所在する遺跡の概要を時代別に説明する。

#### 旧石器時代

松山平野内では旧石器時代の遺構は確認されておらず、遺物はいずれも採集資料あるいは単独出土である。この地区では五郎兵衛谷古墳や久米窪田V遺跡出土の角錘状石器や、久米山田池で採集されたナイフ形石器が知られている。

#### 縄文時代

小野地区にある古市遺跡2次調査地からは、縄文時代晩期の土器が出土した土坑が報告されている。一方、来住・久米地区では久米窪田森元遺跡検出の土坑内から、縄文時代後期に時期比定される一括性の高い土器群が出土し、さらには久米窪田I遺跡では竪穴式住居内より同時期の遺物が出土している。また、久米高畑遺跡36次調査検出の円形竪穴式住居内より、縄文時代晩期中葉の土器群が出土し、同26次調査・35次調査では同時期の土坑が検出されている。

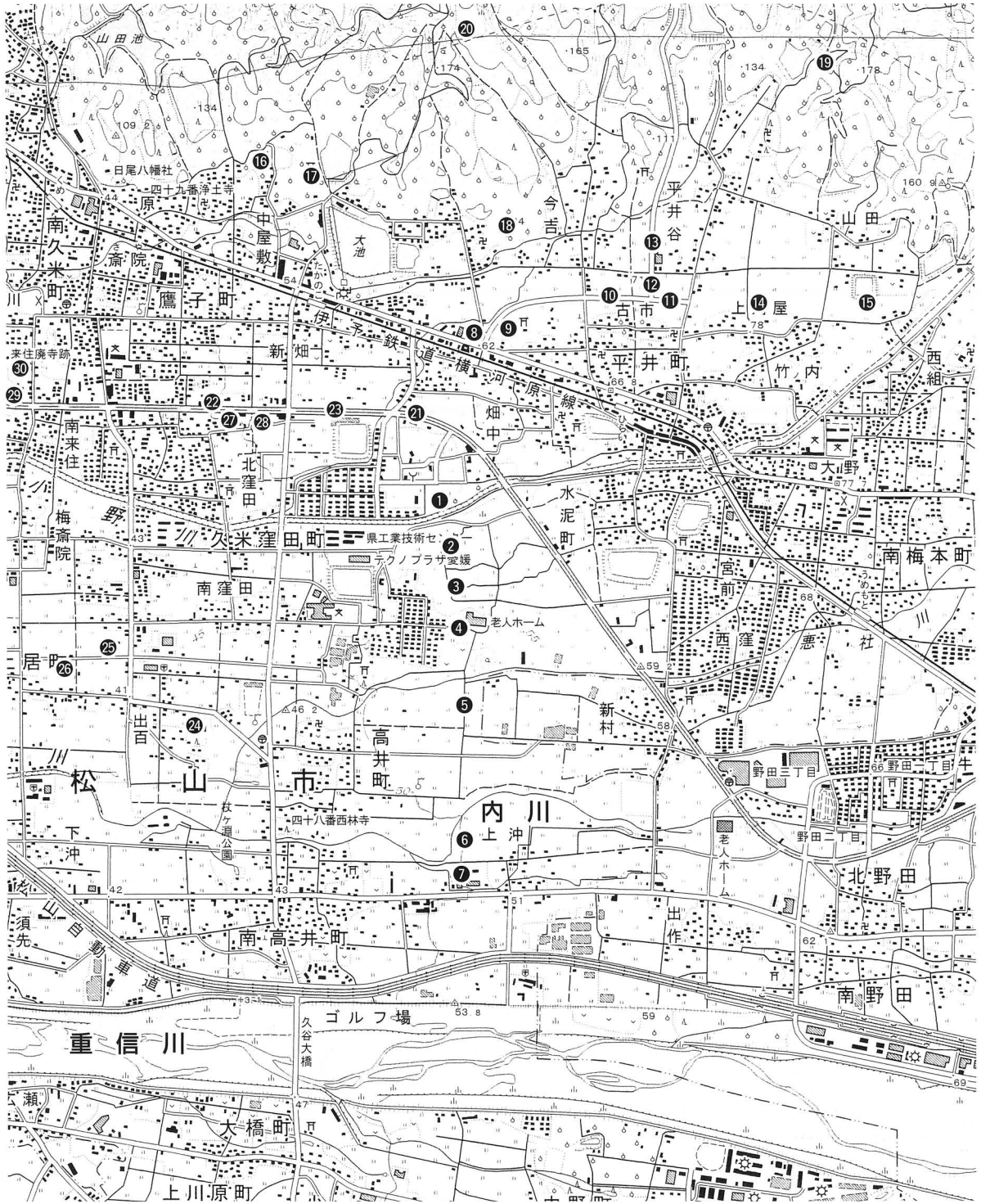
#### 弥生時代

この地区で最も注目されるものが、弥生時代前期末から中期初頭の集落遺構や遺物である。小野・平井地区では古市遺跡2次調査や五楽遺跡より該期の土坑群が検出されている。来住・久米地区では久米高畑遺跡23次・25次調査より環濠と推測される複数の大溝が検出されているほかに、来住台地上に広く展開する同時期の遺跡からは多数の土坑が確認されている。

中期の遺構・遺物の検出例は少なく、久米地区にある久米窪田古屋敷C遺跡より中期後半の土器を伴った大溝が報告されている。そのほか、来住廃寺15次調査では台地の落ち部に同時期の土器が投棄された状態で出土している。この地区における中期集落の様相は不明な点が多く、今後の解明が急務となる。後期では集落の広がり解明されておらず、遺跡が点在する状況である。久米地区にある南久米片廻り遺跡では円形竪穴住居内より終末期の土器のほかに鉄鏃が出土している。また、久米窪田I～V遺跡(国道11号松山東環状線関連遺跡)や来住廃寺域内の調査において後期の遺構や遺物が確認されている。

#### 古墳時代

小野地区では、近年の発掘調査により古墳時代集落の様相が解明されつつある。下苅屋遺跡1～3次調査では竪穴式住居や土坑、掘立柱建物などの集落関連遺構が多数確認されている。とりわけ、住居内からは生焼けや焼け歪みの須恵器が出土しており、当地が小野地区北方にある松山平野東部古窯址群からの中継地点あるいは集積地として機能していた可能性が高いと考えられている。来住・久米地区では開遺跡1・2次調査より6世紀代の竪穴式住居や掘立柱建物が検出され、住居形態の変遷や、竪穴から掘立への移行が報告されている。一方、小野・平井地区にある丘陵上には古墳時代中期から



- ①平井遺跡 2次 ②水泥遺跡 1次 ③水泥遺跡 2次 ④水泥遺跡 3次 ⑤高井遺跡 ⑥南高井遺跡 2次 ⑦南高井遺跡 3次
- ⑧下荇屋遺跡 4次 ⑨下荇屋遺跡 3次 ⑩下荇屋遺跡 2次 ⑪古市遺跡 1次 ⑫古市遺跡 2次 ⑬五楽遺跡 1次
- ⑭上荇屋遺跡 3次 ⑮上荇屋遺跡 4次 ⑯五郎兵衛谷古墳 ⑰素鷲神社古墳 ⑱観音山古墳 ⑲茨谷1号寮
- ⑳かいなご古墳 ㉑平井遺跡 ㉒久米窪田Ⅰ遺跡 ㉓久米窪田Ⅱ遺跡 ㉔波賀部神社古墳 ㉕開遺跡
- ㉖開遺跡 2次 ㉗久米窪田森元遺跡 3次 ㉘久米窪田古屋敷C ㉙来住廃寺15次 ㉚来住廃寺跡

第1図 遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

後期にかけての築造とされる古墳が多数分布している。このうち、檜山峠7号墳は5世紀末の前方後円墳で、松山平野における横穴式石室導入時期を知る貴重な資料である。後期では芝ヶ峠古墳群やかいなご古墳群、播磨塚古墳群などの小規模な円墳または方墳が存在する。平地部では波賀部神社古墳や二ツ塚古墳、近年の調査では葉佐池古墳などの前方後円墳が存在する。

#### 古 代

小野地区には松山平野東部古窯址群があり、10数基の窯址が確認されている。主なものは駄馬姥ヶ懐・悪社谷・茨谷窯址などで、出土遺物から6世紀後半から8世紀後半までの操業とされている。久米地区では来住台地上に展開する久米官衙遺跡や来住廃寺跡などがあり、これらの調査からは回廊状遺構や評庁院、さらには正倉院の発見など古代の松山平野を知るうえで大きな成果が得られている。

#### 中近世

小野地区では下苧屋遺跡2次調査にて中世段階の鋤址や溝などの生産関連遺構が検出され、当地が生産域として利用されていたことが近年の調査で明らかになりつつある。来住・久米地区では来住台地東部、鷹子遺跡周辺で該期の集落遺構が検出され、来住廃寺域内でも掘立柱建物群が集中して検出されている。近世では下苧屋遺跡3次調査において江戸時代前期の墓、さらに来住廃寺15次調査にて土坑墓が報告されている。

#### 【文 献】

- 森 光晴 1978『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会
- 山本健一・山之内志郎 1997「古市遺跡2次調査地」「五楽遺跡」
- 栗田 茂敏 1989「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 阪本 安光ほか 1981「久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、来住Ⅴ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 橋本 雄一 1995「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小笠原善治 1998「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小玉亜紀子 1997「久米高畑遺跡26次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野 史知 1998「久米高畑遺跡35次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾 和長 1996「久米高畑遺跡25次調査地」
- 梅木 謙一 1992「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾 幸則 1993『来住廃寺遺跡－第15次調査報告書－』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

- 栗田 茂敏ほか 2000『古市遺跡・下苅屋遺跡2・3次調査地』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内 慎一 1996「開遺跡1・2次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 茂敏 1997『檜山峠7号墳』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 茂敏 2003『葉佐池古墳』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 愛媛県教育委員会 1991『愛媛県内古墳 一分布調査報告一』

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査の経緯

第2章では、本稿で掲載した4遺跡（7次調査）全体を『調査地』と呼称し、調査の概要を説明する。調査地は松山市平井町甲3317番地1から松山市南高井町173-4までに位置し、道路幅10m、道路全長1,700m、調査対象面積は約17,000㎡である。調査地北端は松山市道小野3号線、南端は県道森松重信線に接続する。各遺跡の所在地、調査期間、調査面積等は表1に記す。

調査：発掘調査は平成14年度から17年度までの約4年間にわたり実施した。調査地は調査以前には水田または会社用地として利用されていた。各調査では廃土置き場の関係上、各調査地内を1区・2区・・・6区と区割し、さらに生活道路が存在する箇所については各区を1A区・1B区といった地区名を付け、細区分した。このほか、ハート設計株式会社に国土座標第、座標系基準点の設置を業務委託し、これを基準とした5m四方のグリッド設定をおこなった。グリッドは遺跡ごとに西から東へA・B・C・・・、北から南へ1・2・3・・・とし、A1・A2・・・といったグリッド名を付けた。グリッドは検出遺構の位置表示や、包含層掘り下げ時の遺物取り上げなどに利用した。

発掘調査では、重機の使用による表土層の除去作業後、作業員による包含層の掘り下げや遺構検出、測量及び写真撮影等の観察・記録作業をおこなった。また、愛媛航空株式会社に業務委託し、セスナ機による上空写真撮影を実施した。調査では水田址または畑址が検出されたため、それらの土壌を採取し、古環境株式会社に植物珪酸体分析やプラントオパール分析を業務委託した。

整理：整理作業は平成14年度から、発掘調査と併行して実施した。発掘調査中は現場事務所内にて出土遺物の洗浄や注記及び復元作業、測量図面の合成や写真類の整理をおこなった。平成18年度からは埋蔵文化財センター内にて、出土遺物の復元や実測、遺構図面の作成や版下作りなど、本格的な整理作業と報告書作成作業を実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	担当
平井遺跡2次	松山市平井町	1,400	平成14年12月2日～平成15年3月31日	梅木・水本
水泥遺跡1次	松山市水泥町	2,800	平成15年4月1日～平成15年8月29日	梅木・水本
水泥遺跡2次	松山市水泥町	1,764	平成15年8月1日～平成16年3月31日	梅木・水本
水泥遺跡3次	松山市水泥町	1,275.2	平成17年1月20日～平成17年8月12日	宮内・水本
高井遺跡1次	松山市高井町	6,429.6	平成16年3月1日～平成17年1月31日	梅木・水本
南高井遺跡2次	松山市南高井町	1,638.04	平成17年8月1日～平成17年11月30日	宮内・水本
南高井遺跡3次	松山市南高井町	1,646	平成17年12月1日～平成18年3月31日	宮内・水本

## 2. 層 位

### (1) 基本層位 (第2・3図)

本稿では、平井遺跡2次調査から南高井遺跡3次調査までの4遺跡7次調査の調査内容や成果を、第3章から第9章までで報告するが、これら全遺跡を「調査地」と呼称し、ここでは遺跡全体の概観を紹介する。

まず、調査地の基本層位は第Ⅰ層から第Ⅶ層までとし、第2・3図に掲載した。それぞれの土層は遺跡ごとに土色や土質の違いがあり、各章での報告では基本層位をさらに細分し、第Ⅰ①層、第Ⅰ②層といった表記をした。なお、細分した土層は遺跡ごとに多少の違いがあるため、細分した土層(土色や土質)は必ずしも全遺跡で一致していない。

第Ⅰ層は近現代の造成や水田耕作に伴う客土である。第Ⅱ層は中世段階の堆積層または水田耕作や畑作に伴う耕土であり、第Ⅲ層は古代の堆積層または水田耕作や畑作に伴う耕土である。第Ⅳ層は古墳時代の遺物を含む堆積層、第Ⅴ層は弥生時代の遺物を含む堆積層である。第Ⅵ層は無遺物層で、シルトまたは粘性の強い土壌である。第Ⅶ層は小野川や悪社川、内川等の河川の氾濫に起因する堆積物である。

第Ⅰ層： 調査地は調査以前、ほとんどの地域で水田として利用されており、調査地南端にある南高井遺跡3次調査地のみが、運送会社の敷地内にある。現況の標高を測量すると、調査地北端が最も高く標高52.4mを測り、徐々に低くなり調査地南側、南高井遺跡2次調査地では標高48.5mとなる。なお、この間では地表下10～40cmまで水田耕作に伴う客土がみられる。調査地南端の南高井遺跡3次調査地では、アスファルトや建物基礎による攪乱や水田耕作に伴う客土があり、地表下1.3mまで開発がおこなわれている。なお、第Ⅰ層はこれら造成土や耕作土であり、最大では第Ⅰ①層から第Ⅰ⑦層の7層に細分している。

第Ⅱ層： 検出遺構や出土遺物から、中世段階の堆積層または水田耕作や畑耕作に伴う客土である。調査地北端、平井遺跡2次調査地を除く地域でみられ、調査地中央部、高井遺跡1次調査地が最も厚い堆積をなし、層厚60cmを測る。第Ⅱ層は主に灰色、灰褐色、暗灰色を呈する粘質土で、水泥遺跡1次調査地と高井遺跡1次調査地では、本層中より13～14世紀代の土師器や輸入陶磁器が出土している。なお、本層上面または本層中にて平井遺跡2次調査地を除く遺跡からは、畝状遺構や鋤址状遺構などの生産遺構のほか、溝や土坑、自然流路などが検出された。おそらく、室町時代を中心として、その前後する時期も含め小野川以南の地域には水田や畑が広く展開していたものと考えられる。

第Ⅲ層： 第Ⅱ層と同様、調査地北端、平井遺跡2次調査地を除く地域にみられ、層厚10～60cmを測る。本層は最大で4層に分層でき、水泥遺跡1～3次調査地や南高井遺跡2・3次調査地では安定した堆積状況をなす。本層は灰黄色、橙灰色を基調とするシルト質または砂質土で、水泥遺跡3次調査地や南高井遺跡2次調査地からは、本層中より飛鳥時代から平安時代までに時期比定される遺物が出土している。南高井遺跡2次調査地では、本層中にて水田に伴う畦畔や水路を検出し、さらに水泥遺跡1次調査地や3次調査地からは鋤址状遺構を多数検出した。このほか、南高井遺跡2次調査地や3次調査地では、掘立柱建物址や土坑を検出した。そのほか、調査地全体をとおして、本層堆積時に数多くの流路を検出した。

## 調査の概要

第Ⅳ層：主に古墳時代の遺物を含む包含層であり、調査地中央部付近、水泥遺跡3次調査地から南高井遺跡2次調査地までの間に堆積がみられた。第Ⅳ層は暗褐色または黒褐色を呈する粘性の強い土壌で、調査地中央部に向けて傾斜堆積がみられ、高井遺跡で最も堆積が厚く、層厚40cmを測る。本層中からは、主に6～7世紀代の遺物が出土している。なお、前述の高井遺跡からは、竪穴状の石室や掘立柱建物址、溝、土坑が検出されており、古墳時代において、調査地が墓域または集落域として土地利用された可能性が高いものと考えられる。また、南高井遺跡2次調査地では古墳時代前期に時期比定される遺物が出土した土坑を検出している。

第Ⅴ層：弥生時代の遺物を含む包含層で、平井遺跡2次調査地、水泥遺跡1次調査地、高井遺跡1次調査地にて検出した。第Ⅴ層は茶色、黒色を呈する粘性の強い土壌で、平井遺跡2次調査地で最も堆積が厚く、層厚50cmを測る。本層中からは弥生時代中期後半～末までの遺物が出土している。平井遺跡2次調査地では、本層中にて弥生時代後期後半～末に時期比定される溝や流路と土器溜まりを検出した。

第Ⅵ層：黄色、暗灰褐灰色を呈するシルト層、または粘土層である。調査地南端を除く地域で検出され、層厚は最大で50cm以上を測る。本層上面が調査における最終遺構検出面となる。本層上面は調査地北端から南側へ向けて傾斜をなし、調査地北端では標高50.5m、南側では47.8mを測る。

第Ⅶ層：灰色粗砂を基調とし、径3～10cm大の礫を含む砂礫層である。調査地ほぼ全域にみられる。本層上面は起伏にとみ、調査地北部が最も高く50.6m、南側へ向けて緩やかに下がり調査地中央部、水泥遺跡3次調査地では標高49.0mとなる。さらに南側、高井遺跡1次調査地では標高49.5mとやや高くなり、調査地南端南高井遺跡3次調査地では標高48.5mを測り、低くなっている。

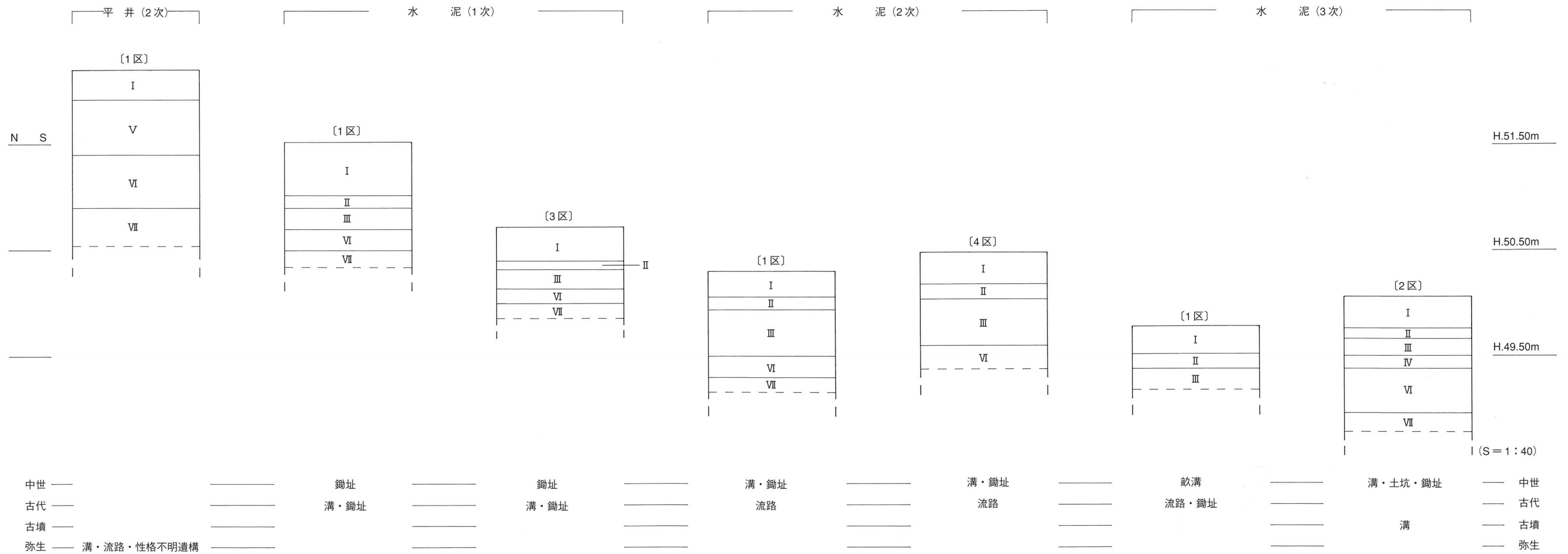
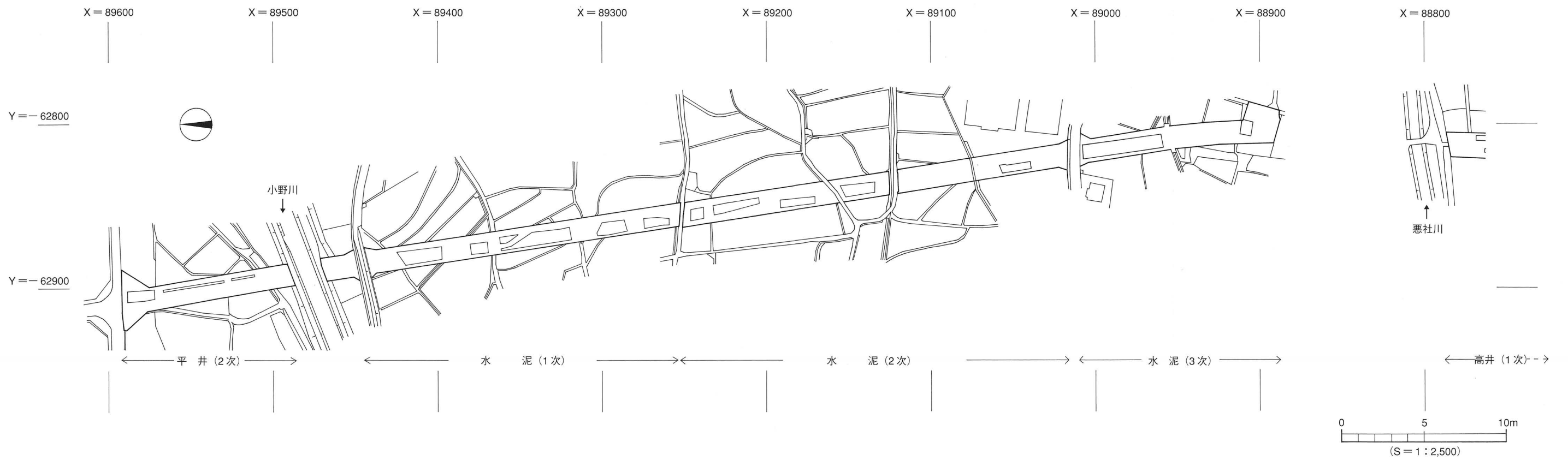
### (2) 検出遺構・遺物 (表2)

調査地からは、弥生時代から近世までの遺構や遺物を検出した。検出した遺構を時代別に記す。

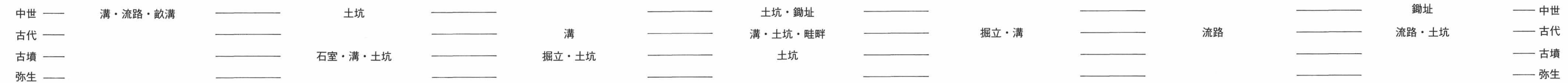
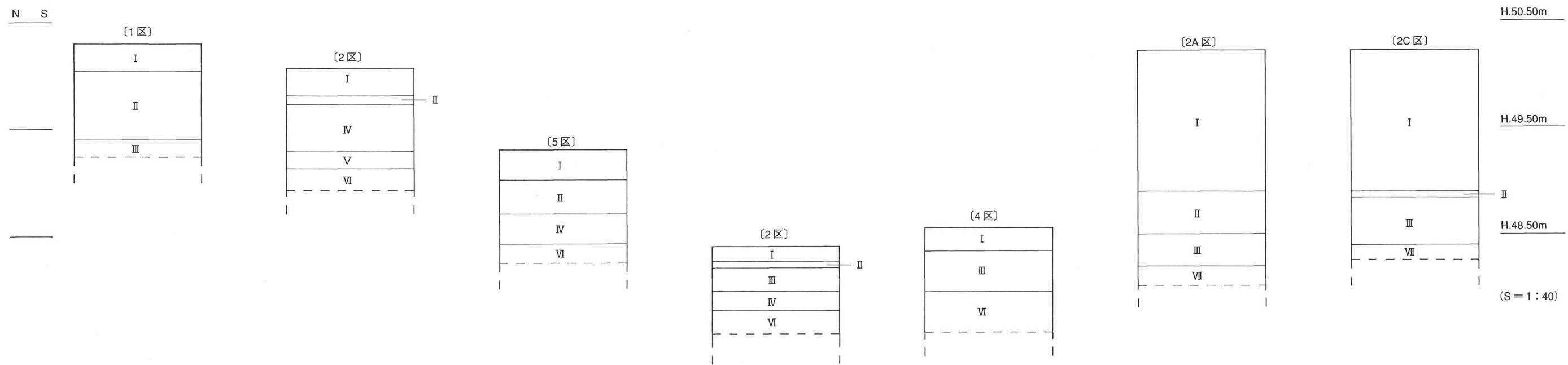
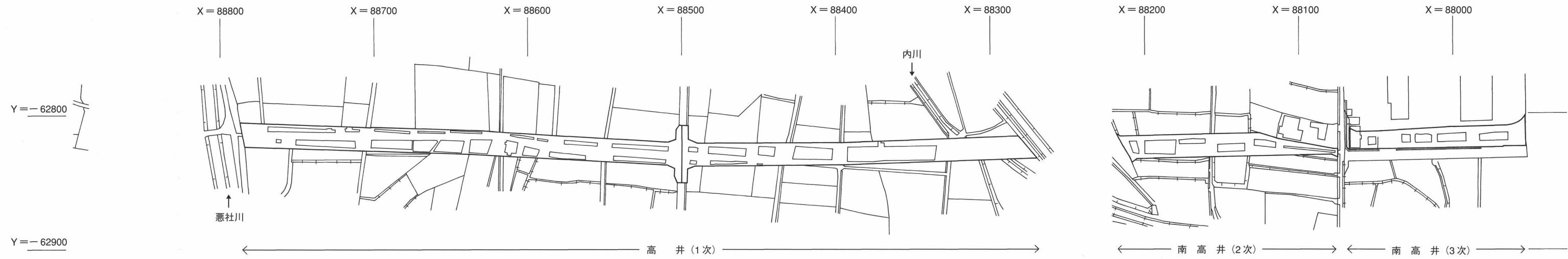
- 1) 弥生時代：溝2条、自然流路4条、性格不明遺構1基
- 2) 古墳時代：掘立柱建物址1棟、石室1基、溝11条、土坑12基
- 3) 古 代：掘立柱建物址1棟、溝14条、自然流路8条、土坑4基、畦畔2条、鋤址状遺構20条、性格不明遺構3基
- 4) 中 世：溝22条、自然流路2条、土坑5基、鋤址状遺構225条、畝状遺構44条、性格不明遺構2基
- 5) 近 世：経塚1基
- 6) その他：ピット138基

各遺跡で検出した遺構の詳細は、表2に記す。遺物は遺構、包含層出土品及び表採資料であり、弥生土器（前期～後期）、土師器（4世紀～中世）、須恵器（6～9世紀）、陶磁器（近世）、鉄器、石器、土錘、管玉である。なお、遺物は遺物収納箱（44×60×14cm）に約50箱分が出土した。





第2図 調査地測量図・土層柱状図(1)



第3図 調査地測量図・土層柱状図(2)

表2 検出遺構一覽

遺跡名	弥生時代	古墳時代	古 代	中 世	近 世
平 井 2 次	溝 : 2条 流路 : 4条 性格不明: 1基				
水 泥 1 次			鋤址 : 9条 溝 : 5条 性格不明: 1基	鋤址 : 39条	
水 泥 2 次			流路 : 2条	鋤址 : 51条 溝 : 12条 性格不明: 2基	
水 泥 3 次		溝 : 2条	鋤址 : 11条 流路 : 1条	畝溝 : 7条 鋤址 : 8条 溝 : 1条 土坑 : 1基	経塚 : 1基
高 井 1 次		石室 : 1基 掘立 : 1棟 溝 : 9条 土坑 : 8基		畝溝 : 37条 溝 : 9条 流路 : 1条 土坑 : 2基	
南高井 2 次		土坑 : 4基	畦畔 : 2条 掘立 : 1棟 溝 : 9条 流路 : 1条 土坑 : 2基 性格不明: 2基	鋤址 : 56条 土坑 : 1基	
南高井 3 次			流路 : 4条 土坑 : 2基	鋤址 : 71条 流路 : 1条 土坑 : 1基	



第3章

# 平井遺跡

— 2次調査 —



## 第3章 平井遺跡2次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2001（平成13）年10月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水尻南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には平井遺跡1次調査地があり、縄文時代から中世までの集落関連遺構や遺物が確認されている。

このことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2002（平成14）年10月15日から同年10月17日の間に試掘調査を実施した。その結果、土坑ほか、弥生土器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2002（平成14）年12月2日より開始した。

#### (2) 調査の経緯（第4図）

調査は2002（平成14）年12月2日から2003（平成15）年3月31日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地内を北側から南側へ3つの区（1区～3区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。12月2日、1区の調査を開始する。重機により表土層を除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。その結果、1区では遺構検出面が2面あり、上面で自然流路1条と性格不明遺構を検出し、下面では溝や自然流路、ピットを検出した。平成15年1月7日、2区と3区の調査を開始する。幅2mの調査区を設定し、重機により表土の除去並びに作業員による遺構検出作業をおこなった。発掘調査時には確認できなかったが、測量段階にて2区では自然流路が存在していたことが判明した。3区では遺構・遺物共に検出されなかった。3月12日、高所作業車を使用して1区の完掘状況写真を撮影する。その後、測量作業をおこない、3月19日より、重機による埋め戻し作業を開始する。3月25日より発掘用具の撤去及び、調査地の安全対策をおこない、3月31日、屋外作業を終了した。

#### (3) 調査組織

所在地：松山市平井町甲3317番地1外

調査期間：2002（平成14）年12月2日～2003（平成15）年3月31日

調査面積：1,400m<sup>2</sup>

調査担当：梅木 謙一・水本 完児

## 2. 層位

### (1) 基本層位 (第5～7図、図版1)

調査地の基本層位は、第I層と第V層、及び第VI層、第VII層の4層であり、第II層(中世)から第IV層(古墳時代)の土層は未検出である。調査以前は水田として利用されており、現況の標高を測量すると調査地北端1区では標高52.3m、3区では51.3mを測る。

第I層—近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより3層に分層される。

第I①層:青灰色土で、水田耕作に伴う耕作土である。調査区全域にみられ地表下10～25cmまで開発がおこなわれている。

第I②層:明黄色土で、水田耕作に伴う床土である。調査区全域にみられ層厚5～60cmを測る。

第I③層:黄褐色土で、水田耕作に伴う旧床土である。2区のみにみられ層厚3～15cmを測る。

第V層—弥生時代の堆積層で、土質・土色の違いにより5層に分層される。

第V①層:茶色土で、調査区全域にみられ層厚5～30cmを測る。1区では本層上面にて自然流路(SR103)を検出した。また、2区では本層下面にて自然流路SR201を検出した。なお、本層中からは弥生時代前期から後期までの遺物が出土した。

第V②層:茶褐色土で、1区と2区にみられ層厚10～25cmを測る。

第V③層:灰褐色土で、調査区ほぼ全域にみられ層厚5～45cmを測る。1区では本層上面にて溝(SD101)を検出した。なお、1区では本層掘り下げ時に土器が集中して出土した箇所があり、SX101として範囲のみを図化し、遺物を取り上げた。

第V④層:明灰褐色土で、1区の一部のみにみられ層厚10cmを測る。1区では本層下面にて自然流路を検出した。

第V⑤層:黒色土で、1区の一部のみにみられ層厚10～15cmを測る。1区では本層上面にて自然流路を検出した。

第VI層—土質・土色の違いにより、2層に分層される。

第VI①層:黄色土で、1区のみにみられ層厚20～30cmを測る。なお本層上面が調査における最終遺構検出面となる。1区では、本層上面にてピットを検出した。

第VI②層:暗灰色を呈する粘質土で、1区のみにみられ層厚30cm以上を測る。

第VII層—河川の氾濫にともなう堆積物で、暗灰色粗砂を基調とし、径5～15cm大の礫を含む。2区と3区にて検出したもので、本層上面は起伏に富み、本層上面の標高は51.1mから51.4mを測る。

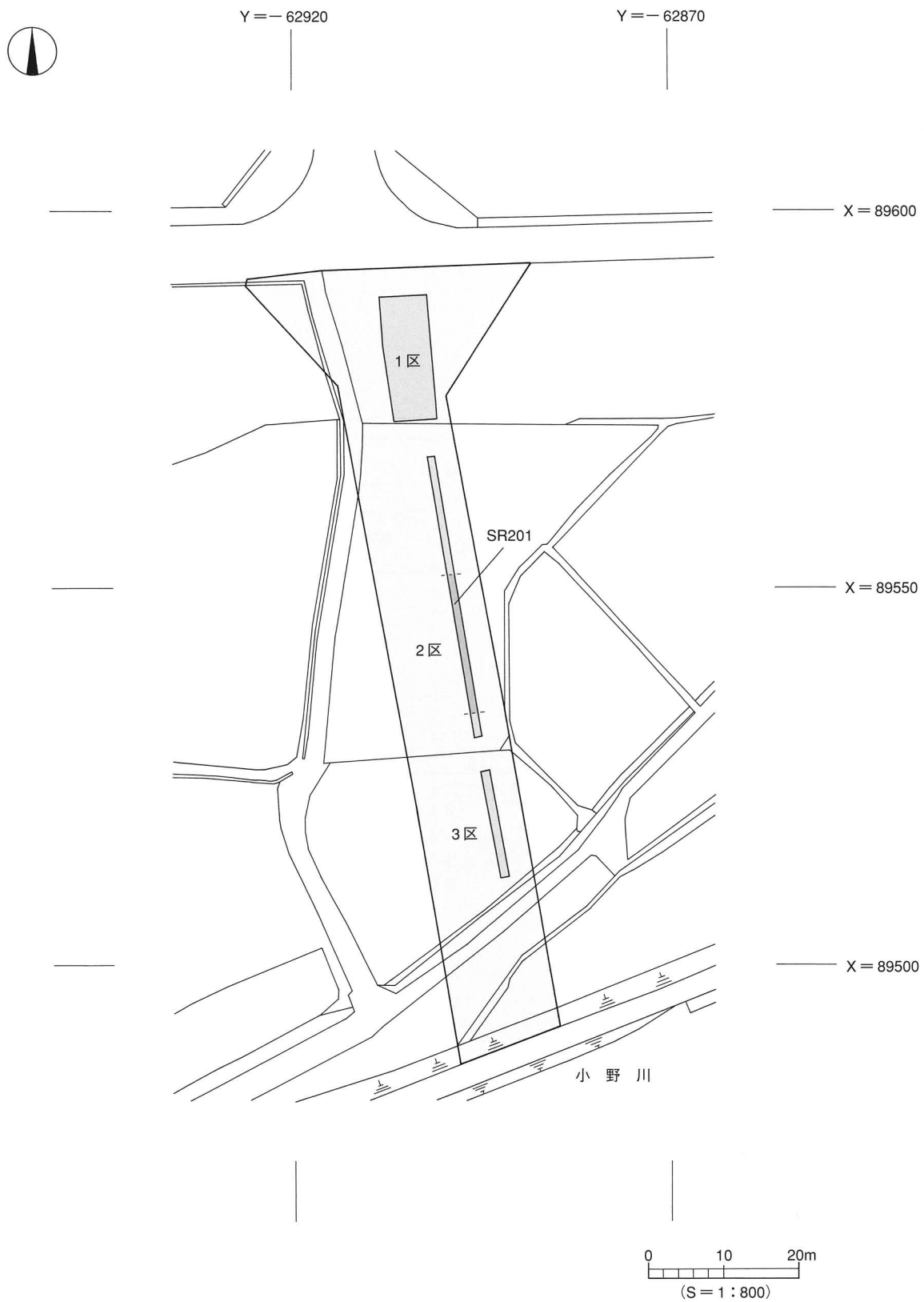
なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3・・・とし、A1・A2・・・Cといったグリット名を付した。

### (2) 検出遺構・遺物 (表3・図版2)

調査では溝2条、自然流路4条、性格不明遺構1基、ピット6基を検出した。検出した遺構は、すべて弥生時代のものである。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。以下、時期別に遺構を紹介する。

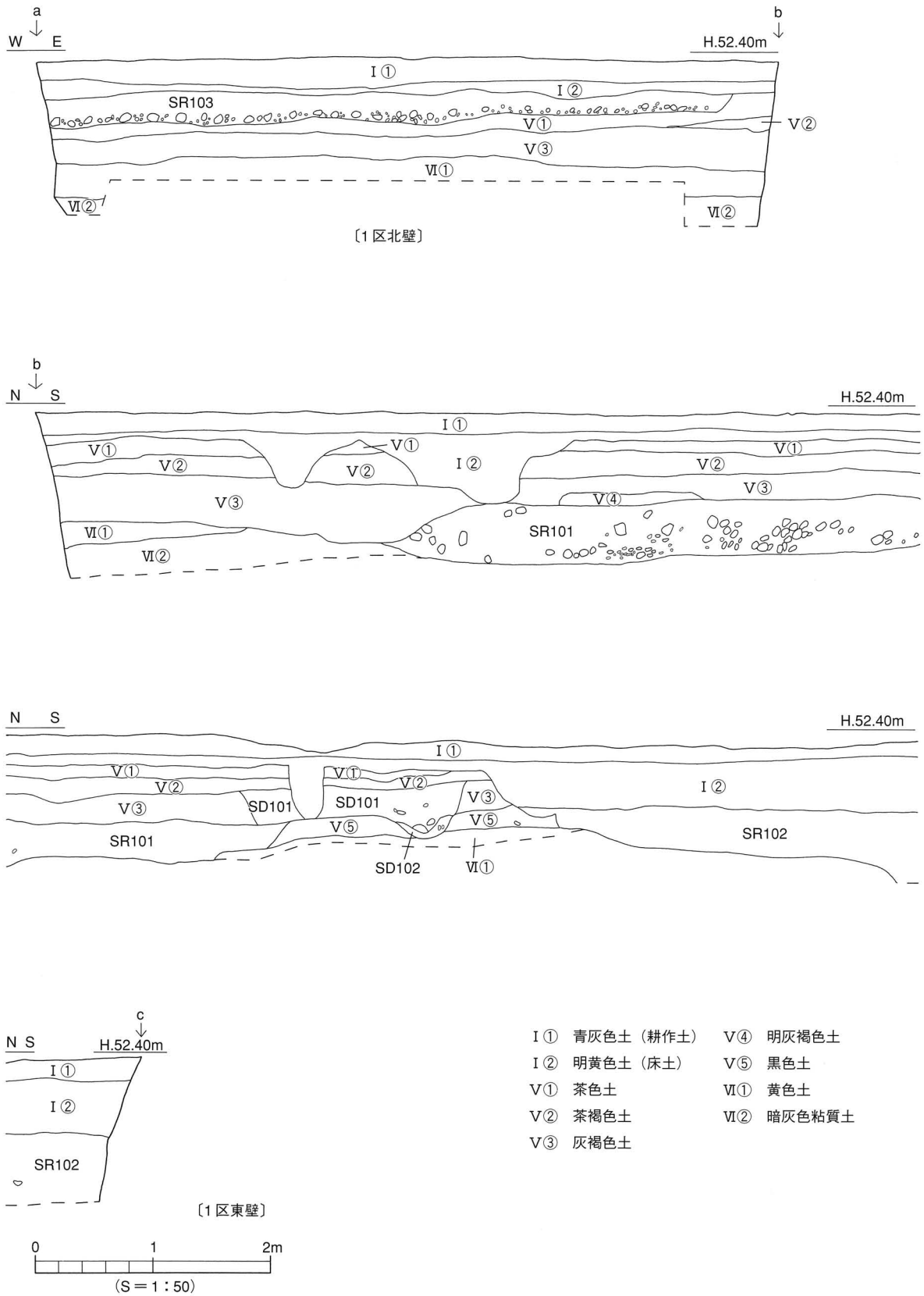


層 位



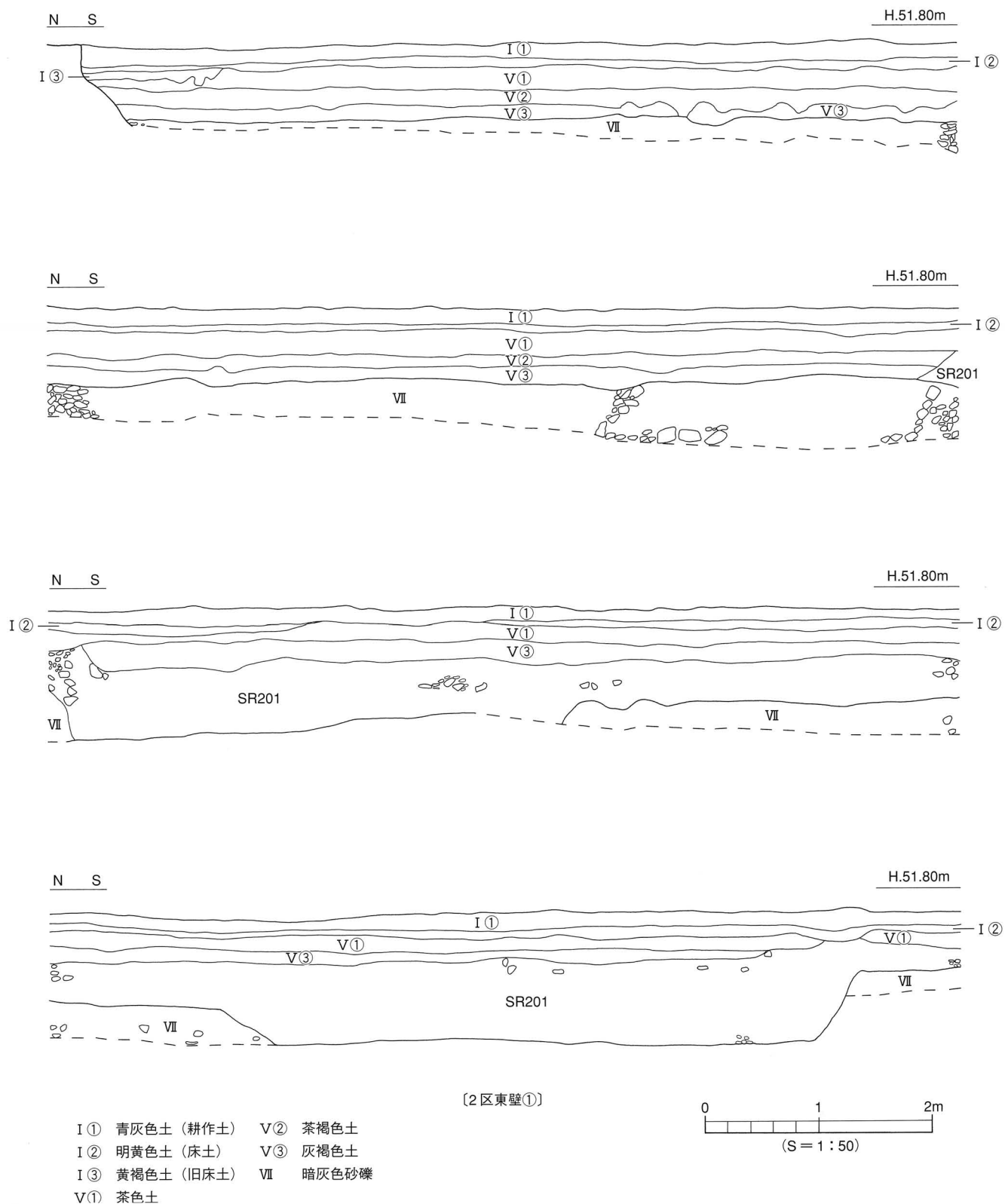
第 4 図 調査区測量図

平井遺跡 2次調査



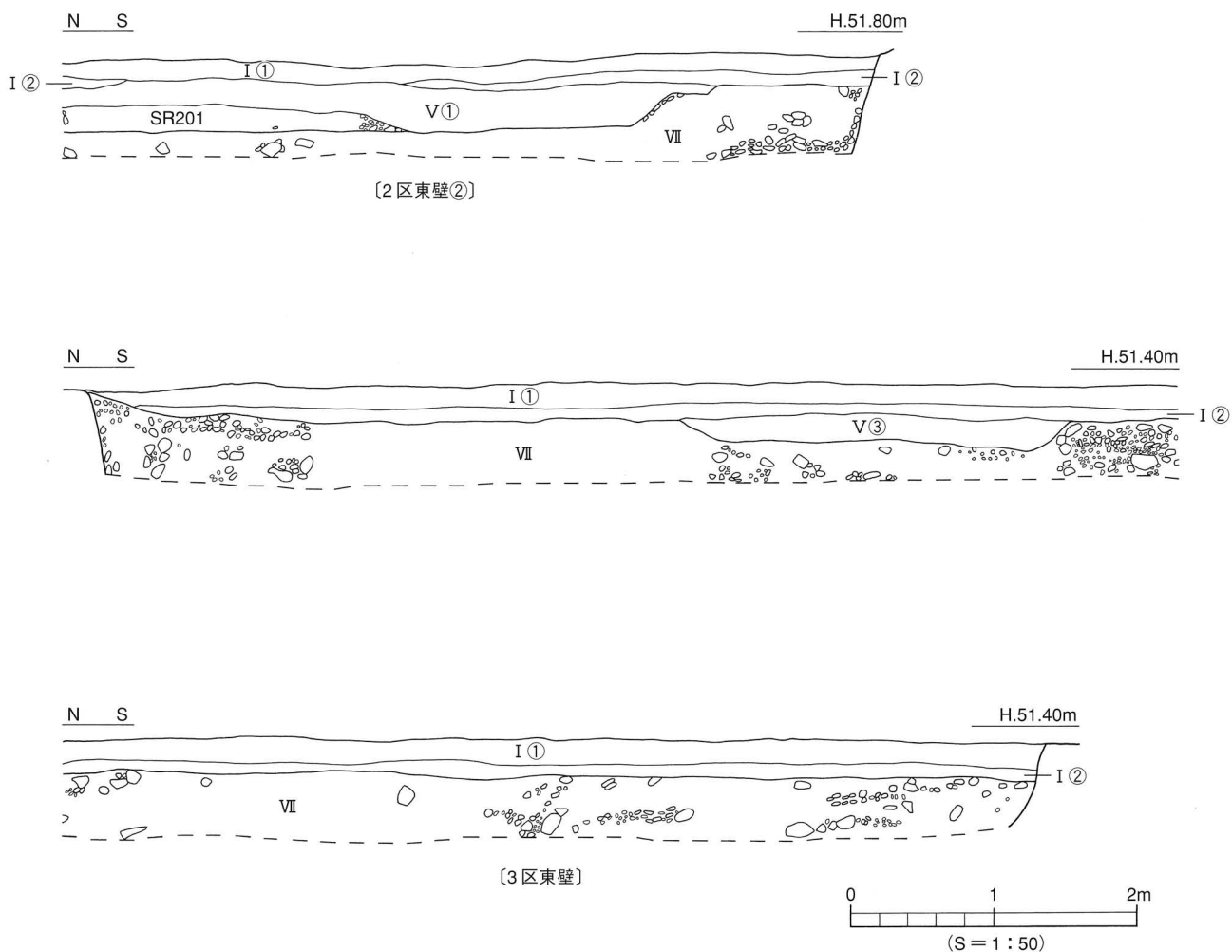
第5図 1区土層図

層 位



第6図 2区土層図(1)

平井遺跡 2 次調査



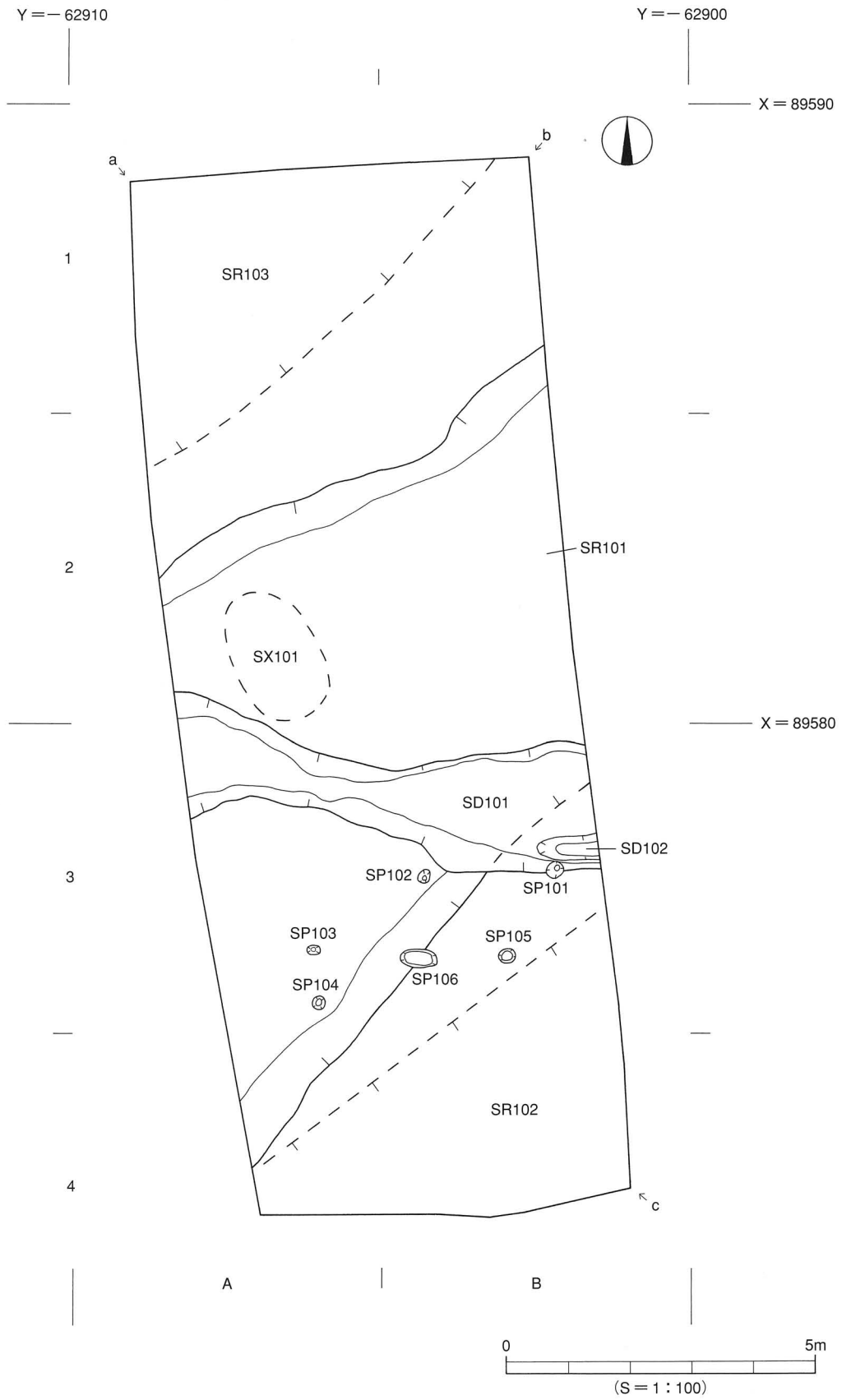
- I ① 青灰色土 (耕作土)
- I ② 明黄色土 (床土)
- V ① 茶色土
- V ③ 灰褐色土
- VII 暗灰色砂礫

第 7 図 2 区 (2) ・ 3 区土層図

表 3 検出遺構一覧

区	時期	弥生時代後期後半	弥生時代末
1 区		溝 2 条 : S D 101・102 自然流路 2 条 : S R 101・102 ピット 6 基 : S P 101~106	自然流路 1 条 : S R 103 性格不明遺構 1 基 : S X 101
2 区		自然流路 1 条 : S R 201	
3 区		—	—

層 位



第8図 1区遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

本調査では、主に弥生時代の遺構と遺物を検出した。遺構は溝 2 条、自然流路 4 条、性格不明遺構 1 基、ピット 6 基を検出した。ここでは、遺構別に概要を説明する。

#### (1) 溝

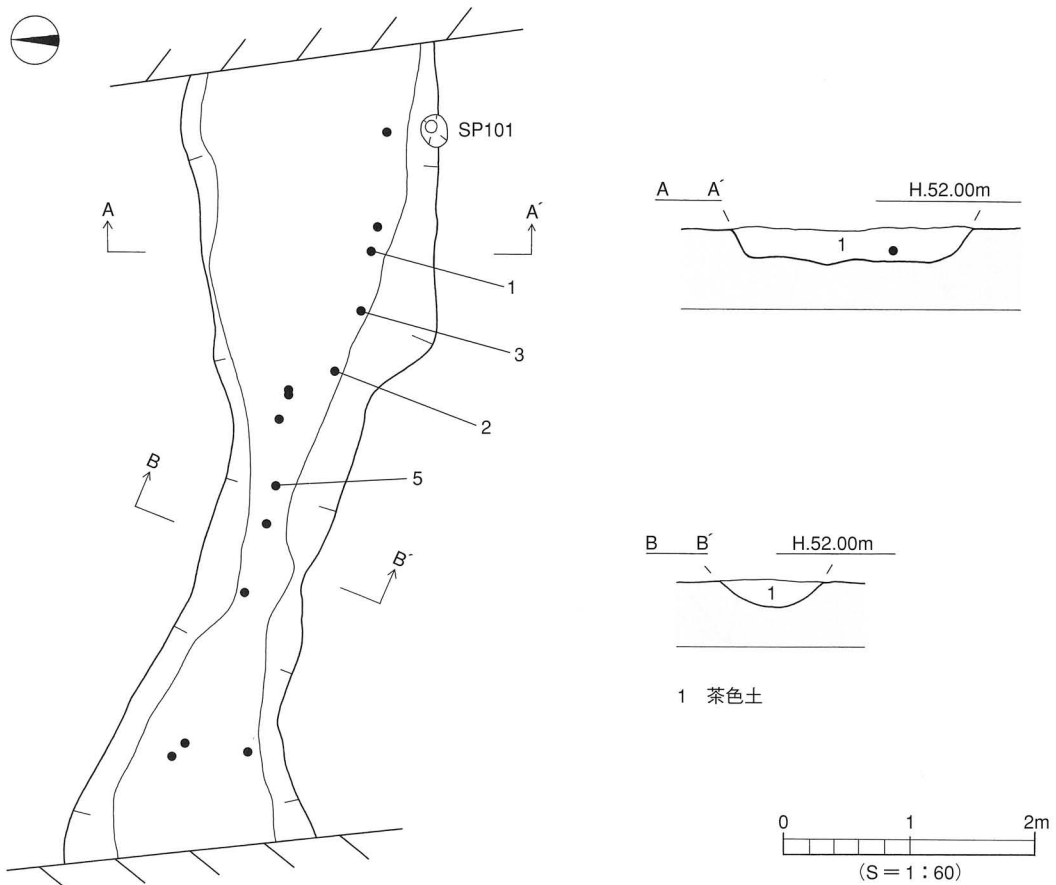
S D 101 (第 8・9 図、図版 3)

1 区中央部南寄り A 2～B 3 区で検出した東西方向の溝で、溝南東部は S P 101 に切れ、溝両端は調査区外に続く。第 V ③ 層上面での検出であり、第 V ② 層が覆う。規模は検出長 6.6m、幅 0.8～2.1m、深さは検出面下 20～24cm を測る。断面形態は皿状を呈するが、壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は茶色土単層である。溝底面には、やや凹凸があり、西側から東側へ向けて傾斜をなす (比高差 4 cm)。なお、溝南東部底面にて、溝 S D 102 を検出した。遺物は弥生土器片が、底面付近に散在して出土した。

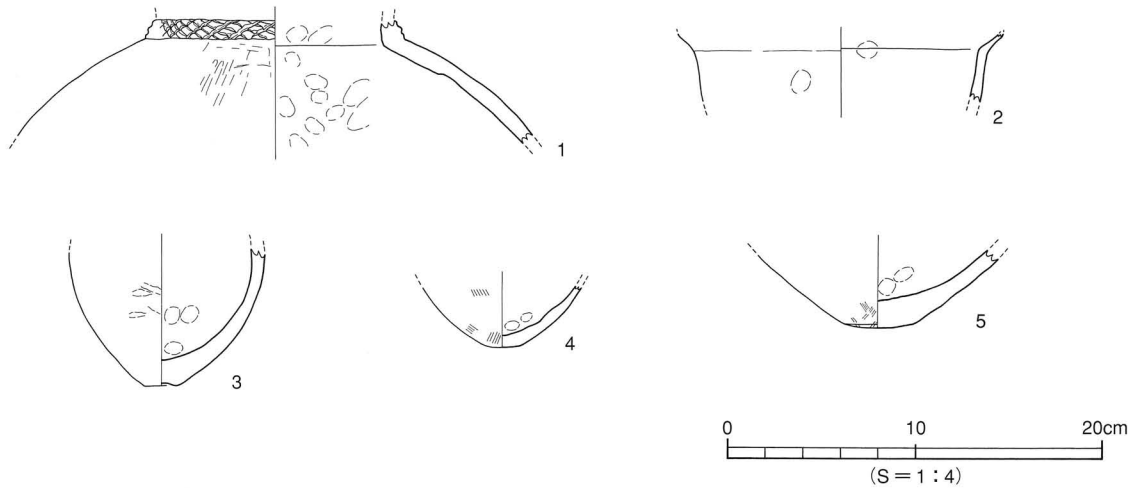
出土遺物 (第 10 図)

1 は壺形土器の肩部片で、頸肩部境に凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を施す。2 は鉢形土器の口縁部片で、口縁部内面に明瞭な稜をもつ。3・4 は鉢形土器、5 は壺形土器の底部である。3 はやや上げ底を呈し、胴部外面にはタタキ調整がわずかに残る。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期後半の遺構とする。



第 9 図 S D 101 測量図



第10図 S D101出土遺物実測図

S D102 (第8図)

1区中央部南寄りB3区で検出した東西方向の溝で、溝西端は消失し、東端は調査区外に続く。溝S D101底面にて検出した。規模は検出長1.0m、幅0.4m、深さ8~16cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒色土に茶色土が少量混入するものである。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、S D101底面での検出であることから、概ね弥生時代後期後半以前の遺構とする。

(2) 自然流路

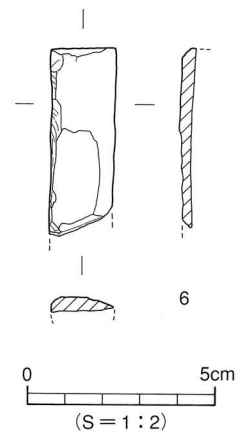
S R101 (第8図)

1区中央部北寄りA4~B1区で検出した北東-南西方向の流路で、流路南側はS P102~104・106、中央部は溝S D101に切られ、両端は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第V⑤層堆積後に存在した流路であり、第V④層が覆う。規模は検出長8.3m、幅6.0~7.4m、深さは30~50cmを測る。埋土は灰色砂を基調とし、径3~20cm大の礫を含む。流路底面にはやや起伏があり、北東部から南西部に向けてわずかに傾斜をなす(比高差5cm)。流路内からは少量の弥生土器片と石器が出土した。

出土遺物(第11図、図版4)

6は緑色片岩製の石斧で、刃部は欠損しており、側面はやや丸みを帯びる。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位から概ね弥生時代後期後半頃の流路とする。



第11図 S R101出土遺物実測図

S R102 (第8図)

1区南東部A4～B3区に位置する流路であるが、発掘調査時はその存在を認識しておらず、整理作業時に確認したものであり、流路の平面形状は想定線で表している。北東－南西方向の流路で、検出長6.5m、検出幅4.5m、深さ60cm以上を測る。調査壁の土層観察では第V⑤層上面で流路壁体を検出したが、上面は第I層が覆う。埋土は灰色砂を基調とし、暗褐色の砂質土が部分的に混入する。調査区南壁のトレンチ内から弥生土器が出土したことから、本来、これらの遺物はS R102に帰属するものと考えられる。

時期：検出層位や出土遺物から、概ね弥生時代後期後半以降の流路とする。

S R103 (第8図)

1区北側A2～B1区に位置する流路であるが、S R102と同様、発掘調査時はその存在を認識しておらず、平面形状は土層壁の観察により想定線で表している。北東－南西方向の流路で、検出長4.7m、検出幅約4.0m、深さは15～30cmを測る。第V①層上面で流路壁体を検出したが、流路上面は第I層が覆う。埋土は灰色砂を基調とし、径3～10cm大の礫を大量に含む。調査区北壁のトレンチ内から弥生土器が出土したことから、これらの遺物は本来、S R103に帰属するものと考えられる。

時期：検出層位や出土遺物から、概ね弥生時代末以降の流路とする。

S R201 (第4図)

2区南側C11・12区に位置する流路であるが、発掘調査時はトレンチ調査であったため、平面形状は未検出である。規模は調査壁の土層観察により、幅18.8m、深さ30～60cmを測る。流路上面は第V③層が覆い、底面は第VII層に及ぶ。埋土は灰色砂を基調とし、径3～10cm大の礫を少量含む。流路内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね弥生時代後期後半の流路とする。

### (3) 性格不明遺構

S X101 (第8図、図版3)

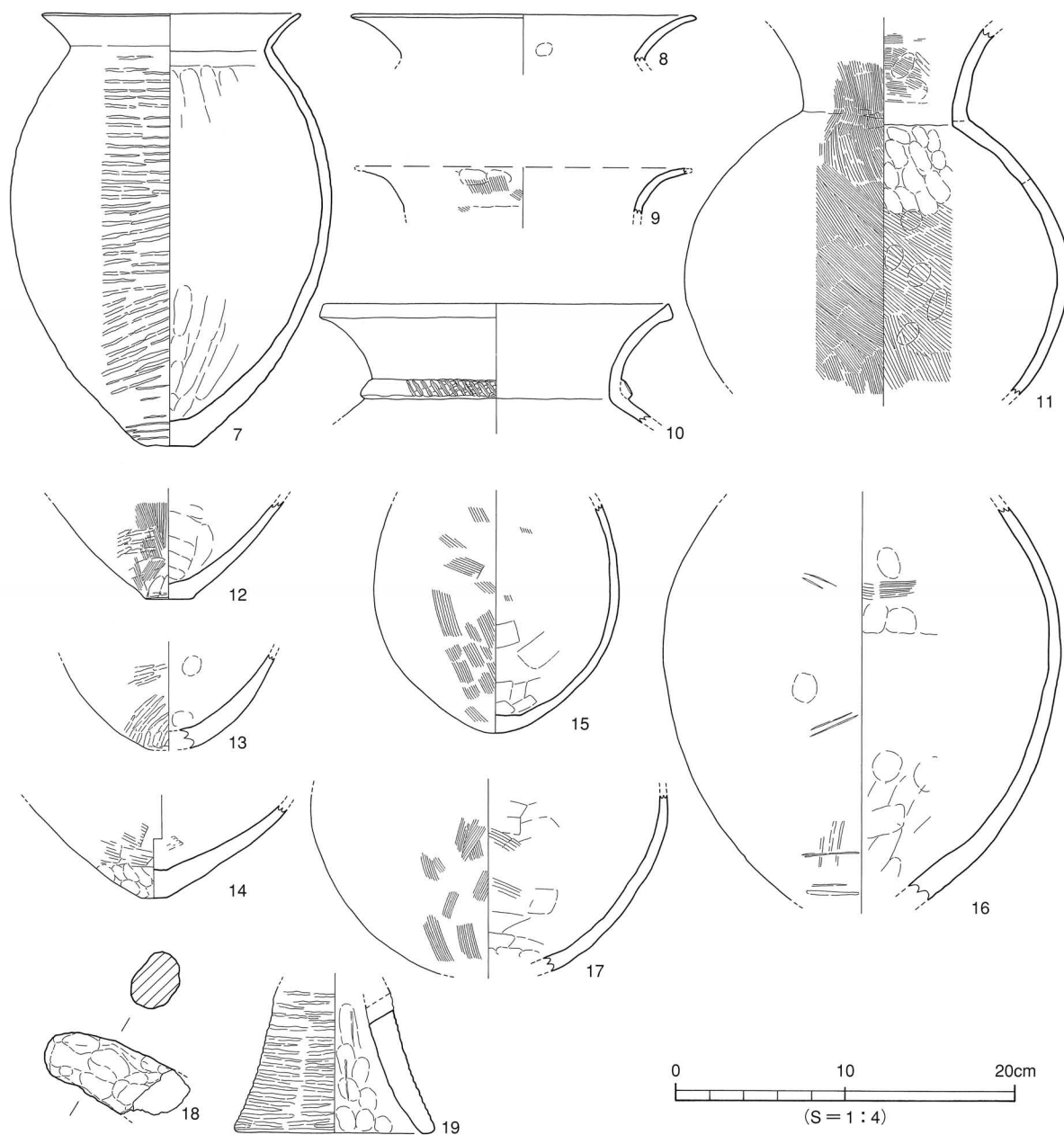
1区中央部西寄りA2区に位置する。第V③層掘り下げ時に土器が集中して出土したが、明確な掘り方は検出されず、出土範囲のみを測量し、S X101として遺物を取り上げた。1.4×2.4m、深さ約15cmの範囲に弥生土器の甕形土器や壺形土器、支脚形土器などが出土したが、いずれもが破片であった。

出土遺物 (第12図、図版4)

7～9は甕形土器である。7は1/2の残存で、胴底部外面にヨコないしナナメ方向のタタキ調整を施す。10・11は壺形土器で、10の頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を施す。11は広口壺の頸胴部片で、内外面共にナナメ方向のハケメ調整を施す。12～16は甕形土器、17は壺形土器の底部片で、12・13・16の外面にはタタキ調整を施す。18・19は支脚形土器で、19の脚部上位には径1.0cm大の円孔を穿つ。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代末とする。





第12図 S X 101出土遺物実測図

(4) その他の遺構と遺物

調査では、1区にてピット6基を検出した。SP102・103・104・106はSR101上面、SP101はSD101上面、SP105は第VI①層上面での検出である。また、第V①層及び表採資料であるが、弥生土器や石器が出土した。

1) ピット

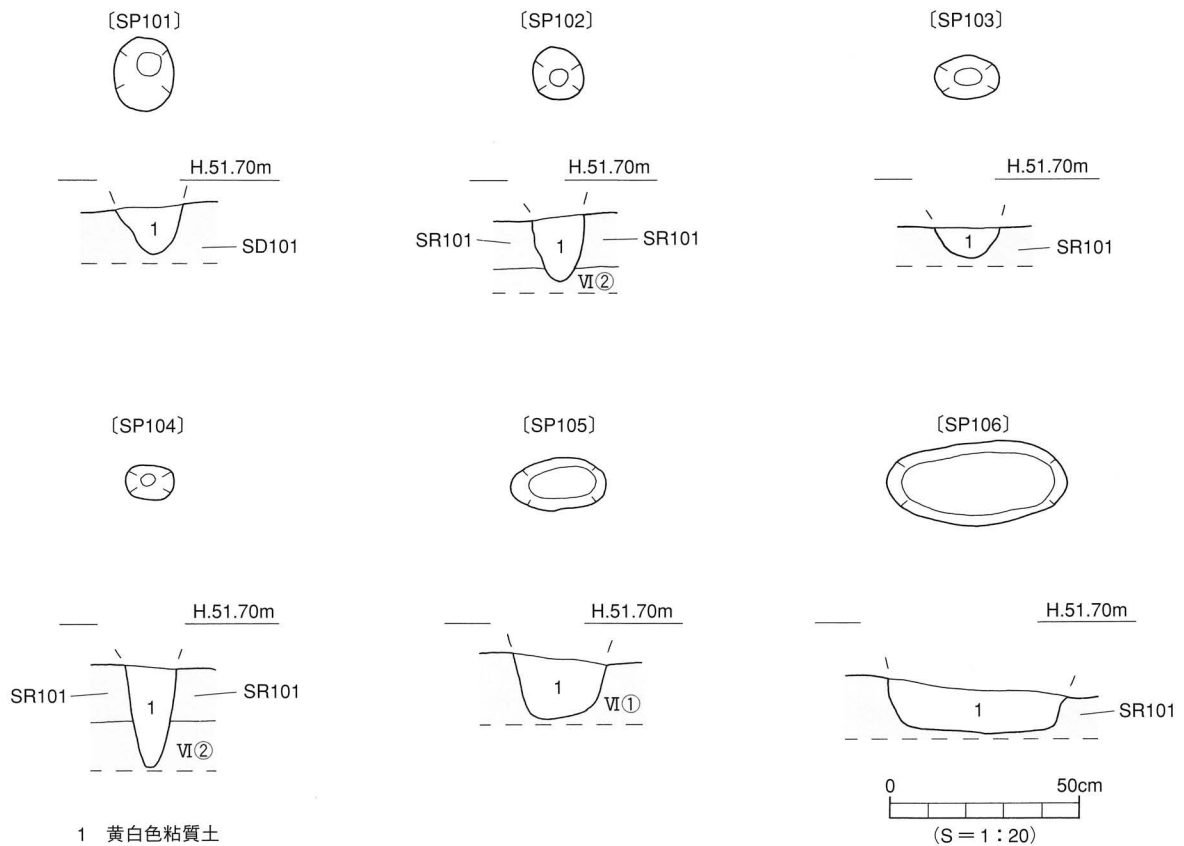
SP101～106 (第8・13図)

1区南側A・B3区で検出したピットで、平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径10～50cm、深さ8～28cmを測る。埋土は、すべて黄白色を呈する粘質土単層である。ピット内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね弥生時代後期後半以降の遺構とする。

2) 第V①層出土遺物 (第14図20～30、図版4)

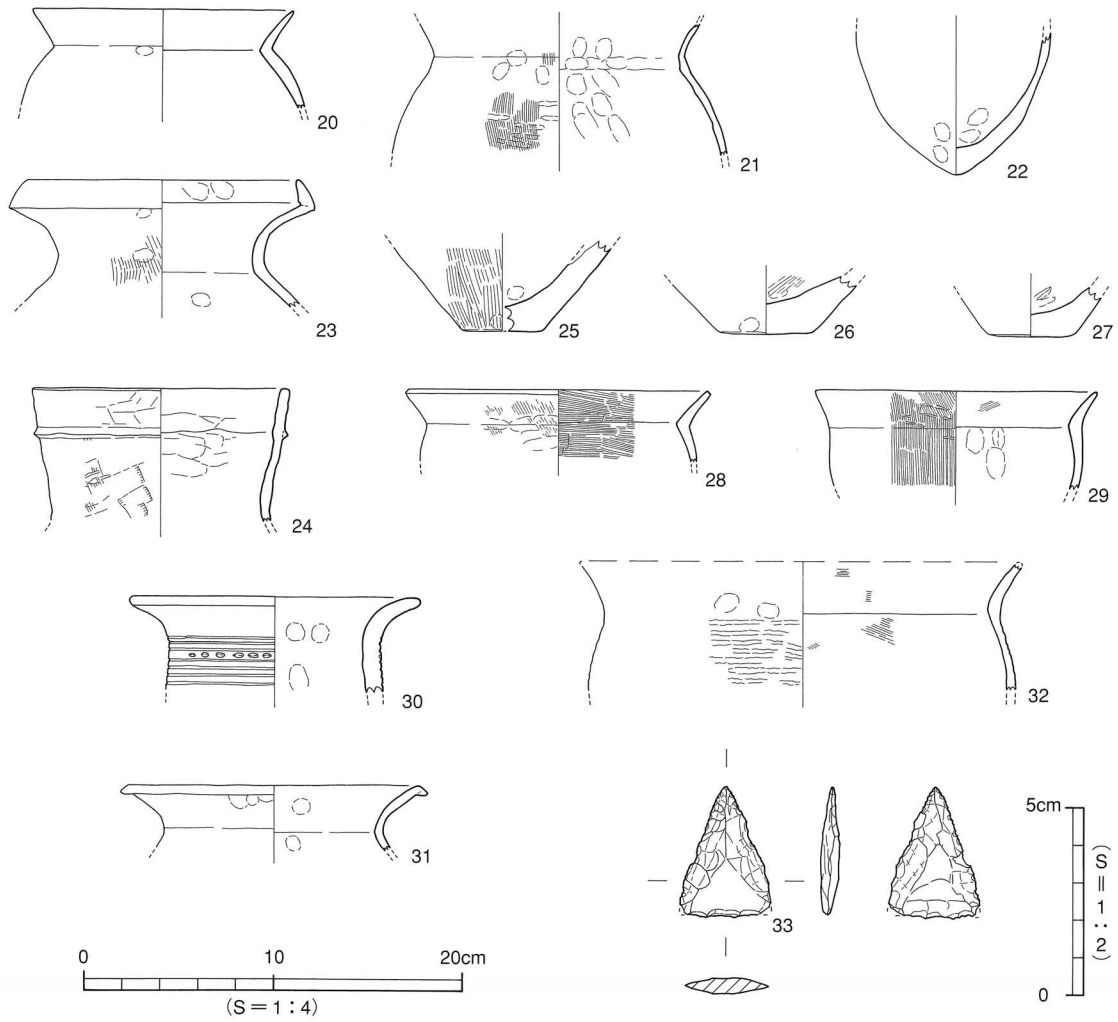
20～22は甕形土器である。20は「く」の字状口縁で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。21の胴部外面にはタタキ調整を施す。弥生末。23～27は壺形土器である。23は複合口縁壺で、口縁拡張部中位に膨らみをもつ。24は直口壺で、口縁部下に凸帯を1条貼り付ける。25～27は底部で、平底となる。28・29は鉢形土器で、口頸部内面に明瞭な稜をもつ。弥生後期後半。30は弥生前期の壺形土器で、頸部にヘラ描き沈線文7条と刻目を施す。



第13図 SP101～106測量図

3) 地点不明出土遺物 (第14図31~33、図版4)

31は弥生後期の甕形土器の口縁部片で、口縁端部は下方にやや拡張する。32は鉢形土器で、体部外面にタタキ調整を施す。弥生末。33はサヌカイト製の打製石鏃で、両面に自然面を残す。



第V①層：20~30  
 地点不明：31~33

第14図 第V①層・地点不明出土遺物実測図

## 4. 小 結

調査では、弥生時代の遺構と遺物を確認した。

### 1) 層 位

調査では、古墳時代（第Ⅳ層）から中世（第Ⅱ層）までの堆積層を除く基本層位のうち4層の土層を確認した。弥生時代の堆積層である第Ⅴ層はすべての区にみられ、最大層厚80cmを測る堆積がみられた。第Ⅴ層は土色や土質の違いにより5層に細分され、各層の上面または下面にて、溝や自然流路を検出した。第Ⅵ層は黄色や暗灰色を呈する土壌で、本層上面が調査における最終遺構検出面となる。1区のみにもみられ、層厚50cm以上の堆積を測る。第Ⅶ層は2区と3区でみられ、本層上面には起伏がみられ、標高51.1m～51.4mを測る。

### 2) 遺 構

検出した遺構は、溝、自然流路、性格不明遺構とピットである。出土遺物から、大半が弥生時代後期後半～末のものと考えられる。特に、性格不明遺構（S X 101）からは、弥生時代末に時期比定される遺物が集中して出土しており、掘り方は確認できなかったが、本来は何らかの遺構である可能性が高い。また、溝S D 101からは弥生時代後期後半の土器が出土しており、弥生後期集落に関する溝と考えられる。調査地近隣では、調査地の北方にある古市遺跡や下苜屋遺跡などで弥生時代集落遺構が検出されていることから、調査地周辺に弥生時代後期集落が展開されている可能性が高いものと考えられる。

今回の調査では、弥生時代後期集落の存在を推測される資料が得られた。今後、調査地周辺の遺跡との関係を検討し、調査地周辺における弥生時代集落の範囲や構造解明を急ぐ必要がある。

遺物観察表

遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 頸→頸部、胴→胴部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、銀→銀ウンモ、密→精製土、安→安山岩。

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表4 S D 101出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺	残高 6.5	貼付凸帯。凸帯上に斜格子目文。	ハケ→ミガキ (マメツ)	マメツ (ナデ)	淡乳茶色 淡乳茶色	石・長(1~3) ◎		
2	鉢	残高 3.9	小片。	マメツ	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
3	鉢	底径 1.6 残高 7.3	やや上げ底。底部2/3の残存。	マメツ (タタキ→ナデ)	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ◎	黒斑	
4	鉢	底径 1.6 残高 3.2	平底。	マメツ (ハケ)	マメツ (ナデ)	淡褐色 淡黄色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
5	壺	底径 (3.6) 残高 1.0	小片。	マメツ (ハケ)	ナデ	乳白色 暗灰褐色	石・長(1~3) 金・銀 ◎	黒斑	

表5 S R 101出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
6	石斧	刃部欠損	緑色片岩	5.0	0.7	3.6	5.1		4

表6 S X 101出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 (15.0) 器高 25.5	1/2の残存。口頸部内面に稜あり。	◎ナデ →タタキ	ナデ (マメツ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~5) 安 ◎	黒斑	4
8	甕	口径 (20.3) 残高 2.7	小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
9	甕	残高 2.7	小片。	ナデ ハケ(8本/cm)	マメツ (ナデ)	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎		
10	壺	口径 (20.4) 残高 7.0	貼付凸帯。凸帯上に斜格子目文。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) 銀・安 ◎		
11	壺	残高 21.6	1/2の残存。	ハケ(10本/cm)	◎ナデ→ ハケ(5~6本/cm)	淡黄褐色 黒灰色	石・長(1~3) ◎	黒斑	4
12	甕	底径 (2.8) 残高 6.7	平底。小片。	タタキ→ ハケ(10本/cm)	マメツ (ナデ)	淡褐色 黒色	石・長(1~4) 金 ◎	黒斑	
13	甕	残高 5.3	やや丸底。	タタキ→ナデ	ナデ	黒褐色 淡褐色	石・長(1~2) 金 ◎	黒斑	
14	甕	底径 1.4 残高 5.1	平底。	マメツ (ハケ)	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長(1~5) 安 ◎	黒斑	

S X 101 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
15	甕	底径 1.0 残高 13.5	2/3の残存。	ハケ(7本/cm) マメツ	ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
16	甕	残高 23.2	2/3の残存。	マメツ (工具痕)	ナデ ハケ	乳白色 乳白灰褐色	石・長(1~5) 石・金・安 ◎	黒斑	
17	壺	残高 10.4	底部片。	マメツ ハケ(10本/cm)	マメツ ナデ	乳黄茶褐色 乳黄褐色	石・長(1~2) 石・安 ◎	黒斑	
18	支脚	残高 4.7	角状突起部。断面楕円形。	ナデ	—	茶褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
19	支脚	底径 11.6 残高 8.6	脚部完形。円孔あり(φ1.0cm)。	タタキ	シボリ痕 ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	4

表7 第V①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
20	甕	口径(13.6) 残高 5.1	小片。	マメツ	マメツ	淡橙黄色 淡黄色	長(1~4) ◎		
21	甕	残高 6.9	小片。	タタキ→ハケ (マメツ)	ナデ	乳褐色 黒色	石・長(1~5) 石・銀 ◎		
22	甕	底径 1.0 残高 7.5	尖り底。	マメツ	ナデ	乳黄褐色 乳白色	石・長(1~4) 石・金・安 ◎		
23	壺	口径(14.1) 残高 6.7	複合口縁壺。	◎ハケ (マメツ)	ヨコナデ マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	4
24	壺	口径(12.8) 残高 7.1	直口壺。貼付凸帯1条。	マメツ (ハケ)	マメツ (工具痕)	乳白灰黄色 乳白灰黄色	石・長(1~4) 石・安 ◎		4
25	壺	底径(4.0) 残高 4.8	平底。1/3の残存。	ハケ (5~6本/cm)	マメツ	淡黄茶色 灰色	長(1) ◎	黒斑	
26	壺	底径(4.8) 残高 3.1	平底。2/3の残存。	マメツ	ハケ	淡黄橙色 黒色	石・長(1~3) 石・安 ◎	黒斑	
27	壺	底径(4.3) 残高 2.6	小片。	マメツ	ナデ	乳白色 暗褐色	石・長(1~5) 石・安 ◎	煤?	
28	鉢	口径(15.8) 残高 3.7	小片。口胴部内面に稜あり。	マメツ (ハケ)	ハケ (10~12本/cm)	淡灰色 淡黄色	石・長(1~2) ◎	黒斑?	
29	鉢	口径(15.0) 残高 5.5	小片。	タタキ→ハケ (16本/cm)	マメツ (ナデ→ハケ)	灰褐色 灰褐色	石・長(1~5) 石・金 ◎		
30	壺	口径(15.4) 残高 5.0	ヘラ沈線文7条以上+刻目。	マメツ	マメツ	乳白色 乳黄白色	石・長(1~4) 石・銀 ◎		

表8 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	甕	口径(15.4) 残高 3.4	小片。	ヨコナデ マメツ	ナデ	乳黄白色 乳白色	石・長(1~5) 石・金・安 ◎		
32	鉢	残高 6.9	小片。	◎タタキ (マメツ)	マメツ (ハケ)	淡黄色 淡黄色	石・長(1~5) ◎		

表9 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
33	石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	3.4	2.4	0.4	2.9		4

第4章

# 水 泥 遺 跡

— 1 次 調 査 —





## 第4章 水泥遺跡1次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2001（平成13）年10月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には平井遺跡2次調査地があり、弥生時代の集落関連遺構や遺物が確認され、さらに平井遺跡1次調査では縄文時代晩期から中世までの遺構や遺物が確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2003（平成15）年1月14日から同年2月14日までの間に試掘調査を実施した。その結果、溝や流路のほか、土師器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2003（平成15）年4月1日より開始した。

#### (2) 調査の経緯（第15図）

調査は2003（平成15）年4月1日から同年8月29日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地内を北側から南側へ5つの区（1区～5区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。

4月18日、1区の調査を開始する。重機により表土層を除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。その結果、1区では溝や鋤址状遺構を検出した。5月19日より1区の調査と併行して2区の調査を開始する。2区からは鋤址状遺構を検出した。6月26日より3区の調査を開始する。3区からは溝や鋤址状遺構、ピットを検出した。6月30日、1区と2区の調査を終了し、7月2日より4区の調査を開始する。4区からは溝と鋤址状遺構を検出した。7月22日、3区と4区の遺構掘り下げを終了し、7月25日、高所作業車を使用して1区から4区までの完掘状況写真を撮影する。7月26日より5区の調査を開始する。5区では近現代の攪乱が著しく、遺構は検出できなかった。3区と4区は5区の調査と併行して遺構の測量や写真撮影等をおこなった。8月4日より、調査が終了した1区や2区の埋め戻しを重機を使用しておこなった。8月25日、5区の調査を終了し、8月29日、屋外調査をすべて終了した。

#### (3) 調査組織

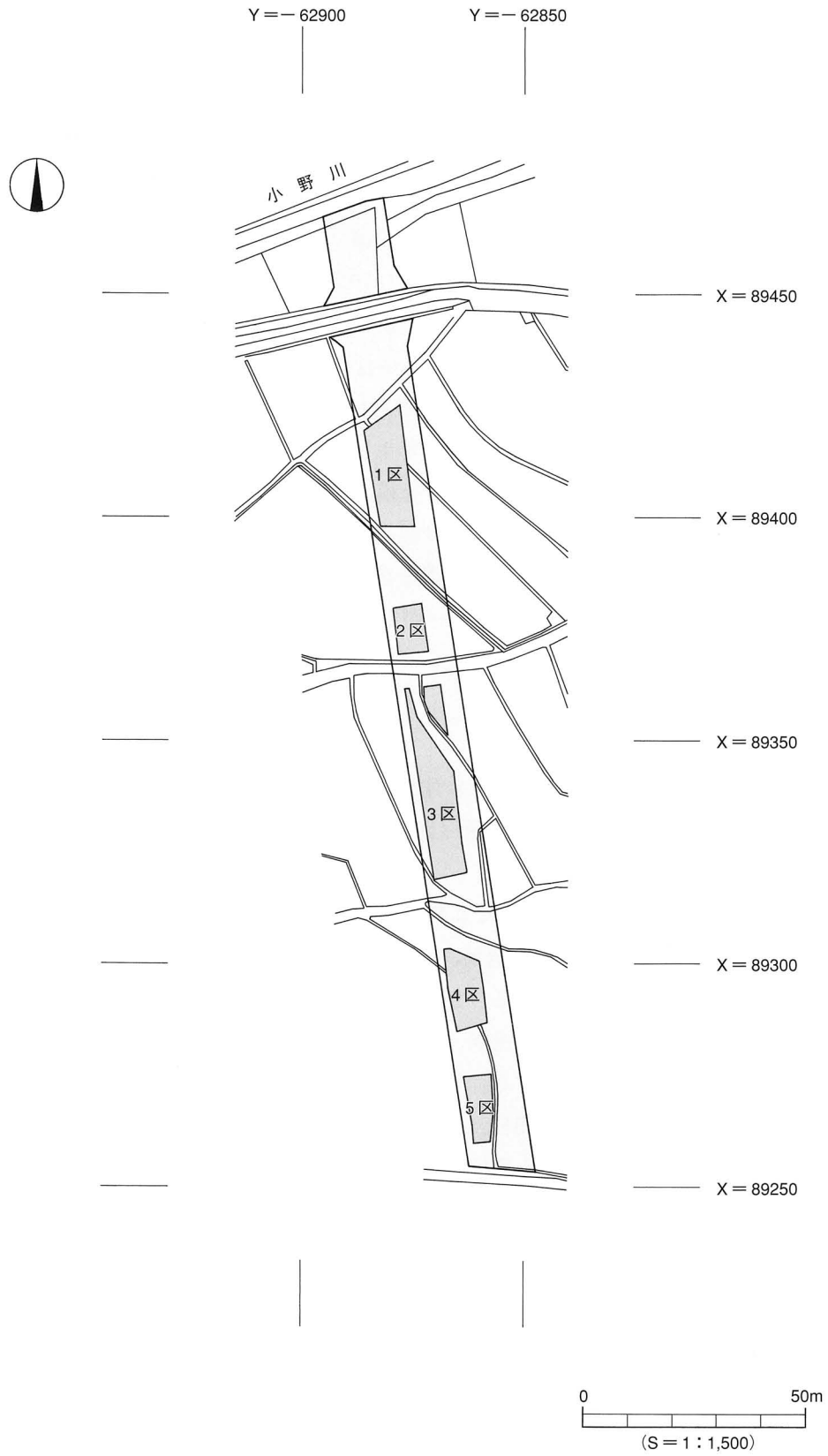
所在地：松山市水泥町1346番地1外

調査期間：2003（平成15）年4月1日～同年8月29日

調査面積：2,800m<sup>2</sup>

調査担当：梅木 謙一・水本 完児

水泥遺跡1次調査



第15図 調査区測量図

## 2. 層 位

### (1) 基本層位 (第16～19図、図版5)

調査地の基本層位は、第Ⅰ層～第Ⅳ層、及び第Ⅵ層、第Ⅶ層の6層であり、第Ⅴ層(弥生)は未検出である。調査以前は水田であり、現況の標高を測量すると北側から南側へ向けて傾斜をなし、調査地北端で標高51.4m、南端で50.20mを測る。

第Ⅰ層—近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより4層に分層される。

第Ⅰ①層：青灰色土で、水田耕作にともなう耕作土である。調査区全域にみられ地表下10～35cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ②層：黄灰色土で、第Ⅰ①層と同様の耕作土である。調査地全域にみられ層厚約10cmを測る。

第Ⅰ③層：明黄褐色土で、水田耕作に伴う床土である。調査区全域にみられ層厚5～35cmを測る。

第Ⅰ④層：灰色土で、水田耕作土に伴う床土で5区でのみ検出。

第Ⅱ層—中世段階の土層で、土質、土色の違いにより4層に分層される。

第Ⅱ①層：灰色を呈する粘質土で、1区から3区にみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅱ②層：暗青灰色を呈する粘質土で、調査地はほぼ全域にみられ層厚5～40cmを測る。2区と3区では本層下面にて鋤址状遺構を検出した。

第Ⅱ③層：暗灰色土で、1区を除く地区にみられ層厚5～30cmを測る。

第Ⅱ④層：暗灰黄色土で、2区のみにみられ層厚3～20cmを測る。

第Ⅲ層—古代の土層で、土質、土色の違いにより2層に分層される。

第Ⅲ①層：橙灰色土で、2区から4区にみられ層厚5～30cmを測る。

第Ⅲ②層：茶褐色土で、5区を除く地区にみられ層厚5～30cmを測る。1区では本層上面にて溝を検出し、本層下面にて鋤址状遺構を検出した。また2区から4区では、本層下面にて溝や鋤址状遺構を検出した。

第Ⅳ層—古墳時代の遺物を含む土層で、2区だけにみられ層厚5～15cmを測る。本層中からは土師器片や須恵器片が少量出土した。

第Ⅵ層—黄褐色土で、5区を除く地区にみられ層厚5～40cmを測る。なお本層上面が調査における最終遺構検出面となる。

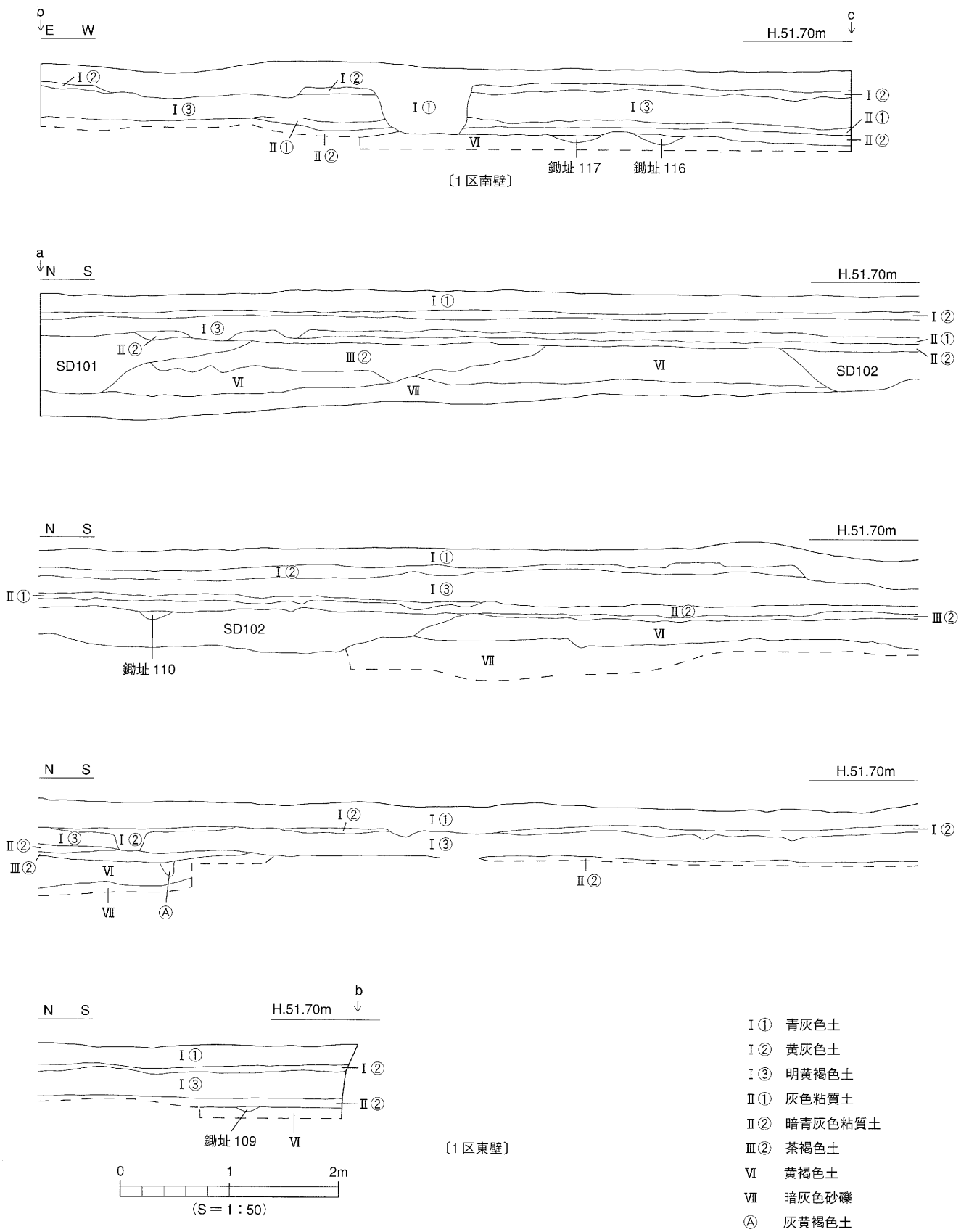
第Ⅶ層—河川の氾濫にともなう堆積物で、暗灰色粗砂を基調とし、径5～15cm大の礫を含む。本層上面は起伏に富み、1区と2区及び4区では本層上面の標高が50.7m、3区では50.4m、5区では49.6mとなる。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C・・・F、北から南へ1・2・3・・・26とし、A1・A2・・・F26といったグリット名を付した。

### (2) 検出遺構・遺物 (表10・図版6・7)

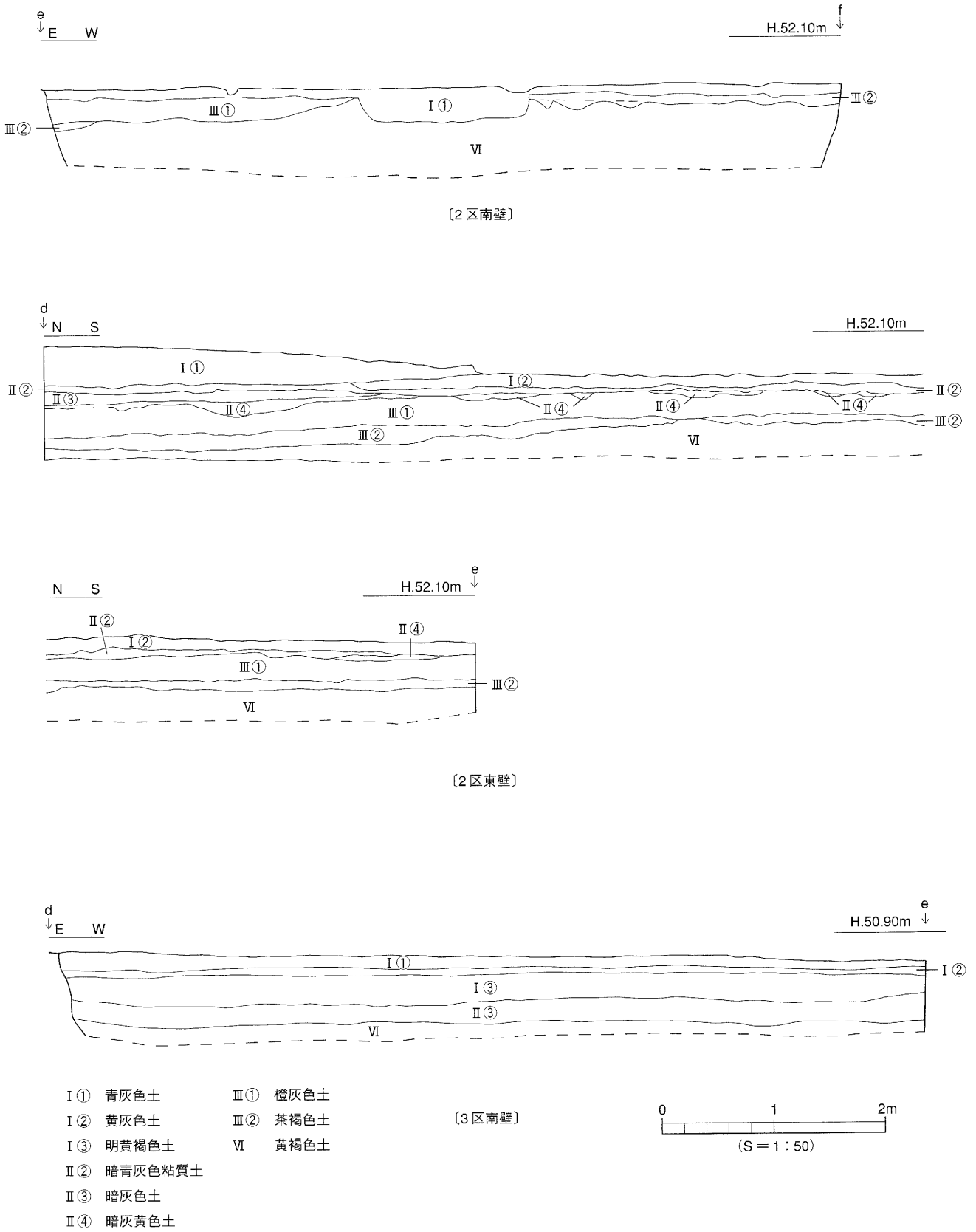
調査では溝5条〔古代〕、鋤址状遺構9条〔古代〕、鋤址状遺構39条〔中世〕、性格不明遺構1基〔古代〕、ピット3基を検出した。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。以下、検出した遺構を地区別に表10に掲載する。なお、5区では遺構は検出されなかった。

水泥遺跡 1次調査



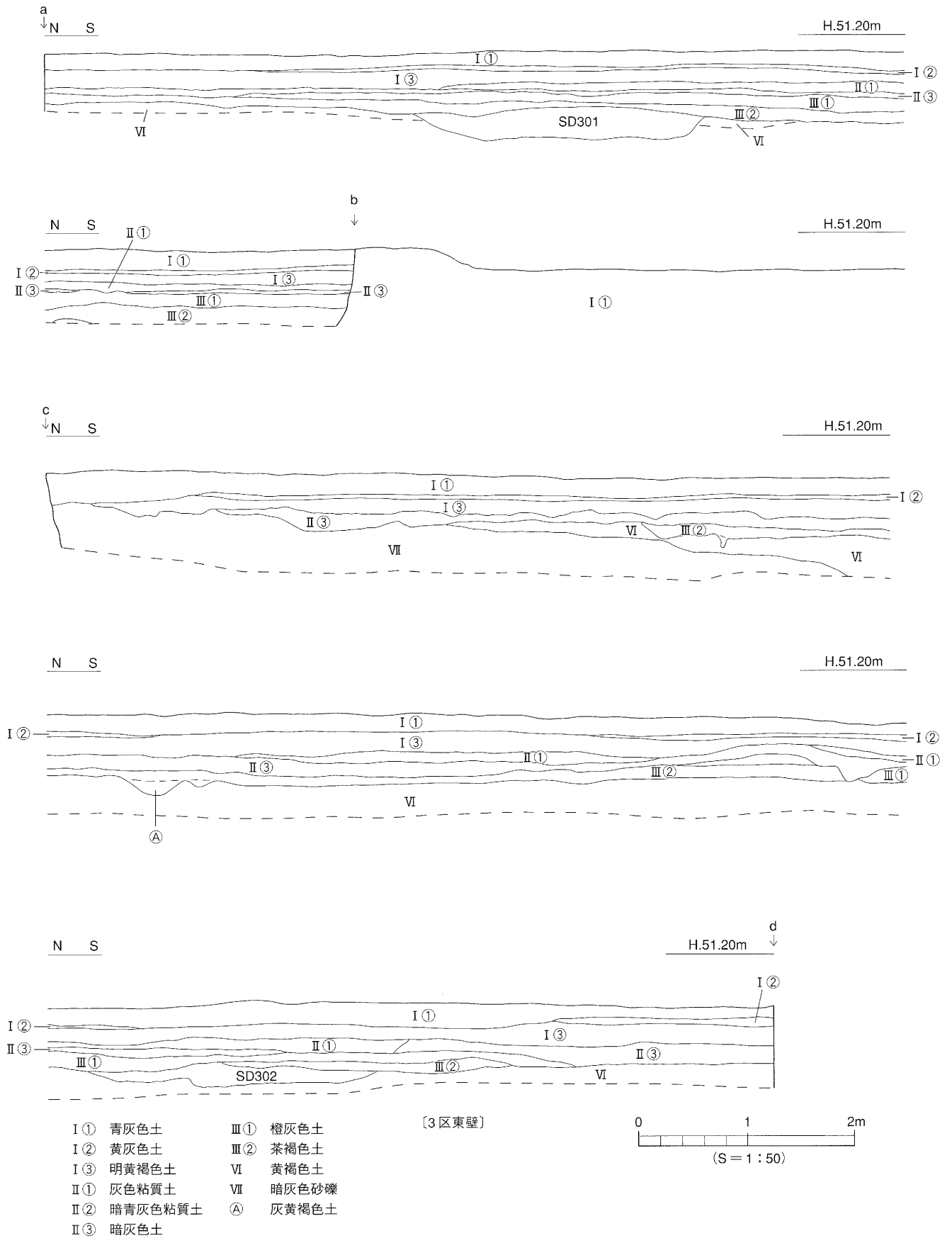
第16図 1区土層図

層 位



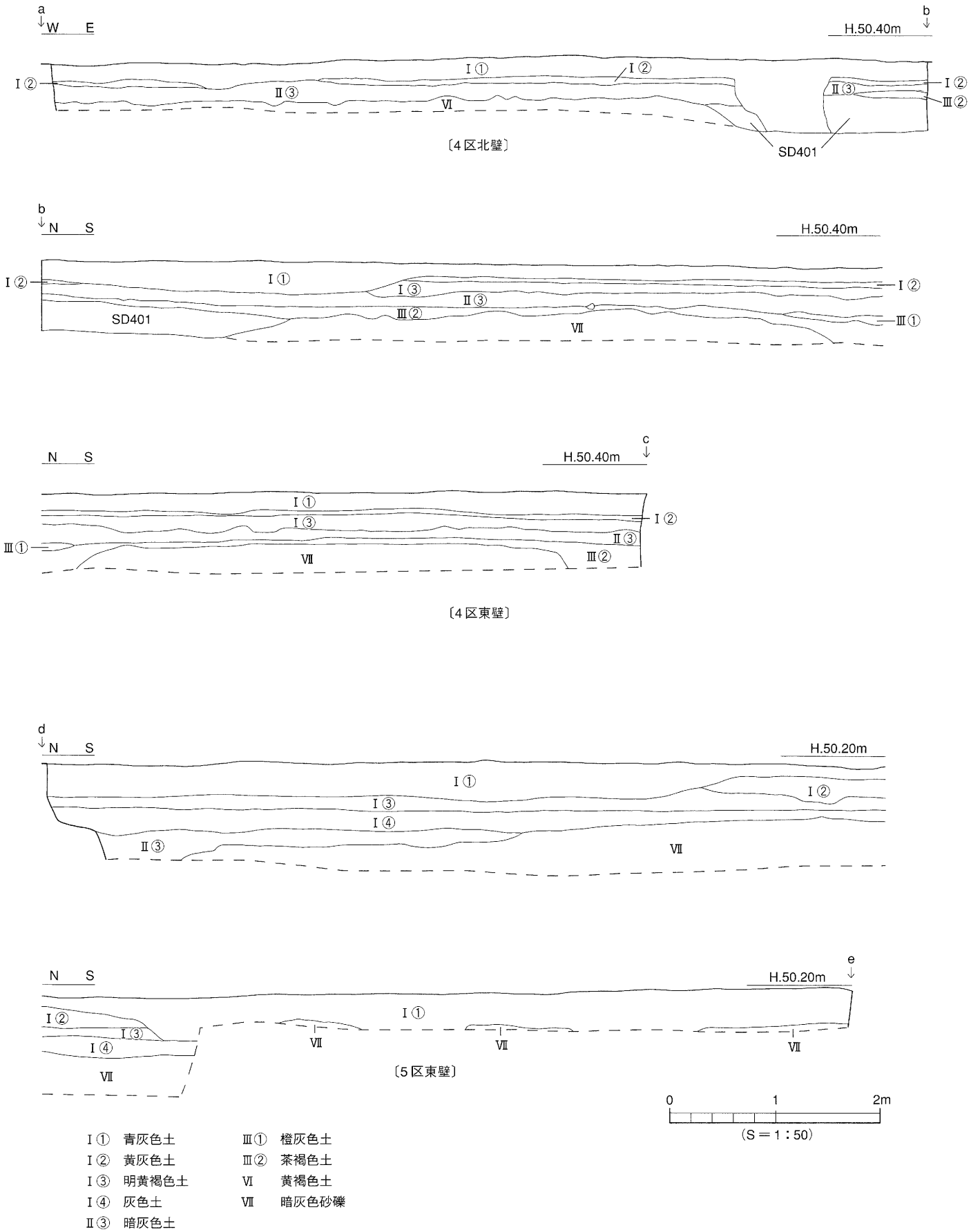
第17图 2区・3区(1)土层图

水泥遺跡 1 次調査



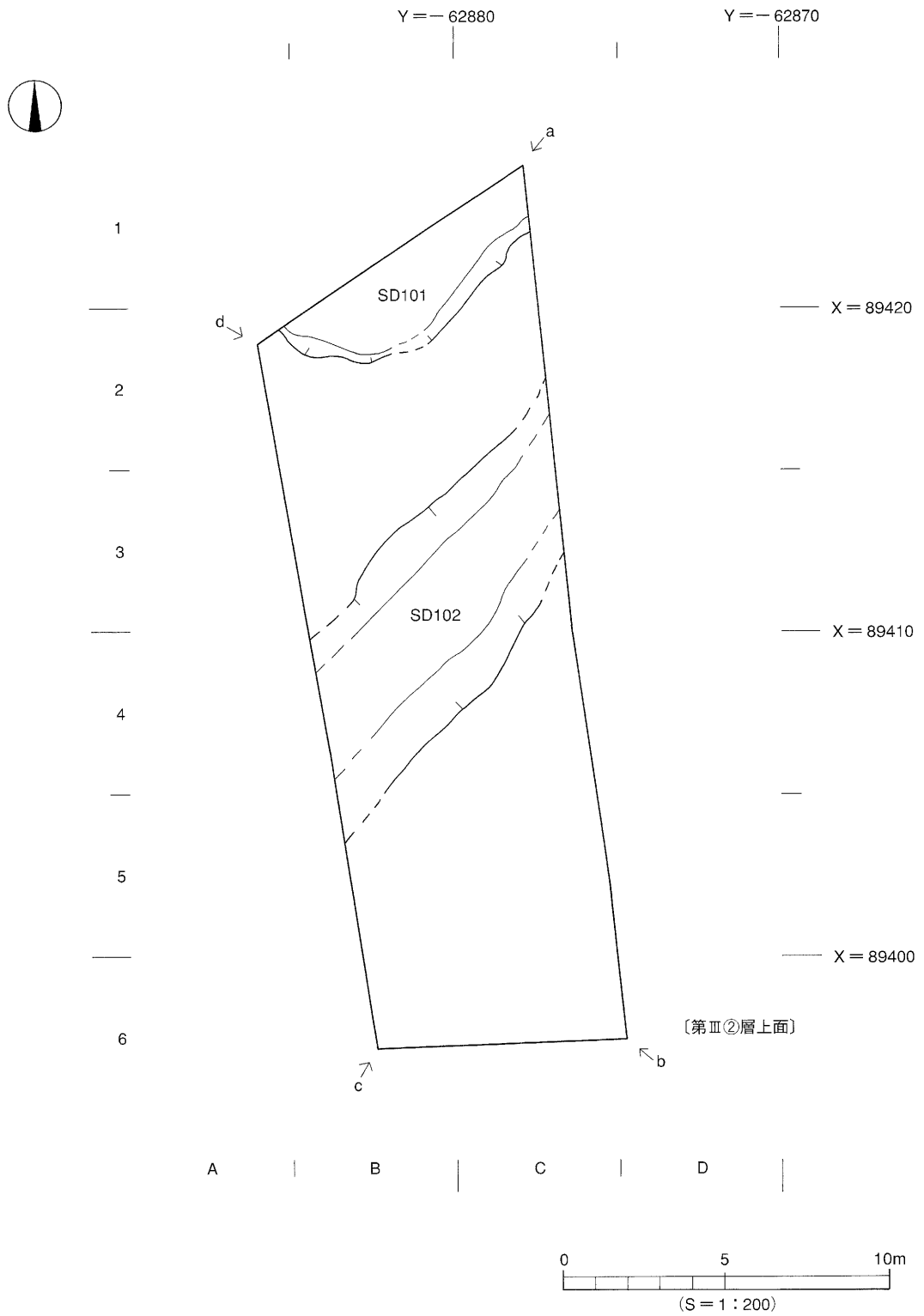
第18図 3区土層図(2)

層 位



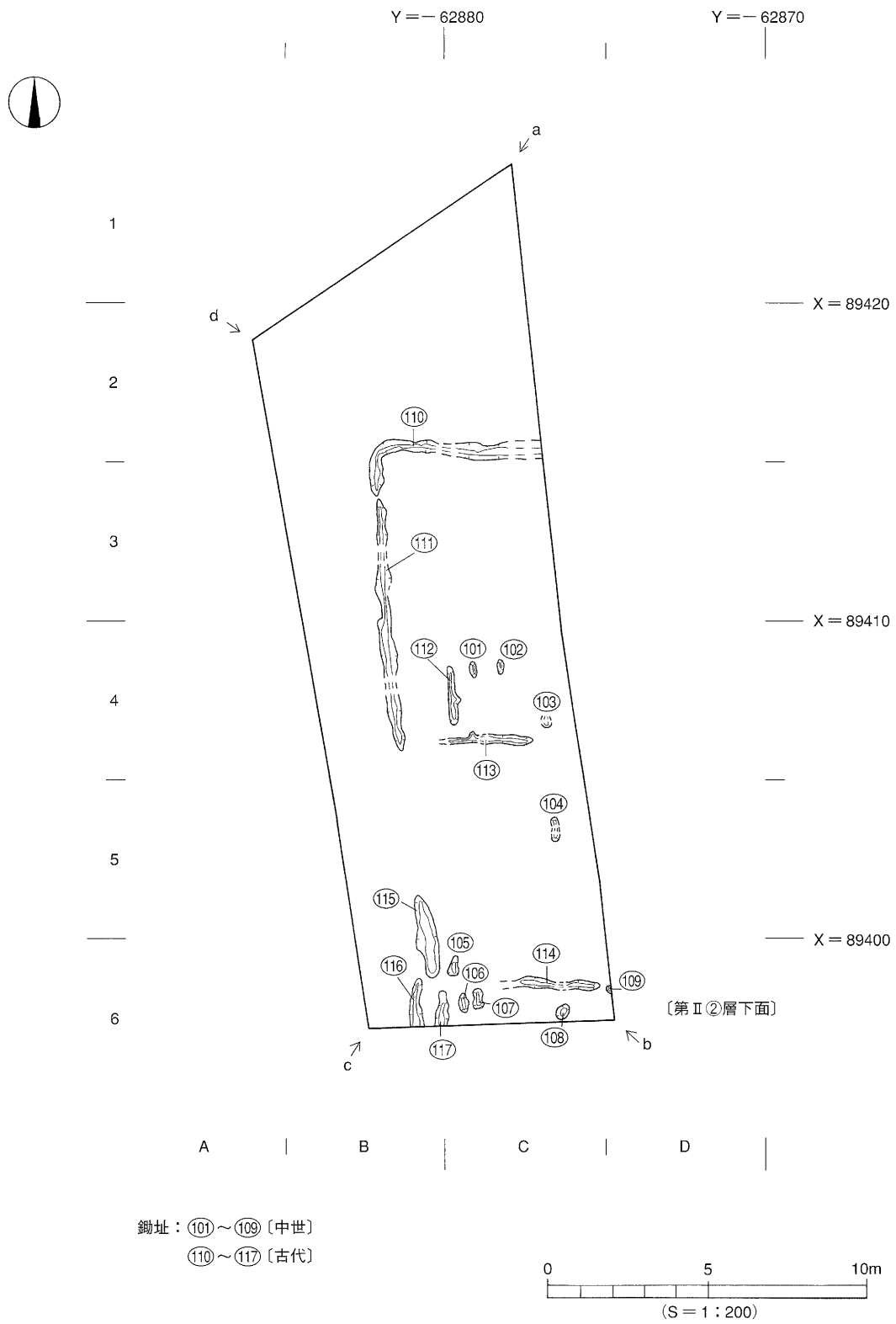
第19図 4区・5区土層図

水泥遺跡 1 次調査



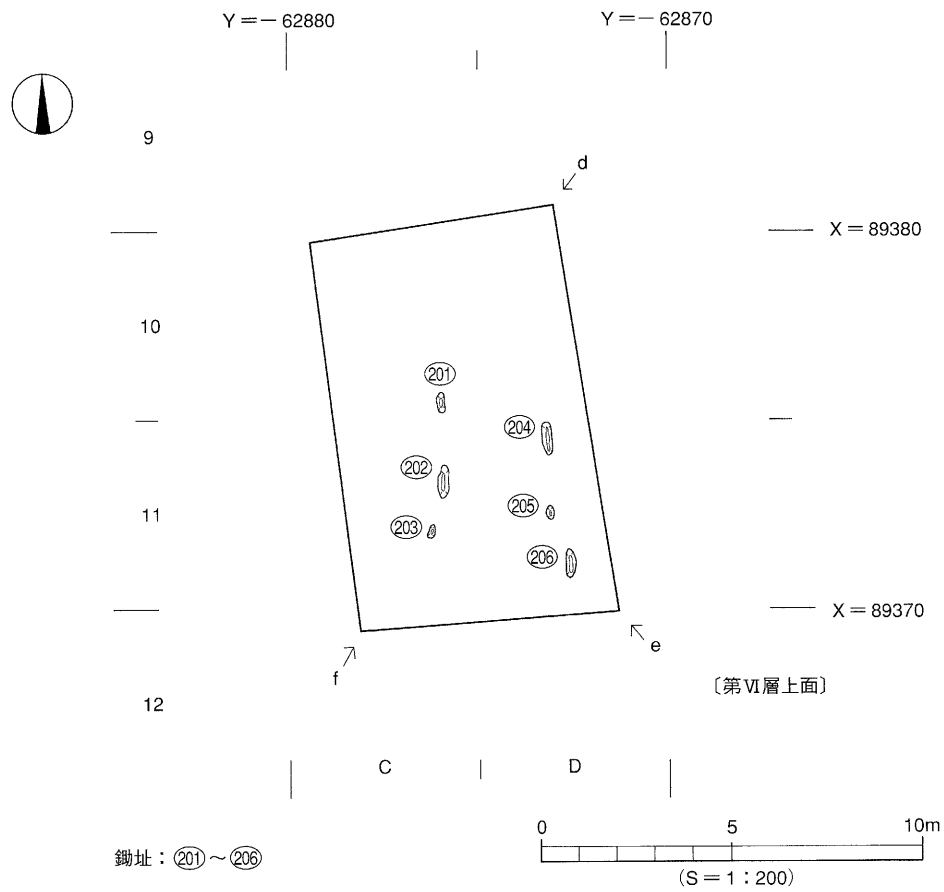
第20図 1区遺構配置図(1)



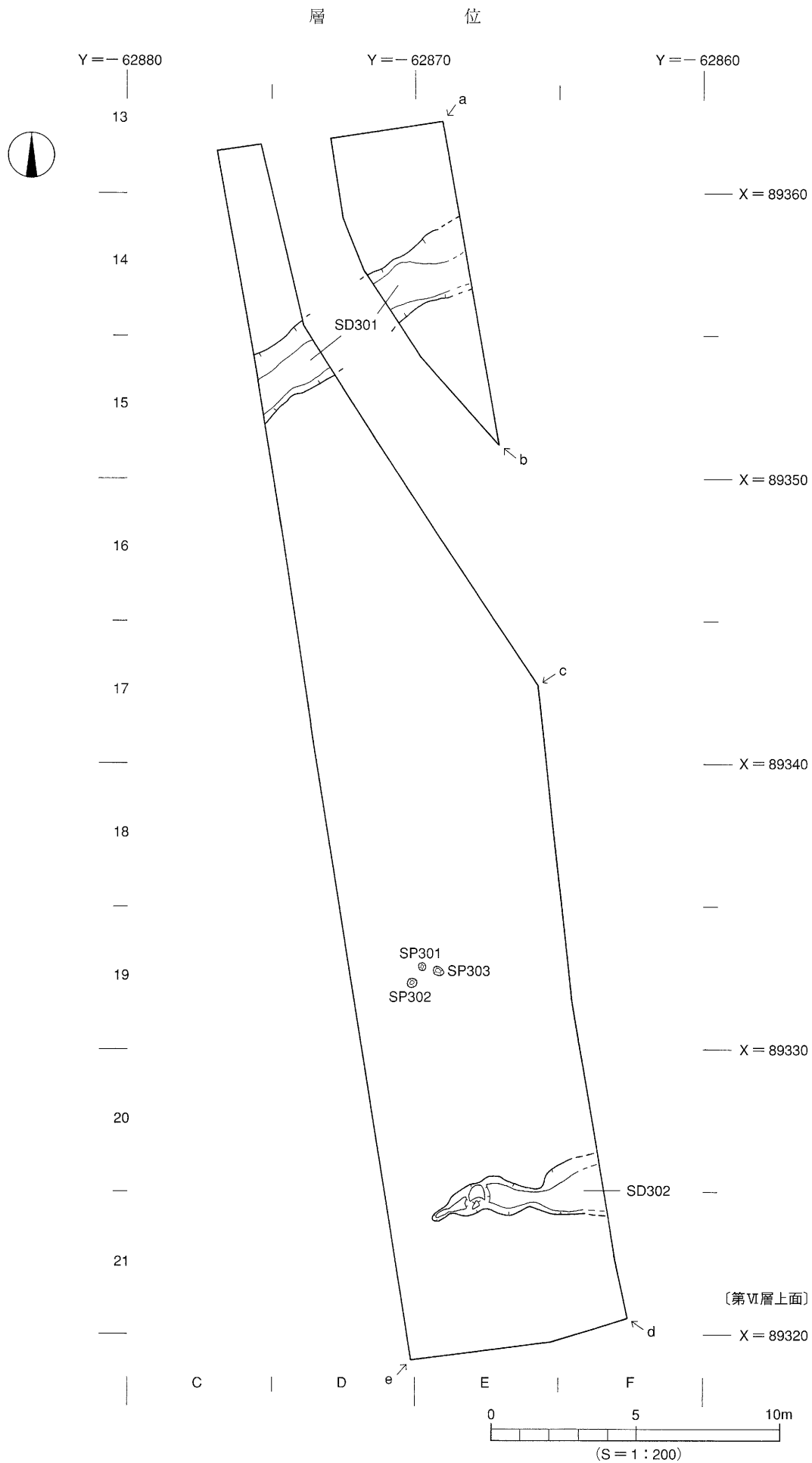


第21図 1区遺構配置図(2)

水泥遺跡 1 次調査

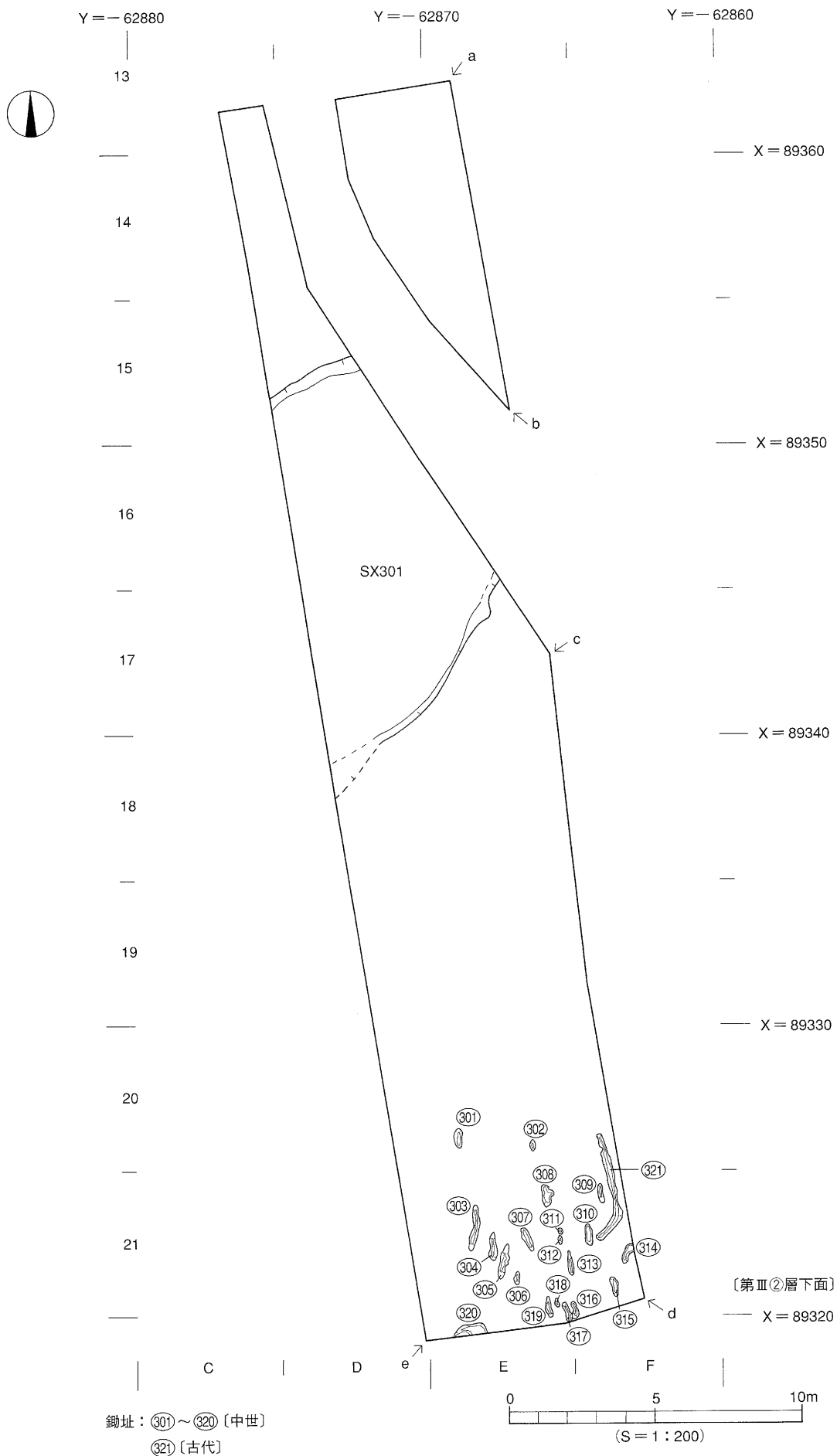


第22図 2区遺構配置図

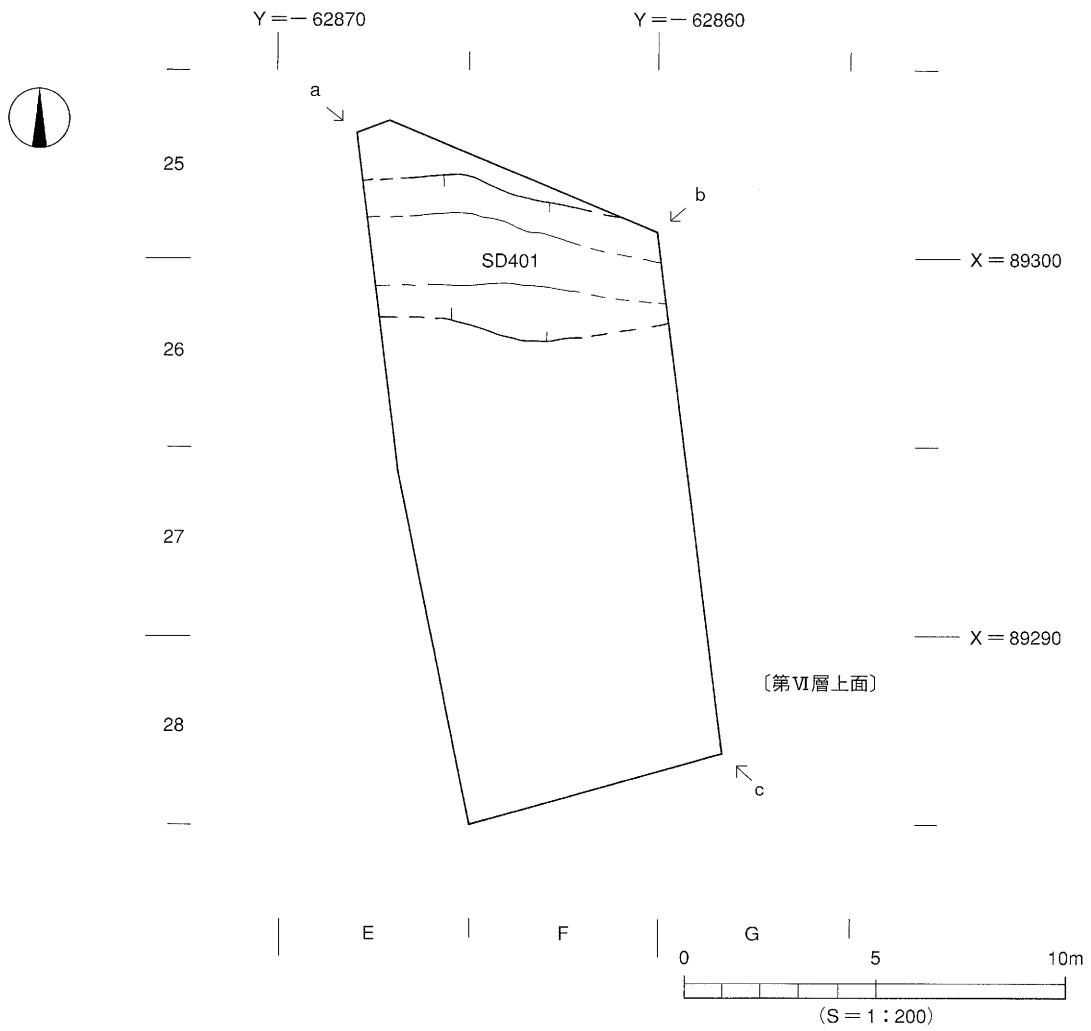


第23図 3区遺構配置図(1)

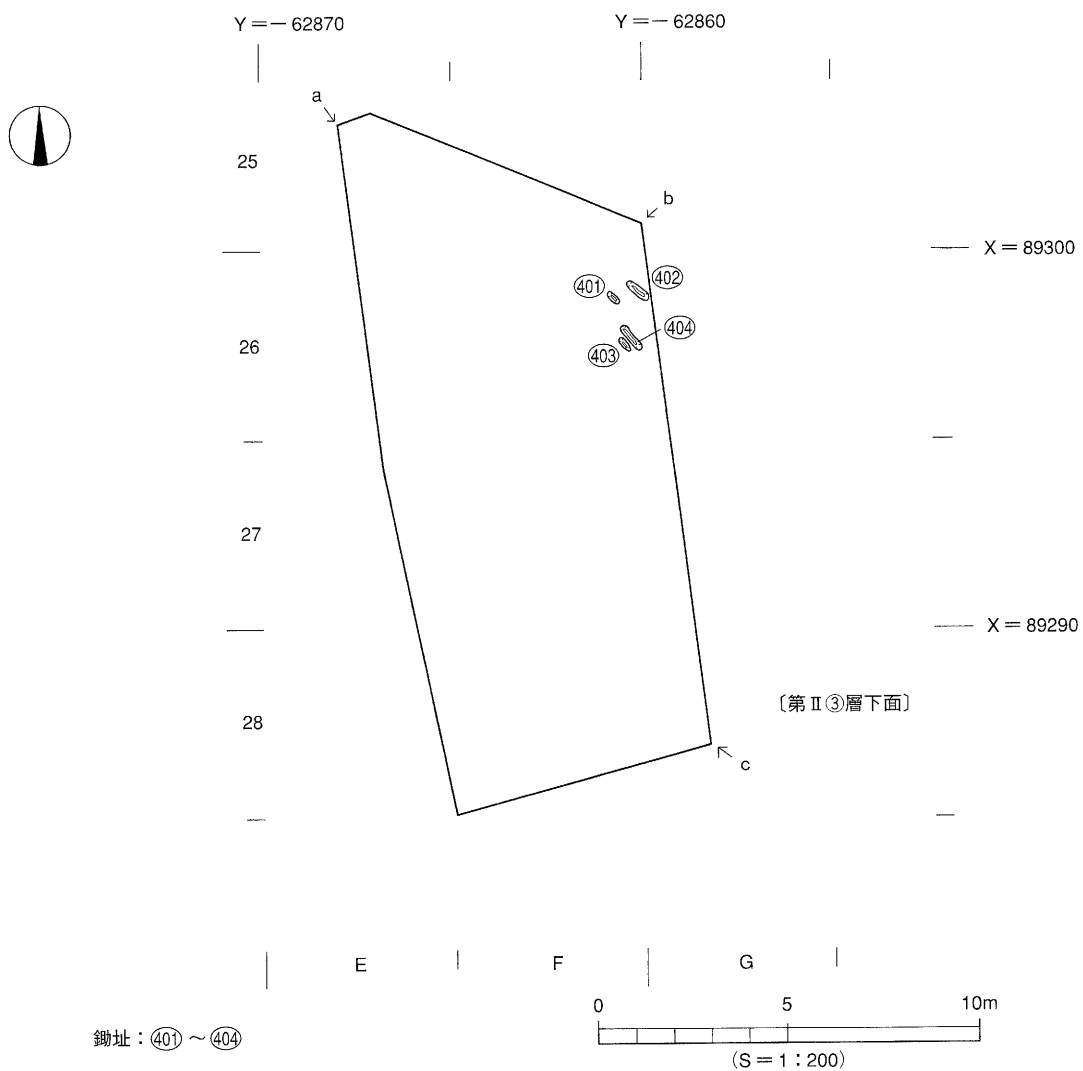
水泥遺跡 1次調査



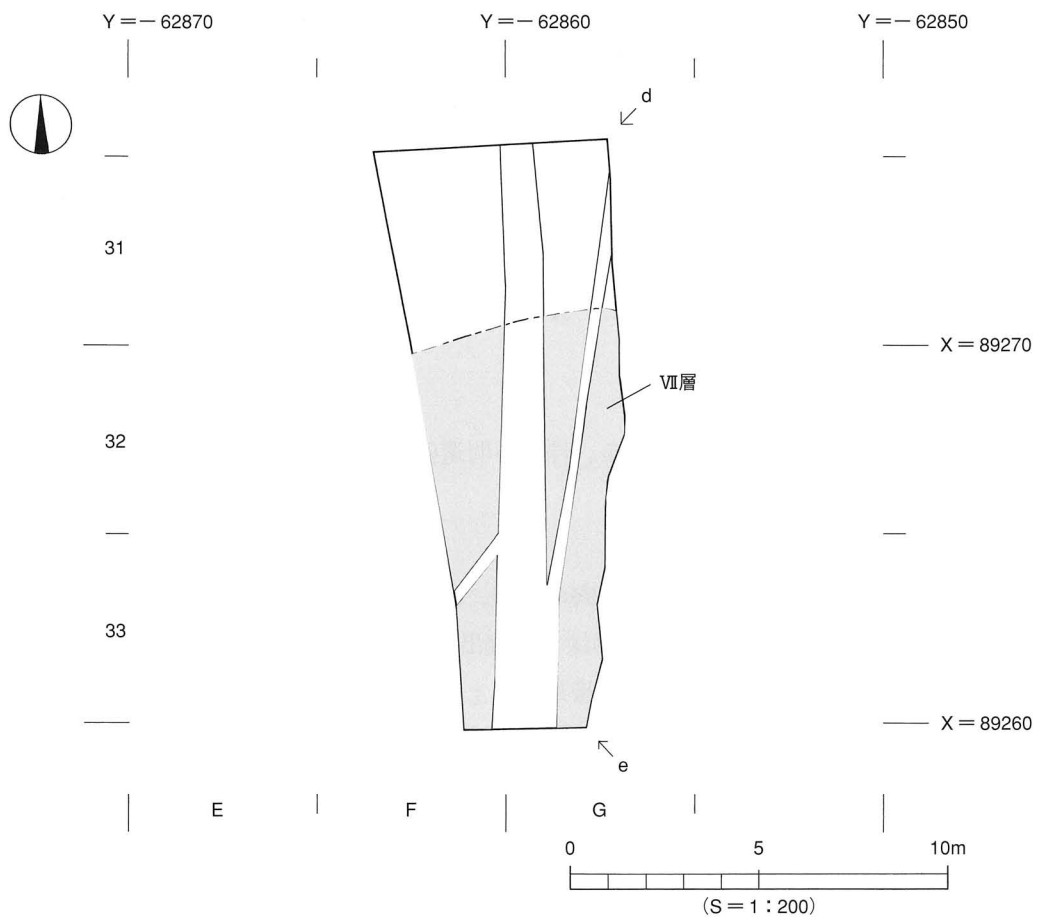
第24図 3区遺構配置図(2)



第25図 4区遺構配置図(1)



第26図 4区遺構配置図(2)



第27図 5区測量図

表10 検出遺構一覧

区	古 代	中 世	その他
1 区	溝 2 条：S D 101・102 鋤址 8 条：鋤址110～117	鋤址 9 条：鋤址101～109	
2 区		鋤址 6 条：鋤址201～206	
3 区	溝 2 条：S D 301・302 性格不明遺構 1 基：S X 301 鋤址 1 条：鋤址321	鋤址20条：鋤址301～320	ピット 3 基：S P 301～303
4 区	溝 1 条：S D 401	鋤址 4 条：鋤址401～404	
5 区			

### 3. 遺構と遺物

本調査では、古代から中世までの遺構と、弥生時代から中世までの遺物を検出した。ここでは時代別に概要を説明する。

#### (1) 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、溝 5 条、鋤址状遺構 9 条、性格不明遺構 1 基である。

##### 1) 溝

S D 101 (第20・28図)

1 区北側 B 1～C 2 区で検出した東西方向の溝で、溝北側及び東側は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。規模は東西検出長9.0m、南北検出長3.0m、深さは検出面下40cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗茶褐色土に少量の灰色砂が混入する。溝底面はほぼ平坦である。溝内からは土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は困難であるが、検出層位や埋土、出土遺物から、概ね7世紀代とする。

S D 102 (第20・29図)

1 区中央部 C 3～B 5 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。規模は検出長10.4m、幅40～50cm、深さは検出面下20～30cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は暗茶褐色土に灰色砂が少量混入する。溝底面は丸みを帯び、東から西へ向けて緩傾斜をなす（比高差5cm）。遺物は溝底面付近より土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定は困難であるが、検出層位や埋土、出土遺物から、概ね7世紀代とする。

S D 301 (第23・30図)

3 区北側 E 14～D 15 区で検出した北東－南西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長8.5m、幅2.0～2.4m、深さは検出面下30～35cmを測る。

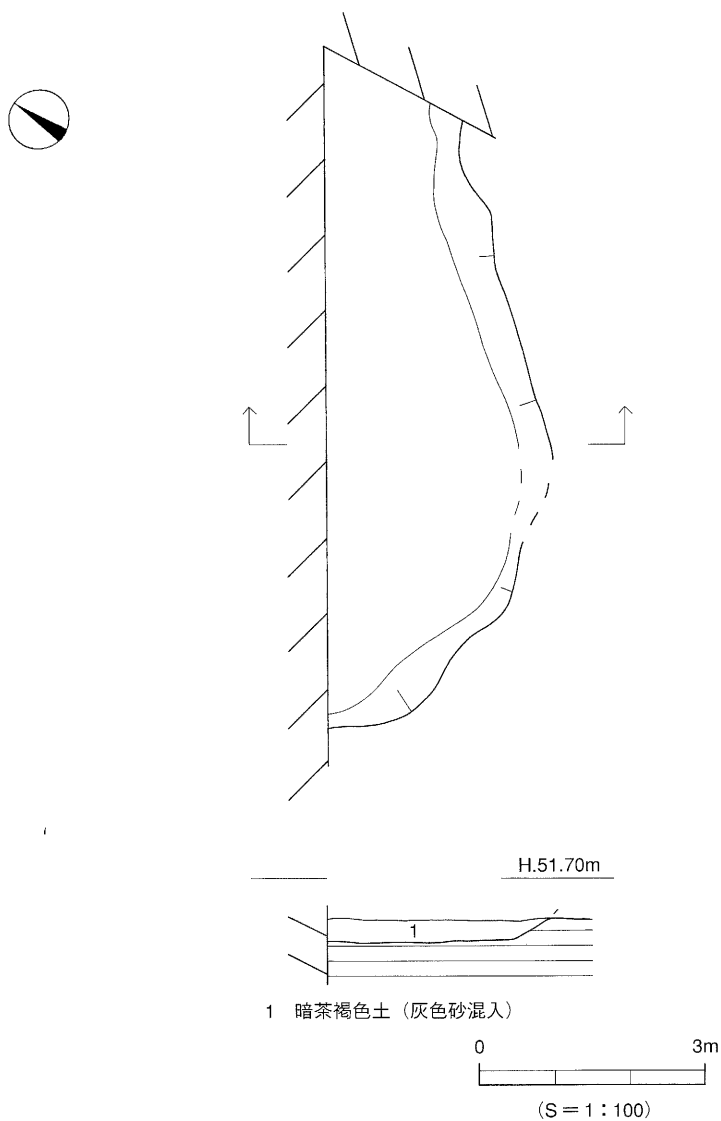


断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝側面は東から西へ向けて傾斜をなし比高差8cmを測る。遺物は溝底面付近より須恵器や弥生土器片が出土した。

出土遺物（第30図、図版8）

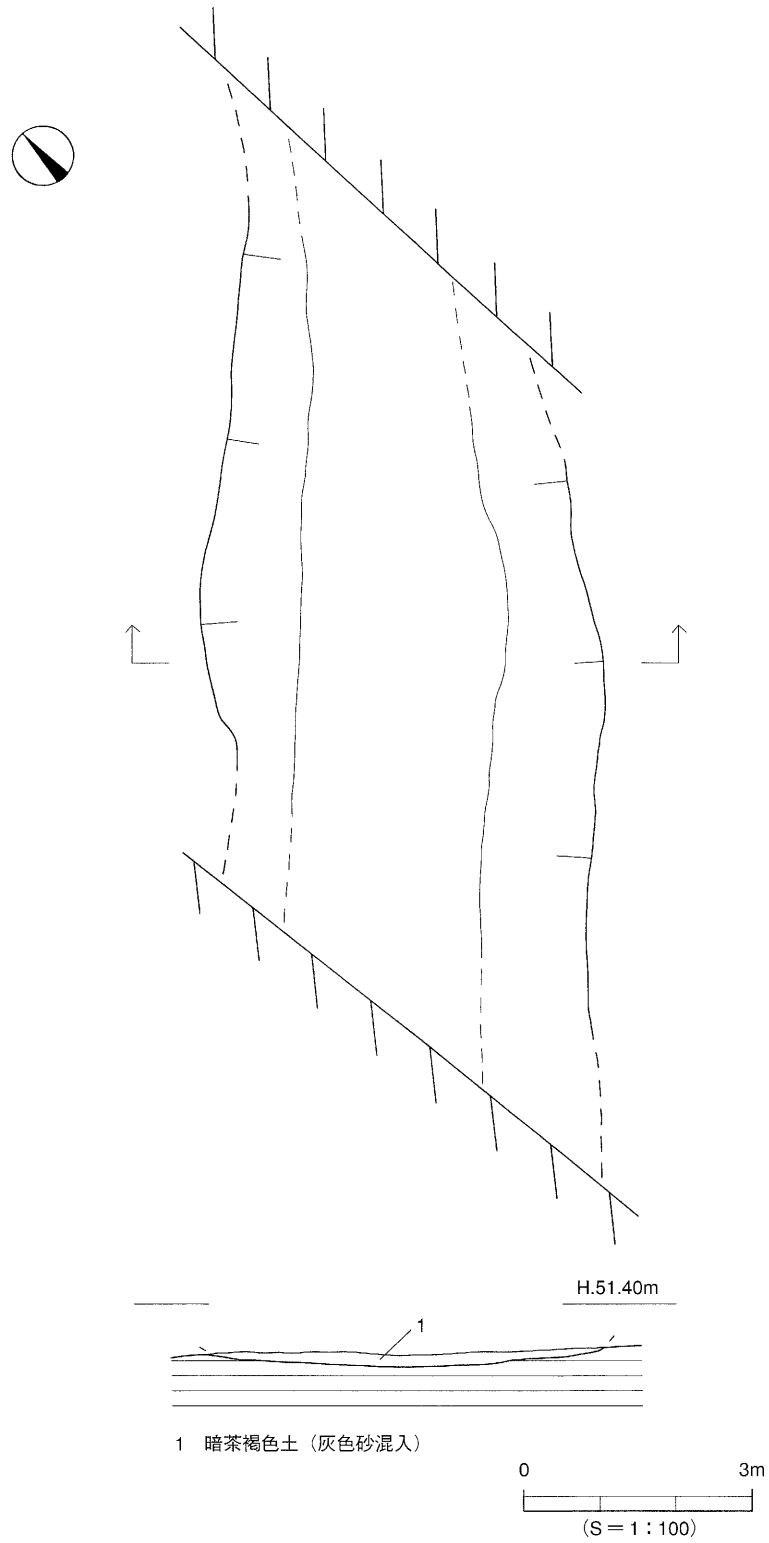
34・35は須恵器坏身で、たちあがりは短く内傾する。36は弥生土器の甕形土器、37は壺形土器である。36の外面にはヨコ方向のタタキ調整を施す。37の内面には板状工具によるナデを施す。

時期：出土した須恵器の特徴より、S D 301は7世紀前半の遺構とする。

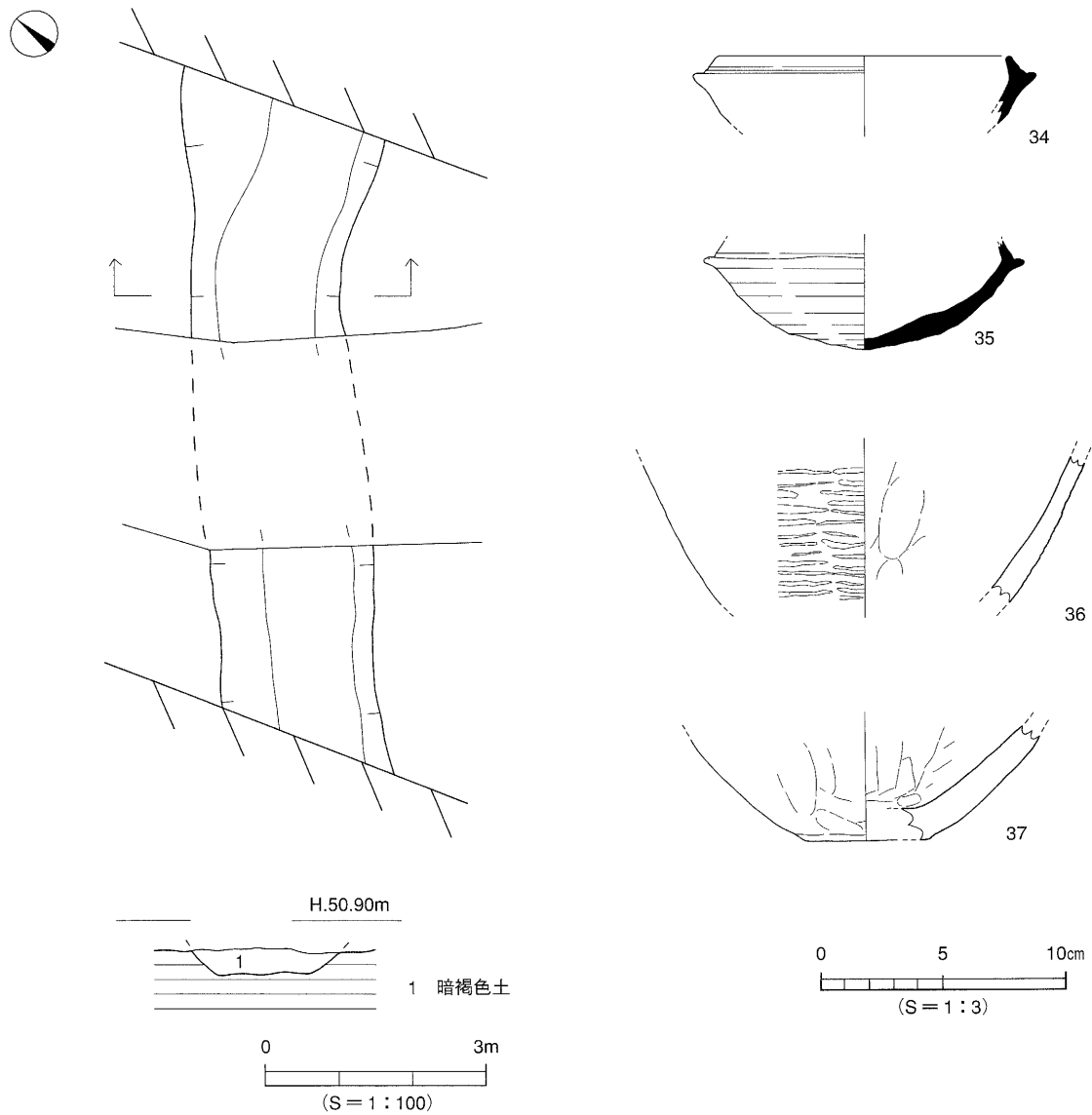


第28図 S D 101測量図

水泥遺跡 1次調査



第29図 S D 102測量図

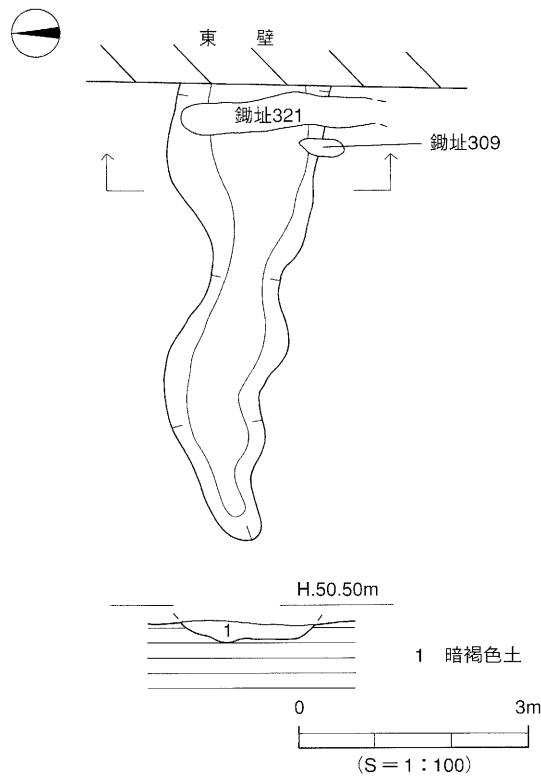


第30図 S D 301測量図・出土遺物実測図

S D 302 (第23・31図)

3区南側E20～F21区で検出した東西方向の溝で、溝西側は消失し、東側は一部鋤址に切られ、調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長6.0m、幅0.6～2.0m、深さは検出面下20～30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より須恵器片や土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は難しいが、検出層位や埋土がS D 301に酷似することから、概ね7世紀代の遺構とする。



第31図 S D 302測量図

S D 401 (第25図)

4区北側E25～F26区で検出した東西方向の溝で、溝上面には一部鋤址が検出され、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長7.7m、幅3.5～4.2m、深さは検出面下45cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は暗茶褐色土に灰色砂が少量混入する。溝底面は東側から西側へむけて緩傾斜をなす（比高差4cm）。遺物は埋土中より須恵器片や土師器片が少量出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定は難しいが、検出層位や埋土、出土遺物から、概ね7世紀代とする。

2) 鋤址状遺構（鋤址）

調査では1区と3区にて鋤址状遺構を検出した。第Ⅱ②層下面及び第Ⅲ②層下面での検出である。ここでは、区ごとに説明をおこなう。

① 1区（第21図）

1区では8条の鋤址（鋤址110～117）を検出した。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅲ②層中より掘削されていることが判明した。鋤址110～112は溝S D 102上面にあり、鋤址110と鋤址111は同一の遺構と思われる。鋤址の規模は幅0.2～0.6m、深さは検出面下3～19cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて灰黄色土単層である。各鋤址は真北方向に沿って東西及び南北方向に掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

## ② 3区（第24・31図）

3区では1条の鋤址（鋤址321）を検出した。第Ⅲ②層下面での検出であるが、本来は第Ⅲ②層中より掘削されていることが、調査壁の土層観察により判明した。鋤址321は一部が溝SD302上面にある。鋤址の規模は幅0.2～0.3m、深さは検出面下3～19cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。鋤址内からの遺物の出土はない。

時期：検出した鋤址からは出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より、概ね古代の遺構とする。

## 3) 性格不明遺構（SX）

## SX301（第24図）

3区中央部やや北寄りD・E15～18区に位置する。遺構東側及び西側は調査区外に続く。第Ⅲ②層下面での検出である。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、規模は東西検出長8.0m、南北検出長11.0m、深さは検出面下40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、遺構底面は丸みを帯びる。埋土は暗茶褐色土単層である。遺物は埋土内より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や出土遺物から、概ね古代の遺構とする。

## （2）中世の遺構と遺物

中世の遺構は、鋤址状遺構39条を検出した。

## 鋤址状遺構（鋤址）

調査では1区から4区にかけて、鋤址状遺構（鋤址と呼称）を検出した。調査壁の土層観察により第Ⅱ②層下面にて掘削されていることが判明した。ここでは、区ごとに鋤址の説明をおこなう。

## ① 1区（第21図）

1区では9条の鋤址（鋤址101～109）を検出した。第Ⅱ②層下面での検出である。各鋤址の規模は検出長45～80cm、幅13～38cm、深さは検出面下3～5cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。鋤址は、ほぼ真北方向に向けて掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

## ② 2区（第22図）

2区では6条の鋤址（鋤址201～206）を検出した。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、第Ⅱ②層下面から掘削されていることが判明した。各鋤址の規模は検出長30～90cm、幅10～25cm、深さは検出面下2～7cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。各鋤址は、ほぼ真北方向に向けて掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

## ③ 3区（第24図）

3区では20条の鋤址（鋤址301～320）を検出した。第Ⅲ②層下面での検出であり、第Ⅱ②層が覆う。各鋤址の規模は検出長0.35～1.55m、幅13～40cm、深さは検出面下2～16cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。各鋤址は真北方向ないし、やや北北西～南南東方向に向けて掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

④ 4区 (第26図)

4区では4条の鋤址(鋤址401~404)を検出した。第Ⅱ③層下面での検出であり、一部が溝SD401上面で検出された。各鋤址の規模は検出長35~78cm、幅8~20cm、深さは検出面下2~4cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。各鋤址は北西-南東方向に向けて掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

時期：鋤址内からの遺物の出土がなく、時期特定は困難であるが、検出層位から、概ね中世の遺構とする。なお、各区で検出した鋤址は検出層位や埋土、掘削方向などが酷似することから、同時期に存在した可能性が高い。

(3) その他の遺構と遺物

調査では3基のピットを検出した。そのほか、第Ⅱ②層中より遺物が出土した。

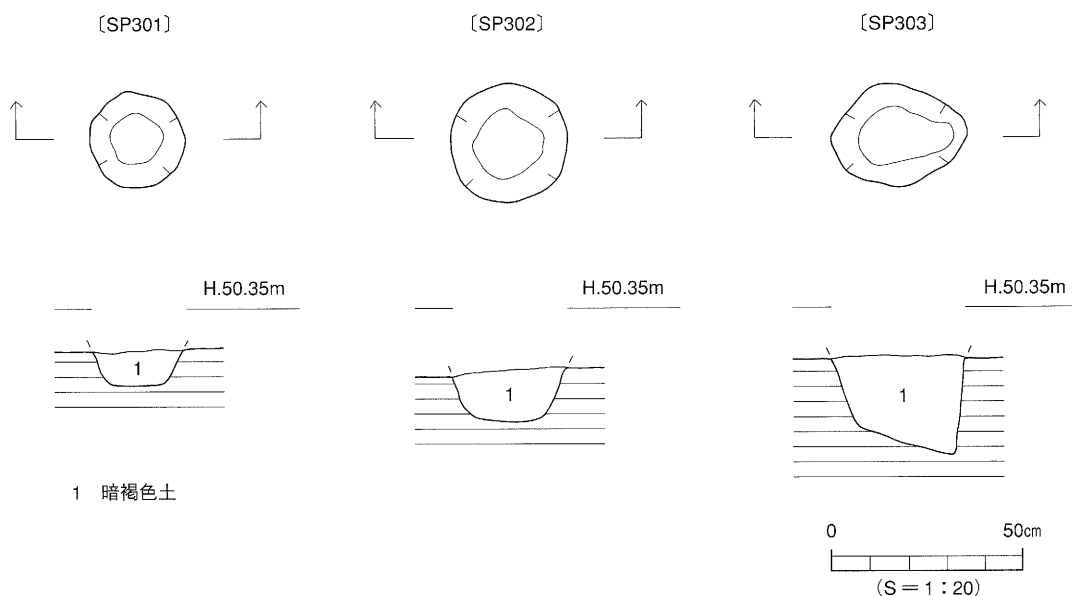
1) ピット

S P 301~303 (第23・32図)

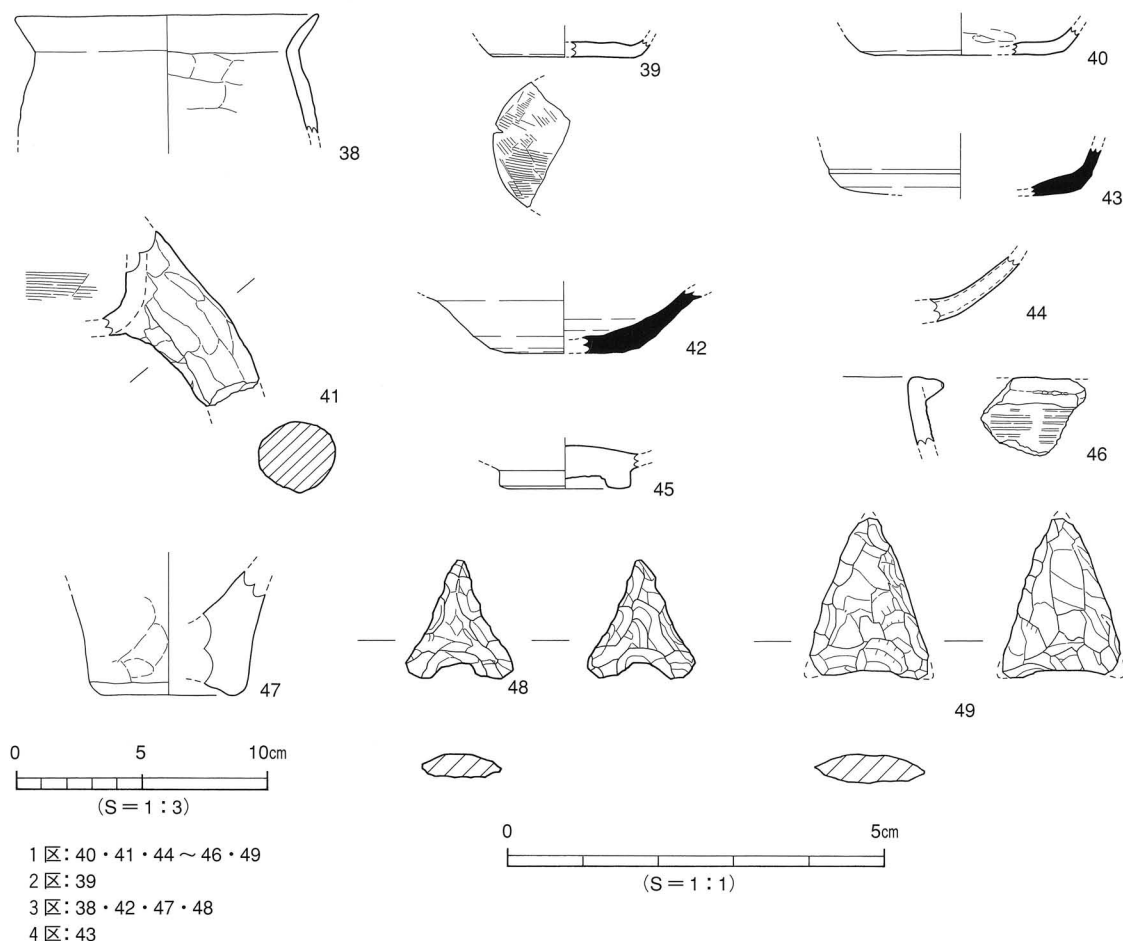
3区中央部やや南寄りD・E19区に位置し、第Ⅵ層上面での検出である。平面形態は円形を呈し、規模は径24~36cm、深さは検出面下11~25cmを測る。埋土はすべて暗褐色土単層である。ピット内からの遺物の出土はない。

2) 第Ⅱ②層出土遺物 (第33図、図版8)

38は土師器の甕で、口縁部は外反する。7世紀。39・40は土師器皿で、40の底部外面には回転糸切り痕を残す。41は土釜の脚部片で、断面楕円形を呈する。13世紀。42は須恵器坏身、43は高坏である。7世紀。44・45は龍泉窯系青磁碗で、釉調は薄緑色を呈する。13世紀。46・47は弥生土器の甕形土器で、46は貼り付け口縁で、胴部外面に沈線文を施す。弥生前期末。47は底部片で、上げ底となる。弥生中期後半。48は凹其式、49は平基式の無茎石鏝で、石材はサヌカイトである。



第32図 S P 301・302・303測量図



第33図 第Ⅱ②層出土遺物実測図

## 4. 小 結

調査では古代から中世までの遺構と、弥生時代から中世までの遺物を確認した。

### 1) 層 位

調査では、弥生時代の堆積層を除く、基本層位中のすべての土層を確認した。第Ⅱ層は調査区ほぼ全域にあり、本層中にて鋤址状遺構を検出した。第Ⅲ層は比較的厚い堆積がみられ、本層中より鋤址状遺構が掘削されていることを確認した。検出した遺構から、第Ⅱ層や第Ⅲ層は水田耕作に伴う耕土の可能性があり、調査地が古代から中世にかけて生産域として土地利用された可能性が高いと考えられる。第Ⅳ層は調査地中央部、2区のみ堆積がみられたが、古墳時代遺構は検出されなかった。本調査における最終遺構検出面である第Ⅵ層は、調査地南側5区を除く全域にあり、安定した堆積をなす。

### 2) 遺 構

弥生時代や古墳時代の遺構は未検出ではあるが、1区の第Ⅱ層中より弥生時代前期末、3区の溝SD301からは弥生時代後期、第Ⅱ層中からは古墳時代後期の遺物が出土した。本来、帰属遺物ではないが、周辺地域に該期の遺構の存在を示唆する資料である。古代では1区、3区、4区で溝、1区と

3区では鋤址状遺構を検出した。特に鋤址状遺構は、水田耕作に伴う遺構と考えられるが、形状や規模は把握できなかった。ただし、いずれの鋤址状遺構も真北方向に沿って、東西、南北方向に掘削されており、企画性をもった構築方法をとっていたものと考えられる。出土遺物がなく、時期特定はできなかったが、古代の段階に調査地が水田を営むための生産域として利用されていたことが判明した。中世では鋤址状遺構を検出した。1区から4区で検出したもので、形状や規模、時期等は把握できなかった。少なくとも、中世段階に調査地及び周辺地域に水田を営んでいたことが推測される。

表11 S D301出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
34	坏身	口径 (11.6) 残高 2.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 褐灰色	密 ◎		8
35	坏身	残高 4.4	1/3の残存。	回転ナデ ⊗回転ハラケズリ	マメツ	灰色 灰色	密 ○		8
36	甕	残高 5.9	小片。	タタキ	ナデ	淡黄褐色 暗灰色	石・長(1~2) 金 ◎		8
37	壺	底径 (5.2) 残高 3.6	1/4の残存。	マメツ	板ナデ・ナデ (マメツ)	淡黄色 淡黄色	石・長(1~3) 安 ◎		

表12 第II②層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	甕	口径 (11.8) 残高 4.7	小片。	ハクリ マメツ	ナデ (マメツ)	淡乳褐色 淡乳褐色	石・長(1~3) 安 ◎	3区	8
39	皿	底径 (5.7) 残高 0.7	1/3の残存。	ナデ	ヨコナデ	乳黄橙色 乳黄橙色	密 ◎	2区	8
40	皿	底径 (6.8) 残高 1.1	小片。底部に回転糸切り痕。	ナデ	ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	1区 黒斑	
41	土釜	残高 6.8	三足付土釜。脚部断面楕円形。	ナデ	ハケ(9本/cm)	淡黄灰褐色 淡褐色	石・長(1~3) ◎	1区	8
42	坏身	底径 (4.6) 残高 2.5	小片。	⊗回転ハラケズリ ナデ	回転ナデ	暗灰色 褐灰色	密・金 ◎	3区	8
43	高坏	残高 1.9	無蓋高坏の坏部片。	回転ナデ ⊗回転ハラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	4区	8
44	碗	残高 2.6	青磁碗。釉調は薄緑色。	施釉	施釉	淡青緑色 淡青緑色	密 ◎	1区 胎土: 灰白色	8
45	碗	底径 (5.1) 残高 1.7	青磁碗。釉調は薄緑色。	施釉	施釉	乳緑色 乳緑色	密 ◎	1区 胎土: 灰色	8
46	甕	残高 2.7	貼付口縁。小片。	マメツ	ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1~3) 安 ◎	1区 黒斑	8
47	甕	底径 (6.1) 残高 4.9	上げ底。	マメツ	マメツ	橙褐色 暗褐色	石・長(1~3) ◎	3区	8

表13 第II②層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
48	石鏃	完存	サヌカイト	1.6	1.4	0.3	0.4	3区	8
49	石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	2.1	1.5	0.3	1.0	1区	8



第5章

# 水 泥 遺 跡

— 2 次 調 査 —



## 第5章 水泥遺跡2次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2001（平成13）年10月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には水泥遺跡1次調査地が隣接し、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物が確認され、さらに平井遺跡1次調査では縄文時代晩期から中世までの遺構や遺物が確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2003（平成15）年6月9日から同年6月11日までの間に試掘調査を実施した。その結果、溝やピットのほか、土師器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2003（平成15）年8月1日より開始した。

#### (2) 調査の経緯（第34図）

調査は2003（平成15）年8月1日から2004（平成16）年3月31日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地内を北側から南側へ4つの区（1区～4区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。8月1日、1区の調査を開始する。重機により表土層を除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。その結果、1区では鋤址状遺構を検出した。10月2日より2区の調査を開始する。2区からは溝を検出した。12月1日より3区の調査を開始する。3区では、基本層序の堆積はみられたものの、明確な遺構は検出されなかった。1月26日より4区の調査を開始する。4区からは溝と鋤址状遺構を検出した。3月29日、高所作業車を使用して1区から4区までの完掘状況写真を撮影する。8月31日、屋外調査をすべて終了した。

#### (3) 調査組織

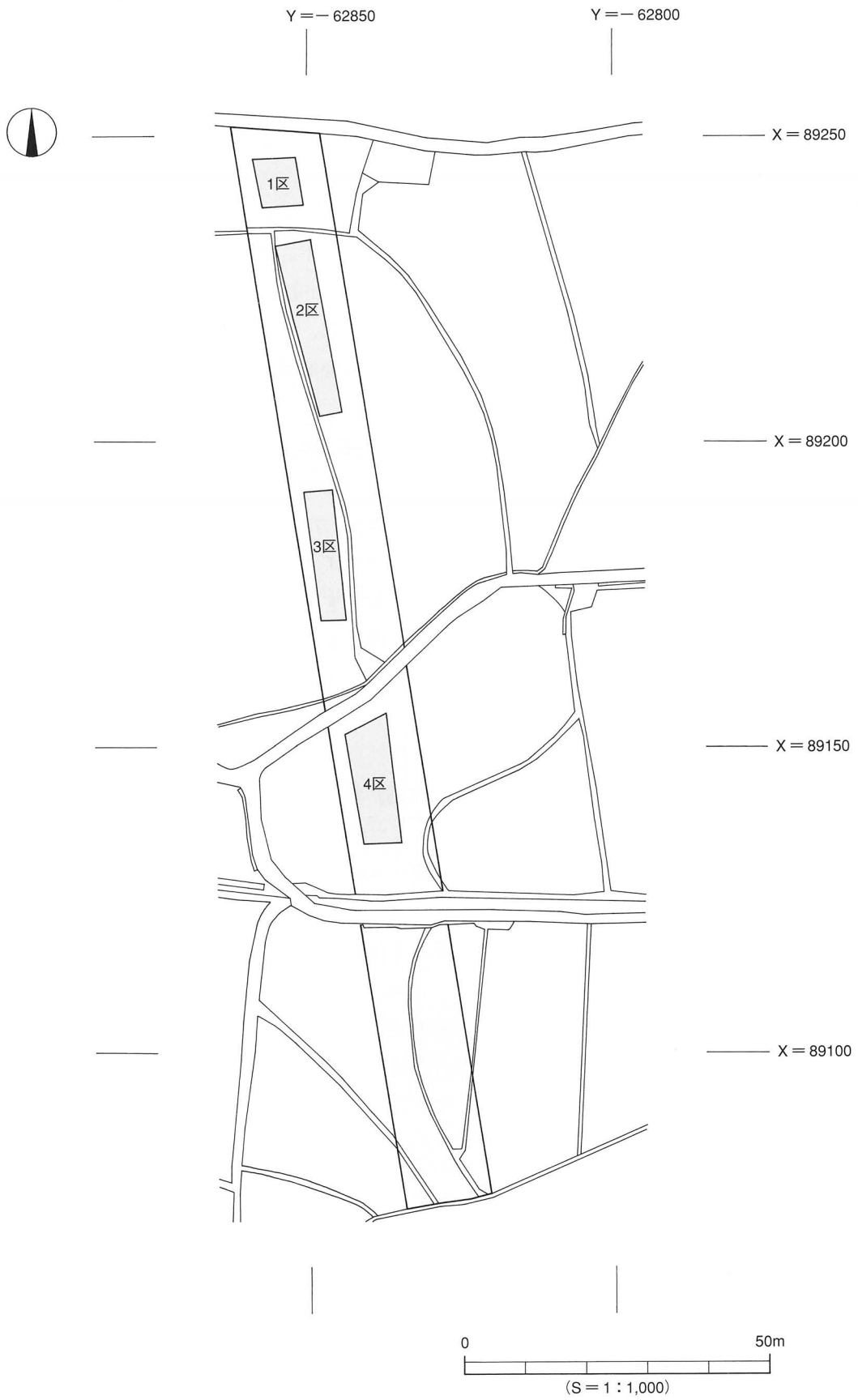
所在地：松山市水泥町464-1 外

調査期間：2003（平成15）年8月1日～2004（平成16）年3月31日

調査面積：1,764m<sup>2</sup>

調査担当：梅木 謙一・水本 完児

水泥遺跡 2 次調査



第34図 調査区測量図

## 2. 層 位

### (1) 基本層位 (第35~38図、図版9)

調査地の基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅲ層、及び第Ⅵ層、第Ⅶ層の5層であり、第Ⅳ層(古墳時代)と第Ⅴ層(弥生時代)は未検出である。調査以前は水田であり、現況の標高を測量すると水田に段差があり、調査地北端1区では標高50.3m、2・3区では50.2m、4区では50.6mを測る。

第Ⅰ層—近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより3層に分層される。

第Ⅰ①層：灰色土で、水田耕作にともなう耕作土である。調査区全域にみられ地表下10~30cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ②層：黄褐色土で、水田耕作に伴う床土である。調査区全域にみられ層厚5~10cmを測る。

第Ⅰ③層：明黄褐色土で、水田耕作に伴う旧床土である。調査区ほぼ全域にみられ層厚5~20cmを測る。

第Ⅱ層—灰色を呈する粘質土で、3区を除く地区にみられ層厚5~25cmを測る。

第Ⅲ層—古代の土層で、土質、土色の違いにより4層に分層される。

第Ⅲ①層：黄灰色土で、調査区全域にみられ層厚5~30cmを測る。1区では本層上面にて鋤址状遺構、2区と4区では溝を検出した。なお、2区では本層下面にて自然流路を検出した。なお、本層中からは平安時代に時期比定される遺物が出土した。

第Ⅲ②層：明黄灰色土で、4区のみにみられ層厚5~30cmを測る。4区では本層下面にて自然流路を検出した。なお、本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ③層：橙灰色土で、2区を除く地区にみられ、層厚5~35cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ④層：茶褐色土で、2区を除く地区にみられ、層厚5~40cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅵ層—土質・土色の違いにより、2層に分層される。

第Ⅵ①層：黄色土で、3区と4区にみられ層厚30cm以上を測る。なお本層上面が調査における最終遺構検出面となる。

第Ⅵ②層：灰色を呈する粘土層で、4区を除く地区にみられ、層厚5~15cmを測る。

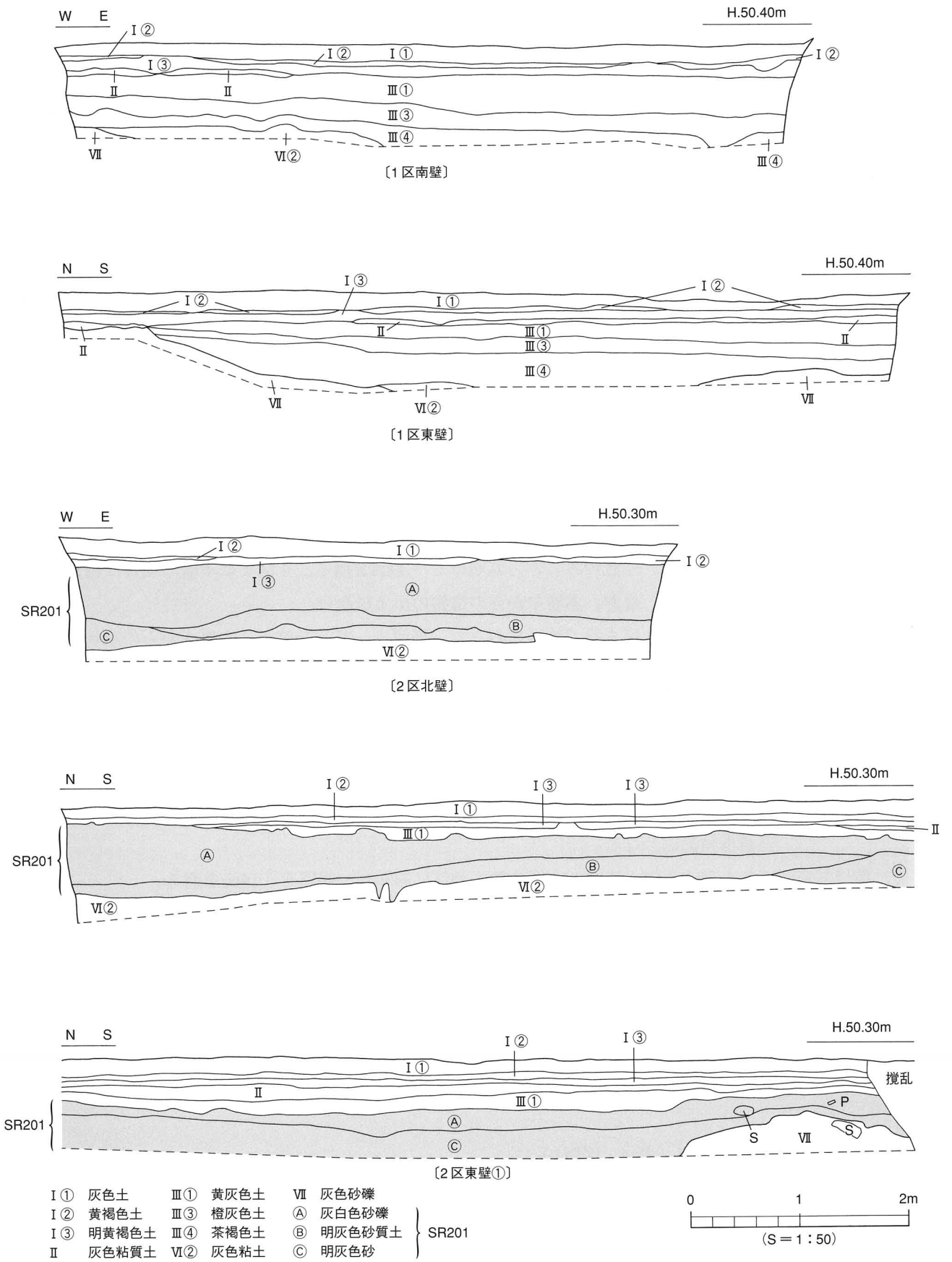
第Ⅶ層—河川の氾濫にともなう堆積物で、灰色粗砂を基調とし、径5~15cm大の礫を含む。本層上面は起伏に富み、1区北端では本層上面の標高が50mであるが、2区に向けて徐々に下がり、1区南側と2区北側では標高49.4m、2区南側では高くなり標高50m、さらに3区にむけては低くなり、標高49.3mとなる。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C・・・F、北から南へ1・2・3・・・24とし、A1・A2・・・F24といったグリット名を付した。

### (2) 検出遺構・遺物 (表14・図版10・11)

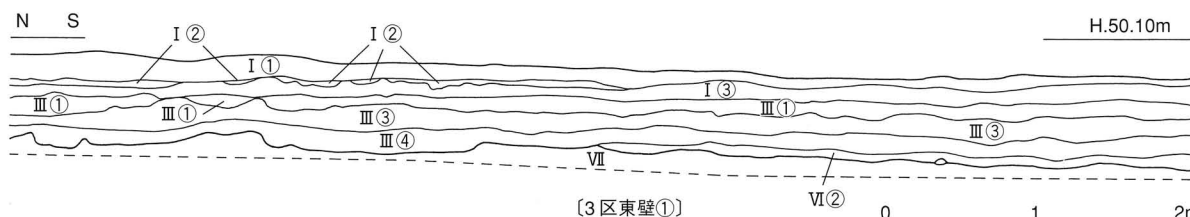
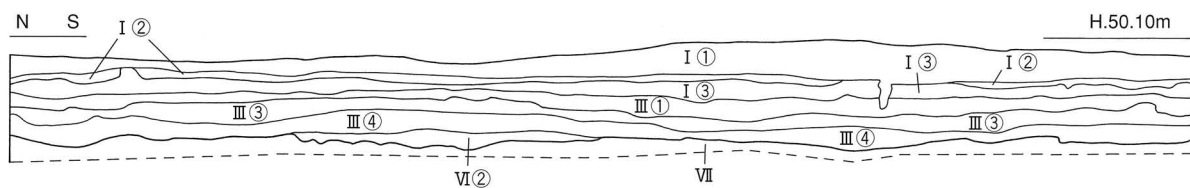
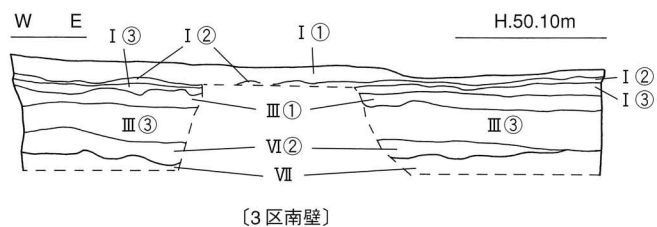
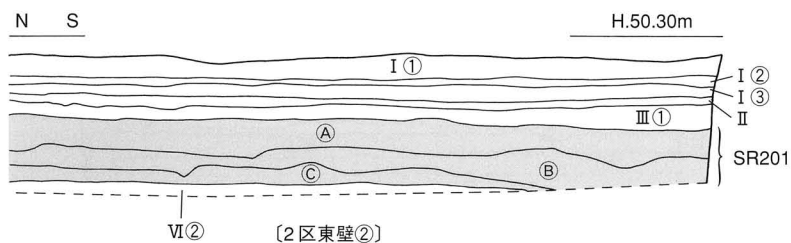
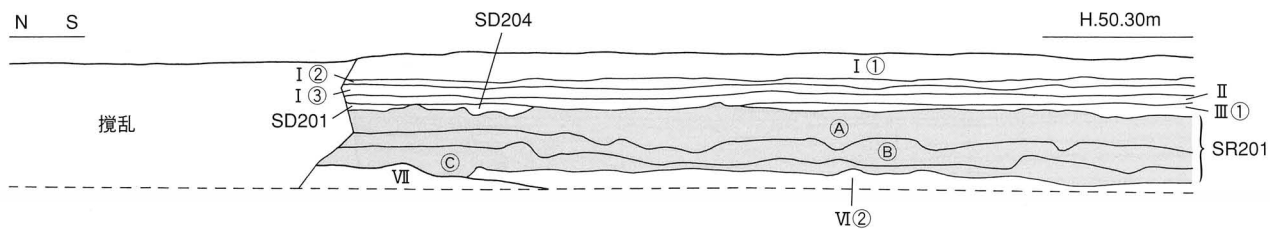
調査では溝12条〔中世〕、自然流路2条〔古代〕、鋤址状遺構51条〔中世〕、性格不明遺構2基〔中世〕を検出した。なお、3区にて明確な遺構は検出されなかった。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器である。

水泥遺跡 2次調査

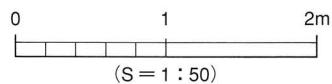


第35図 1区・2区(1)土層図

層 位

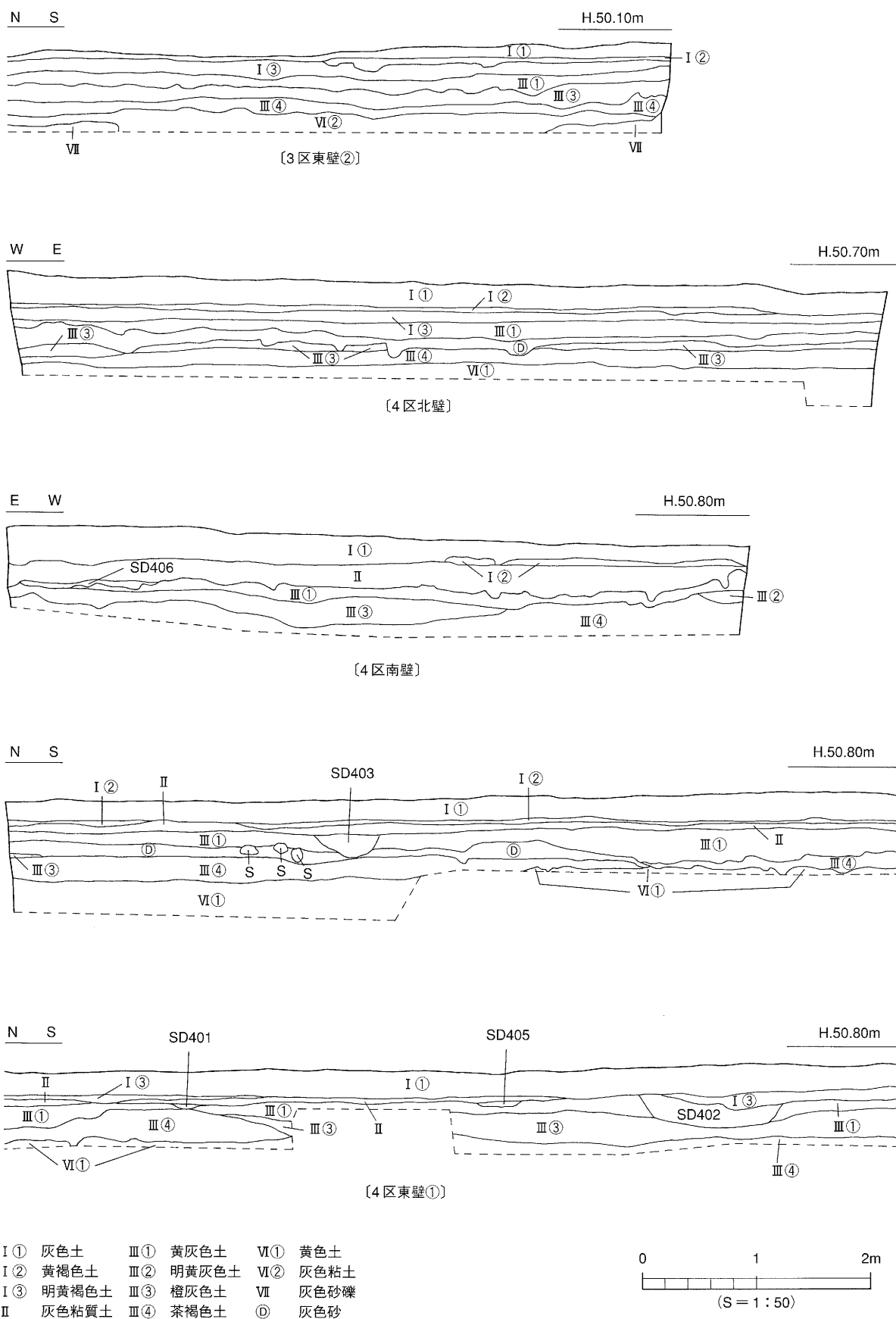


- |            |            |          |         |
|------------|------------|----------|---------|
| I ① 灰色土    | III ③ 橙灰色土 | Ⓐ 灰白色砂礫  | } SR201 |
| I ② 黄褐色土   | III ④ 茶褐色土 | Ⓑ 明灰色砂質土 |         |
| I ③ 明黄褐色土  | VI ② 灰色粘土  | Ⓒ 明灰色砂   |         |
| II 灰色粘質土   | VII 灰色砂礫   |          |         |
| III ① 黄灰色土 |            |          |         |
|            |            |          |         |



第36图 2区(2)・3区(1)土层图

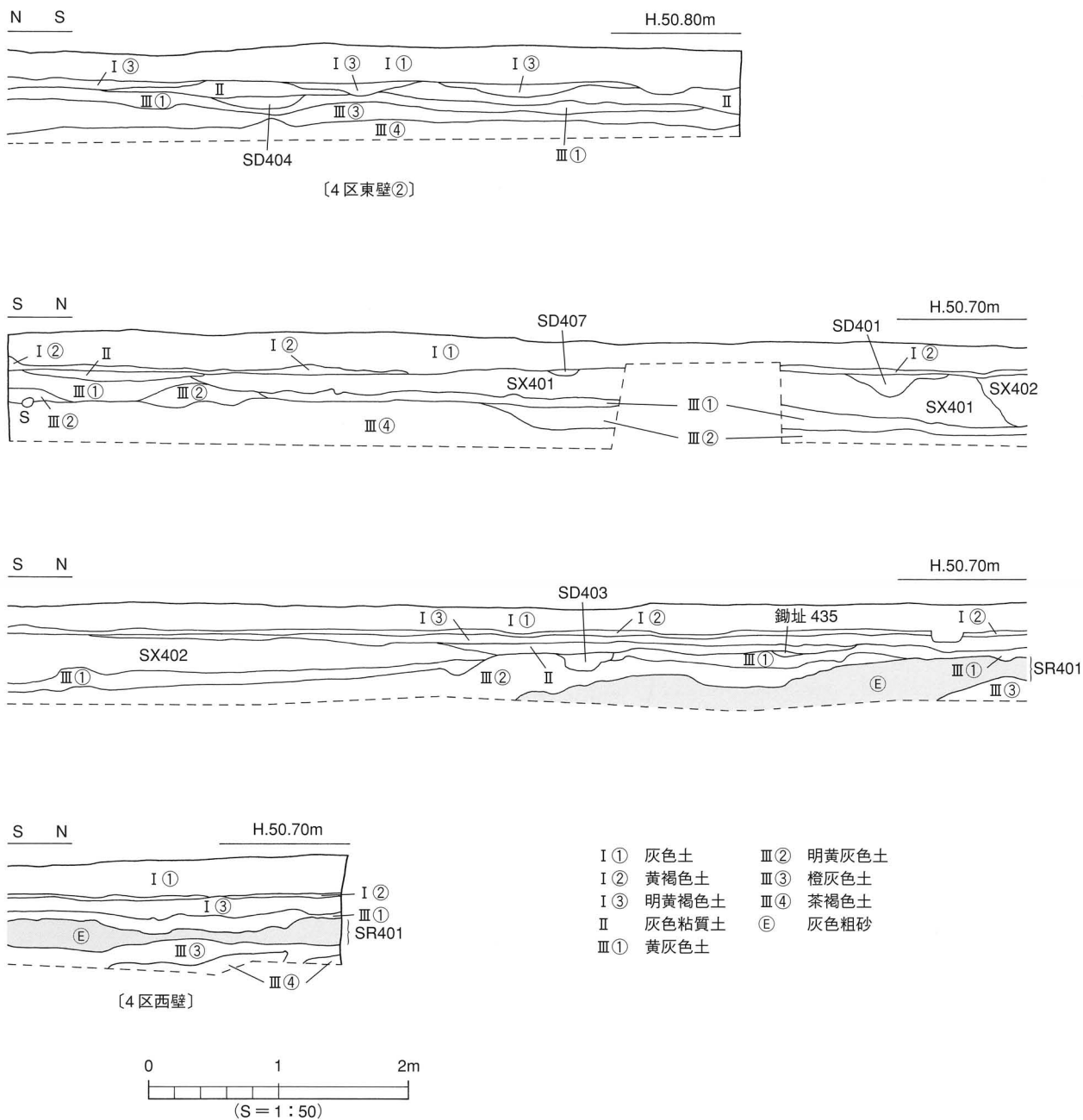
水泥遺跡 2次調査



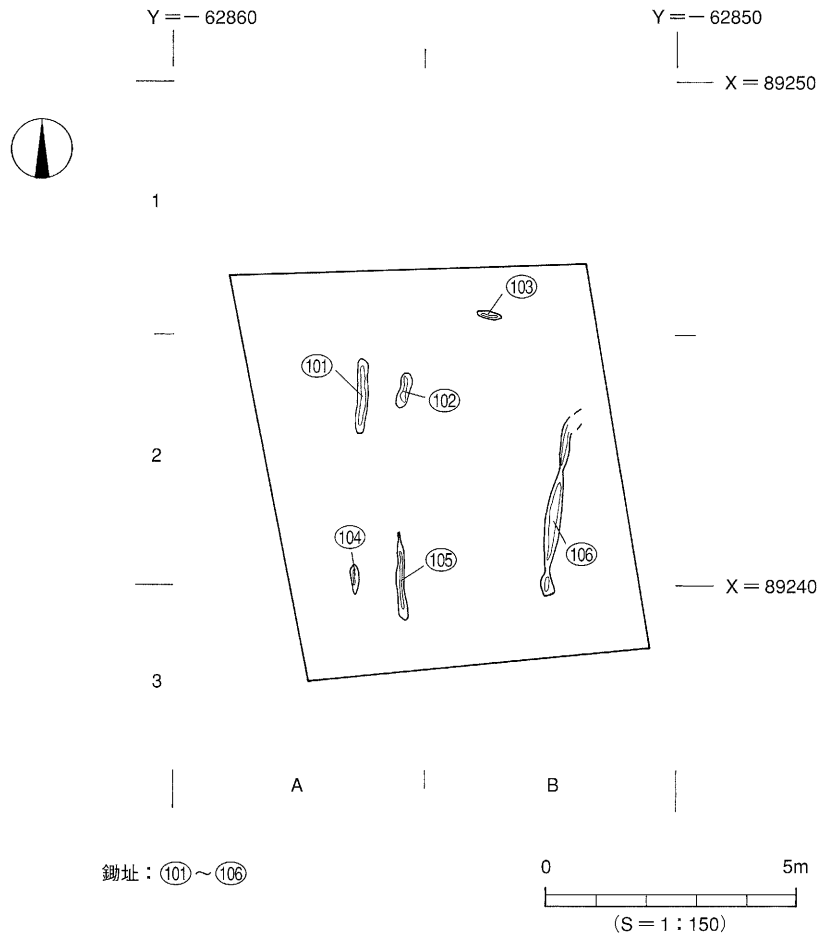
第37図 3区(2)・4区(1)土層図



層 位

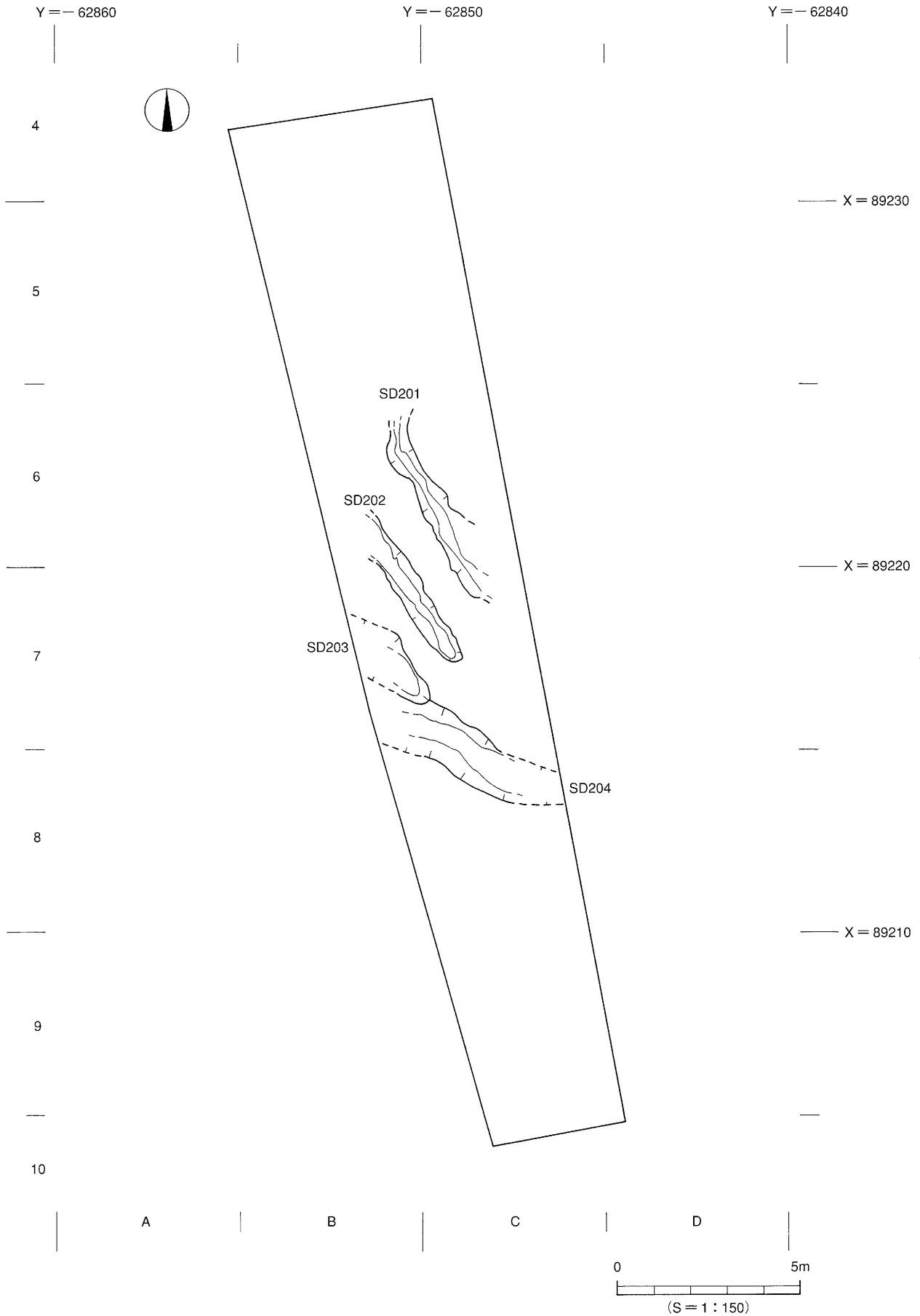


第38图 4区土层图(2)



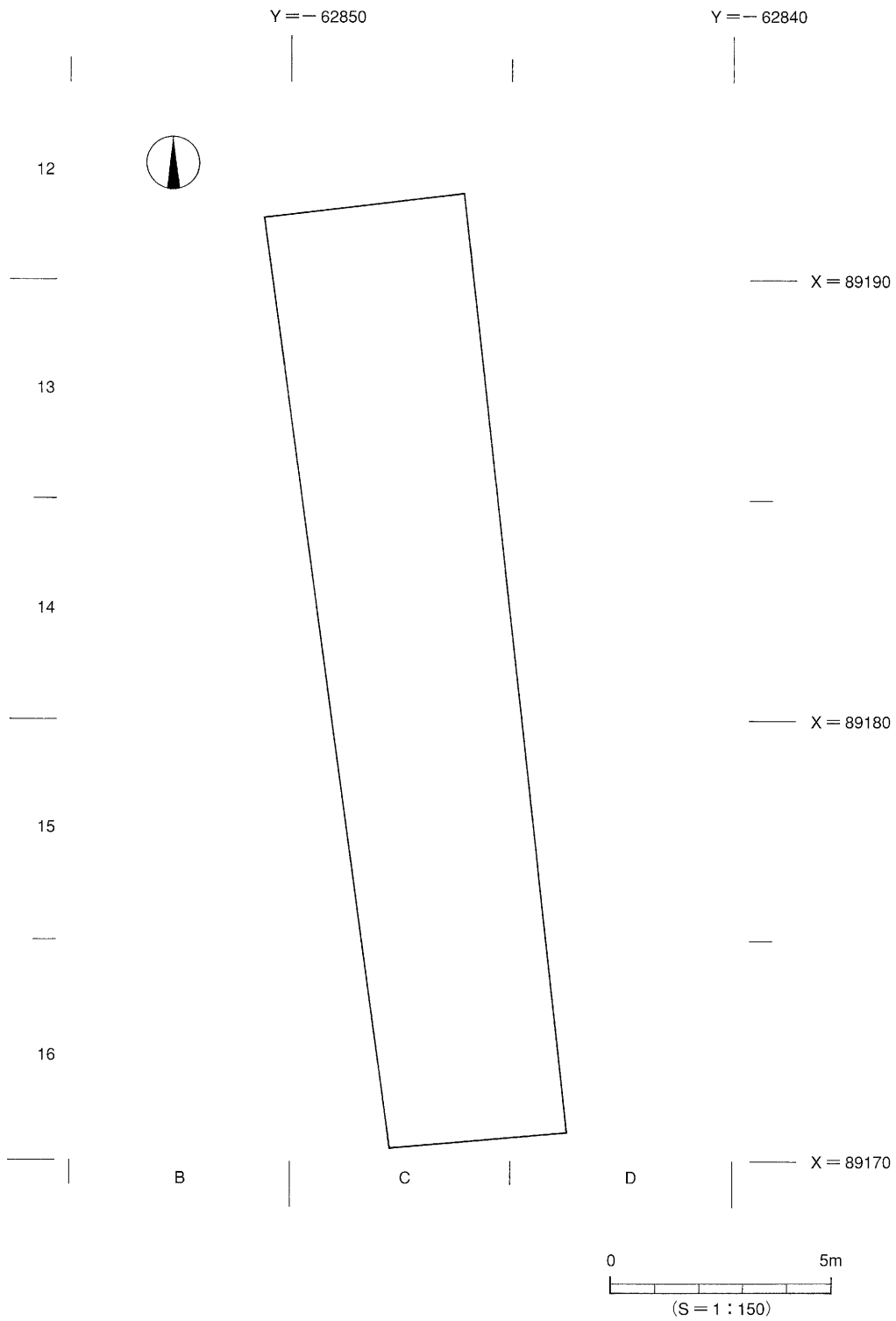
第39図 1区遺構配置図

層 位



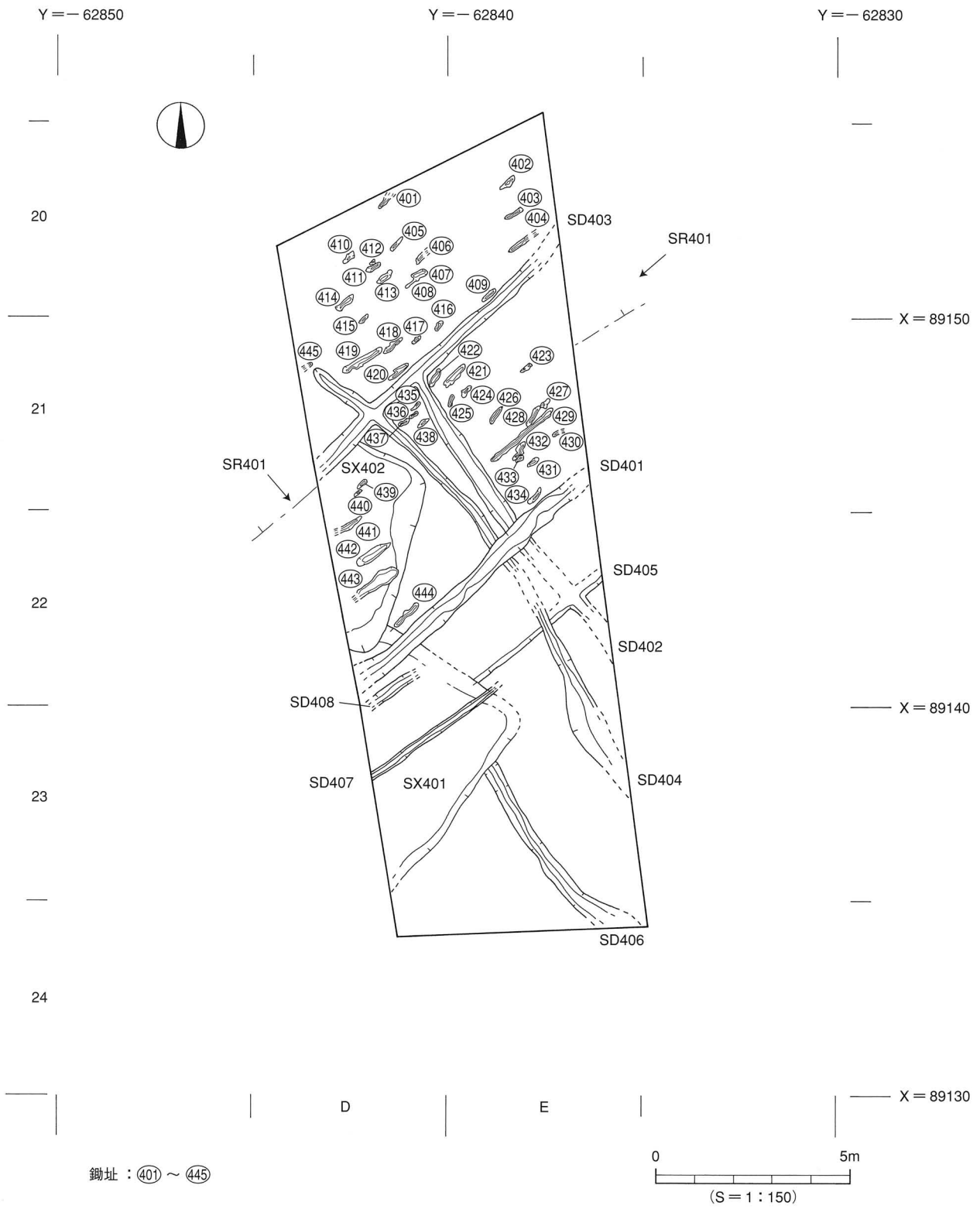
第40図 2区遺構配置図

水泥遺跡 2 次調査



第41図 3区測量図

層 位



第42図 4区遺構配置図

表14 検出遺構一覧

区	時期	古 代	中 世	その他
1区			鋤址6条：鋤址101～106	
2区		自然流路1条：S R 201	溝4条：S D 201～204	
3区				
4区		自然流路1条：S R 401	溝8条：S D 401～408 鋤址45条：鋤址401～445 性格不明遺構2基：S X 401・402	

### 3. 遺構と遺物

本調査では、古代から中世までの遺構と、弥生時代から近世までの遺物を検出した。遺構は溝12条、自然流路2条、鋤址状遺構51条、性格不明遺構2基を検出した。ここでは時代別に概要を説明する。

#### (1) 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、自然流路2条である。

自然流路

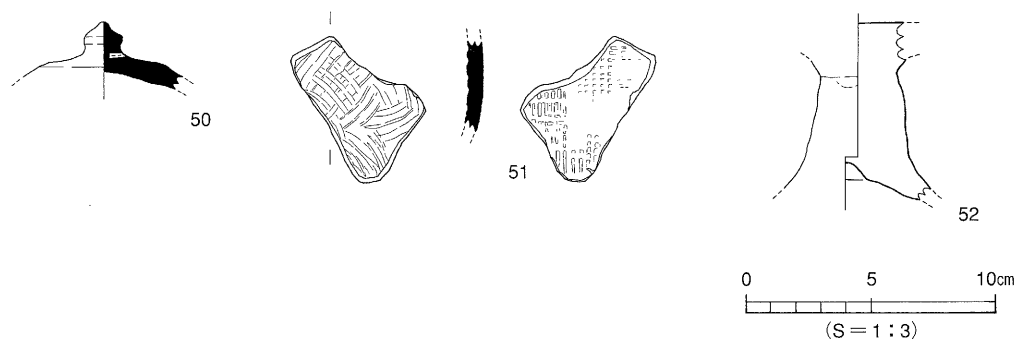
S R 201 (第35・36図)

2区全域で検出した流路である。調査壁の土層観察により第Ⅲ①層が流路を覆い、流路底面は第Ⅵ②層及び第Ⅶ層となる(第35・36図)。規模は深さ75cm以上を測る。埋土は3層に分層され、埋土上位よりA層：灰白色粗砂を基調とし、径3～5cm大の礫を含む、B層：明灰色を呈する砂質土、C層：明灰色を呈する砂である。流路底面は起伏に富み、2区中央部付近が最も高くなる。流路内からは土師器片と須恵器片が数点出土した。

出土遺物 (第43図、図版12)

50は須恵器坏蓋で、宝珠状のつまみが付く。51は須恵器甕の胴部片で、外面に格子叩き、内面に円弧叩きを施す。52は土師器高杯の脚部で、中実である。

時期：出土遺物の特徴より、7世紀中葉から後半とする。



第43図 S R 201出土遺物実測図

## S R 401 (第42図)

4区北部D21～D22区で検出した北東－南西方向の流路で、調査壁の土層観察により確認したものである。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は深さ30cm以上を測る。埋土は灰色砂を基調とし、径1～3cm大の円礫が少量混入する。流路内からは少量の土師器片と須恵器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は困難であるが、検出層位や出土遺物から、概ね古代7世紀代とする。

## (2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、溝12条、鋤址状遺構51条、性格不明遺構2基である。

## 1) 溝

## S D 201 (第40・44図)

2区中央部B6～C7区で検出した北西－南東方向の溝で、溝両端は消失する。自然流路S R 201上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅲ①層上面から掘削されていることが判明した(第36図)。規模は検出長6m、幅0.4～1.0m、深さは検出面下10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面にはやや凹凸がみられ、溝北側から南側へむけてわずかに傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は、埋土中より土師器片が数点出土した。

## 出土遺物 (第44図)

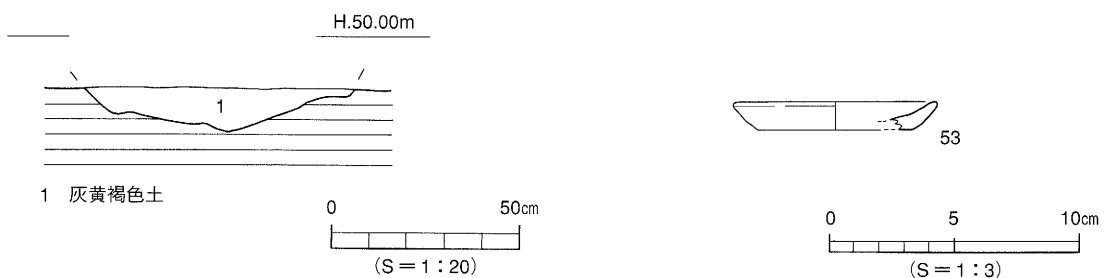
53は土師器皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部外面に回転糸切り痕をわずかに残す。

時期：出土遺物が少なく時期特定は難しいが、検出層位や出土品より概ね中世13世紀代とする。

## S D 202 (第40・45図)

2区中央部B6～C7区で検出した北東－南西方向の溝で、溝両端は消失する。自然流路S R 201上面での検出である。規模は、検出長4.5m、幅0.4～0.8m、深さは検出面下8～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面にはやや凹凸がみられ、溝北側から南側へ向けてわずかに傾斜をなす(比高差2cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がS D 201と酷似することから概ね中世の遺構とする。



第44図 S D 201断面図・出土遺物実測図

S D203 (第40・45図)

2区中央部B・C7区で検出した北東-南西方向の短い溝で、溝南端はS D204と一部重複する。S D201やS D202と同様、自然流路S R201上面で検出した。規模は、検出長2.3m、幅0.6~1.0m、深さは検出面下10~14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面は底面中央部がやや盛り上がりしており、本来は2条の溝が重複する可能性がある。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土より概ね中世の遺構とする。

S D204 (第40・45図)

2区中央部南寄りB7~C8区で検出した北東-南西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。自然流路S R201上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、第Ⅲ①層上面から掘削されていることが判明した(第36図)。規模は検出長3m、幅1.1~1.4m、深さは検出面下14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土より概ね中世の遺構とする。

S D401 (第42・45図)

4区中央部D22~E21区で検出した北東-南西方向の溝で、溝南西部はS X401を切り、溝北西部は溝S D402・404と重複する。溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長8.2m、幅0.4~0.7m、深さ4~9cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面は平坦であるが、溝北東部から南西部に向けてわずかに傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね中世とする。

S D402 (第42・45図)

4区中央部やや東寄りD21~E22区で検出した北西-南東方向の溝で、溝北端はS D403、南側はS D405に接続し、溝中央部付近はS D401と重複する。溝南端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅰ③層が覆う。規模は検出長8.5m、幅0.3~0.4m、深さは13~15cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入する。溝底面はほぼ平坦であるが、北側から南側へ向けてわずかに傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね中世とする。

S D403 (第42・45図)

4区北側D21~E20区で検出した北東-南西方向の溝で、溝中央部はS D402とS D404とに接続し、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長8.7m、幅0.3~0.5m、深さ11~14cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入する。溝底面はほぼ平坦であり、北東部から南西部に向けてわずかに傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね中世とする。



## S D404 (第42・45図)

4区中央部D21～E23区で検出した北西－南東方向の溝で、溝北側はS D403に接続し、溝中央部はS D401とS D405と重複する。溝北端は消失し、南端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長13.2m、幅0.2～0.9m、深さ8～14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入する。溝底面はやや凹凸がみられ、北西部から南西部に向けて傾斜をなす(比高差6cm)。溝内からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、検出層位から概ね中世の遺構とする。

## S D405 (第42・45図)

4区中央部やや南寄りE22区で検出した北東－南西方向の溝で、溝南西側はS X401と重複し、北東部は調査区外に続く。なお、溝北側壁体は消失している。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長4.9m、幅0.2～0.3m、深さ3～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入する。溝底面はやや凹凸がみられる。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね中世とする。

## S D406 (第42・45図)

4区南側E23・24区で検出した北西－南東方向の溝で、溝北側はS X401と重複し、南側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長5.4m、幅0.3～0.7m、深さ3～5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底はほぼ平坦であり、わずかに北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差5cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね中世とする。

## S D407 (第42・45図)

4区南側D23～E22区で検出した北東－南西方向の溝で、S X401と重複し、溝北東端は消失し、南西端は調査区外に続く。S X401上面での検出であり、第Ⅰ①層が覆う。規模は検出長4.3m、幅0.1～0.2m、深さ3～6cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面はやや凹凸があり、溝北東部から南西部に向けて緩傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

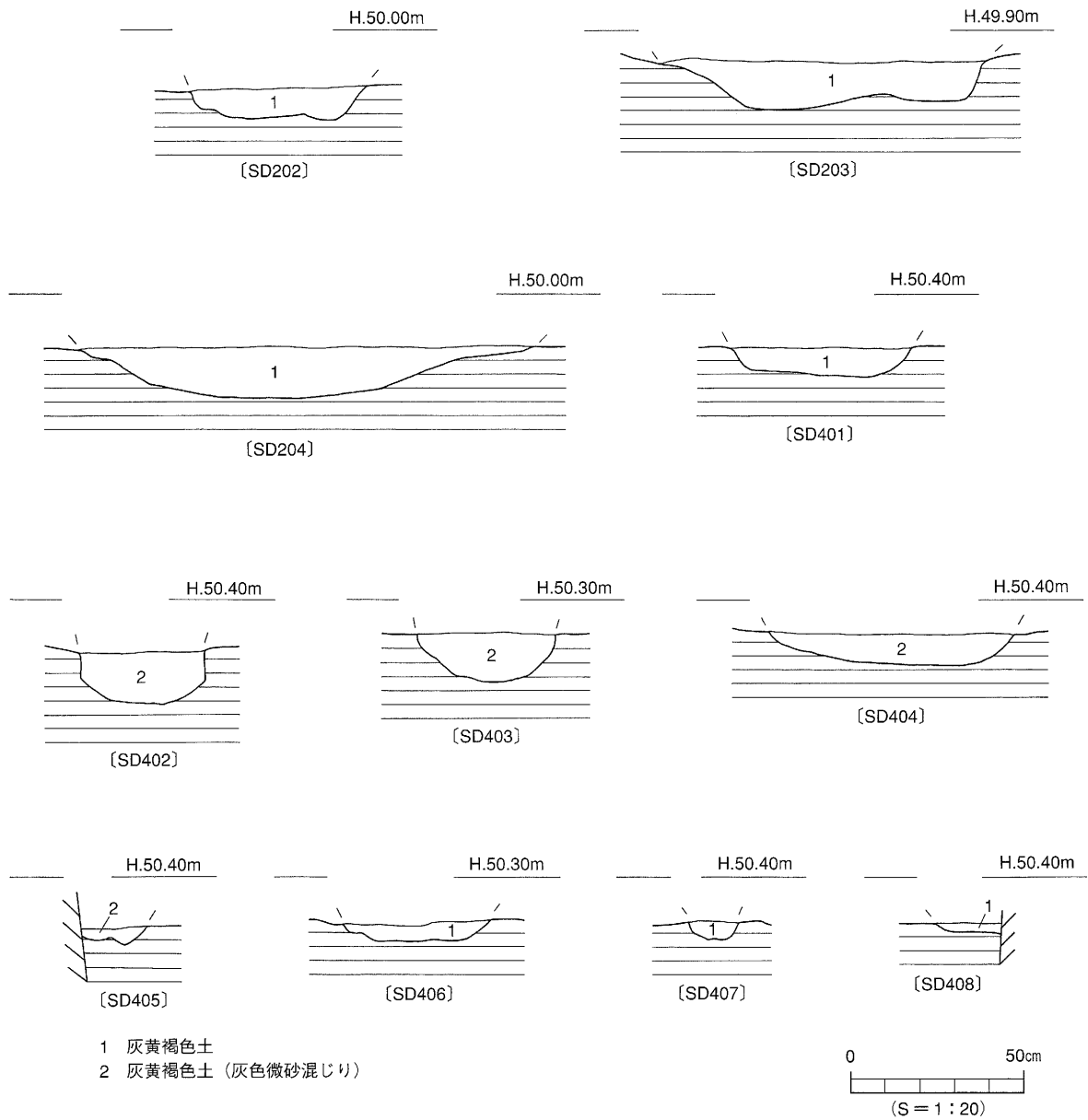
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土から概ね中世とする。

## S D408 (第42・45図)

4区中央部南西寄りD22区で検出した北東－南西方向の短い溝で、溝両端は消失する。S X401上面での検出である。規模は検出長1.7m、幅0.1～0.3m、深さ2～3cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土から概ね中世とする。

水泥遺跡 2次調査



第45図 S D断面図

## 2) 鋤址状遺構（鋤址）

調査では1区と4区にて鋤址状遺構を検出した。

## ①1区（第39図）

1区では6条の鋤址（鋤址101～106）を検出した。すべて第Ⅲ①層上面での検出である。鋤址の規模は検出長0.3～1.6m、幅0.1～0.2m、深さは検出面下2～5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。各鋤址は真北方向に沿って南北方向に掘削されている。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね中世の遺構とする。

## ②4区（第42図）

4区では鋤址45条（鋤址401～445）を検出した。鋤址439～443はS X402上面、その他はすべて第Ⅲ①層上面で検出した。鋤址の規模は検出長0.6～2.0m、幅6～20cm、深さは1～6cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土は、すべて灰黄褐色土単層である。鋤址は、いずれも北東－南西方向に向けて掘削されている。4区で検出した数条の溝と、検出面や方向及び埋土が酷似することから、4区で営まれた水田耕作に伴う鋤址と考えられる。鋤址底面は凹凸が著しく、鋤痕と思われるピット状の凹みが多数検出された。鋤址内からは遺物の出土はない。

時期：検出した鋤址状遺構からは出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土等より、概ね中世の遺構とする。

## 3) 性格不明遺構（S X）

調査では、4区にて方形状の凹みを2箇所検出した。性格が判断しがたいため、ここでは性格不明遺構（S X）として掲載する。

## S X401（第42図）

4区南西部D22～E23区に位置する。遺構北東部は溝S D405・406と重複し、中央部は溝S D401とS D407とに切られ、北西部はS X402と重複し、西側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は東西検出長4m、南北検出長5.6m、深さは検出面下40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体はゆるやかに立ち上がる。遺構底面には凹凸がみられ、底面中央部に向けて、やや摺鉢状で丸みを帯びる。埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入するものである。遺構内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から、概ね中世の遺構とする。

## S X402（第42図）

4区中央部西寄りD21・22区に位置する。遺構北側は溝S D403に切られ、南側はS X401と重複し、遺構上面には鋤址439～443があり、西側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.4m、南北検出長4.8m、深さは検出面下35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが東側壁体はゆるやかに立ち上がる。遺構底面には、わずかに凹凸がみられ、底面中央部に向けて摺鉢状の形状をなす。埋土は灰黄褐色土に少量の灰色微砂が混入するものである。遺構内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から、概ね中世の遺構とする。

(3) その他の遺構と遺物 (第46図、図版12)

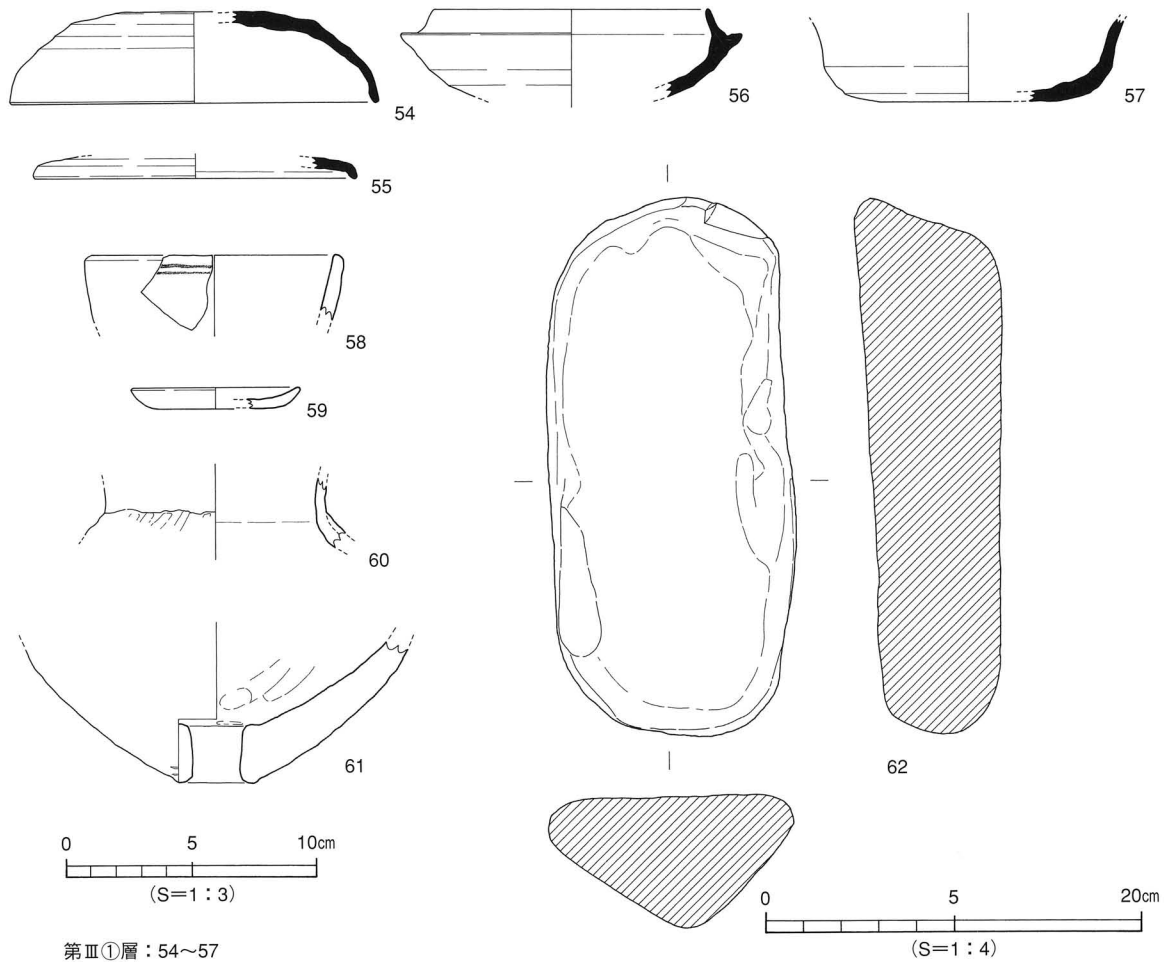
第Ⅲ①層及び出土地点不明資料である。弥生時代から近世までの遺物が出土した。

1) 第Ⅲ①層出土遺物 (54~57)

54・55は須恵器坏蓋で、54は扁平な天井部からなだらかに下がって口縁部に至り、口縁端部は丸く仕上げる。7世紀前半。55は口縁部が下外方に屈曲する。8世紀前半。56は須恵器坏身で、たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。7世紀前半。57は須恵器坏で、口縁部は外反する。7世紀後半。

2) 地点不明出土遺物 (58~62)

58は肥前系の碗で、口縁部下外面に藍色の線文を施す。18世紀。59は土師器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。13世紀。60は弥生土器の壺形土器で、頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。弥生後期。61はコシキ形土器で、底部に焼成前の円孔(径2.0cm)を穿つ。弥生後期。62は砂岩製の砥石で、1面の研磨面をもつ。重量4.15kg。



第Ⅲ①層：54~57  
地点不明：58~62

第46図 第Ⅲ①層・地点不明出土遺物実測図

## 4. 小 結

調査では古代から中世までの遺構と、弥生時代から近世までの遺物を確認した。

### 1) 層 位

調査では、弥生時代と古墳時代の堆積層を除く基本層位中の土層を確認した。第Ⅱ層は3区を除く地区にみられ25cmの堆積がみられた。第Ⅲ層は1mを超える比較的厚い堆積がみられ、本層上面にて溝や鋤址状遺構を検出した。また本層堆積中に自然流路が存在していることを確認した。なお、第Ⅲ①層中からは飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が少量出土した。検出した遺構から、第Ⅱ層や第Ⅲ層は水田または畑耕作に伴う耕土の可能性があり、調査地が中世において生産域として土地利用された可能性が高いと考えられる。本調査における最終遺構検出面である第Ⅶ層は40cm以上の堆積がみられ、比較的安定した堆積をなす。また、第Ⅶ層は起伏に富み、面は1区と2区の間で1mを超える高低差が認められた。

### 2) 遺 構

弥生時代や古墳時代の遺構は未検出ではあるが、表面採集遺物の中に弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が含まれている。近接する水泥遺跡1次調査地においても、該期の遺構は未検出であるが、周辺地域に該期の遺構の存在を示唆する資料である。古代では2区と4区で自然流路を検出した。明確な集落遺構は検出されなかったが、調査地が古代において安定した土壌を形成していたことがわかった。中世では1区と4区にて鋤址状遺構や数条の溝を検出した。このうち、4区で検出した鋤址状遺構や溝は、方向や埋土が酷似しており、水田耕作に伴う遺構と推測される。溝が重複する箇所があり、少なくとも2時期以上の水田が営まれていたことがわかる。溝の形状からは一辺7m程度を測る方形区画の水田と考えられる。中世段階に調査地南側では水田が営まれていたことがわかり、水泥遺跡1次調査地を含め、調査地周辺には中世段階に広く水田耕作が展開されていたものと考えられる。

### 遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、天→天井部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表15 S R201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
50	坏蓋	残高 2.7	宝珠状つまみ。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ →ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		12
51	甕	残高 5.7	小片。	格子叩き	円弧叩き	灰白色 灰白色	密 △		
52	高坏	残高 7.0	中実。	マメツ	マメツ (ナデ)	淡茶色 乳茶色	石・長(1~3) ○		12

表16 S D201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
53	皿	口径(8.0) 器高 1.1	小片。	マメツ	マメツ	乳白褐色 乳白褐色	長(1) 長金◎		

表17 第III①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
54	坏蓋	口径(14.2) 器高 3.6	1/2の残存。天井部1/3に回転ハラケズリ。	⊕回転ハラケズリ ⊙回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		12
55	坏蓋	口径(12.6) 残高 0.9	小片。口縁部は下方外方に屈曲。	回転ナデ 回転ハラケズリ?	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
56	坏身	口径(10.8) 残高 3.5	小片。たちあがり端部は尖り気味。	⊕回転ナデ ⊙回転ハラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
57	坏	底径(9.8) 残高 3.2	1/4の残存。	回転ナデ ⊙マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表18 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
58	碗	口径(9.6) 残高 2.7	肥前焼。小片。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 ◎	胎土： 灰色	12
59	皿	口径(6.6) 器高 0.8	小片。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡褐色	長(1) ◎		
60	壺	残高 2.8	貼付凸帯。凸帯上に刻目文。	マメツ	マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~3) ○		
61	コシキ	底径(3.0) 残高 5.6	焼成前穿孔(φ2.0cm)。	マメツ	マメツ (ナデ)	乳黄褐色 乳白褐色	石・長(1~4) ◎		12

表19 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
62	砥石	ほぼ完形	砂岩?	28.9	13.1	7.9	4150.0		12

第6章

# 水 泥 遺 跡

— 3 次 調 査 —





## 第6章 水泥遺跡3次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2003（平成15）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には水泥遺跡2次調査地が隣接しており、中世の生産遺構や弥生時代から近世までの遺物が確認され、平井遺跡2次調査地では弥生時代の遺構や遺物が確認されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2003（平成15）年11月4日から同年11月10日と、2004（平成16）年11月8日から同年11月15日までの間に2度に分けて試掘調査を実施した。その結果、経塚や溝、鋤址状遺構やピットのほか、土師器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2005（平成17）年1月20日より開始した。

#### (2) 調査の経緯（第47図）

調査は2005（平成17）年1月20日から同年8月12日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地内を北側から南側へ3つの区（1区～3区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。1月20日、1区の調査を開始する。重機により表土層を除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。その結果、1区では遺構検出面が2面あり、上面で畝状遺構、下面では鋤址状遺構や自然流路を検出した。3月28日、1区の調査を終了する。4月18日より3区の調査を開始する。3区では経塚があり、安全祈願のお祓いをした後に調査を実施した。経塚は径3～5cm大の礫で覆われており、掘り下げや測量に1ヶ月を費やした。3区の調査と併行して、2区の調査を進めた。2区では1区と同様に、遺構面が2面存在しており、上面では溝や鋤址状遺構、下面では溝やピットを検出した。7月8日、高所作業車を使用して、1区と2区の完掘状況写真を撮影する。7月27日、重機により1区と2区の埋め戻し作業をおこない、8月11日、3区の完掘状況写真を撮影し、8月12日、屋外作業を終了した。

#### (3) 調査組織

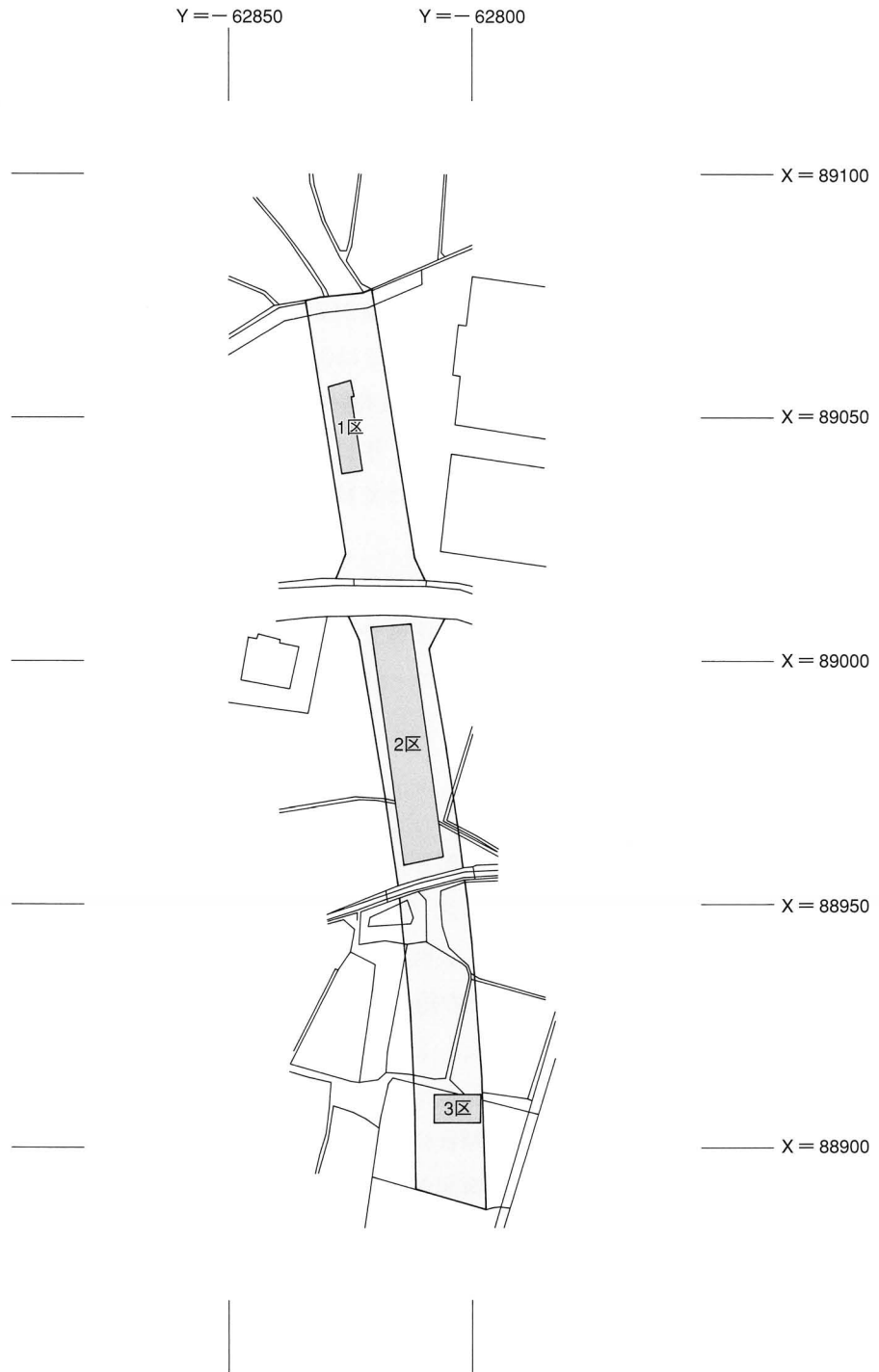
所在地：松山市水泥町405 外

調査期間：2005（平成17）年1月20日～同年8月12日

調査面積：1,275.2m<sup>2</sup>

調査担当：水本 完児・宮内 慎一

水泥遺跡 3次調査



第47図 調査区測量図

## 2. 層 位

### (1) 基本層位 (第48～52図、図版13)

調査地の基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅳ層、及び第Ⅵ層、第Ⅶ層の6層であり、第Ⅴ層(弥生時代)は未検出である。調査以前は療養施設の駐車場及び水田として利用されており、現況の標高を測量すると調査地北端1区では標高49.8m、2・3区では50.2mを測る。

第Ⅰ層—近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより4層に分層される。

第Ⅰ①層：灰色土で、水田耕作に伴う耕作土である。調査区全域にみられ地表下10～15cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ②層：灰白色土で、水田耕作に伴う旧耕作土である。調査区全域にみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅰ③層：灰褐色土で、水田耕作に伴う旧耕作土である。調査区ほぼ全域にみられ層厚3～10cmを測る。

第Ⅰ④層：明黄褐色土で、水田耕作に伴う旧床土である。調査区ほぼ全域にみられ層厚5～10cmを測る。

第Ⅱ層—灰黄色土で、調査区ほぼ全域にみられ層厚5～15cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ層—古代の土層で、土質、土色の違いにより4層に分層される。

第Ⅲ①層：にぶい黄橙色土で、調査区全域にみられ層厚5～20cmを測る。1区では本層上面にて畝状遺構、2区では鋤址状遺構と溝、土坑を検出した。なお、1区では本層下面にて自然流路を検出した。なお、本層中からは平安時代に時期比定される遺物が出土した。

第Ⅲ②層：暗灰色を呈する砂質土で、1区のみにみられ層厚5～15cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ③層：灰褐色を呈する砂質土で、1区のみにみられ層厚5～15cmを測る。1区では本層上面にて鋤址状遺構と自然流路を検出した。なお、本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ④層：暗灰褐色を呈する砂質土で、1区のみにみられ、層厚20cm以上を測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅳ層—暗褐色土で、2区のみにみられ層厚10～50cmを測る。2区では本層下面にて溝やピットを検出した。本層中からは古墳時代の須恵器片や土師器片が出土した。

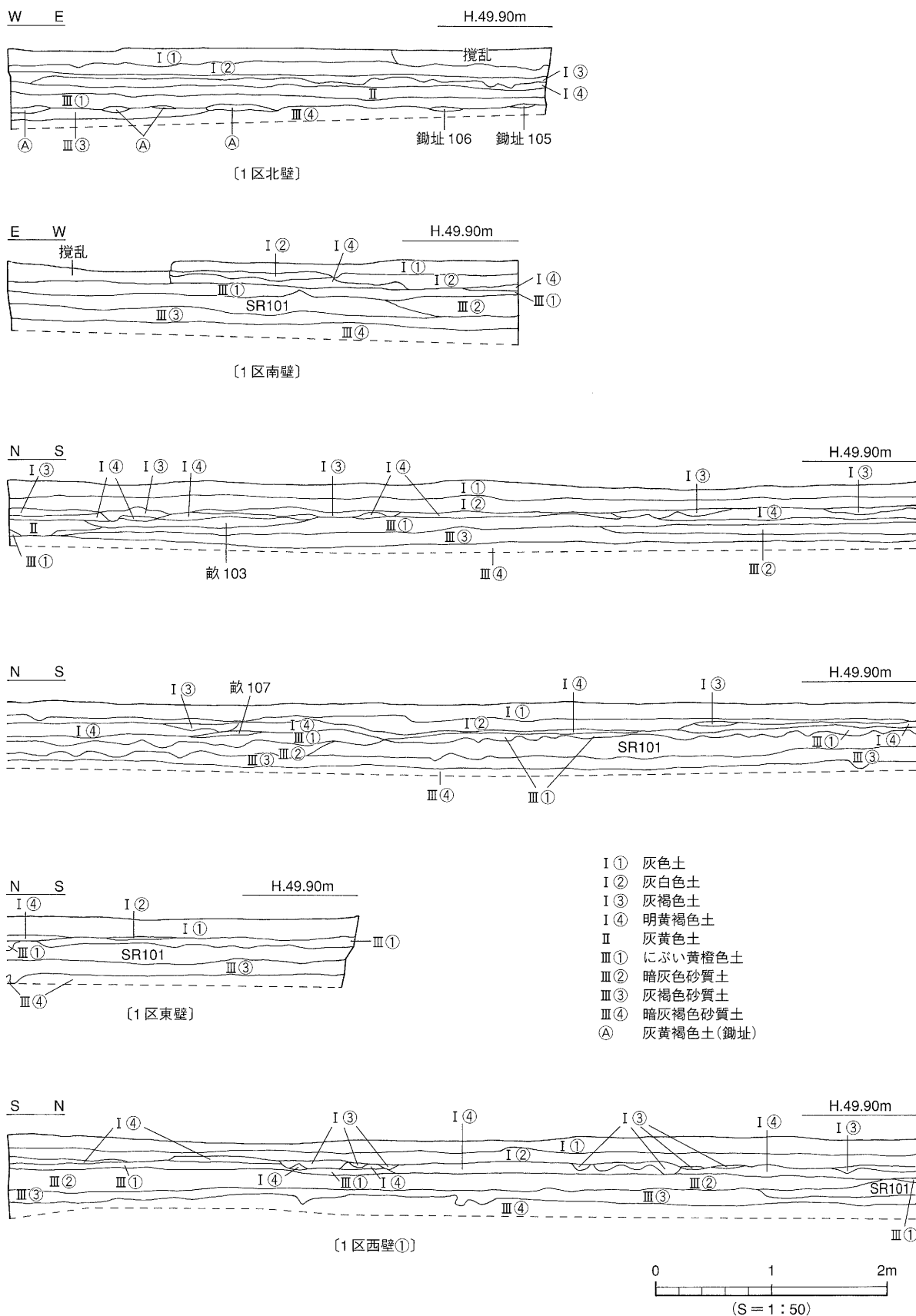
第Ⅵ層—土質・土色の違いにより、2層に分層される。

第Ⅵ①層：黄色土で、2区のみにみられ層厚50cm以上を測る。なお本層上面が調査における最終遺構検出面となる。2区では、本層上面にて溝やピットを検出した。

第Ⅵ②層：淡黄色土で、2区のみにみられ層厚50cm以上を測る。なお、2区では調査壁の土層観察により、本層下面にて自然流路を検出した(平面形状は不明)。

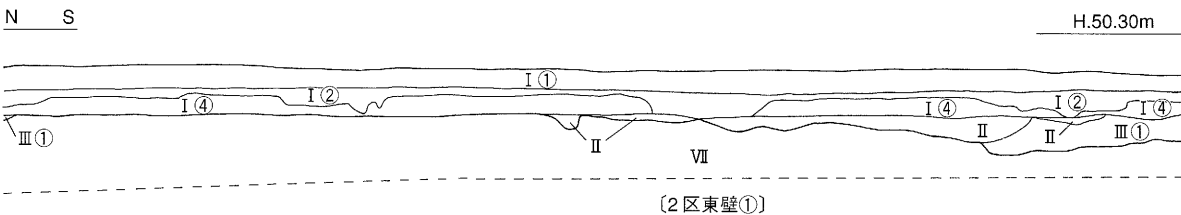
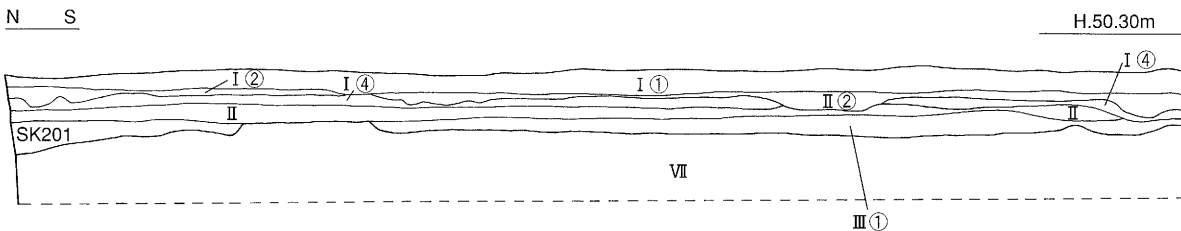
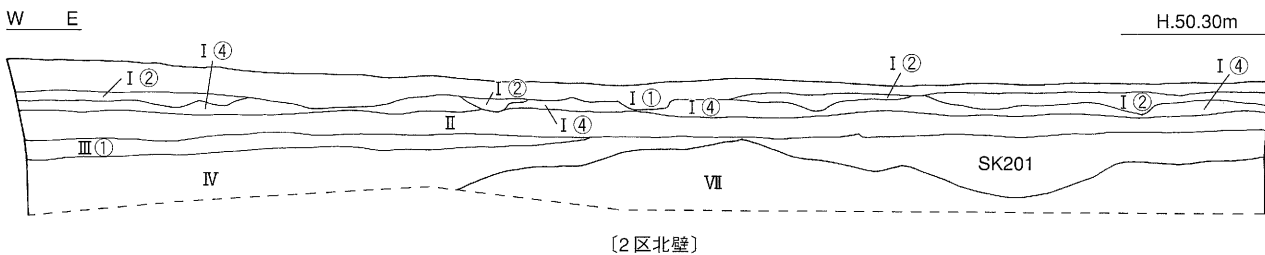
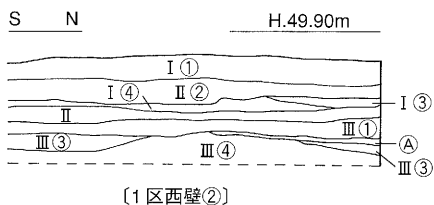
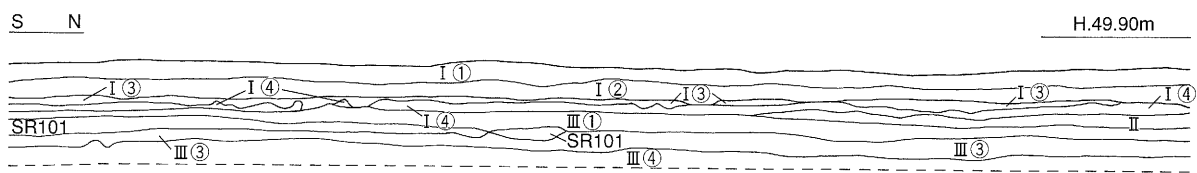
第Ⅶ層—河川の氾濫にともなう堆積物で、灰色粗砂を基調とし、径5～15cm大の礫を含む。2区にて検出したもので、本層上面は起伏に富み、本層上面の標高は48.9mから49.7mを測る。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C・・・G、北から南へ1・2・3・・・・31とし、A1・A2・・・・G31といったグリット名を付した。

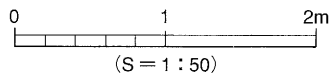


第48図 1 区土層図 (1)

層 位

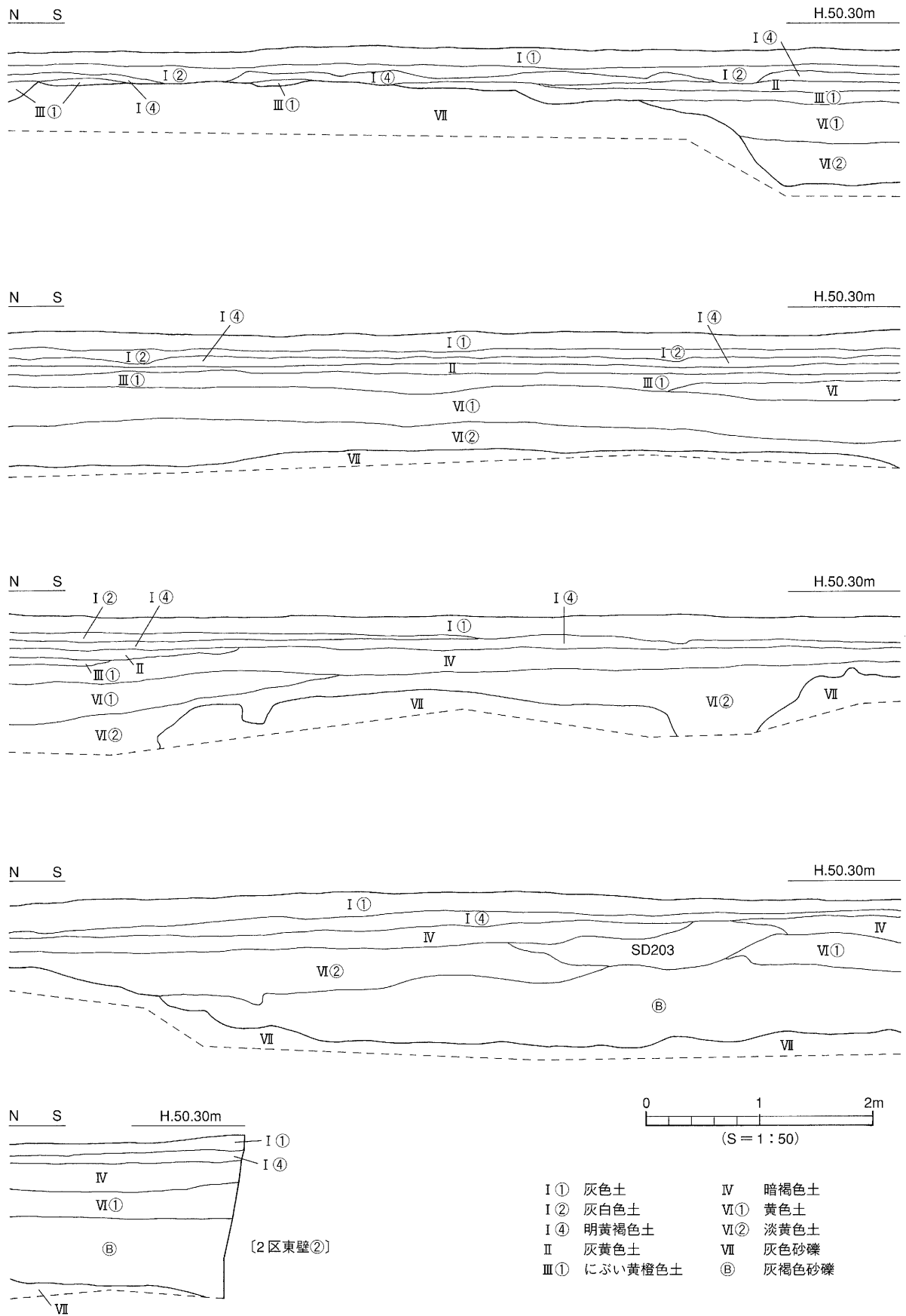


- |           |               |         |
|-----------|---------------|---------|
| I ① 灰色土   | III ① にぶい黄褐色土 | Ⓐ 灰黄褐色土 |
| I ② 灰白色土  | III ③ 灰褐色砂質土  |         |
| I ③ 灰褐色土  | III ④ 暗灰褐色砂質土 |         |
| I ④ 明黄褐色土 | IV 暗褐色土       |         |
| II 灰黄色土   | VII 灰色砂礫      |         |



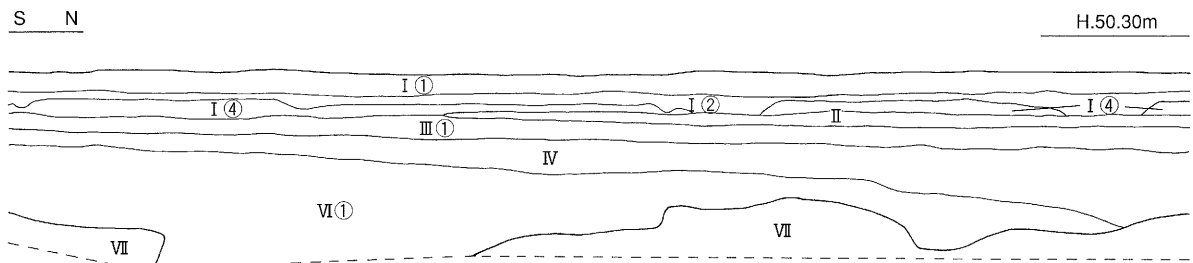
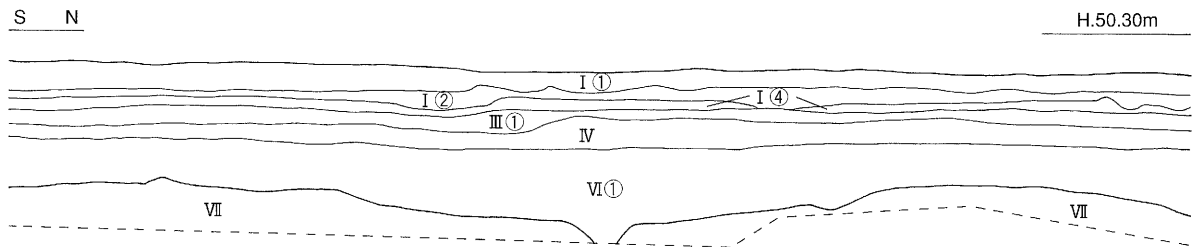
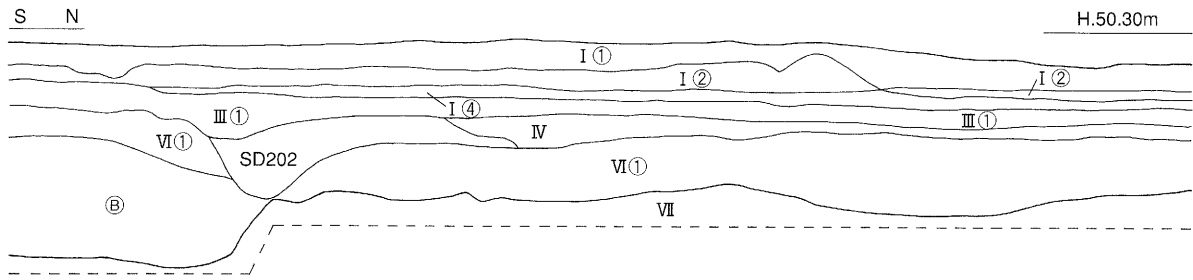
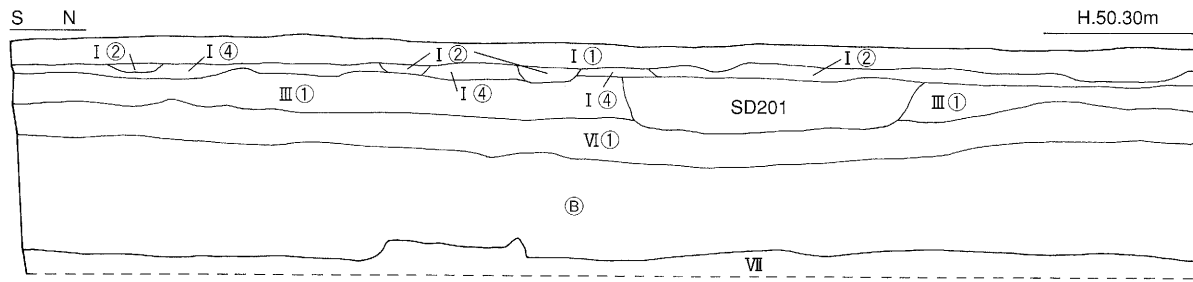
第49図 1区(2)・2区(1)土層図

水泥遺跡 3次調査



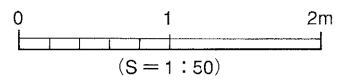
第50図 2区土層図(2)

層 位



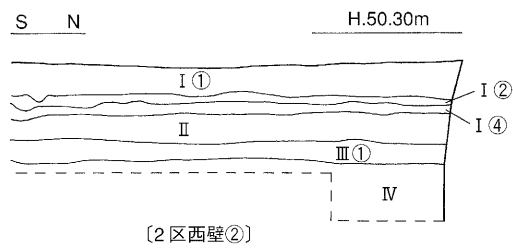
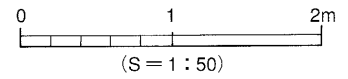
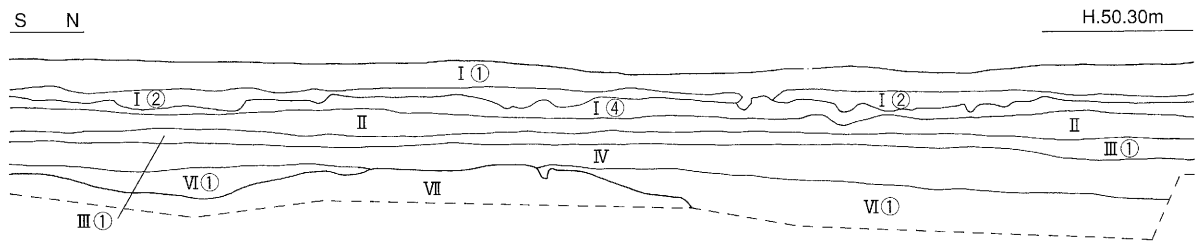
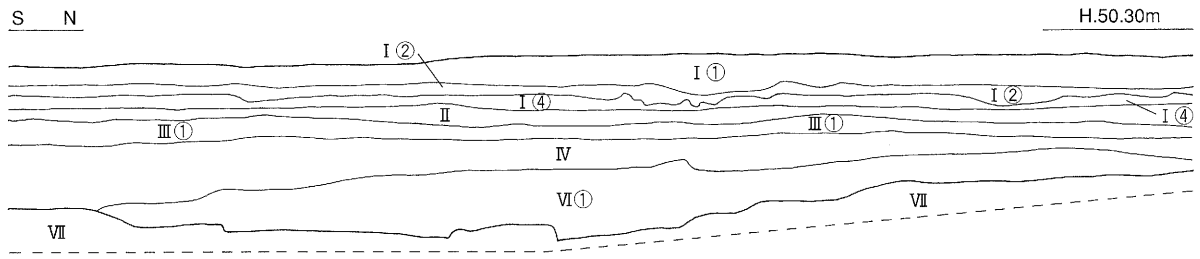
[2区西壁①]

- |               |          |
|---------------|----------|
| I ① 灰色土       | IV 暗褐色土  |
| I ② 灰白色土      | VI ① 黄色土 |
| I ④ 明黄褐色土     | VII 灰色砂礫 |
| II 灰黄色土       | ⓑ 灰褐色砂礫  |
| III ① にぶい黄橙色土 |          |



第51図 2区土層図(3)

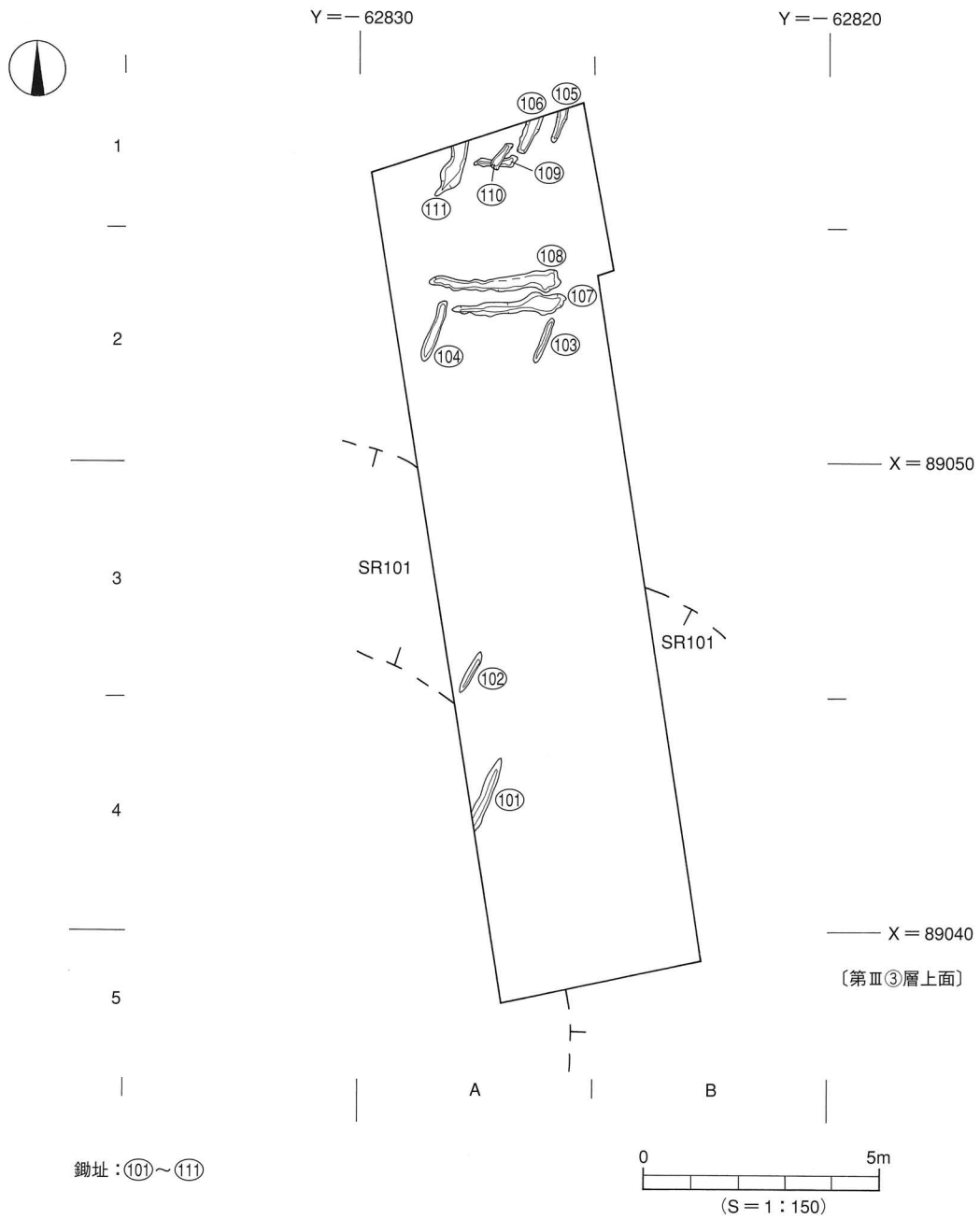
水泥遺跡 3次調査



- |     |       |       |         |
|-----|-------|-------|---------|
| I ① | 灰色土   | III ① | にぶい黄橙色土 |
| I ② | 灰白色土  | IV    | 暗褐色土    |
| I ③ | 灰褐色土  | VI ①  | 黄色土     |
| I ④ | 明黄褐色土 | VII   | 灰色砂礫    |
| II  | 灰黄色土  |       |         |

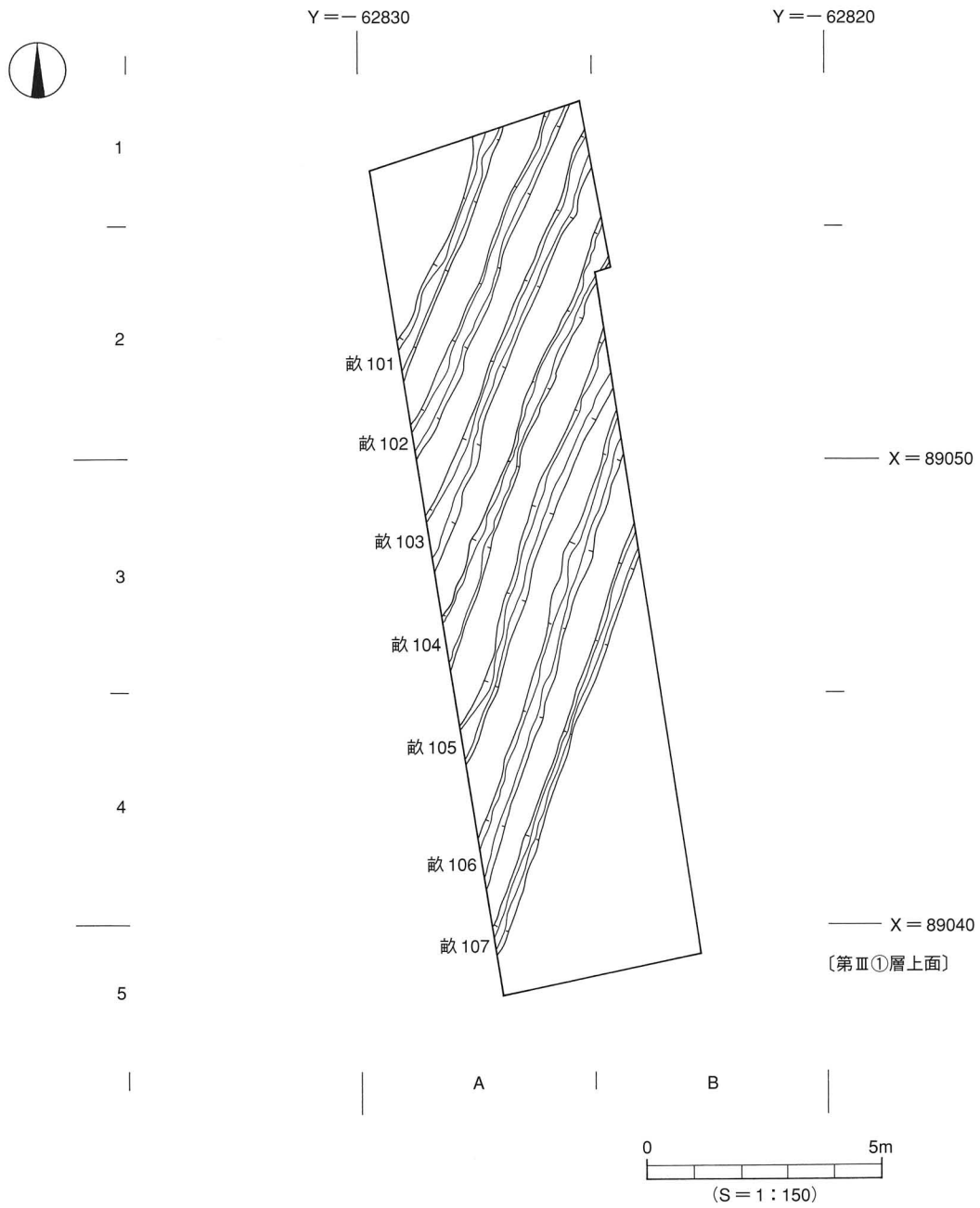
第52図 2区土層図(4)





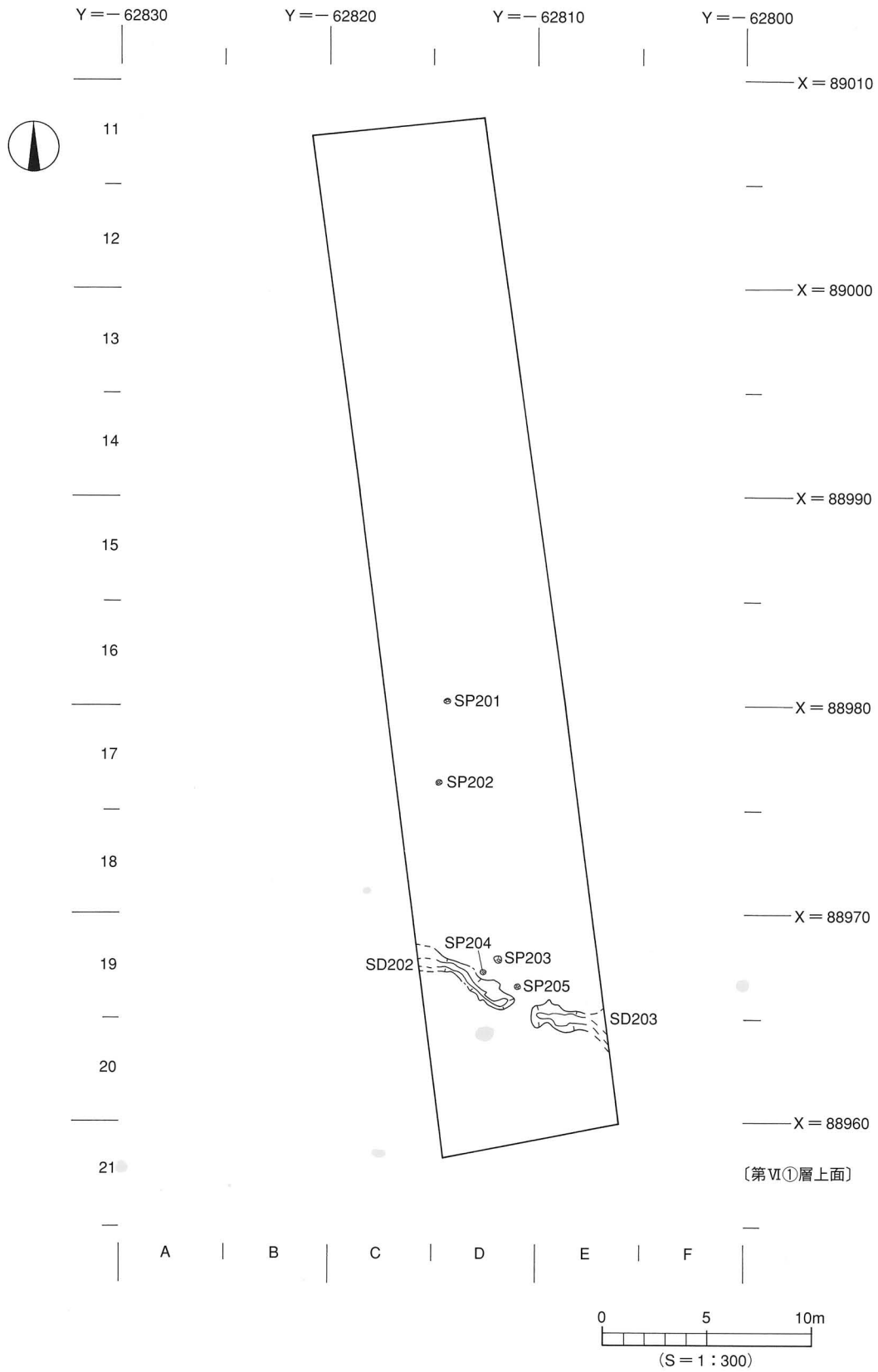
第53図 1区遺構配置図(1)

水泥遺跡 3 次調査



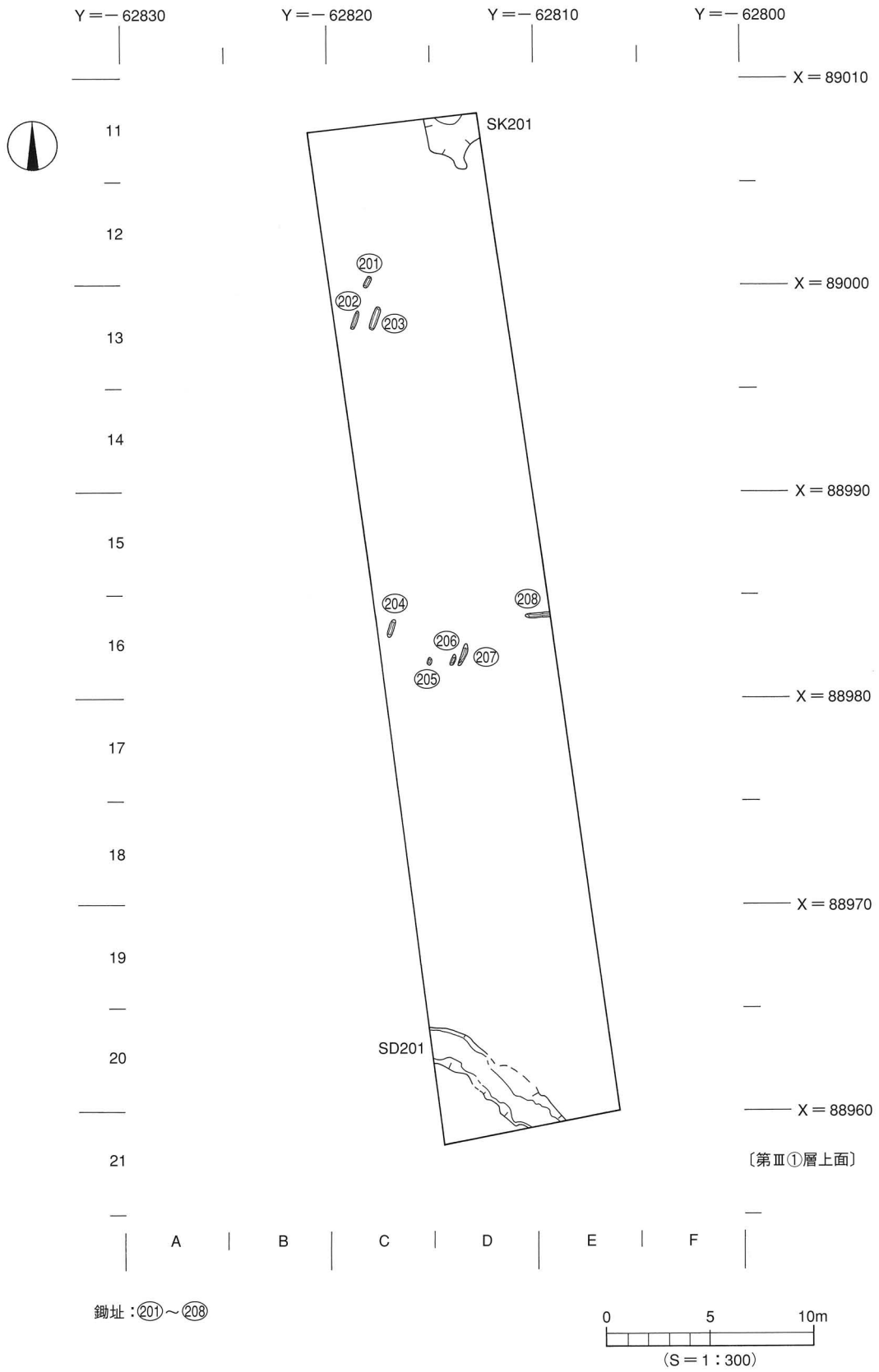
第54図 1区遺構配置図(2)

層 位

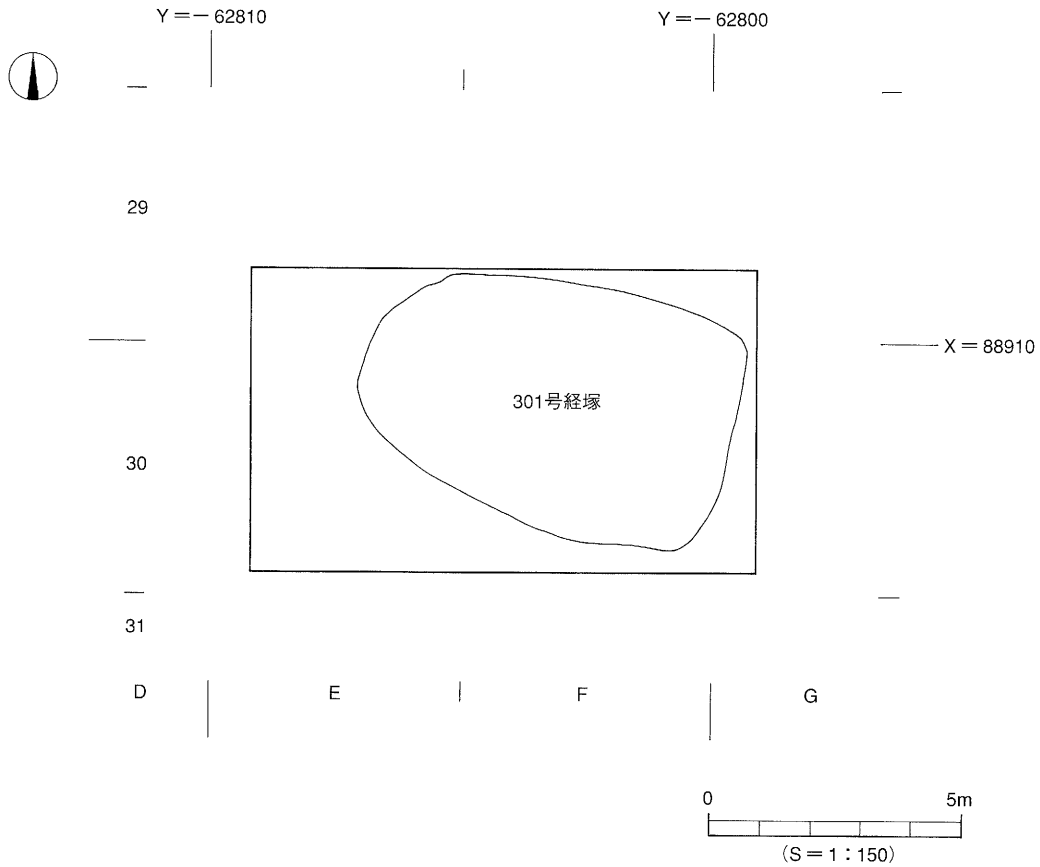


第55図 2区遺構配置図(1)

水泥遺跡 3 次調査



第56図 2区遺構配置図(2)



第57図 3区遺構配置図

(2) 検出遺構・遺物 (表20・図版14・15)

調査では溝3条〔古墳：2条、中世：1条〕、自然流路1条〔古代〕、畝状遺構7条〔中世〕、鋤址状遺構19条〔古代：11条、中世：8条〕、土坑1基〔中世〕、ピット5基〔古墳〕を検出した。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器である。以下、検出した遺構を地区別に掲載する

表20 検出遺構一覧

区	時期	古墳時代	古 代	中 世	近 世
1区			鋤址11条：鋤址101～111 自然流路1条：S R 101	畝溝7条：畝101～107	
2区		溝2条：S D 202・203 ピット5基：S P 201～205		溝1条：S D 201 土坑1基：S K 201 鋤址8条：鋤址201～208	
3区					経塚1基

### 3. 遺構と遺物

本調査では、古墳時代から近世までの遺構と、弥生時代から近世までの遺物を検出した。遺構は溝 3 条、自然流路 1 条、畝状遺構 7 条、鋤址状遺構 19 条、土坑 1 基、ピット 5 基を検出した。ここでは時代別に概要を説明する。

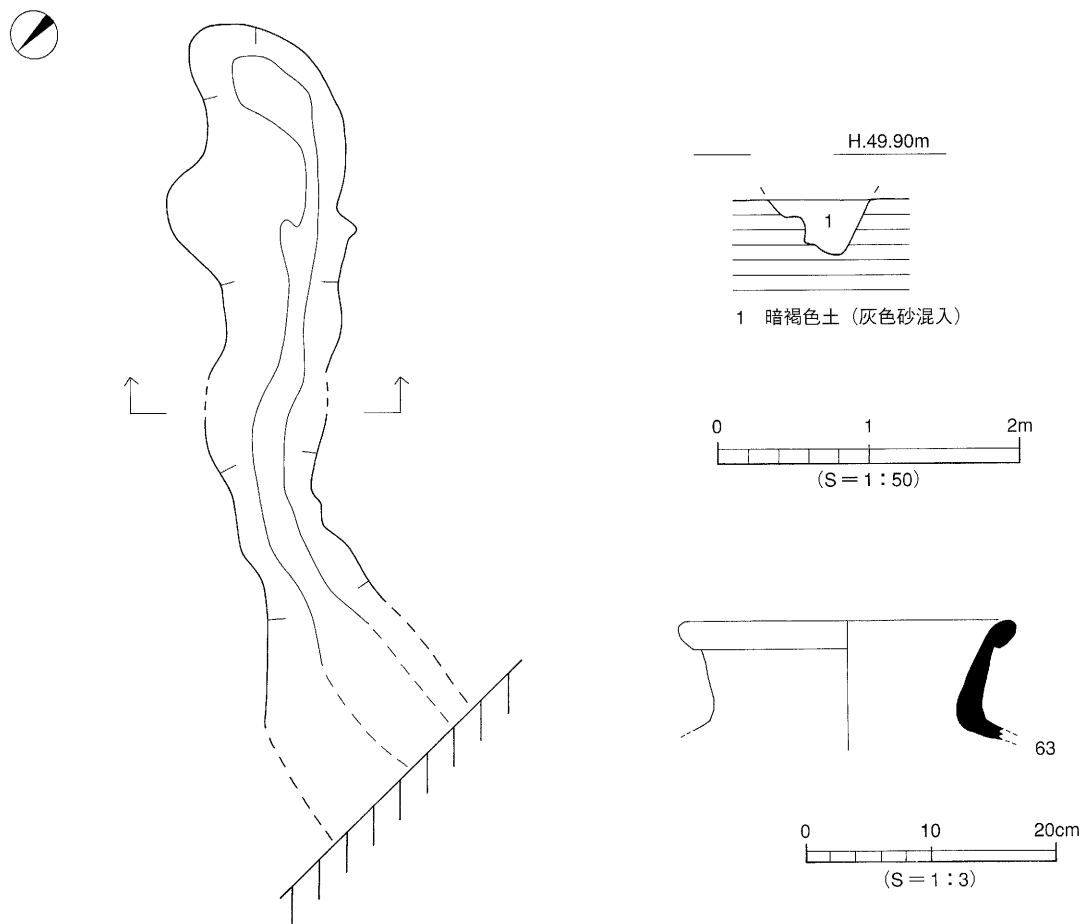
#### (1) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝 2 条とピット 5 基である。

##### 1) 溝

S D 202 (第 55・58 図)

2 区南西部 C・D19 区で検出した北西—南東方向の溝で、溝東端は消失し、西端は調査区外に続く。第 VI①層上面での検出であり、第 IV 層が覆う。規模は検出長 5.4m、幅 0.6~1.2m、深さは検出面下 15~35cm を測る。断面形態は溝西側壁体が緩やかに立ち上がるが、概ね「U」字状を呈し、埋土は暗褐色土に灰色砂が少量混入する。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より須恵器片や土師器片が数点出土した。図化しうるものを 1 点掲載した。



第 58 図 S D 202 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第58図、図版17）

63は須恵器壺で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、6世紀後半の遺構とする。

S D 203（第55・59図）

2区南東部D19～E20区で検出した東西方向の溝で、溝西端は消失し、東端は調査区外に続く。第VI①層上面での検出であり、第IV層が覆う。規模は検出長4.3m、幅0.8～1.1m、深さは検出面下25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土に灰色砂が少量混入する。溝底面は平坦である。溝内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は困難であるが、検出層位や出土遺物、埋土がS D 202と酷似することから、概ね古墳時代後期の遺構とする。

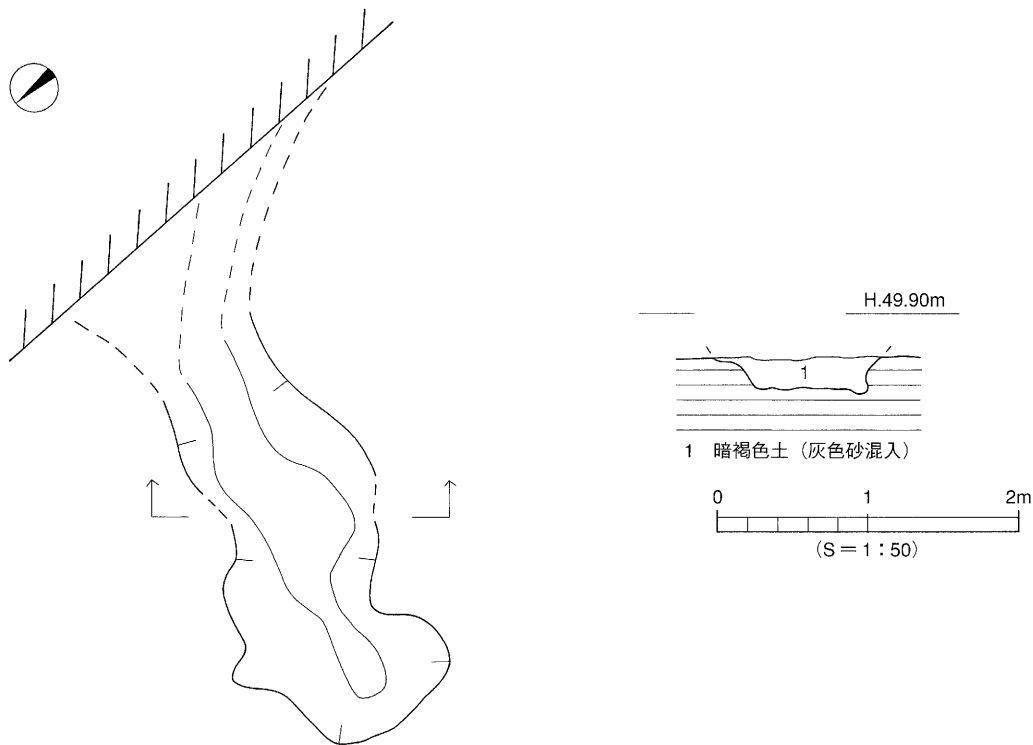
2) ピット

調査では2区にて、ピット5基（S P 201～205）検出した。すべて第VI①層上面での検出である。

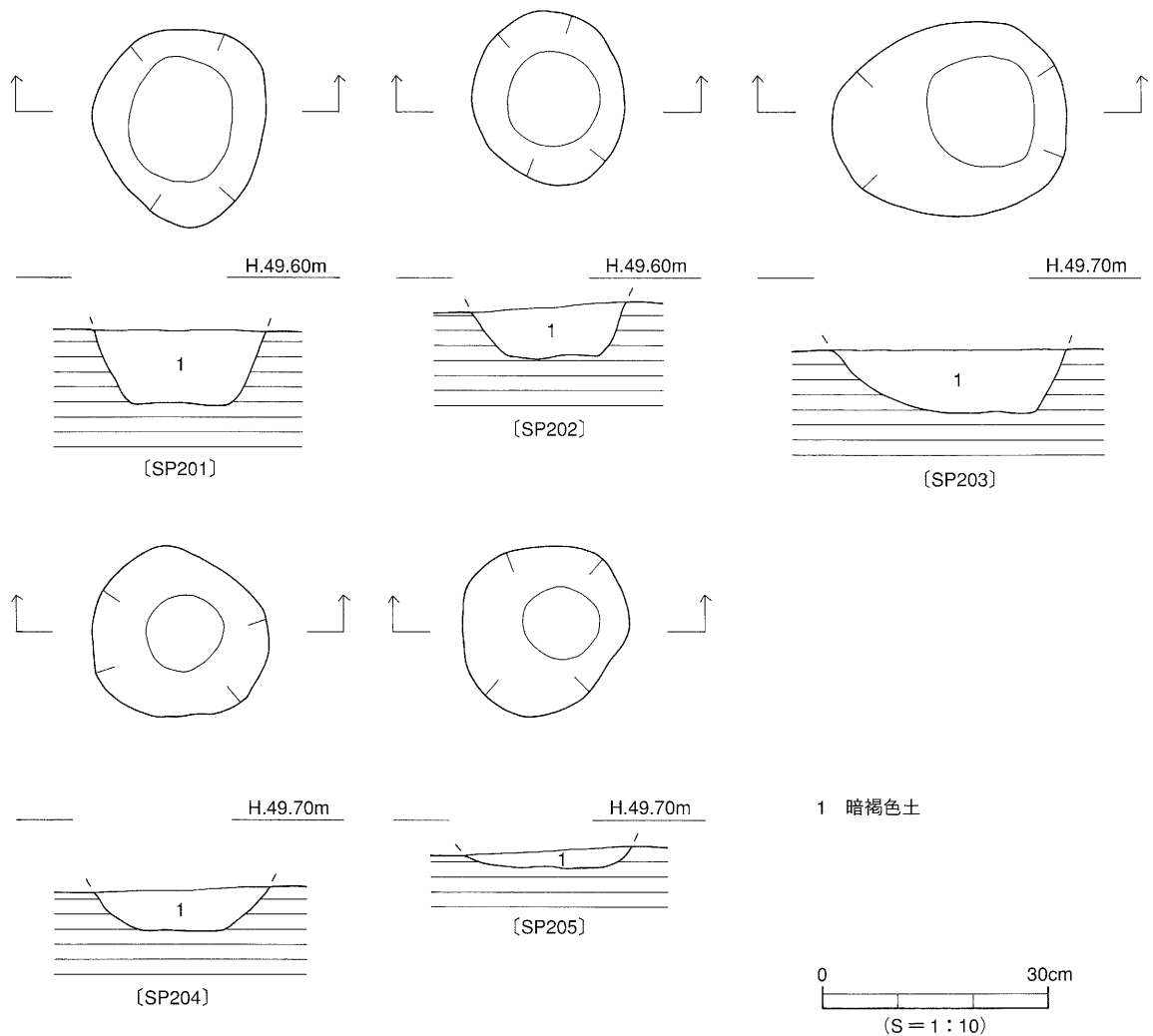
S P 201～205（第55・60図）

調査区中央部D16・17区及び、調査区南側D19区で検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径20～32cm、深さは検出面下4～9cmを測る。埋土はすべて暗褐色土単層である。遺物は、土師器片、須恵器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定は困難であるが、埋土や出土遺物より概ね古墳時代の遺構とする。



第59図 S D 203測量図



第60図 S P 201～205測量図

## (2) 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、1区にて鋤址状遺構11条と自然流路1条を検出した。

### 1) 鋤址状遺構 (鋤址)

鋤址101～111 (第53図)

1区では、第Ⅲ③層上面にて鋤址状遺構11条 (鋤址101～111) を検出した。鋤址上面は第Ⅲ①層が覆う。規模は、検出長1.2～2.8m、幅15～50cm、深さは検出面下2～4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。各鋤址は真北方向よりやや東側に方位を振り、東西及び南北方向に直交するように掘削されている。鋤址底面は起伏に富み、凹凸が著しい。鋤址内からは遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね古代の遺構とする。



## 2) 自然流路

S R 101 (第53図)

1区南半部A3～B5区に存在する流路であるが、発掘調査時は確認しておらず、整理作業の段階で確認したものである。調査壁の土層観察により、第Ⅲ②層と第Ⅲ③層堆積中に存在していたことが判明した。北西－南東方向の流路で、規模は、幅4.0m以上、深さ20cm以上を測る。埋土は暗灰色砂質土を基調とし、径3～5cm大の礫を少量含む。流路内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね古代の遺構とする。

## (3) 中世の遺構と遺物

調査では、1区にて畝状遺構7条、2区では溝1条、土坑1基、鋤址状遺構8条を検出した。

## 1) 溝

S D 201 (第56・61図)

2区南西部C20～E21区で検出した北西－南東方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅰ④層が覆う。規模は検出長8.0m、幅1.4～2.2m、深さは検出面下10～35cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色砂で、径1～3cm大の小礫が少量混入する。なお、溝底面には灰色微砂が一部10cm程度の堆積をなす。溝底面にはやや凹凸がみられ、溝北側から南側へむけて傾斜をなす(比高差10cm)。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位から概ね中世の遺構とする。

## 2) 土坑

S K 201 (第56・62図)

2区北東隅C・D11区に位置し、遺構北側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。平面形態は不整形を呈し、規模は東西検出長2.6m、南北検出長2.7m、深さは検出面下20cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。遺構南側にはピット状の張り出しがある。土坑底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器片が少量出土した。図化しうるものを1点掲載した。

出土遺物(第62図)

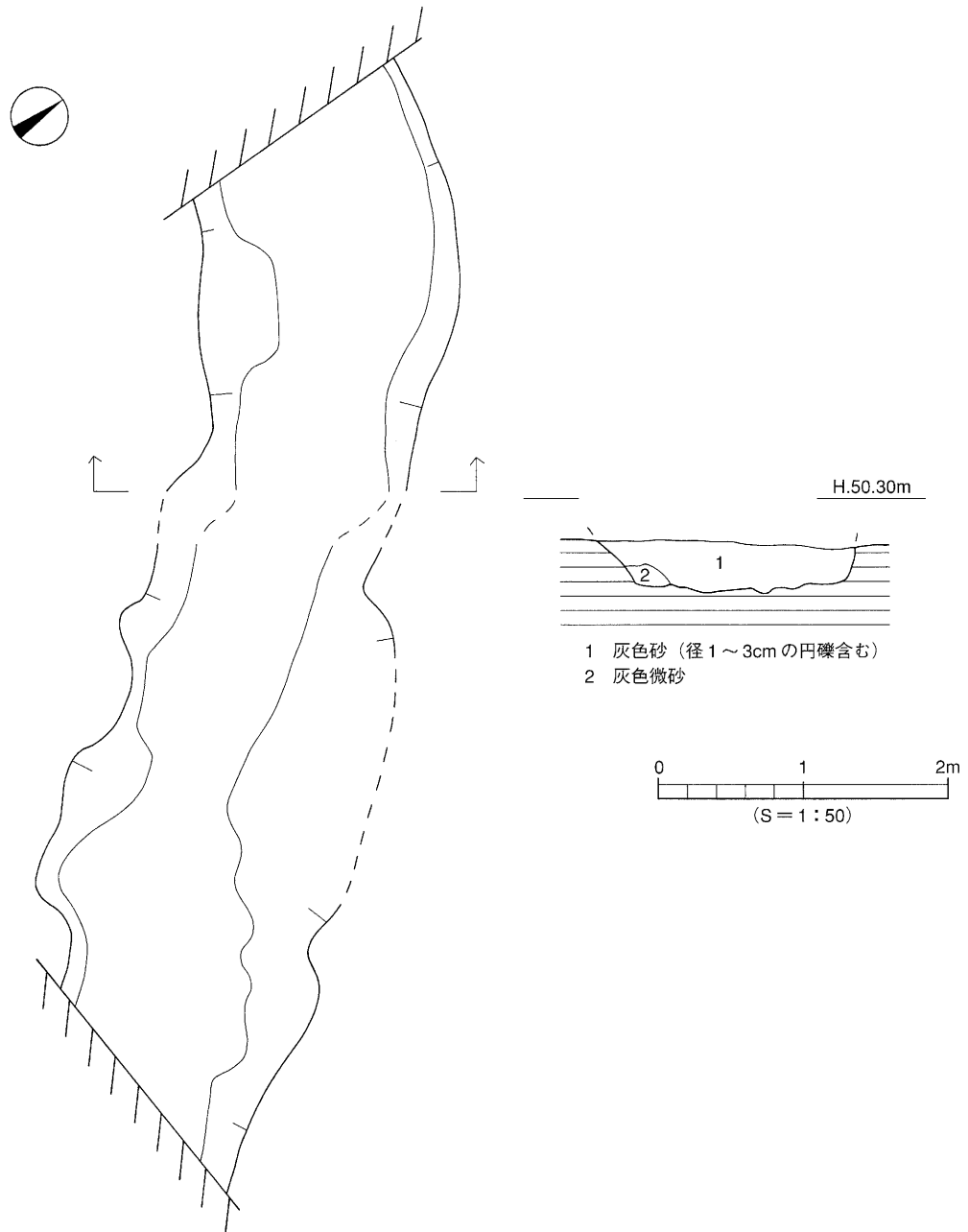
64は和泉型瓦器椀の底部片で、断面三角形状の高台が付く。体部内面にはヘラミガキ調整を施す。

時期：出土遺物より、13世紀代の遺構とする。

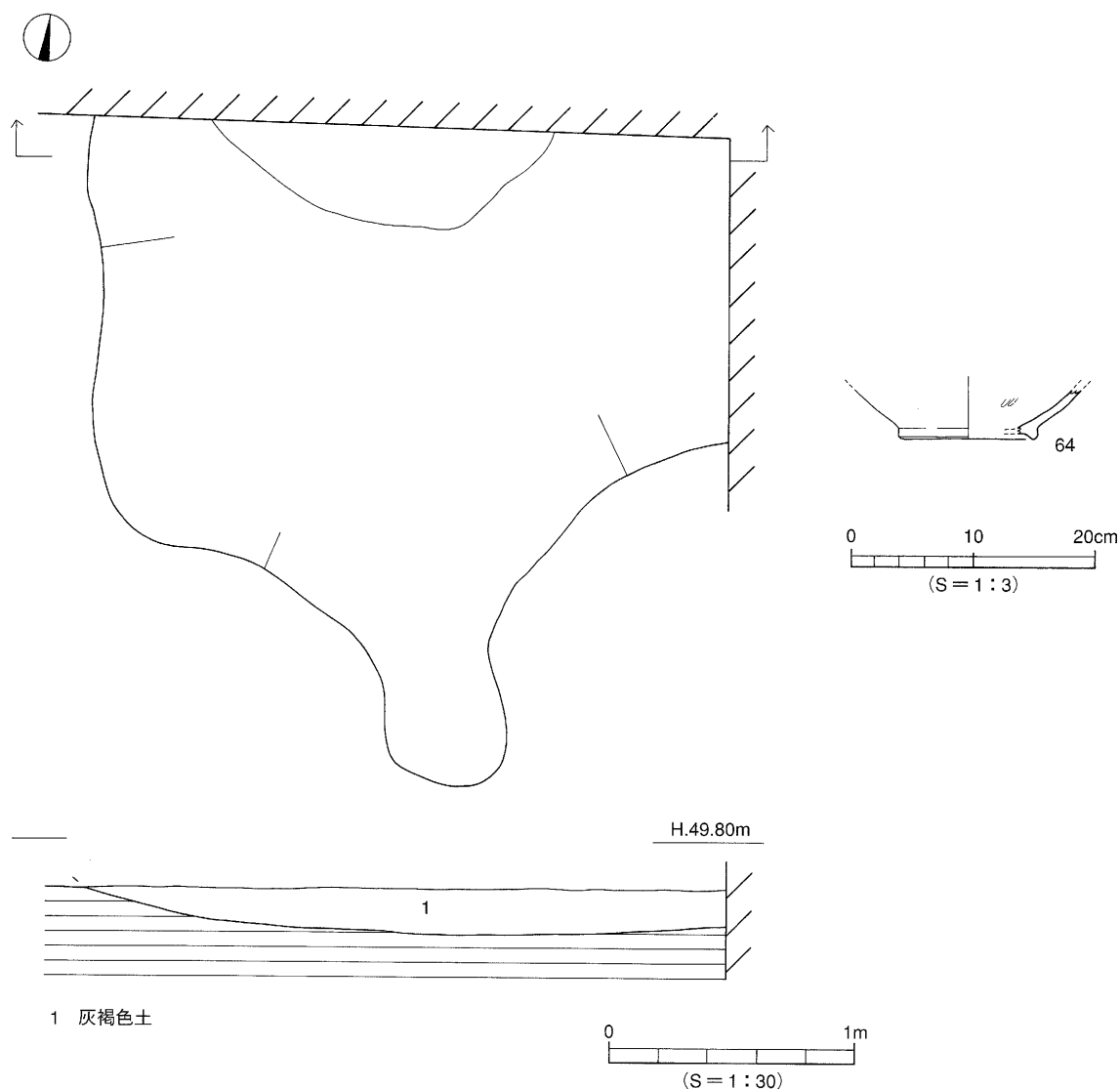
## 3) 畝状遺構(畝溝)(第54図)

調査では1区にて畝状遺構7条(畝101～107)を検出した。すべて第Ⅲ①層上面での検出である。畝溝の規模は検出長5.3～9.8m、幅0.2～0.7m、深さは検出面下2～15cmを測る。なお、畝溝の深さが浅く、調査壁での観察では大半の畝溝が検出されなかった。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。各畝溝は北東－南北方向に向けて直線的に掘削されている。畝溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね中世の遺構とする。



第61図 S D 201測量図



第62図 S K 201測量図・出土遺物実測図

4) 鋤址状遺構（鋤址）（第56図）

調査では2区にて鋤址状遺構8条（鋤址201～208）を検出した。すべて第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。鋤址の規模は検出長0.4～1.2m、幅4～10cm、深さは検出面下2～6cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。鋤址の大半は、北東－南西方向に向けて掘削されている。鋤址底面は凹凸が著しく、鋤痕と思われるピット状の凹みが一部に検出された。鋤址内からは遺物の出土はない。

時期：検出した鋤址状遺構からは出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土等から、概ね中世の遺構とする。

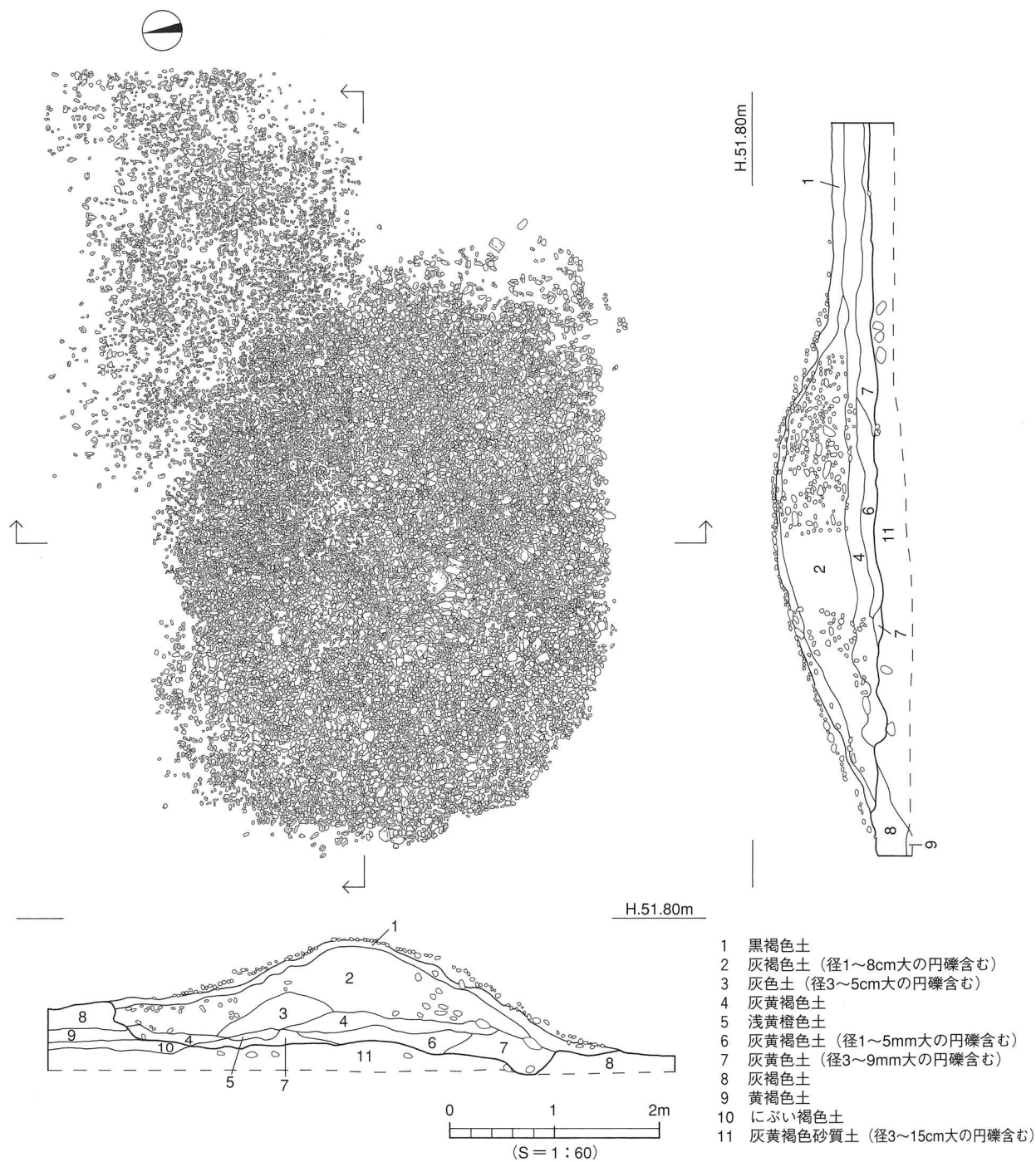
(4) 近 世

調査では、3区にて経塚を検出した。調査前の状況では、経塚の中央部に1本の木が植わっており、南部に祀と湯呑みが1点ずつ祭られていた。

経 塚

301号経塚 (第57・63・64図、図版16)

3区のE29～G30区で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長3.6m、東西検出長4.5mを測り、地表面から約1.0mの高さまで様々な土が盛られており、経塚表面には径1～8cm大の円



第63図 301号経塚測量図 (1)

礫が厚さ5cm程度敷き詰められていた。発掘調査時は、経塚中央部に東西及び南北方向のトレンチを設定し、土層観察をおこなった後、7層の土層(1~7)を上位から順に掘り下げた。8層が基底面と考えられ、8層上面にて掘り方を検出した(第63図)。掘り方の平面形態は楕円形を呈し、規模は南北検出長4.4m、東西検出長5.6m、深さは20cmを測る。なお、掘り方壁体沿いには溝状の凹みが巡り、溝内には径5~20cm大の礫が掘り方を囲むように配置されていた。また、基底面中央部には径2.0m前後、深さ5cm程度の方形状の凹みが検出された。遺物は2層中より肥前系の碗や近世の瓦が出土したが、基底面付近の土層中からは、古墳時代の須恵器片が多数出土した。

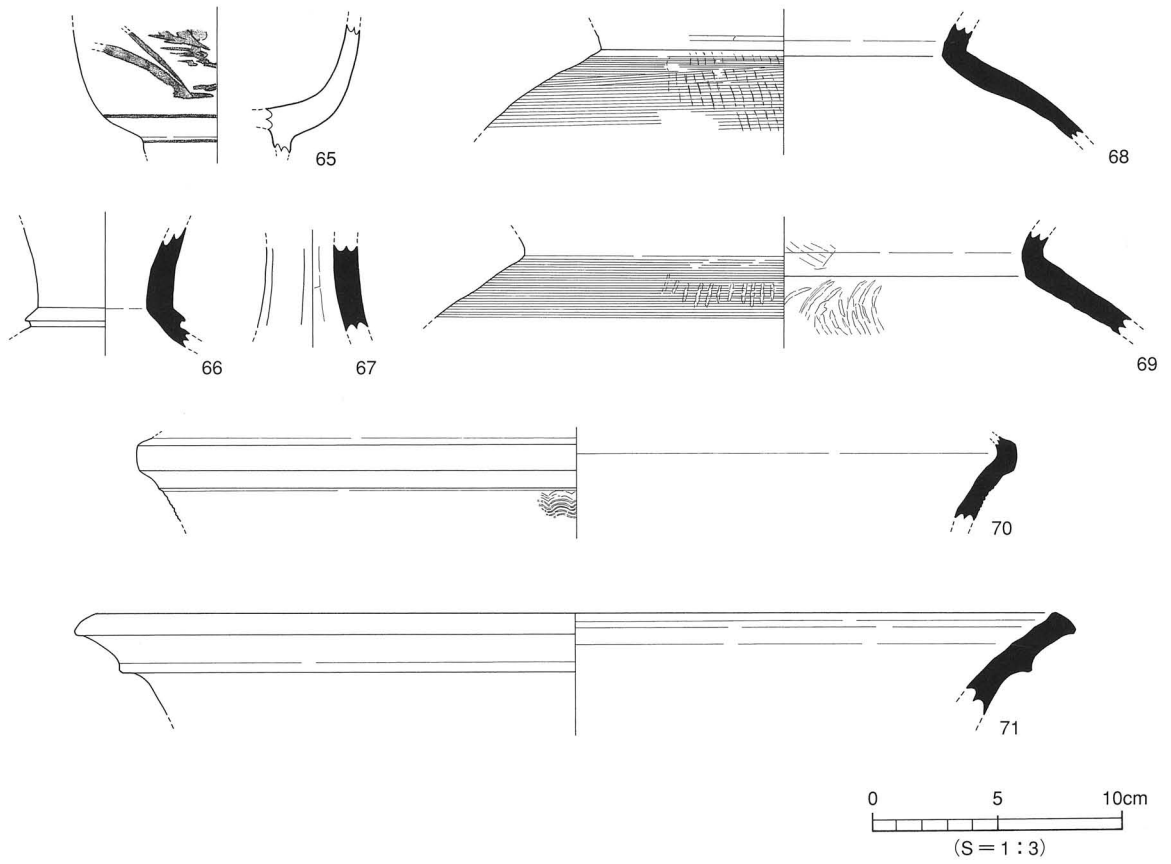
出土遺物(第65図、図版17)

65は肥前系の碗で、体部及び高台部分に青味がかかった色調の文様を施す。18世紀。66~71は須恵器である。66は長頸壺の頸肩部片で、頸部に凸帯が巡る。67は高坏の脚柱部片で、外面は面取りされている。68~71は甕で、68・69の肩部外面には平行叩き後、カキメ調整を施す。70は頸部に波状文を施す。71の口縁部中位には断面三角形状の凸帯が巡る。6~7世紀。

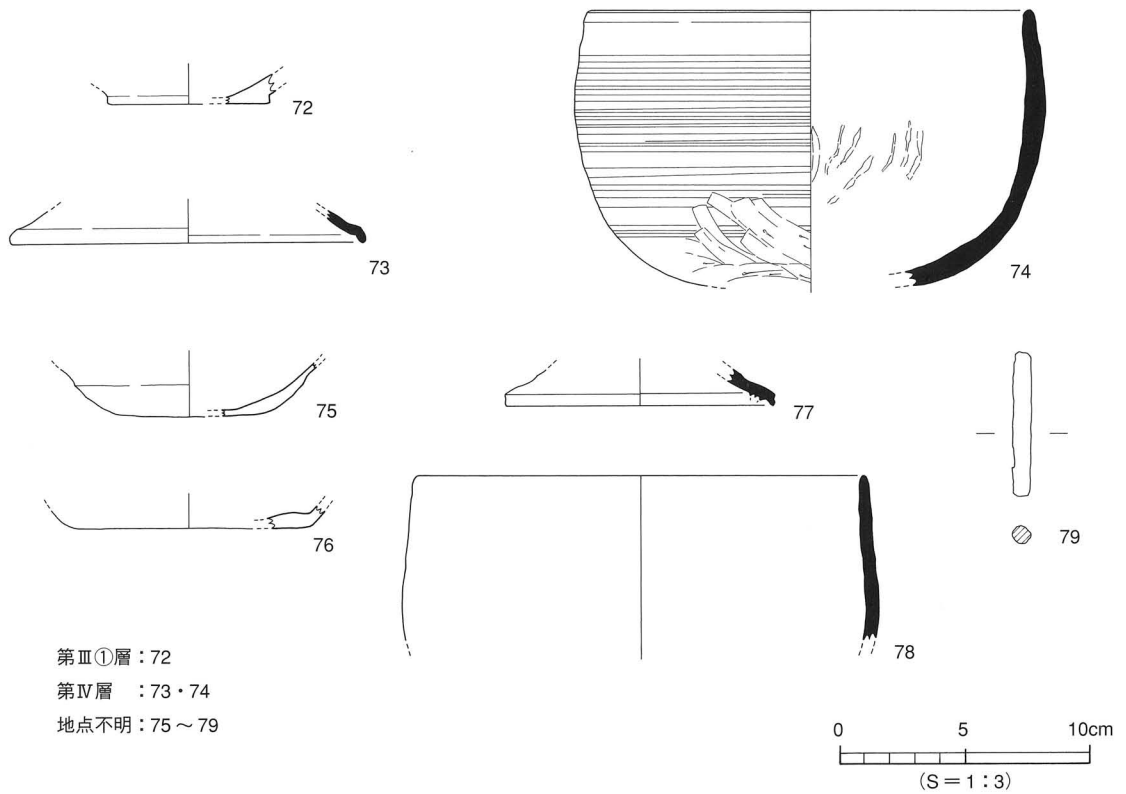
時期：出土遺物から近世、江戸時代中期頃に造られた経塚と考えられる。ただし、基底部付近から出土した須恵器から、経塚構築以前には古墳が存在していた可能性が考えられる。



第64図 301号経塚測量図(2)



第65図 301号経塚出土遺物実測図



第66図 包含層・地点不明出土遺物実測図

## (5) その他の遺構と遺物

調査では、第Ⅲ①層・第Ⅳ層及び表採資料で、古墳時代から中世までの遺物が出土した。

### 1) 包含層出土遺物 (第66図72～74)

72は第Ⅲ①層出土の土師器杯の底部片である。円盤高台状の底部をもち、底部外面に回転糸切り痕を残す。11世紀。73・74は第Ⅳ層出土の須恵器である。73は高杯の脚裾部片で、脚端部は下外方に屈曲する。74は鉢で、体部外面にはカキメ調整、底部外面には手持ちヘラケズリ調整を施す。

### 2) 地点不明出土遺物 (第66図75～79、図版17)

75・76は土師器杯で、75は体部中位に稜をもち、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。10世紀。76は平底の底部片で、底部外面にはわずかに回転ヘラ切り痕が残る。11世紀。77は須恵器杯蓋で、かえりは欠損する。7世紀。78は須恵器鉢で、口縁部は直立し、体部は内湾する。7世紀。79は不明鉄製品である。

## 4. 小 結

調査では、古墳時代から近世までの遺構と遺物を確認した。

### 1) 層 位

調査では、弥生時代の堆積層を除く基本層位のうち6層の土層を確認した。第Ⅱ層は調査区ほぼ全域にみられ25cmの堆積がみられた。第Ⅲ層は50cm程度の比較的厚い堆積がみられ、本層上面にて溝や畝状遺構、鋤址状遺構を検出した。また本層堆積中にも鋤址状遺構や自然流路を確認した。なお、第Ⅲ①層中からは平安時代に時期比定される遺物が少量出土した。検出した遺構から、第Ⅲ層は水田または畑耕作に伴う耕土の可能性があり、調査地が中世において生産域として土地利用された可能性が高いと考えられる。第Ⅳ層は2区にみられ、本層下面にて溝やピットを検出した。これは調査地周辺に存在する古墳時代集落の存在を示唆する資料となる。本調査における最終遺構検出面である第Ⅵ層は2区で検出され、70cm以上の堆積がみられ安定した堆積状況をなす。また、第Ⅶ層上面には起伏がみられ、2区北端と南端では1mを超える高低差が認められた。

### 2) 遺 構

古墳時代の遺構は、溝とピットを検出した。出土品から古墳時代後期の遺構と考えられ、調査地近隣に古墳時代後期集落が存在するものと推測される。古代では1区にて鋤址状遺構を検出した。検出層位から平安時代以前の遺構と考えられ、調査地が古代、飛鳥時代から奈良時代において水田耕作が営まれていた可能性が高いと推測される。中世では1区で畝状遺構、2区では鋤址状遺構や溝を検出した。畝状遺構は、畑耕作に伴う遺構と考えられるが、形状や規模は把握できなかった。ただし、いずれの畝状遺構も真北方向に沿って、東西、南北方向に掘削されていた。一方、鋤址状遺構は、部分的にしか残存しておらず、形状や規模は判断できなかった。しかしながら、水泥遺跡1次調査に続き、本調査においても中世段階に水田や畑耕作が営まれていた可能性が高く、中世においては調査地周辺に広く生産遺構が展開していることが想定される。このほか、近世では経塚を検出した。石積みによる塚で、出土品から江戸時代中期頃の築造と考えられる。なお、経塚構築以前には、古墳が存在した可能性があり、平地における古墳の存在を示唆する資料である。

表21 S D 202出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
63	壺	口径(12.8) 残高 4.7	珠玉状の口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	17

表22 S K 201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
64	椀	底径 5.6 残高 2.0	瓦器椀。高台は断面三角形状。	ナデ	マメツ (ミガキ)	黒色 黒色	密 ◎		

表23 301号経塚出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	碗	残高 5.0	肥前焼。藍色絵付。	施釉	施釉	淡緑青色 淡緑青色	密 ◎	胎土： 灰色	17
66	壺	残高 4.7	頸部に凸帯。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	17
67	高坏	残高 3.4	面取り。小片。	マメツ	回転ナデ	淡灰色 緑色	密 ◎	自然釉	17
68	甕	残高 4.6	小片。	㊦平行叩き →カキメ	㊦回転ナデ ㊦スリケシ	淡青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
69	甕	残高 4.1	小片。	㊦平行叩き →カキメ	㊦ナデ ㊦円弧叩き	淡灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	
70	甕	残高 3.8	波状文5条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色 灰褐色	石・長(1) ◎		17
71	甕	口径(38.0) 残高 4.0	口縁下に凸線1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		17

表24 第Ⅲ①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
72	坏	底径(6.4) 残高 1.2	円盤状高台。小片。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		

表25 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	高坏	底径(14.0) 残高 1.2	脚部小片。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
74	鉢	口径(17.6) 残高 10.8	1/3の残存。底部外面：静止ヘラケズリ。	㊦カキメ ㊦ヘラケズリ	㊦円弧叩き →回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		17

表26 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	坏	底径(6.0) 残高 2.1	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 乳黄色	長(1) ◎		
76	坏	底径(9.7) 残高 0.9	小片。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
77	坏蓋	口径(10.5) 残高 1.4	かえり一部欠損。	回転ナデ	回転ナデ?	青灰色 青灰色	密 ◎		
78	鉢	口径(17.6) 残高 6.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表27 地点不明出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
79	不明	不明	鉄	5.7	0.7	0.7	10.9		17



第7章

# 高井遺跡

— 1次調査 —



## 第7章 高井遺跡1次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2003（平成15）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地の北側には水泥遺跡や平井遺跡があり、弥生時代から中世までの遺構や遺物が多数確認されている。このことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2003（平成15）年11月25日から同年12月10日までの間に試掘調査を実施した。調査の結果、溝や土坑、鋤址と土師器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は申請地内における古墳時代から中世までの集落構造及び古地形復元を主目的とし、道路建設課と委託契約を結び、埋文センターが主体となり、2004（平成16）年3月1日より開始した。

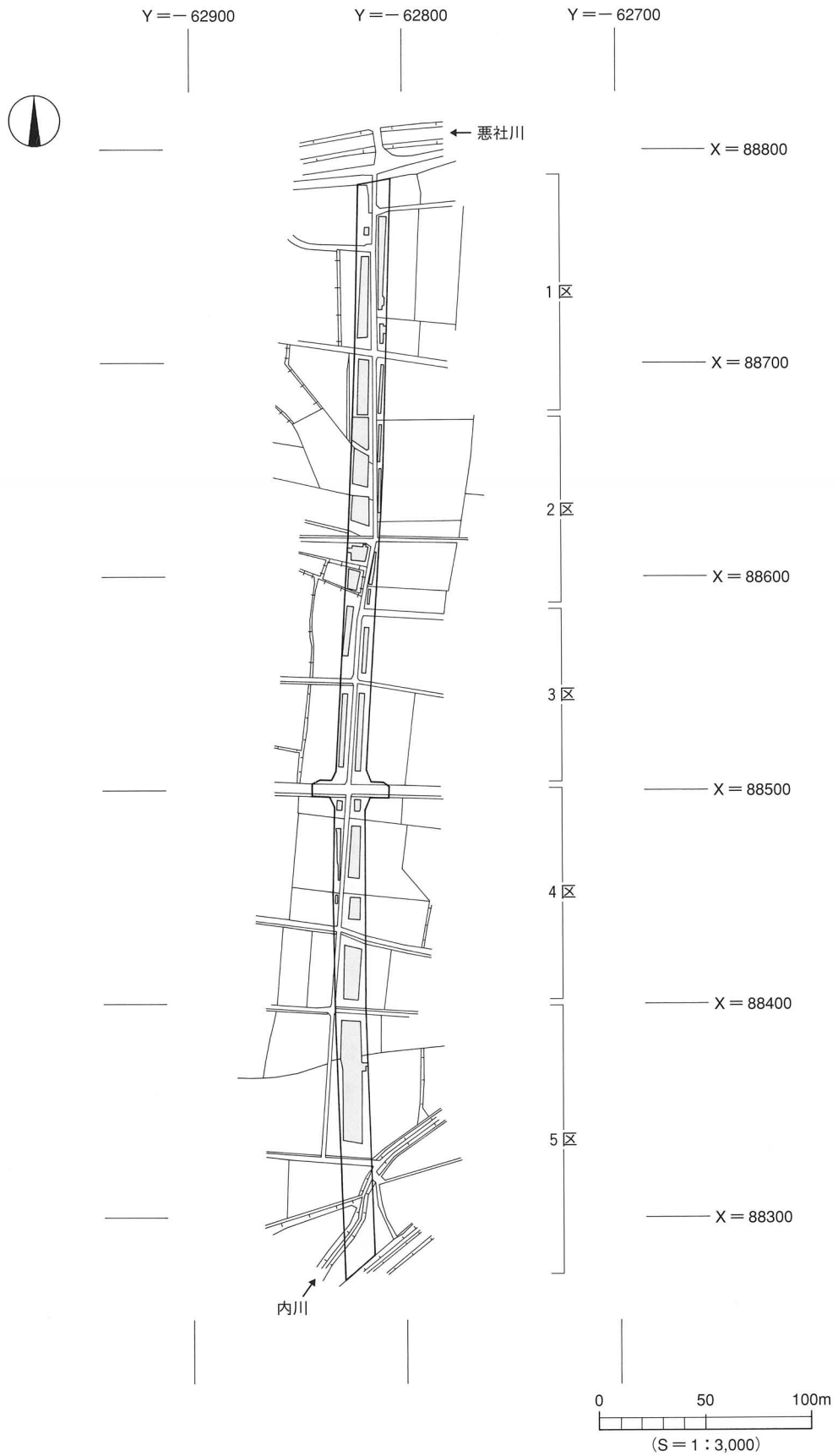
#### (2) 調査の経緯（第67図）

調査は2004（平成16）年3月1日から2005（平成17）年1月31日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地を5つの区（1区～5区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。

3月1日、1区には生活道路が存在したため、1A区から1F区までの6地区に分区して調査を開始した。1A区から重機を使用して表土を除去し、その後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。1区では中世段階の畑址と思われる畝溝や溝を検出した。4月上旬、道路建設課の要請により調査工程を変更し、1区の調査を一旦中断し、3区の調査を進めることになった。4月16日、3区の調査を開始した。3区には1区と同様に生活道路が存在したため、調査区内を4つの地区（3A～3D区）に分区して調査をおこなった。重機による表土の除去後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出、遺構掘り下げをおこなった。3区では古墳時代や中世の溝や土坑を検出した。8月24日、3区の調査を終了した。3区の調査と併行して、6月7日より4区の調査を開始した。4区も生活道路の関係上、7つの地区（4A～4G区）に分区して調査をおこなった。4区では主に古墳時代や中世の遺構や遺物を検出した。8月27日、4区の調査を終了した。8月30日より5区の調査を開始した。5区は2つの地区（5A・5B区）に分区して調査をおこなった。5区では主に古墳時代の掘立柱建物址や土坑を検出した。11月2日、5区の調査を終了した。11月4日、中断していた1区の調査を再開した。1区では2面の畑址を確認した。12月24日、1区の調査を終了した。2005（平成17）年1月5日より2区の調査を開始した。2区にも生活道路が存在したため、9つの地区（2A～2I区）に分区し、調査をおこなった。2区では古墳時代から中世までの遺構や遺物を検出した。1月31日、2区の調査を終了し、高井遺跡1次調査をすべて終了した。

高井遺跡 1次調査



第67図 調査区測量図

### (3) 調査組織

所在地：松山市高井町466 外

調査期間：2004（平成16）年3月1日～2005（平成17）年1月31日

調査面積：6,429.6m<sup>2</sup>

調査担当：梅木 謙一、水本 完児

## 2. 層 位

### (1) 基本層位（第68～76図、図版18）

調査地の基本層位は第Ⅰ層から第Ⅶ層までの7層である。調査以前の状況は水田であり、現況の標高を測量すると、調査地北側から南側へ向けて傾斜をなし、調査地北端で50.30m、南端で49.20mを測る。

第Ⅰ層－近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質・土色の違いにより7層に分層される。

第Ⅰ①層：青灰色土で、いわゆる水田耕作にともなう耕作土である。調査地全域にみられ地表下15～20cmまで開発がおこなわれている。本層上面の標高を測量すると調査地北端が最も高く、標高50.2m、南端では標高48.8mを測る。

第Ⅰ②層：灰色土で、第Ⅰ①層と同様の耕作土である。調査地ほぼ全域にみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅰ③層：黄褐色土で、水田耕作に伴う床土である。2区のみにみられ層厚5～10cmを測る。

第Ⅰ④層：灰黄色土で、水田耕作に伴う耕作土である。2区のみにみられ層厚10cmを測る。

第Ⅰ⑤層：にぶい黄褐色土で、水田耕作に伴う床土である。2区のみにみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅰ⑥層：灰白色土で、水田耕作に伴う耕作土である。調査地ほぼ全域にみられ層厚5～10cmを測る。

第Ⅰ⑦層：にぶい黄橙色土で、水田耕作に伴う床土である。1区と4区とにみられ層厚10～15cmを測る。

第Ⅱ層－中世段階の土層で、土質・土色の違いにより5層に分層される。

第Ⅱ①層：灰黄色土で、1区と2C区、3区の全域及び4D・4E・5B区にみられ、層厚5～20cmを測る。本層上面にて溝を検出した。

第Ⅱ②層：灰褐色土で、1～3区全域及び4D・4E区・5B区にみられ、層厚5～10cmを測る。

第Ⅱ③層：灰白色土で、1区全域と2A区とにみられ、層厚5～15cmを測る。1B区では本層上面にて溝を検出した。

第Ⅱ④層：にぶい橙色を呈する砂質土で、1A～1E区、及び5B区にみられ、層厚10～50cmを測る。1区では本層上面にて畝溝を検出した。

第Ⅱ⑤層：褐灰色土で、1A～1E区、及び5B区にみられ、層厚10～20cmを測る。1区では本層上面にて畝溝を検出した。

第Ⅲ層－古代の土層で、土質・土色の違いにより2層に分層される。

第Ⅲ①層：にぶい黄褐色土で、1B・1E・1F区にみられ、層厚25～80cmを測る。

第Ⅲ②層：褐色を呈する粘質土で、1B区のみにみられ、層厚5～25cmを測る。

第Ⅳ層—古墳時代の遺物を含む土層で、土質の違いにより2層に分層される。

第Ⅳ①層：黒褐色土で、2D～2F・2H区、3区、及び4D～4F区にみられ、層厚10～30cmを測る。4区では本層上面にて溝を検出した。また、2D区では本層掘り下げ時に石室を検出した。

第Ⅳ②層：黒褐色を呈する砂質土で、2D・2F・2H区、及び3C区にみられ、層厚10～30cmを測る。3C区では本層上面にて溝を検出した。

第Ⅴ層—弥生時代の遺物を含む褐色を呈する粘質土で、2D・2F・2H区にみられ、層厚10～15cmを測る。2D区では本層上面にて溝を検出した。

第Ⅵ層—黄色から暗褐色を呈する土層で、土質・土色の違いにより5層に分層される。

第Ⅵ①層：黄色土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚20～35cmを測る。本層上面の標高を測量すると北から南へむけて傾斜をなす。

第Ⅵ②層：暗褐色を呈する粘質土で、4G区と5区にみられ層厚5～10cmを測る。

第Ⅵ③層：黄褐色土で、4G区と5区にみられ層厚20～50cmを測る。

第Ⅵ④層：暗灰褐色を呈する粘質土で、4G区と5区にみられ層厚10～25cmを測る。

第Ⅵ⑤層：黄褐色を呈する粘質土で、5区のみにみられ層厚35cm以上を測る。

第Ⅶ層—河川の氾濫に伴う堆積物で灰色粗砂を基調とし、径5～15cm大の礫を含む。

なお、調査にあたり、各調査区内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C・D・E、北から南へ1・2・3・・・88とし、A1・A2・・・E88といったグリット名を付した。また、5B区にて活断層を検出した(第75・76図)。詳細は第11章考察にて記載する。

## (2) 検出遺構・遺物 (表28・図版19～24)

本調査で検出した遺構は古墳時代から中世までのもので、掘立柱建物址1棟(古墳)、石室1基(古墳)、溝18条(古墳：9条、中世：9条)、自然流路1条(中世)、土坑10基(古墳：8基、中世：2基)、及び畝溝37条(中世)である。このほか、各区より小ピット65基を検出した。遺物は遺構及び包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器ほかである。

表28 検出遺構一覧

(1)

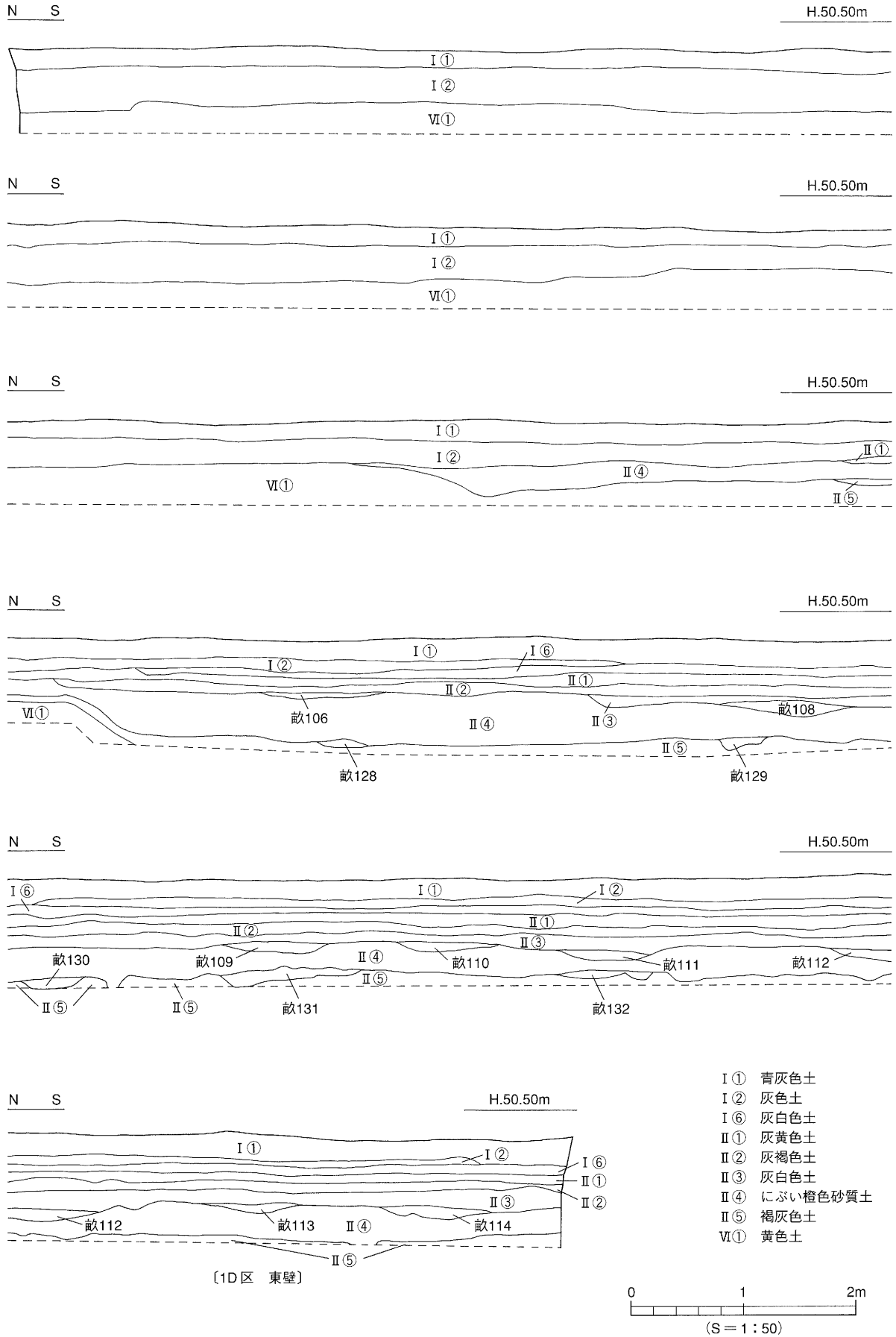
区	時期	古墳時代	中世	その他
1A				
1B			溝2条：SD101・102 畝溝13条：畝101～105、 120～127	
1C			自然流路1条：SR101	
1D			畝溝16条：畝106～115、 128～133	
1E			畝溝8条：畝116～119、 134～137 溝1条：SD103	

## 検出遺構一覧

(2)

区	時期	古墳時代	中 世	その他
1 F			溝 1 条：S D104	
2 A		土坑 1 基：S K202	溝 1 条：S D201	ピット 2 基：S P203・204
2 B			土坑 1 基：S K201	ピット 1 基：S P202
2 C				
2 D		石室 1 基：201号石室 溝 1 条：S D202 土坑 1 基：S K203		
2 E				
2 F				ピット 1 基：S P201
2 G				
2 H				
2 I				
3 A				ピット 2 基：S P301・302
3 B				ピット 14 基：S P303～311・ 327～331
3 C		溝 2 条：S D301・302 土坑 1 基：S K301		ピット 7 基：S P312～317・326
3 D				ピット 8 基：S P318～325
4 A				
4 B				
4 C				
4 D				
4 E				ピット 2 基：S P401・402
4 F		溝 1 条：S D401	溝 1 条：S D409 土坑 1 基：S K401	ピット 17 基：S P403・404・411～ 413・415～424・428・429
4 G		溝 5 条：S D402・403・406～408 土坑 2 基：S K402・403	溝 2 条：S D404・405	ピット 8 基：S P405～409・ 425～427
5 A				
5 B		掘立柱建物址 1 棟：掘立501 土坑 3 基：S K501～503	溝 1 条：S D501	ピット 3 基：S P501・512・513

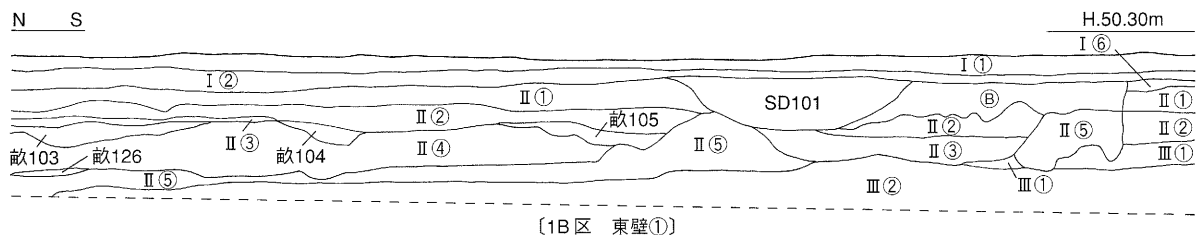
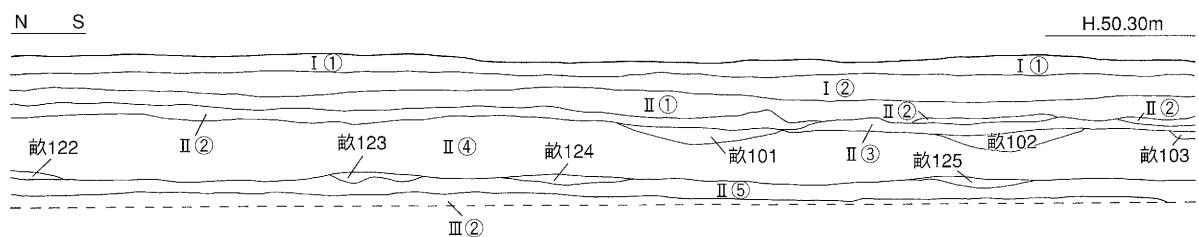
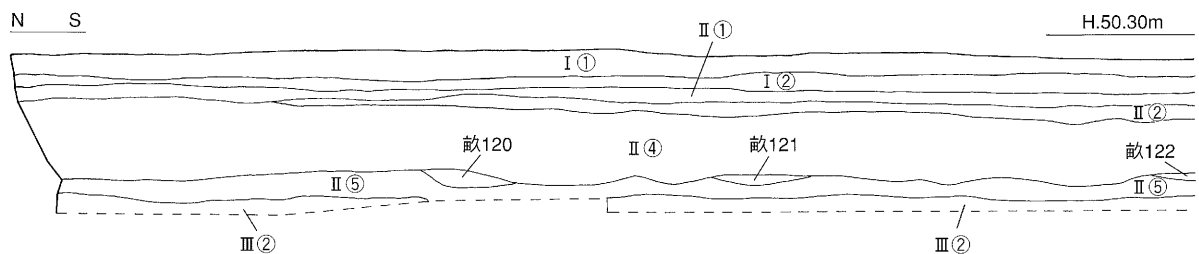
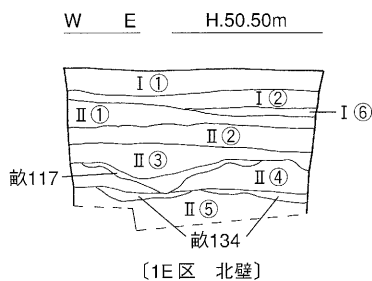
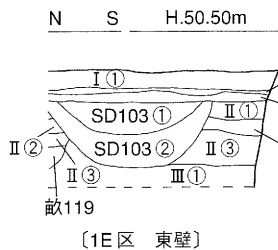
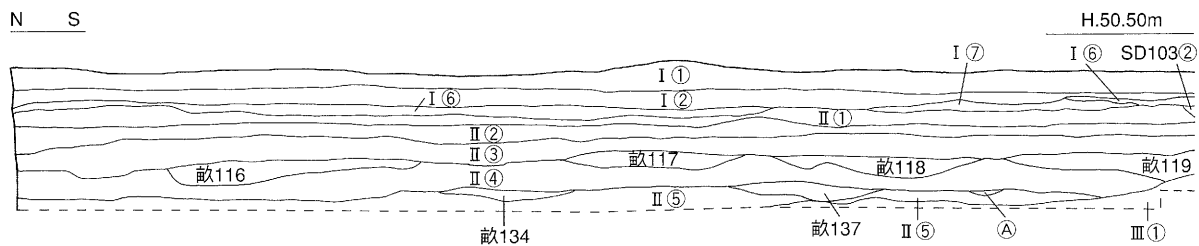
高井遺跡 1次調査



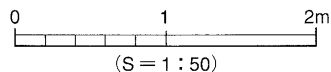
第68図 1D区土層図



層 位

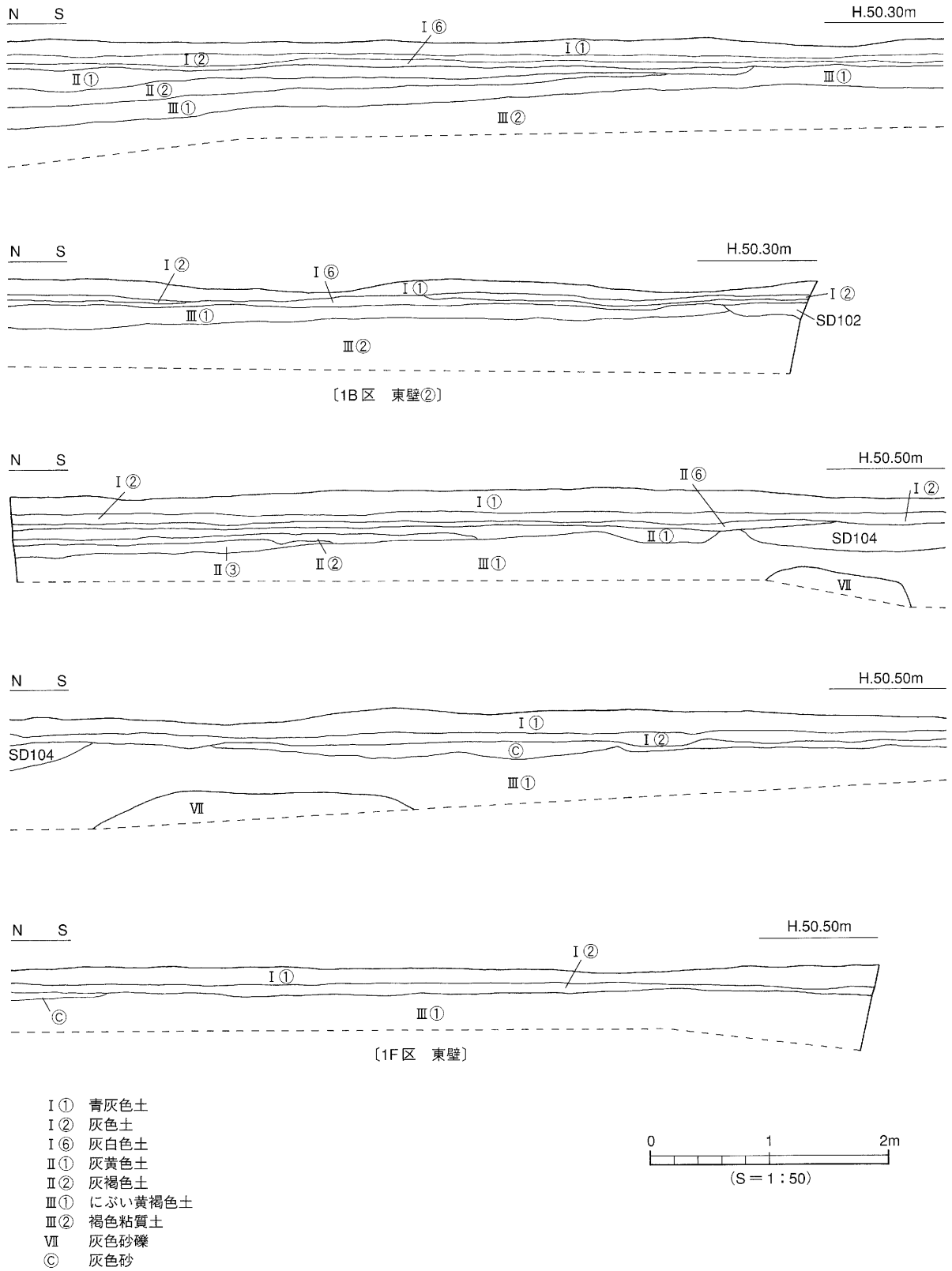


- |             |               |                  |
|-------------|---------------|------------------|
| I ① 青灰色土    | II ② 灰褐色土     | III ② 褐色粘質土      |
| I ② 灰色土     | II ③ 灰白色土     | A  にぶい褐色土 (橙色砂混) |
| I ⑥ 灰白色土    | II ④ にぶい橙色砂質土 | B  灰褐色土と灰黄色土の混合土 |
| I ⑦ にぶい黄橙色土 | II ⑤ 褐灰色土     |                  |
| II ① 灰黄色土   | III ① にぶい黄褐色土 |                  |



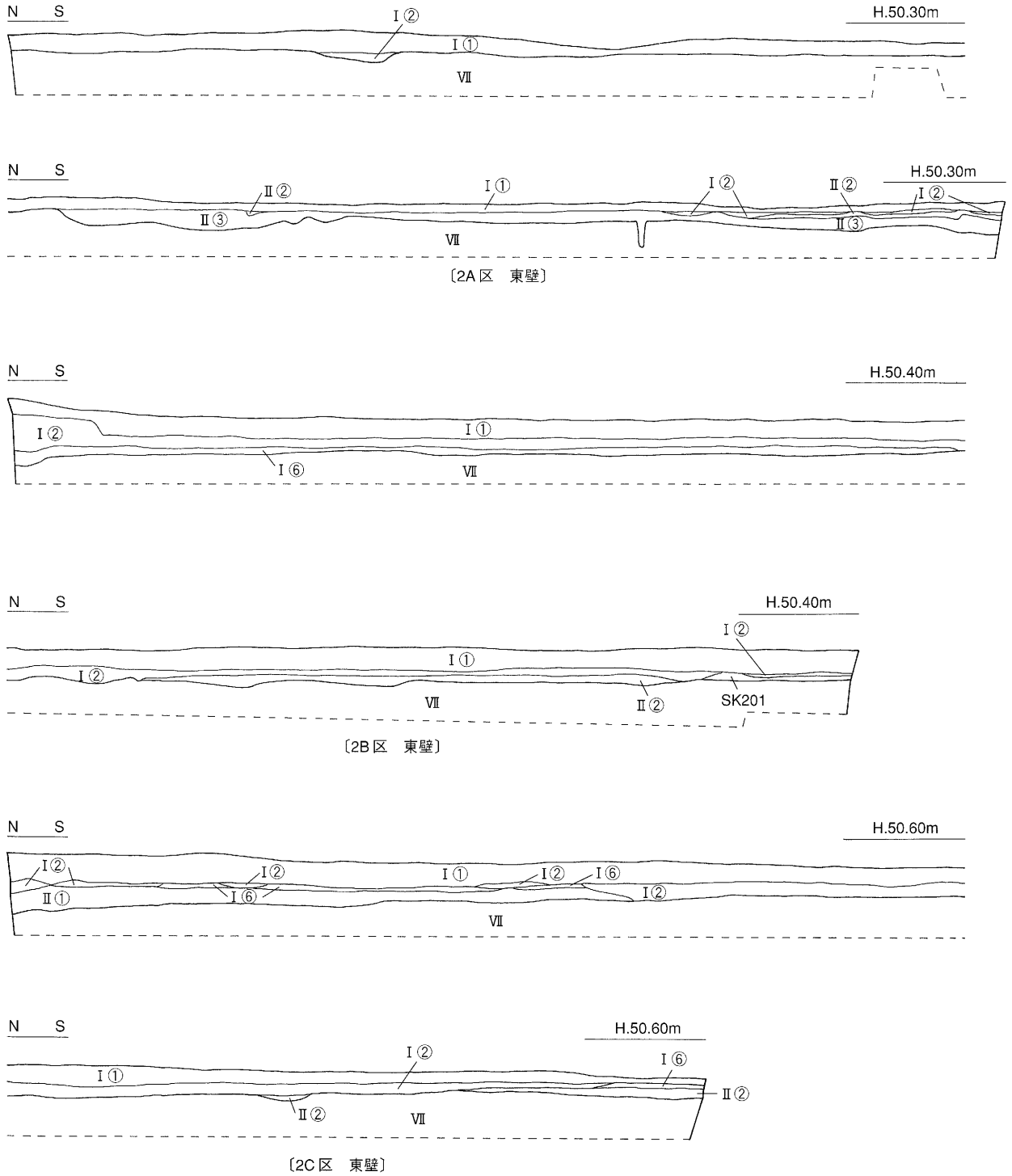
第69図 1E区・1B区(1)土層図

高井遺跡 1次調査

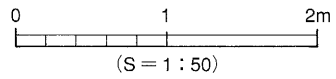


第70図 1B区(2)・1F区土層図

層 位

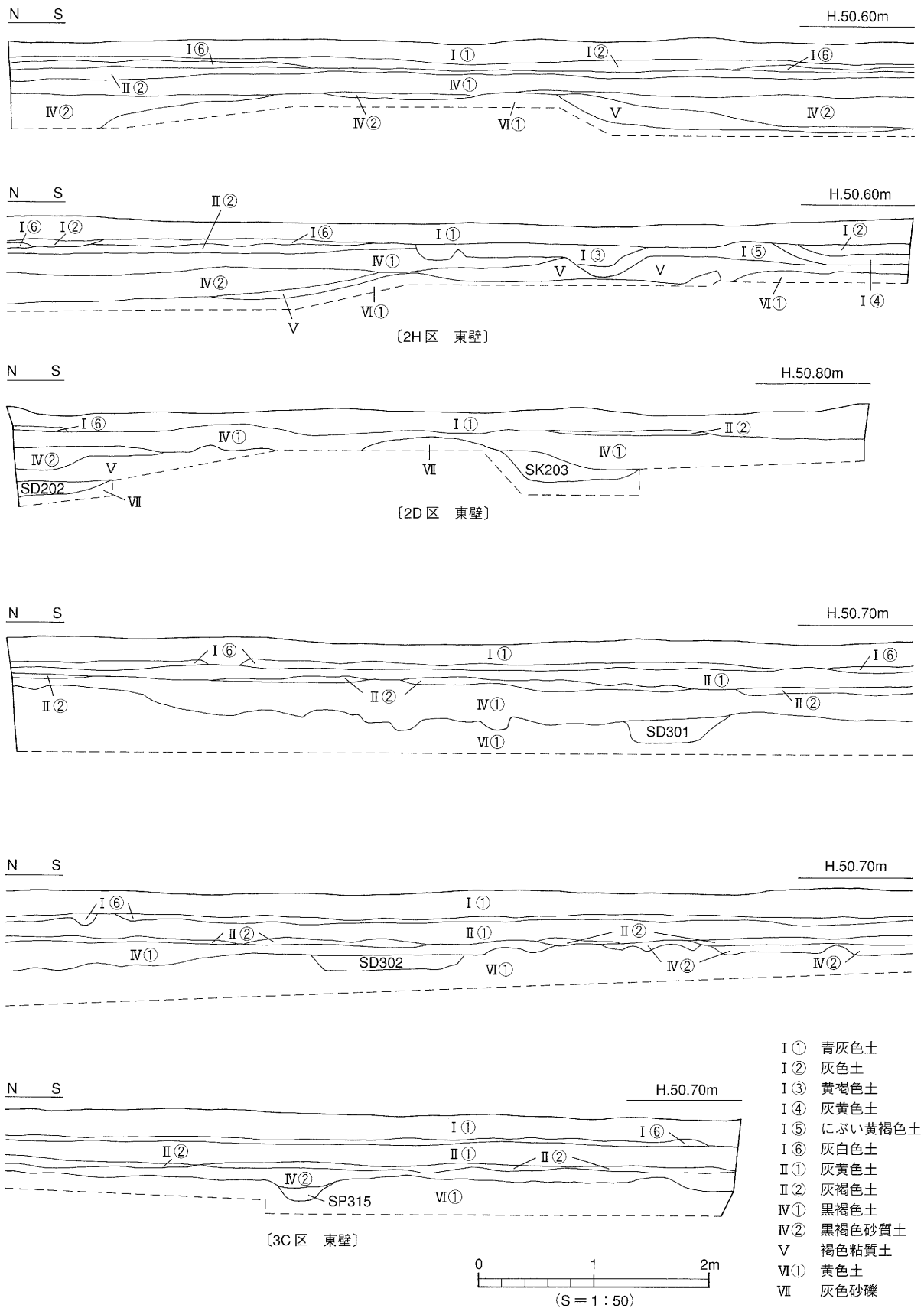


- I ① 青灰色土
- I ② 灰色土
- I ⑥ 灰白色土
- II ① 灰黄色土
- II ② 灰褐色土
- II ③ 灰白色土
- VII 灰色砂礫



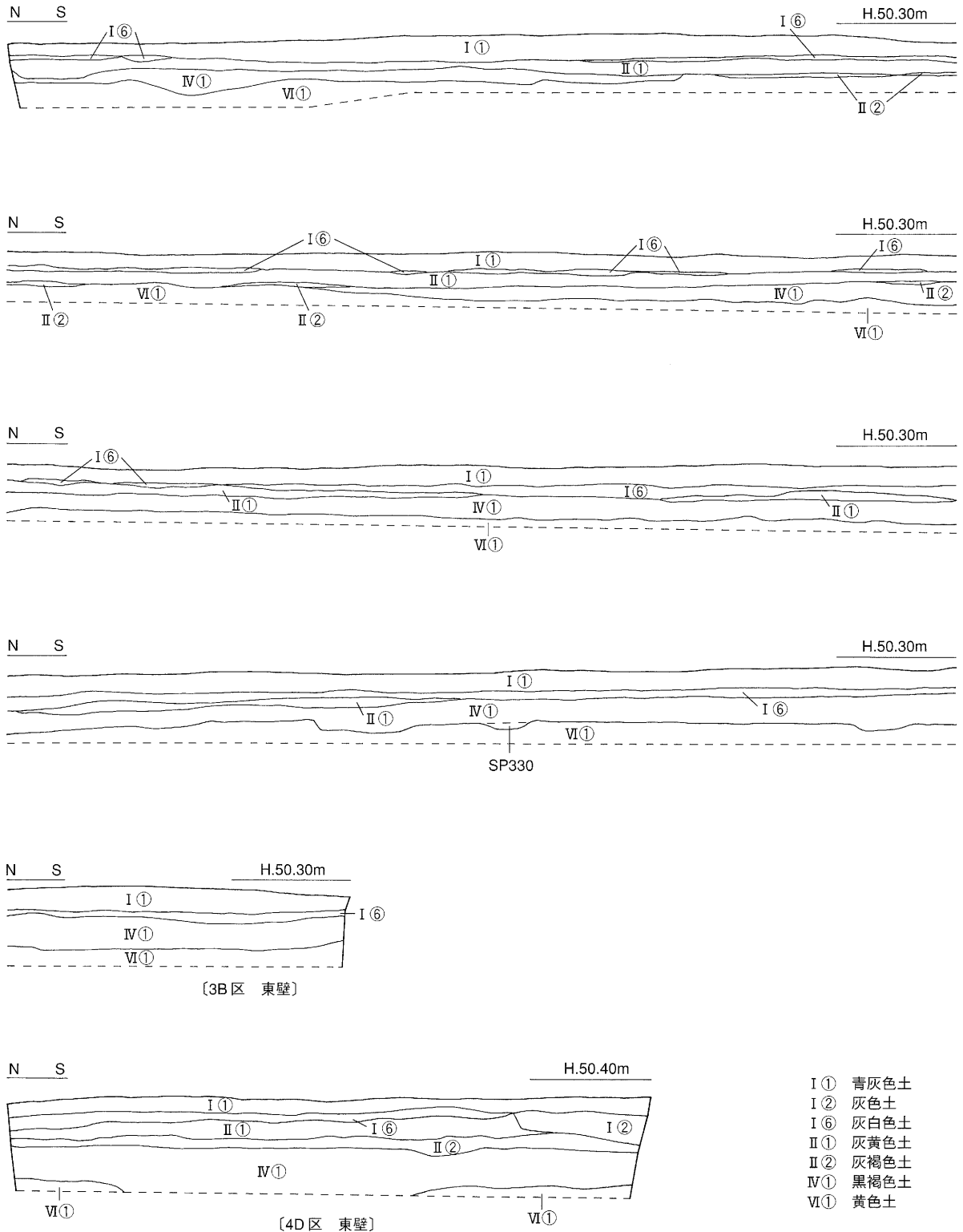
第71図 2A区・2B区・2C区土層図

高井遺跡 1次調査



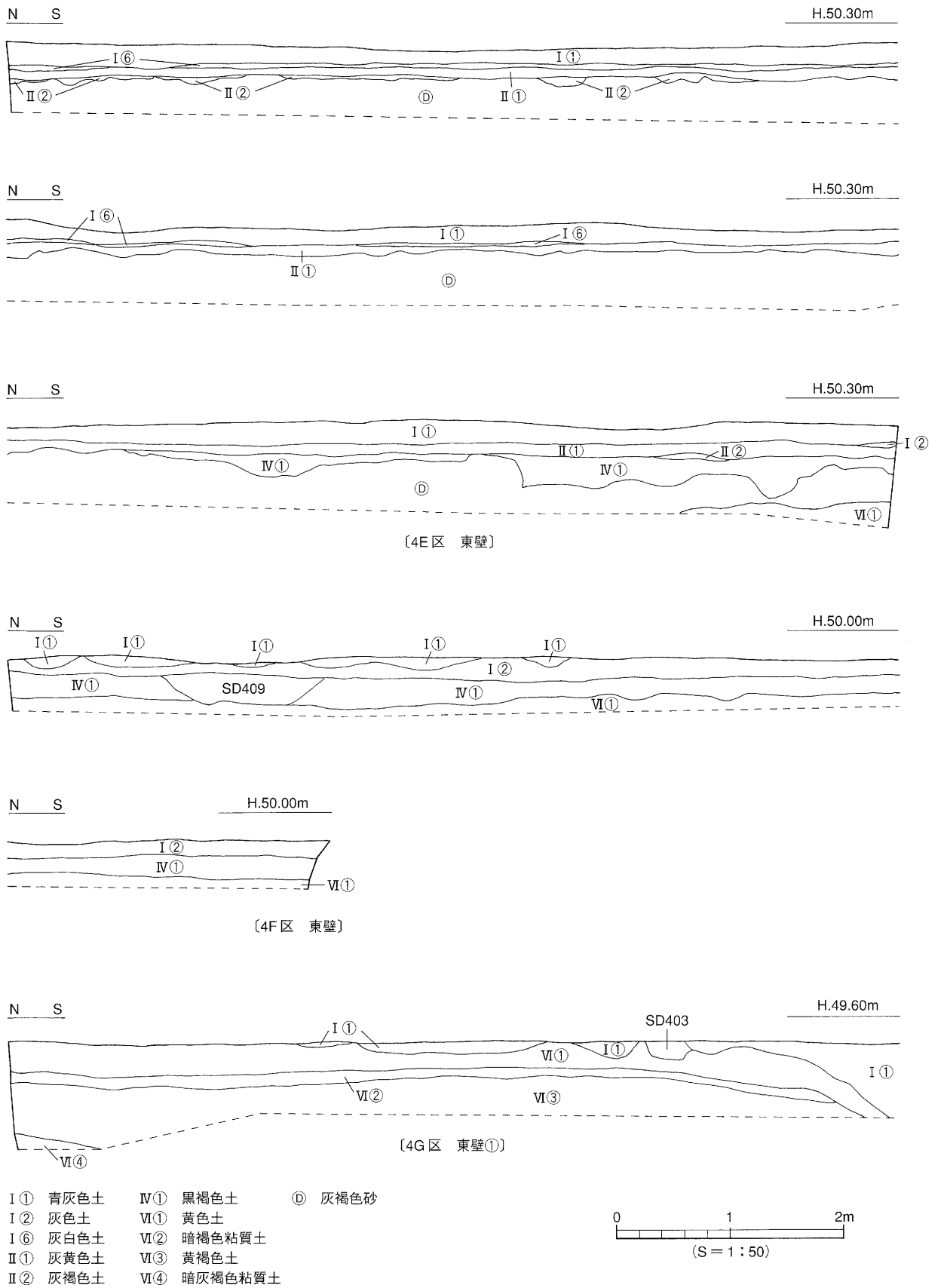
第72図 2H区・2D区・3C区土層図

層 位



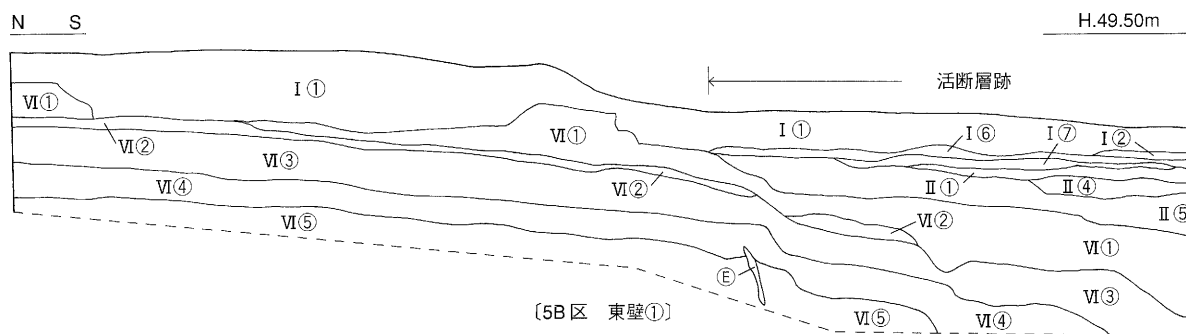
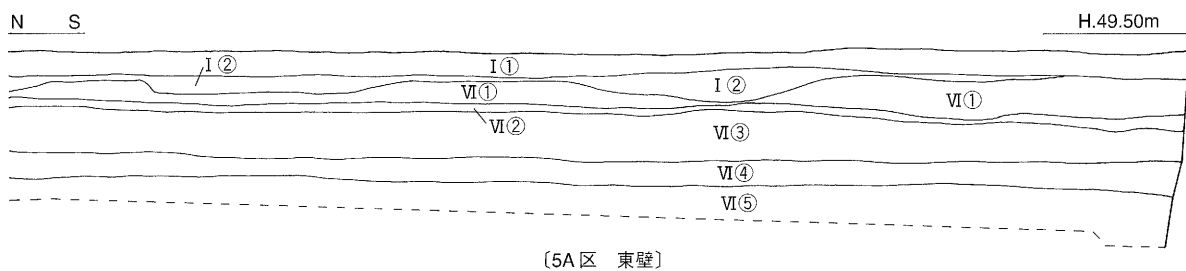
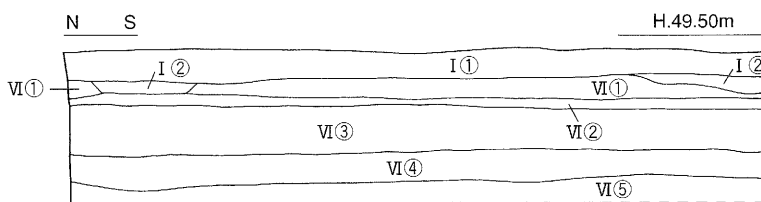
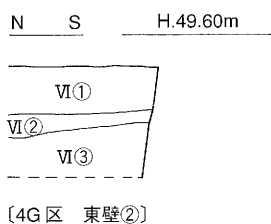
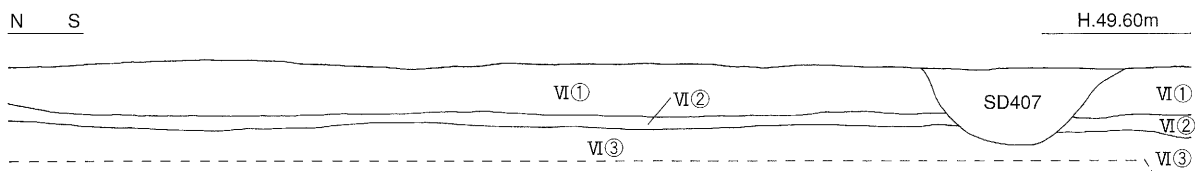
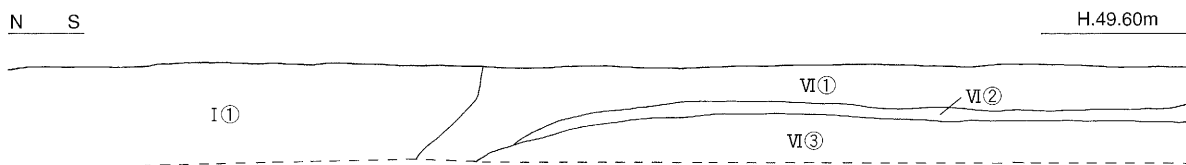
第73图 3B区·4D区土层图

高井遺跡 1次調査

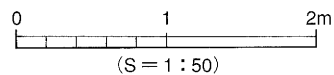


第74図 4E区・4F区・4G区(1)土層図

層 位

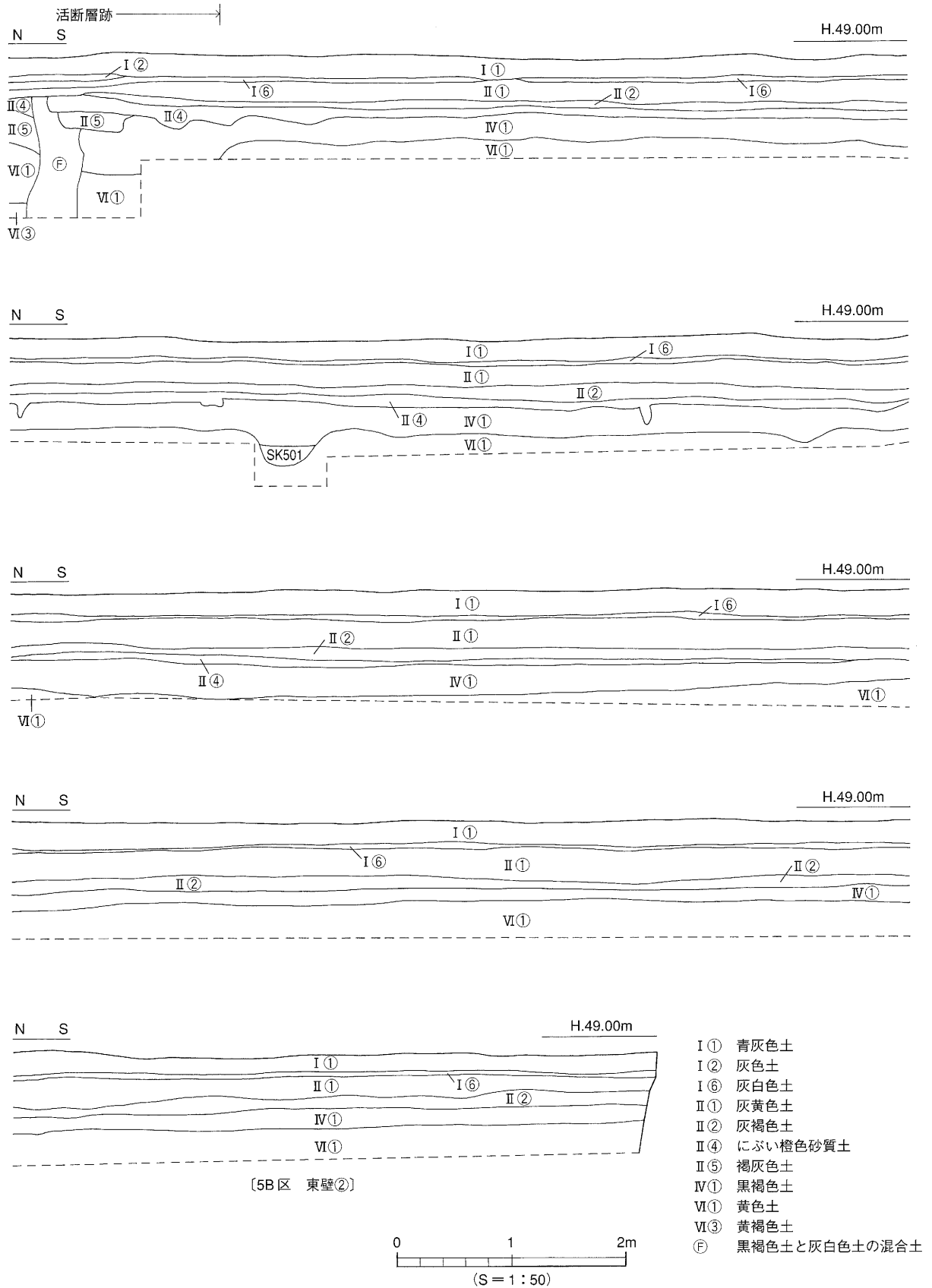


- |             |               |              |
|-------------|---------------|--------------|
| I ① 青灰色土    | II ④ にぶい橙色砂質土 | VI ④ 暗灰褐色粘質土 |
| I ② 灰色土     | II ⑤ 褐灰色土     | VI ⑤ 黄褐色粘質土  |
| I ⑥ 灰白色土    | VI ① 黄色土      | E 灰色砂        |
| I ⑦ にぶい黄橙色土 | VI ② 暗褐色粘質土   |              |
| II ① 灰黄色土   | VI ③ 黄褐色土     |              |



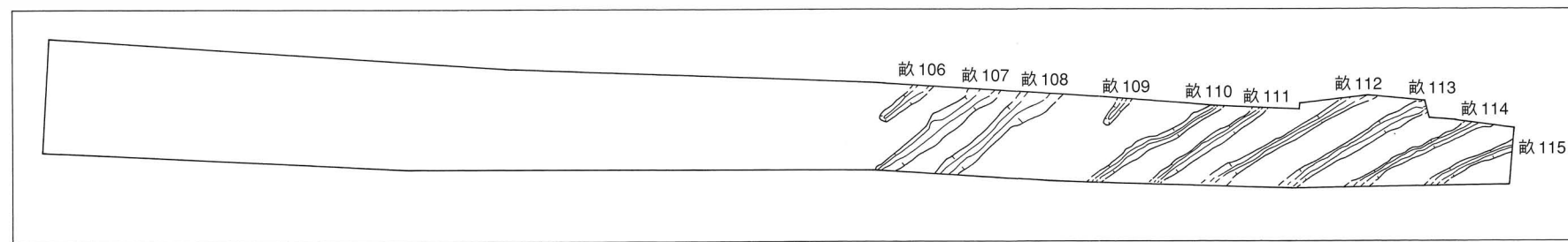
第75図 4G区(2)・5A区・5B区(1)土層図

高井遺跡1次調査

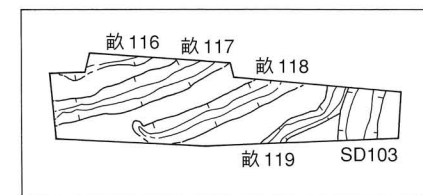


第76図 5B区(2)土層図



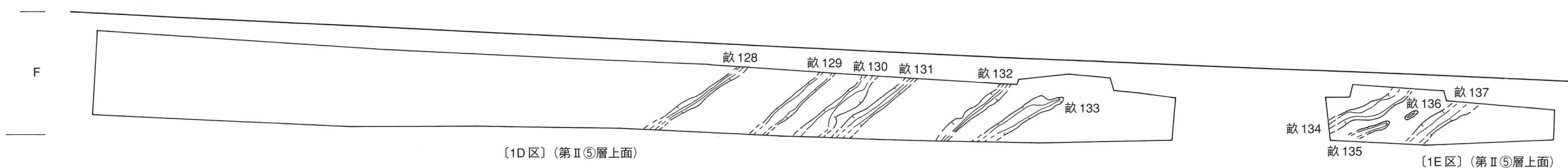


[1D区] (第II④層上面)



[1E区] (第II④層上面)

X = 88770      X = 88760      X = 88750      X = 88740      X = 88730      X = 88720      X = 88710



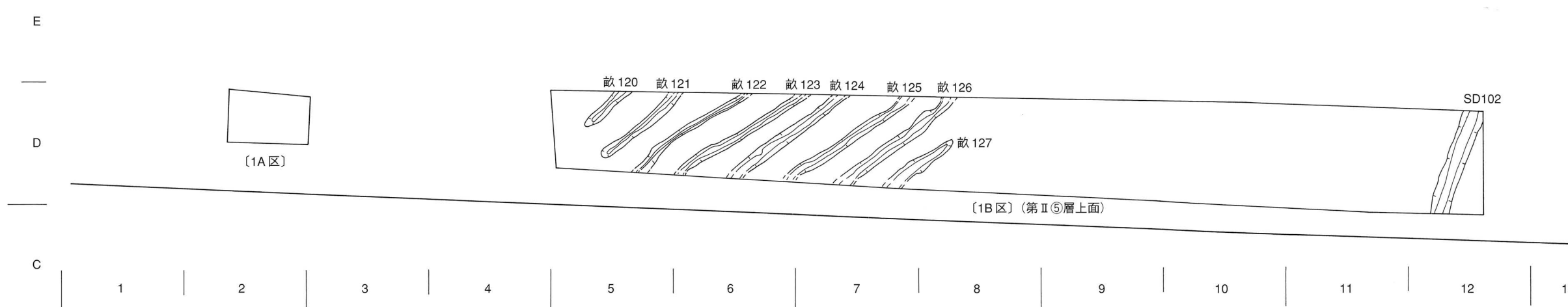
[1D区] (第II⑤層上面)



[1E区] (第II⑤層上面)

Y = -62810

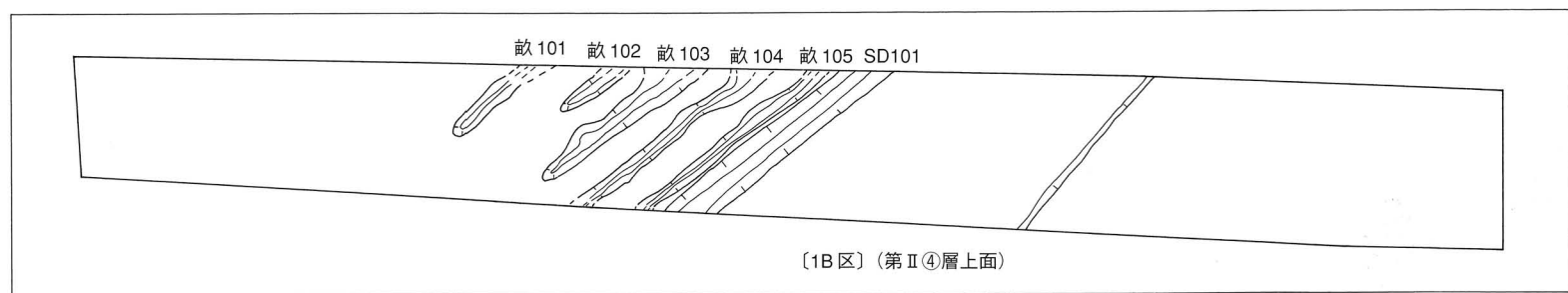
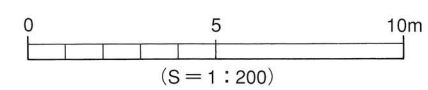
Y = -62820



[1A区]

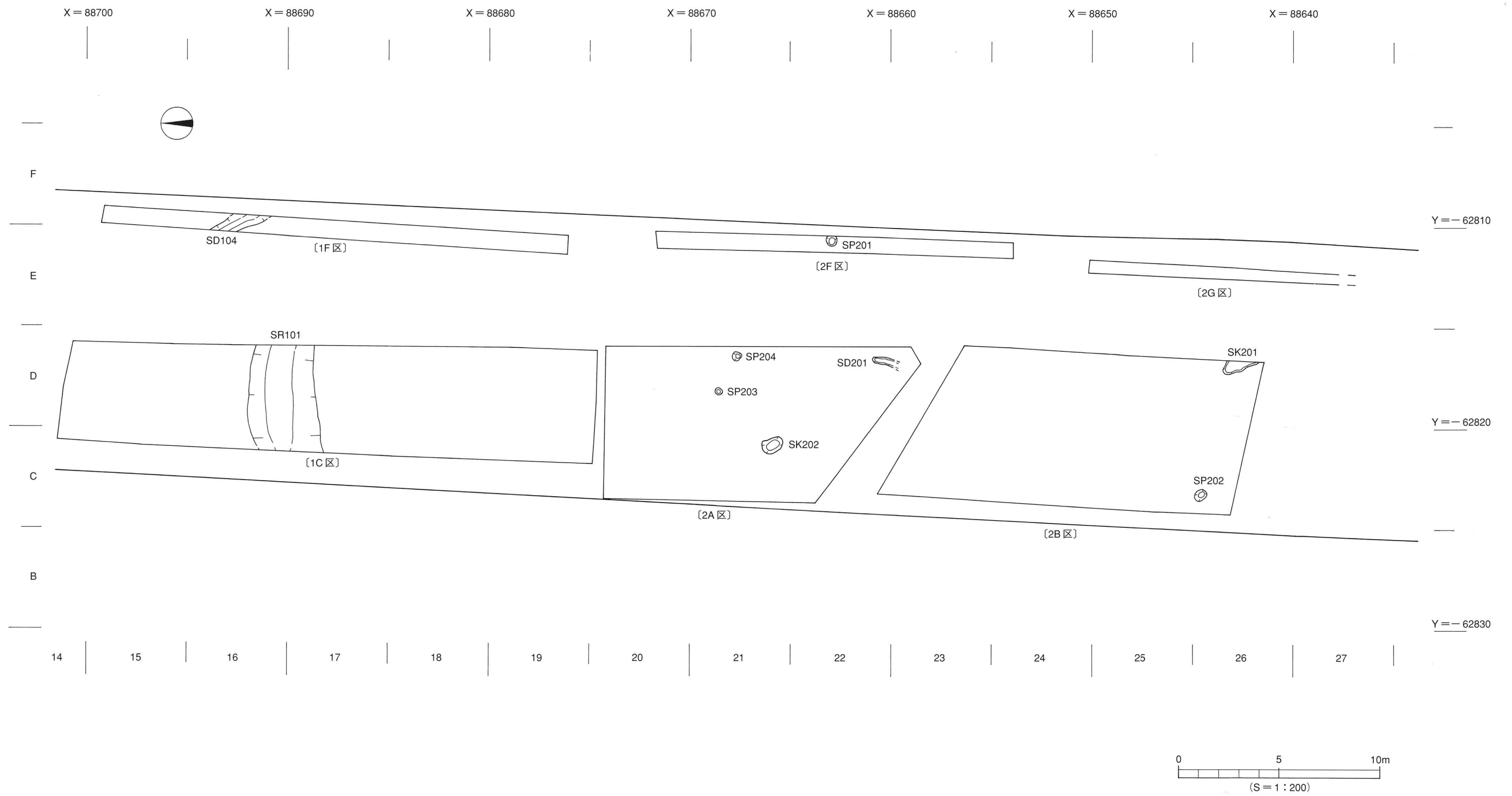
[1B区] (第II⑤層上面)

1      2      3      4      5      6      7      8      9      10      11      12      13

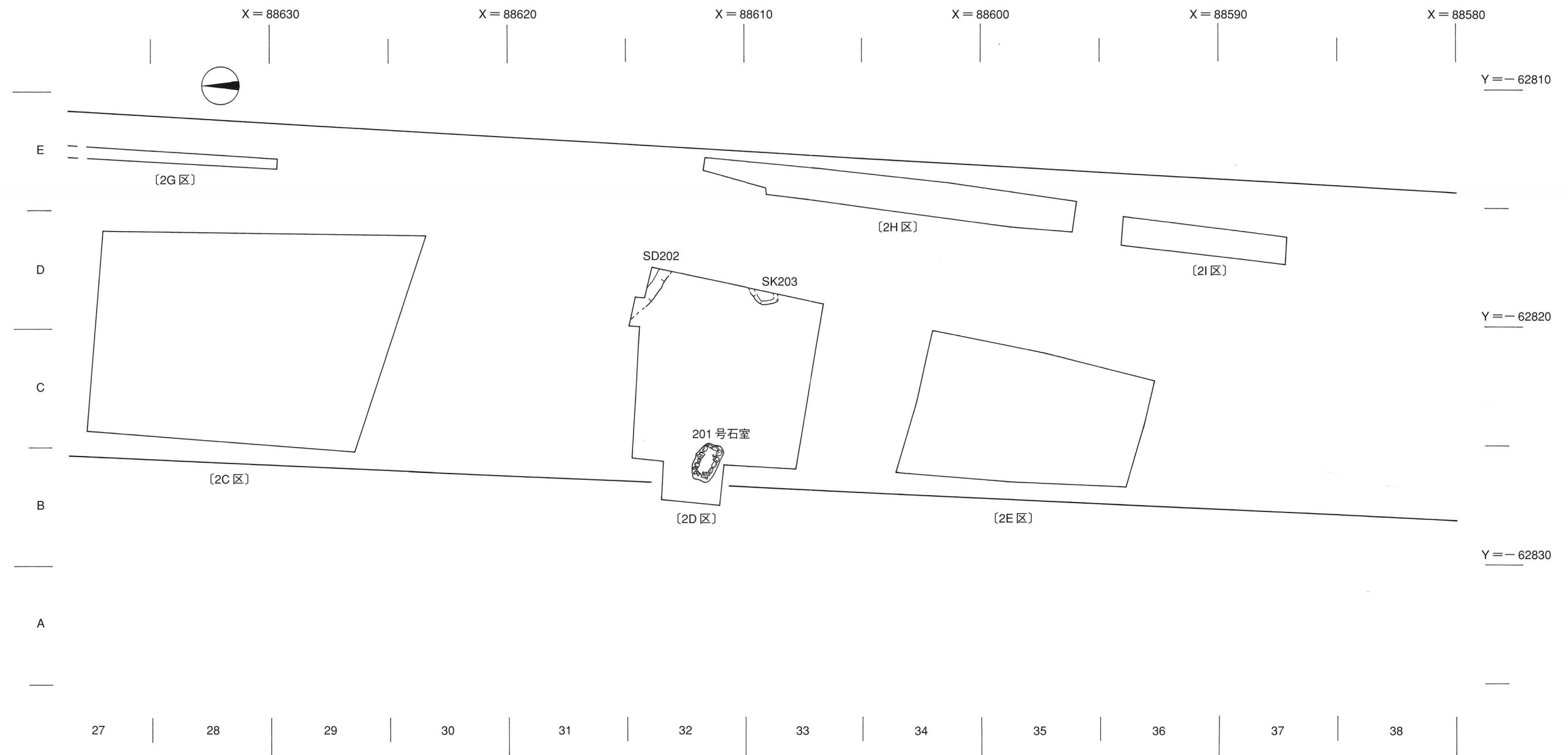


[1B区] (第II④層上面)

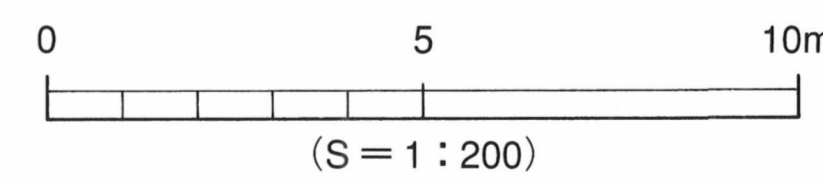
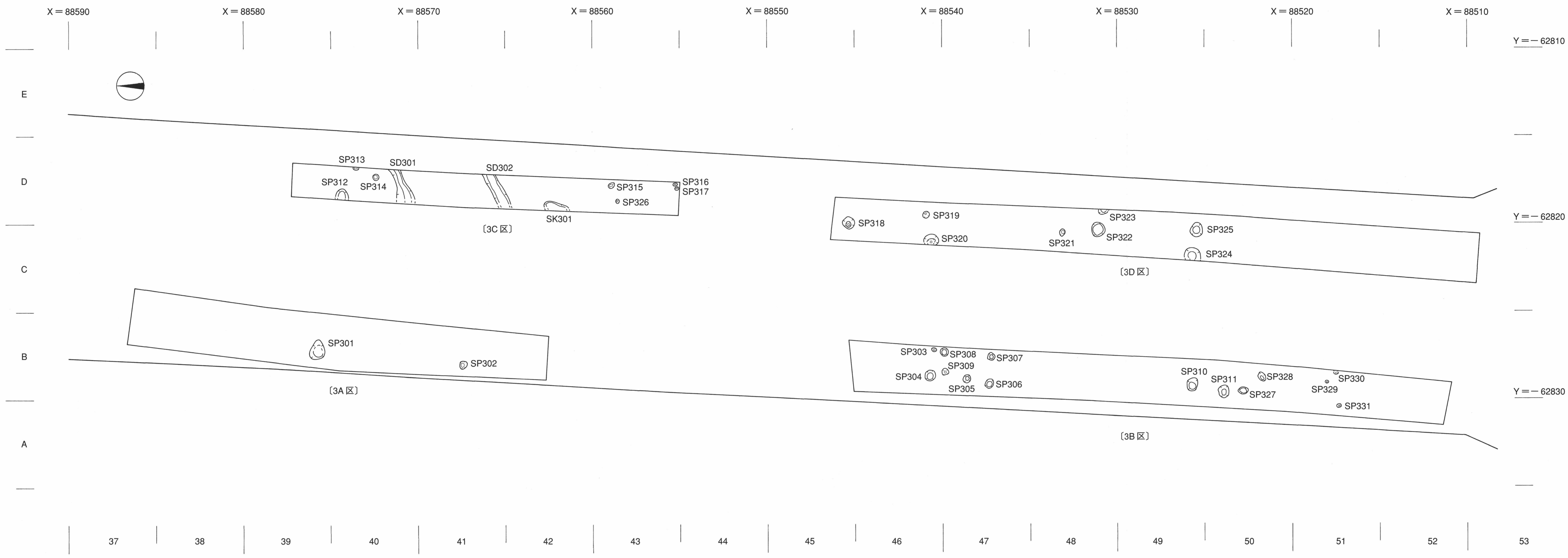
第77図 1A・1B・1D・1E区 遺構配置図



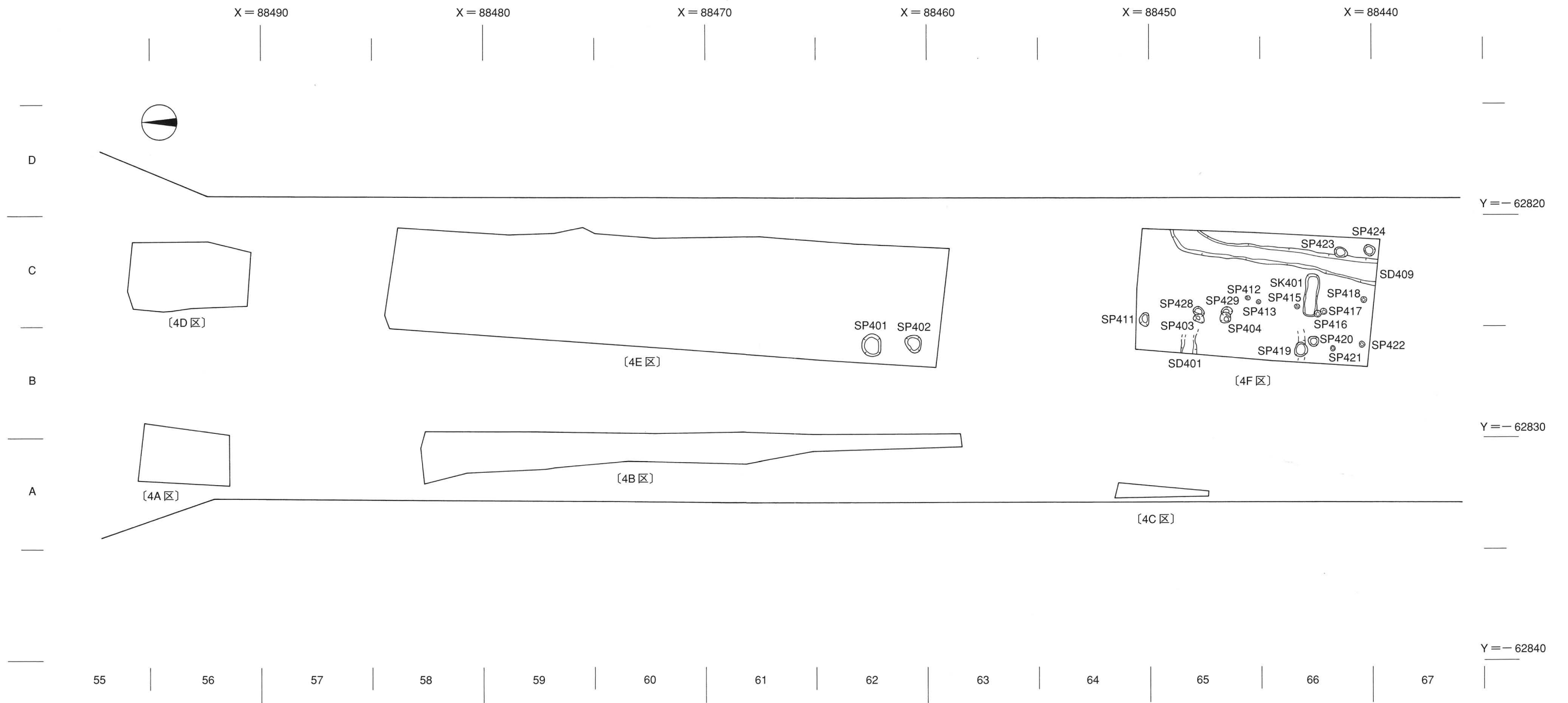
第78図 1C・1F・2A・2B・2F・2G区 遺構配置図



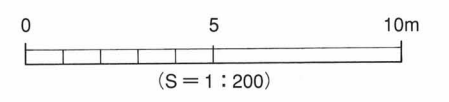
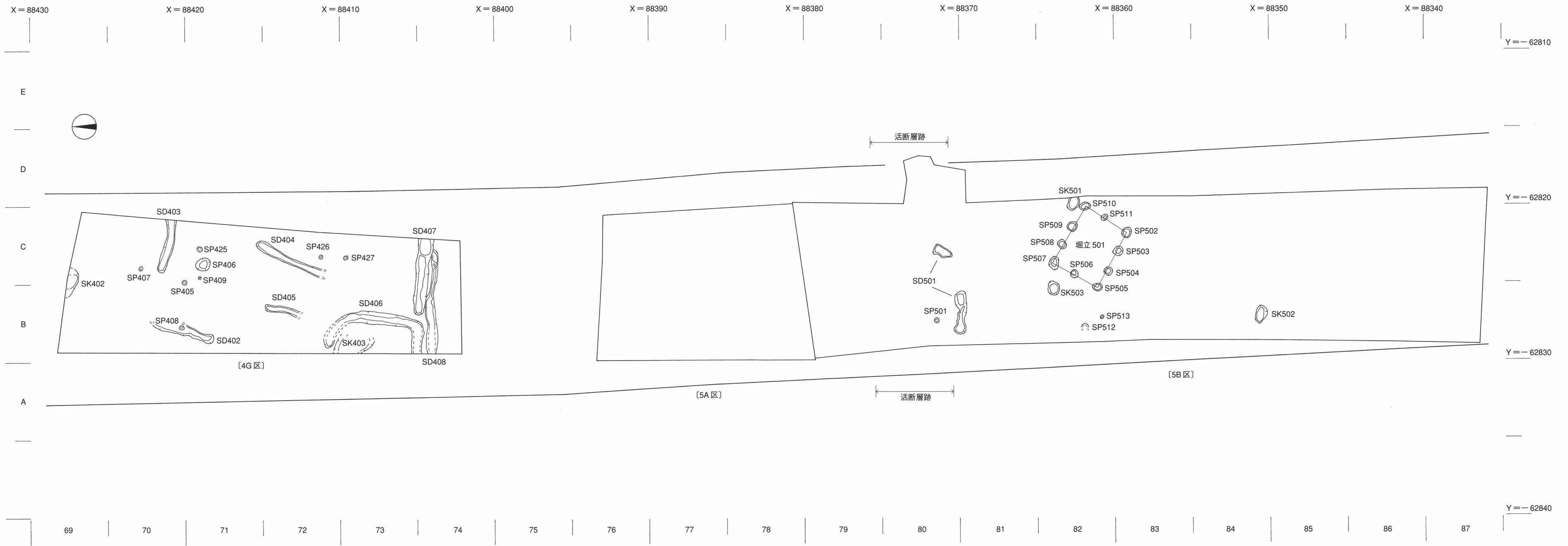
第79图 2C·2D·2E·2G·2H·2I区 遺構配置图



第80図 3A・3B・3C・3D区 遺構配置図



第81図 4A・4B・4C・4D・4E・4F区 遺構配置図



第82図 4G・5A・5B区 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 古墳時代の遺構と遺物

##### 1) 石室

201号石室（第79・83・84図、図版25）

2 D区中央西寄りB32区で検出した竪穴式石室である。第Ⅳ①層掘り下げ時に検出したもので、天井石や盛土等は未検出である。石室の構築方法は、第Ⅳ①層を楕円形状に掘りくぼめ墓坑を構築し、さらに掘り方壁体から内側へ20～25cmの幅の溝を巡らせる。その後、溝に沿って基底石を配置し裏込めをおこないながら石材を積み重ねている。調査では2段ないし3段の石が残っていた。墓坑掘り方の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.65m、短径1.02mを測る。掘り方の深さは定かではないが、前述の溝は検出面下7～10cmを測り、溝底面は第Ⅶ層灰色砂礫層に及んでいる。石室内部は長さ1.08m、幅0.45mを測る、調査時は石室床面に径3～5cm大の円礫を検出したことから敷石と考えられたが、その後の整理作業により、実際にはそれらの円礫は第Ⅶ層であることが判明した。よって、本来、敷石等の施設は存在していなかったものと考えられる。石室に使用する石は径10～15cm大のものから、最大で径30cm大のものまでがあり、石材は花崗岩を使用している。遺物は石室南東隅にて須恵器壺が床面直上より出土した。

出土遺物（第84図、図版27）

80は須恵器短頸壺で、口縁部は欠損する。肩部の張りは強く、底部外面の回転ヘラケズリ調整を施す。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

時期：出土遺物の特徴より、201号石室は6世紀後半とする。

##### 2) 掘立柱建物址

掘立501（第82・85図、図版26）

5 B区ほぼ中央部B82～C83区で検出した2間×3間の建物址で、建物方位を北西－南東方向にとる。第Ⅵ①層上面で検出した。10基の柱穴で構成される東西棟で、桁行長4.12m、梁行長3.15mを測る。各柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径84cm、短径34cm、深さは検出面下20～45cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土単層である。柱痕はいずれの柱穴からも検出できなかった。遺物は柱穴掘り方埋土中より土師器片、須恵器片が数点出土したほか、S P 509より耳環が1点出土した。

出土遺物（第85図、図版27）

81はS P 509出土の耳環である。

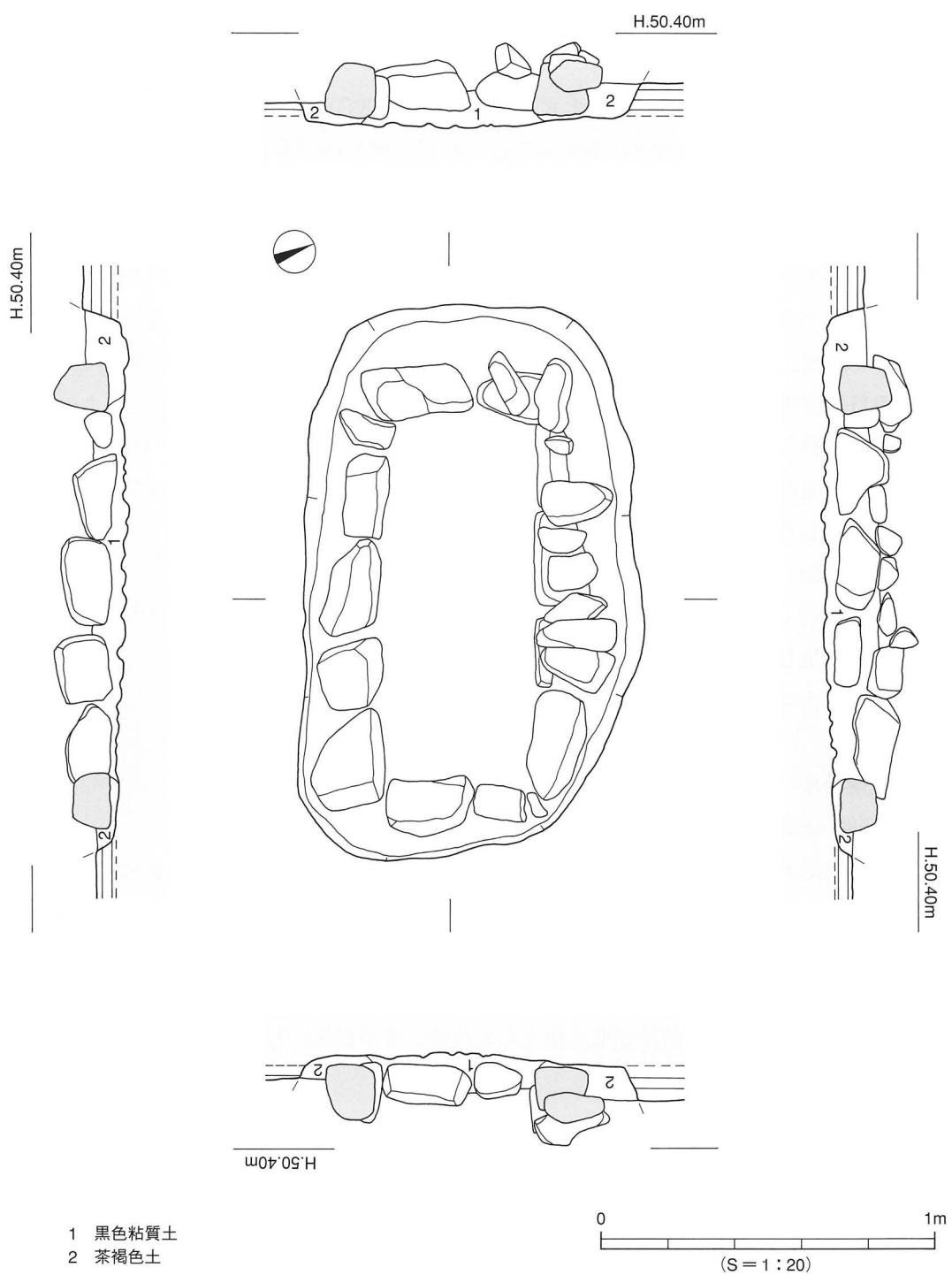
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、検出層位や遺構埋土などから、概ね古墳時代後期とする。

##### 3) 溝

S D 202（第79・86図）

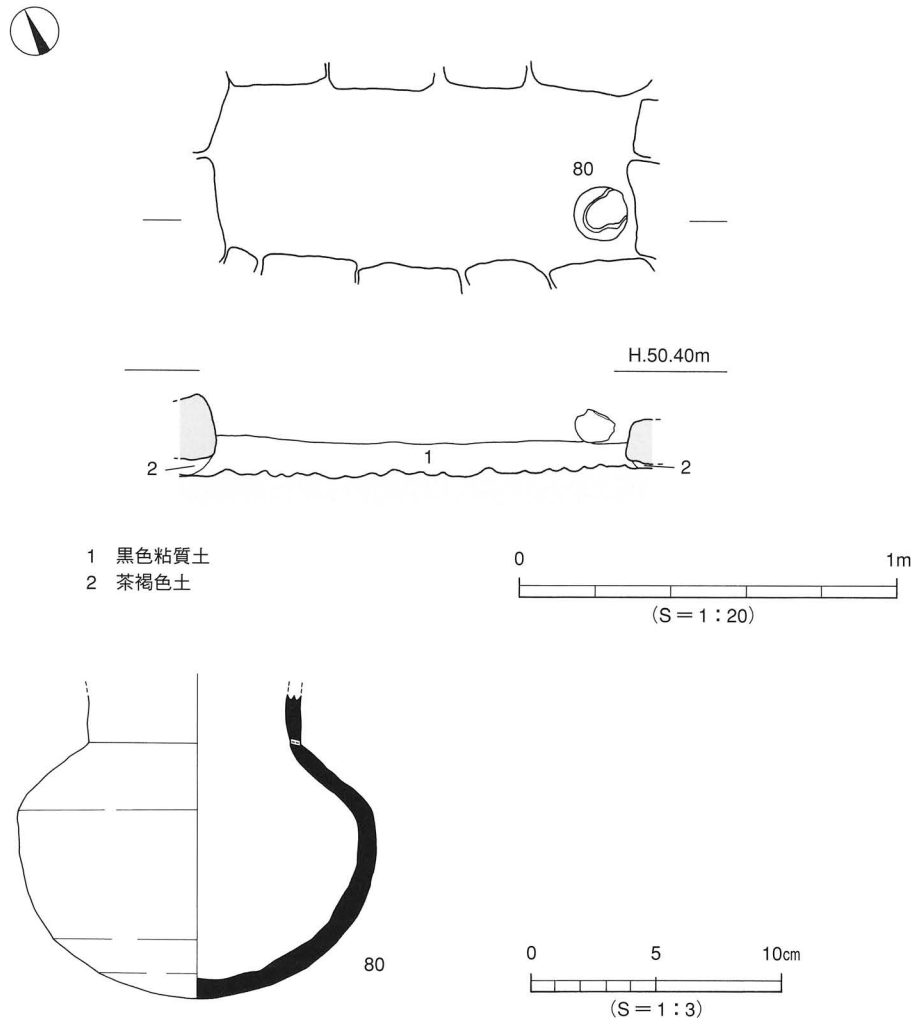
2 D区北東隅C31～D32区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面で検出した。東西検出長2.5m、南北検出長1.0m、深さ12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：出土遺物より、概ね古墳時代後期とする。



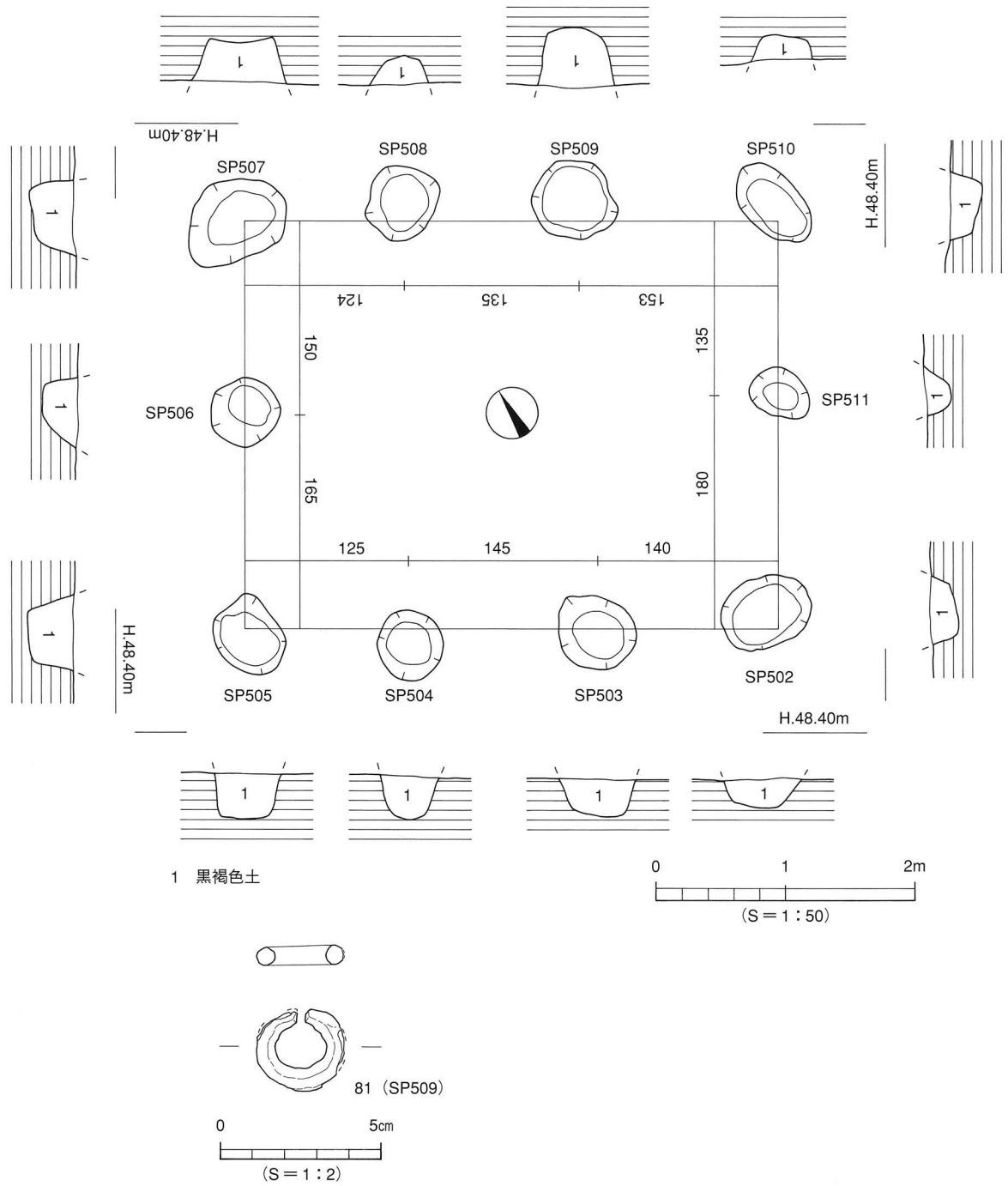
第83図 201号石室測量図(1)





第84図 201号石室測量図(2)・出土遺物実測図

高井遺跡 1次調査



第85図 掘立501測量図・出土遺物実測図

## S D301 (第80・86図)

3 C区中央部やや北寄りD40・41区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ①層が覆う。検出長2.1m、検出幅0.6～1.0m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位から概ね古墳時代後期とする。

## S D302 (第80・86図)

3 C区中央部D41・42区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ①層が覆う。検出長2.1m、検出幅0.6～0.7m、深さは検出面下22cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片と須恵器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね古墳時代後期とする。

## S D401 (第81・86図)

4 F区北西部B65区で検出した東西方向の溝で、溝西端は調査区外に続き、東端は消失している。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ①層が覆う。検出長0.6m、検出幅0.7m、深さは検出面下17cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物はないが、検出層位や埋土より概ね古墳時代後期とする。

## S D402 (第82・86図)

4 G区北西部B70・71区で検出した南北方向の溝で、溝北端は消失している。第Ⅵ①層上面で検出した。検出長4.2m、幅0.5～0.7m、深さは検出面下25cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面は北から南へ向けて緩傾斜をなす（比高差4cm）。溝底面にてピット（S P408）を検出した。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

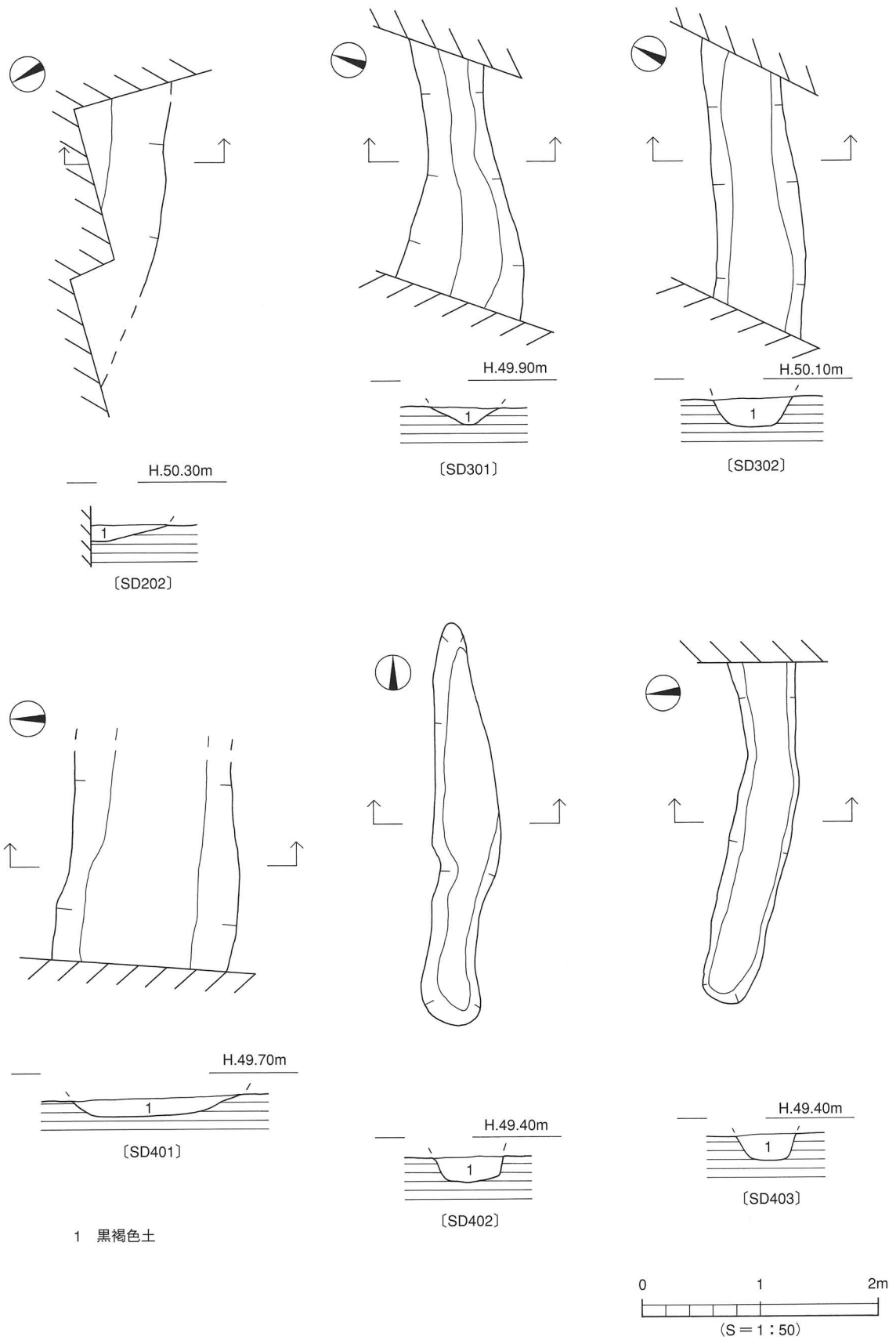
時期：出土遺物や埋土より、古墳時代後期とする。

## S D403 (第82・86図)

4 G区北東部C70区で検出した東西方向の溝で、溝東端は調査区外に続く。第Ⅵ①層上面で検出した。検出長3.4m、幅0.5～0.8m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面は東から西へ向けて緩傾斜をなす（比高差2cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定は困難であるが、検出層位や埋土より概ね古墳時代後期とする。

高井遺跡 1次調査



1 黒褐色土

第86図 S D 202・301・302・401~403測量図

## S D406 (第82・87図)

4 G区南西部B72~74区で検出した溝で、平面形態は「コ」の字状を呈する。第Ⅵ①層上面での検出であり、第Ⅳ①層が覆う。検出長8.7m、幅0.5~0.7m、深さは検出面下15~25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底面は北から南へ向けて緩傾斜をなし、比高差7cmを測る。溝内からは土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、埋土などから概ね古墳時代後期とする。

## S D407 (第82・87図)

4 G区南東部B74~C74区で検出した東西方向の溝で、溝東端は調査区外に続き、S D408を切る。第Ⅵ①層上面で検出した。検出長4.8m、幅0.7~0.9m、深さは検出面下25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝東側には、一部底面が盛り上がる箇所がある。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定は難しいが、検出層位や埋土より概ね古墳時代後期とする。

## S D408 (第82・88図)

4 G区南東部B74区で検出した東西方向の溝で、溝西側は調査区外に続き、溝東側はS D407に切られる。第Ⅵ①層上面で検出した。検出長6.6m、幅0.2~0.6m、深さ17cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝底は起伏にとみ、わずかに北から南へ向けて緩傾斜をなす(比高差2cm)。遺物は埋土中より須恵器片が数点出土した。

出土遺物 (第88図)

82は須恵器高坏で、筒状の柱部となる。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、検出層位や出土品から古墳時代後期とする。

## 4) 土坑

## S K202 (第78・89図)

2 A区中央やや西寄りC21区に位置し、第Ⅶ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より須恵器片のほか、鉄釘が出土した。

出土遺物 (第89図、図版27)

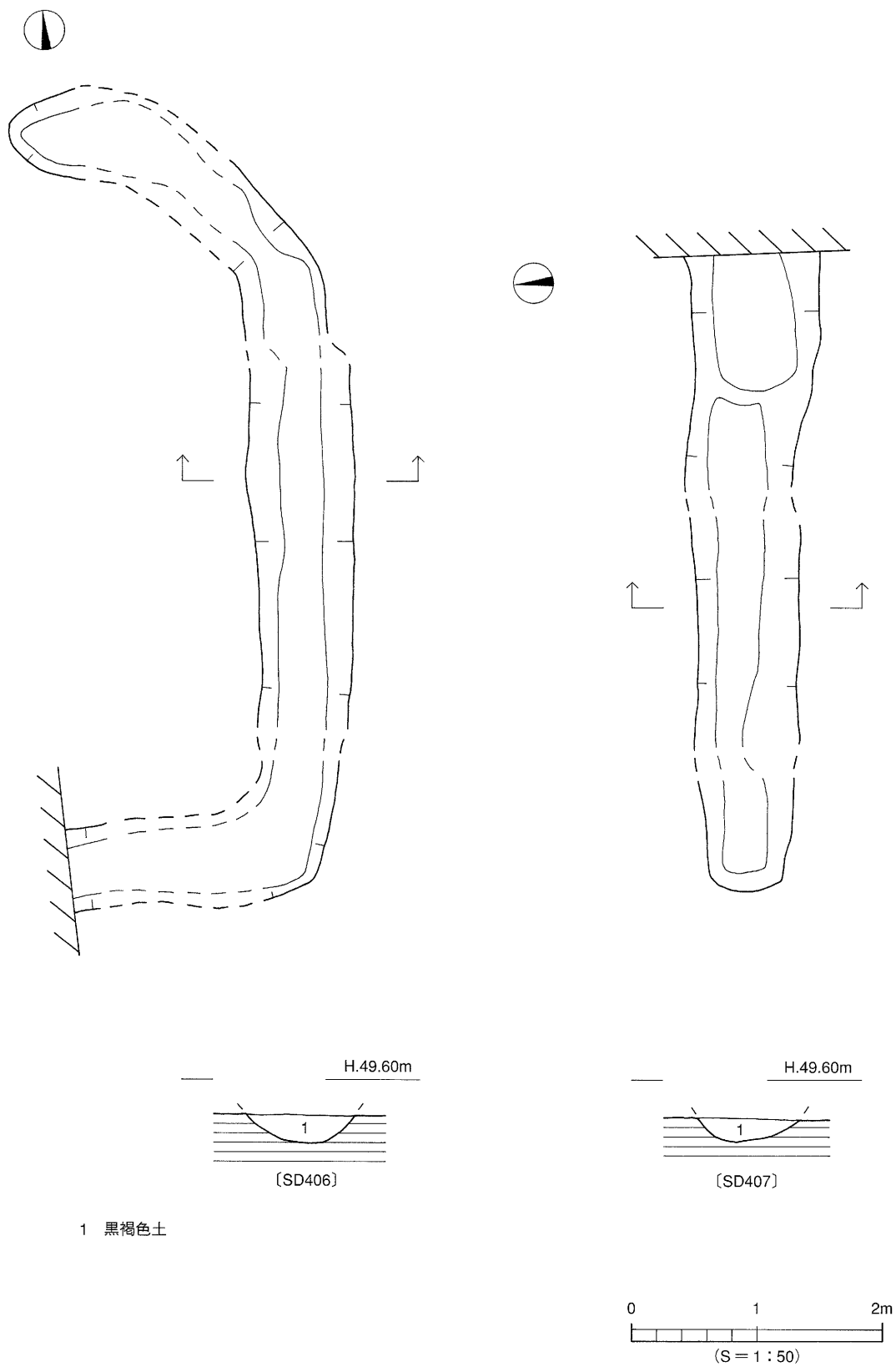
83は須恵器杯身で、たちあがり内傾し、受部推定径12.4cmを測る。84~87は鉄釘と思われ、厚さ3~5mmを測る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、検出層位や出土品から、古墳時代後期とする。

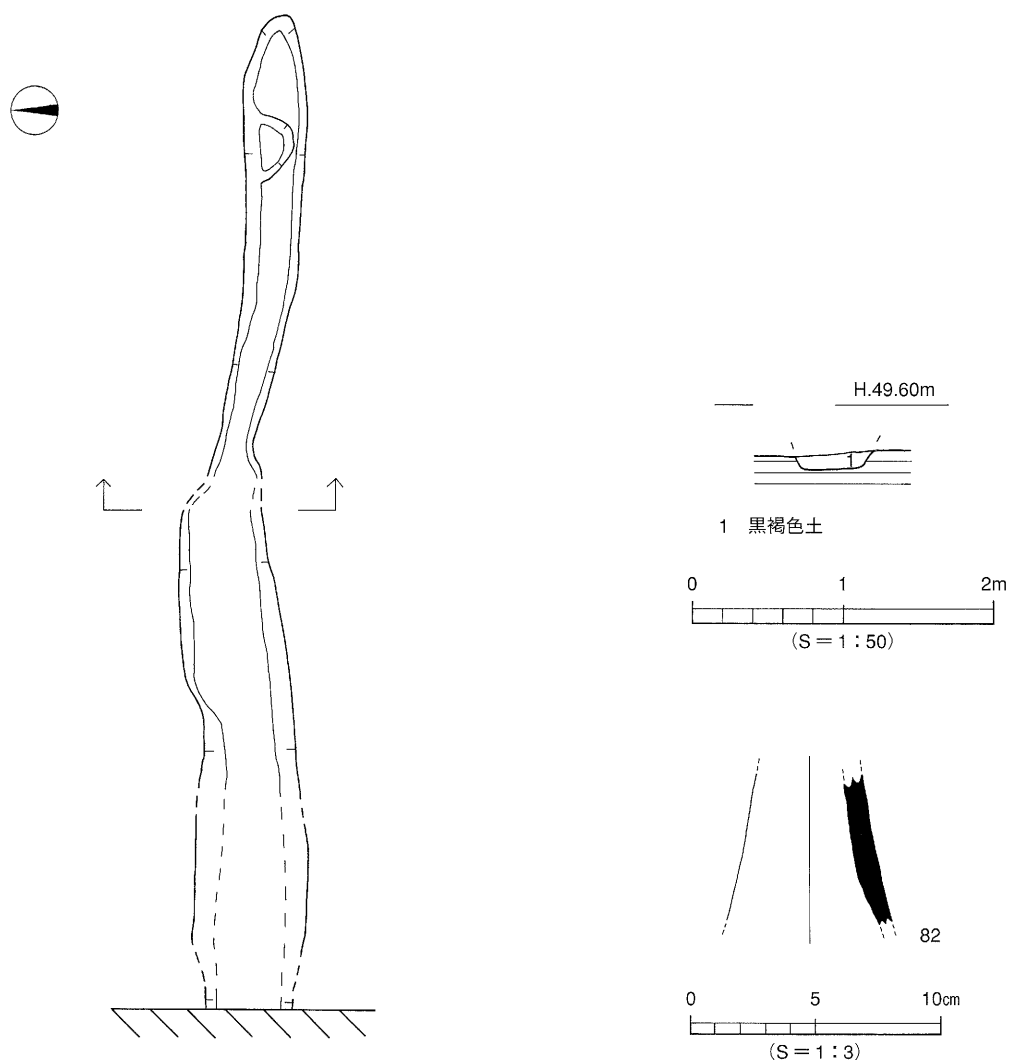
## S K203 (第79・92図)

2 D区南東部D33区に位置し、土坑東側が調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅳ①層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.9m、南北検出長0.7m、深さ22cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位などから概ね古墳時代後期とする。



第87図 S D 406・407測量図



第88図 S D 408測量図・出土遺物実測図

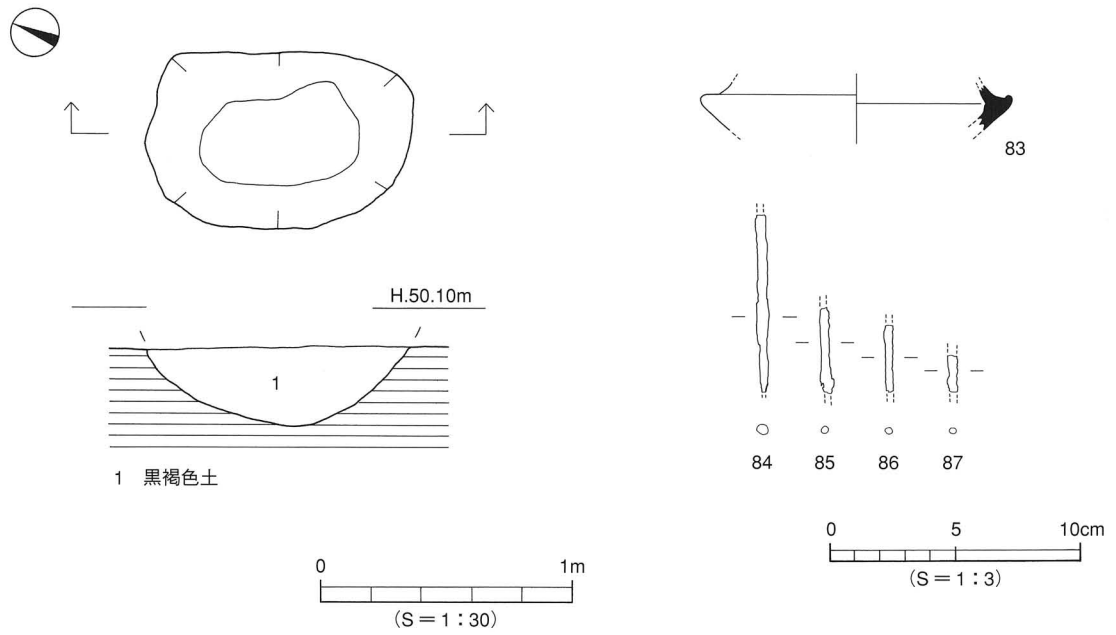
S K 403 (第82・90図)

4 G区南西部B 72・73区に位置し、土坑東側は消失し、西側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.5m、南北検出長2.1m、深さは検出面下33cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土中より土師器片のほか、石器が出土した。

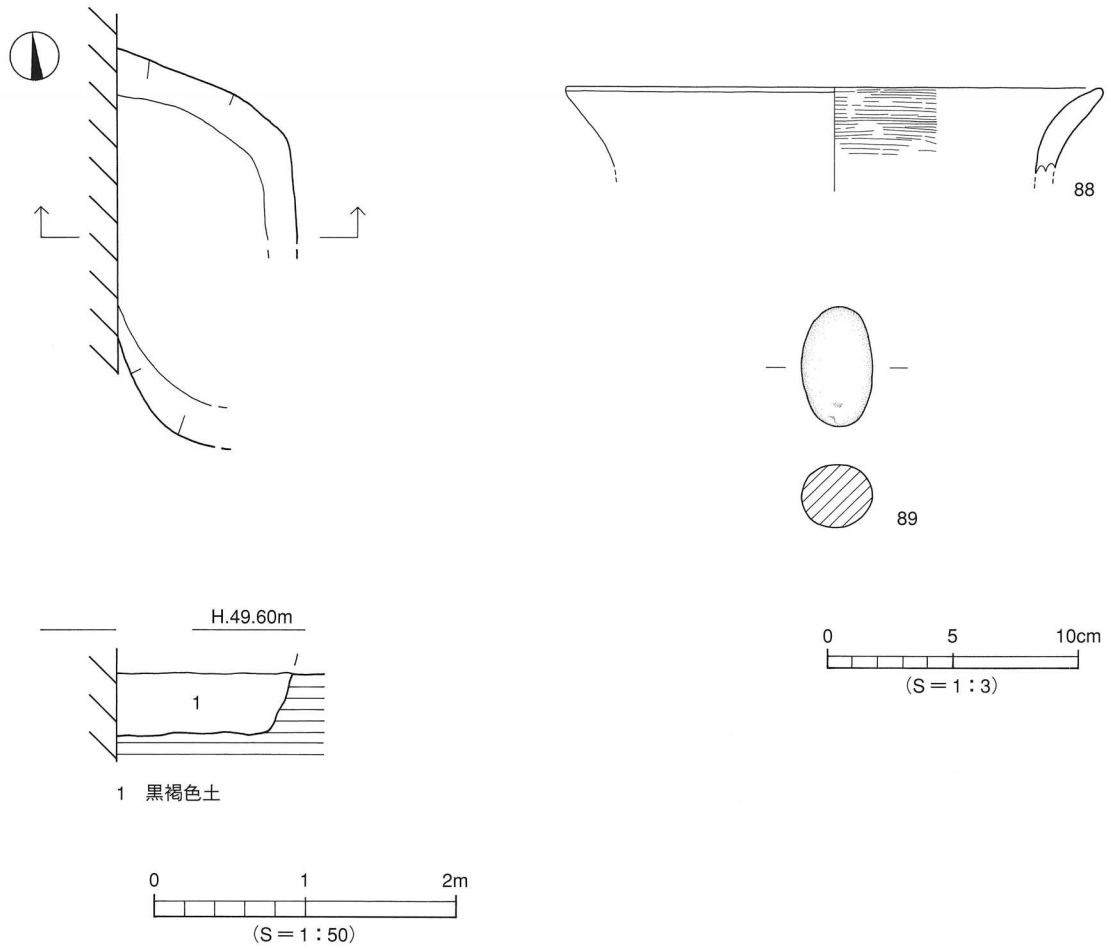
出土遺物 (第90図)

88は土師器甕の口縁部片で、口縁端部内面はわずかに凹む。89は器種不明の石製品で、重さ39.8gを測る。砂岩製。

時期：出土遺物の特徴や検出層位より、古墳時代後期とする。



第89図 S K 202測量図・出土遺物実測図



第90図 S K 403測量図・出土遺物実測図



S K 402 (第82・92図)

4 G区北壁中央部B・C69区に位置し、土坑北側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.0m、南北検出長0.7m、深さは検出面下21cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑内から遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土から概ね古墳時代後期とする。

S K 501 (第82・91図、図版27)

5 B区東壁中央部C82区に位置し、土坑東側は調査区外に続く。第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.7m、南北検出長0.6m、深さは検出面下16cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。遺物は埋土より須恵器が出土した。

出土遺物 (第91図)

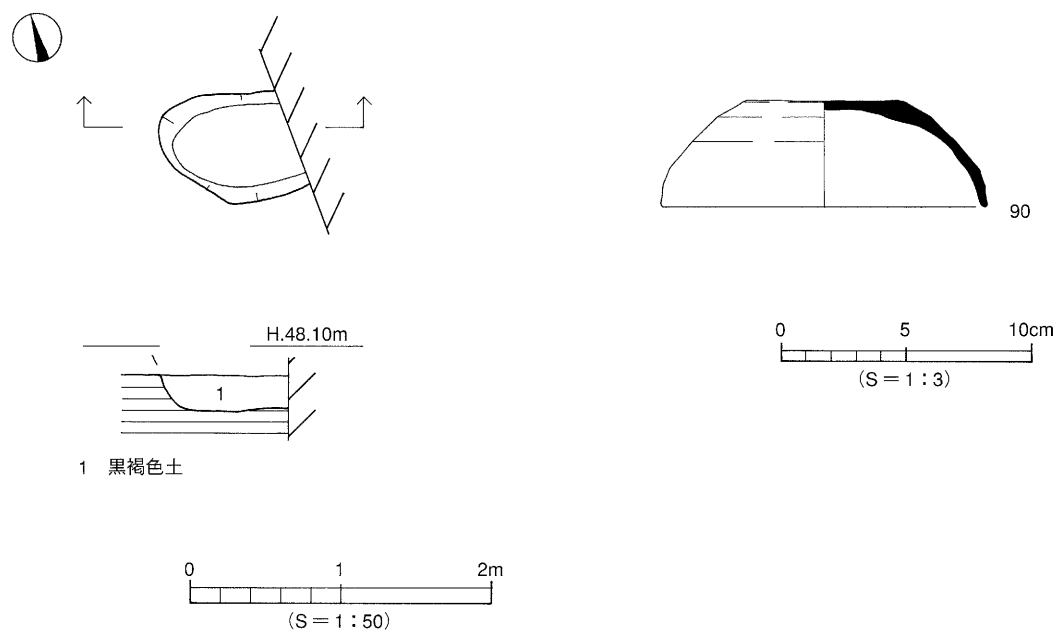
90は須恵器坏蓋である。扁平な天井部からなだらかに下がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、古墳時代後期後半とする。

S K 502 (第82・92図)

5 B区中央やや南西寄りB84区に位置し、第VI①層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.7m、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑内からは土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、概ね古墳時代後期とする。

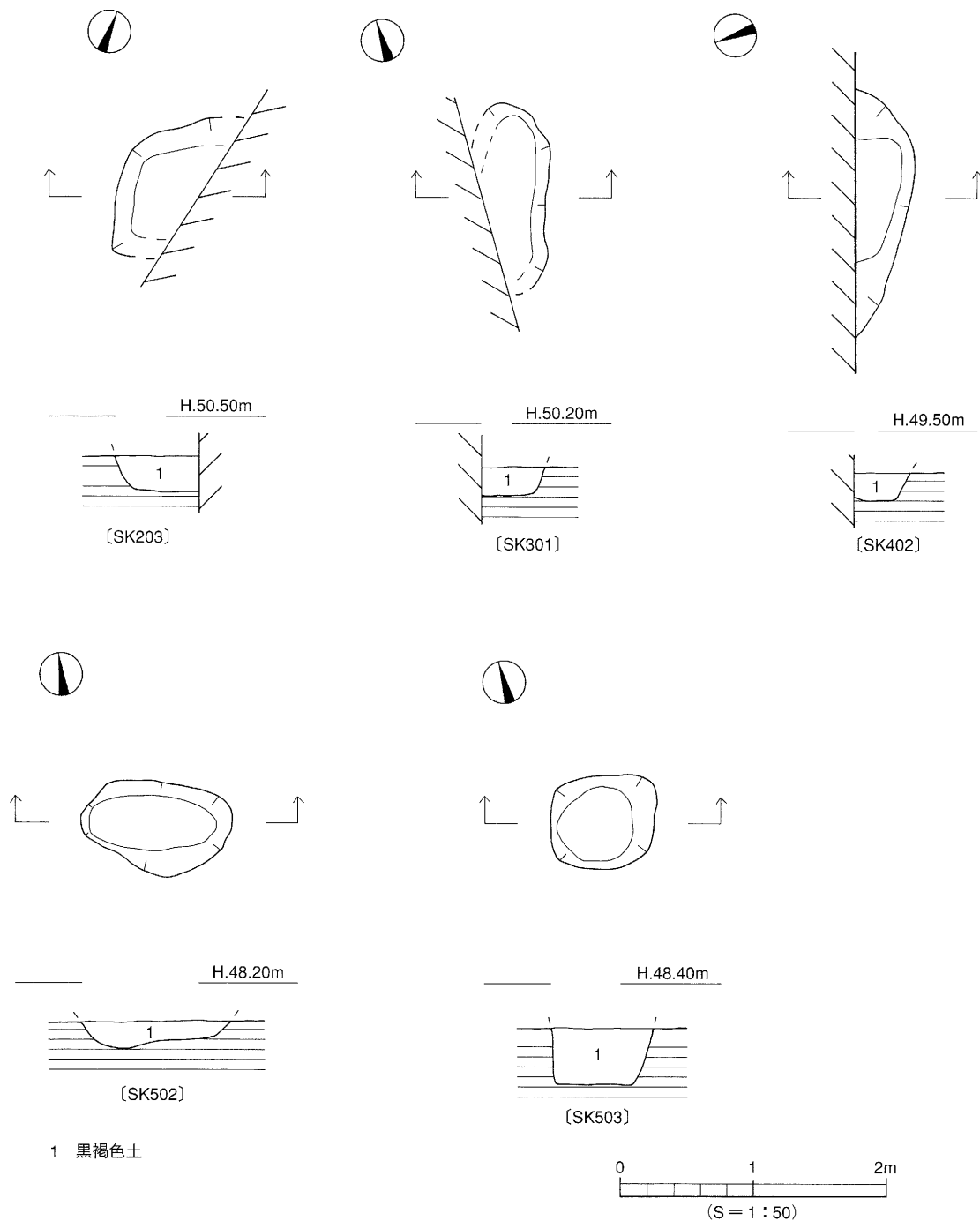


第91図 S K 501測量図・出土遺物実測図

S K 503 (第82・92図)

5 B区中央西寄りB82区に位置し、第VI①層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.7m、深さは検出面下42cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土より概ね古墳時代後期とする。



第92図 S K 203・301・402・502・503測量図

## (2) 中世の遺構と遺物

### 1) 溝

#### S D101 (第77・93図)

1 B区中央部D8・9区で検出した北西－南東方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅱ①層上面での検出であり、第Ⅰ層が覆う。検出長6.3m、幅0.9～1.1m、深さ30cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰褐色土に少量の砂が混入する。溝底はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね中世とする。

#### S D103 (第77・94図)

1 E区南端E12区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅱ①層上面での検出であり、第Ⅰ層が覆う。検出長1.6m、幅0.9～1.1m、深さ40cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は2層に分層される。溝底はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね中世とする。なお、S D101とS D103は溝の規模や方向、埋土などから同時期の遺構と考えられる。

#### S D102 (第77・93図)

1 B区南端D12区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅰ層が覆う。検出長4.7m、幅0.7～0.8m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底面はわずかに東から西へ緩傾斜をなす（比高差3cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね中世とする。

#### S D104 (第78・94図)

1 F区北寄りE・F16区で検出した北西－南東方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり第Ⅰ層が覆う。検出長3.0m、幅0.9～1.0m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね中世とする。

#### S D201 (第78・94図)

2 A区南東部D22区で検出した南北方向の溝で、溝南端は消失する。第Ⅶ層上面で検出した。検出長1.0m、幅0.3m、深さは検出面下7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底はほぼ平坦である。溝内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物はないが、概ね中世とする。

S D404 (第82・94図)

4 G 区中央東寄り C 71・72 区で検出した南北方向の溝で、溝南端は消失する。第 VI ①層上面で検出した。検出長 4.6m、幅 0.3~0.5m、深さは検出面下 22cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底面は北から南へ向けて緩傾斜をなす (比高差 5cm)。溝内からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物はないが、概ね中世とする。

S D405 (第82・94図)

4 G 区中央やや西寄り B 72 区で検出した南北方向の溝であり、第 VI ①層上面で検出した。検出長 2.3m、幅 0.3~0.4m、深さは検出面下 13cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定する遺物はないが、概ね中世とする。

S D409 (第81・95図)

4 F 区東側 C 65~67 区で検出した溝で、溝北側は折れ曲がり、溝北端及び南端は調査区外に続く。第 IV ①層上面での検出で第 I 層が覆う。検出長 9.6m、幅 0.5~1.1m、深さ 22cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面は北から南へ傾斜をなし、比高差 8cm を測る。溝内からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定する遺物はないが、埋土等から概ね中世とする。

S D501 (第82・95図)

5 B 区中央やや北寄り B 80 区で検出した東西方向の溝で、第 VI ①層上面で検出した。検出長 3.0m、幅 0.4~0.7m、深さ 10cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

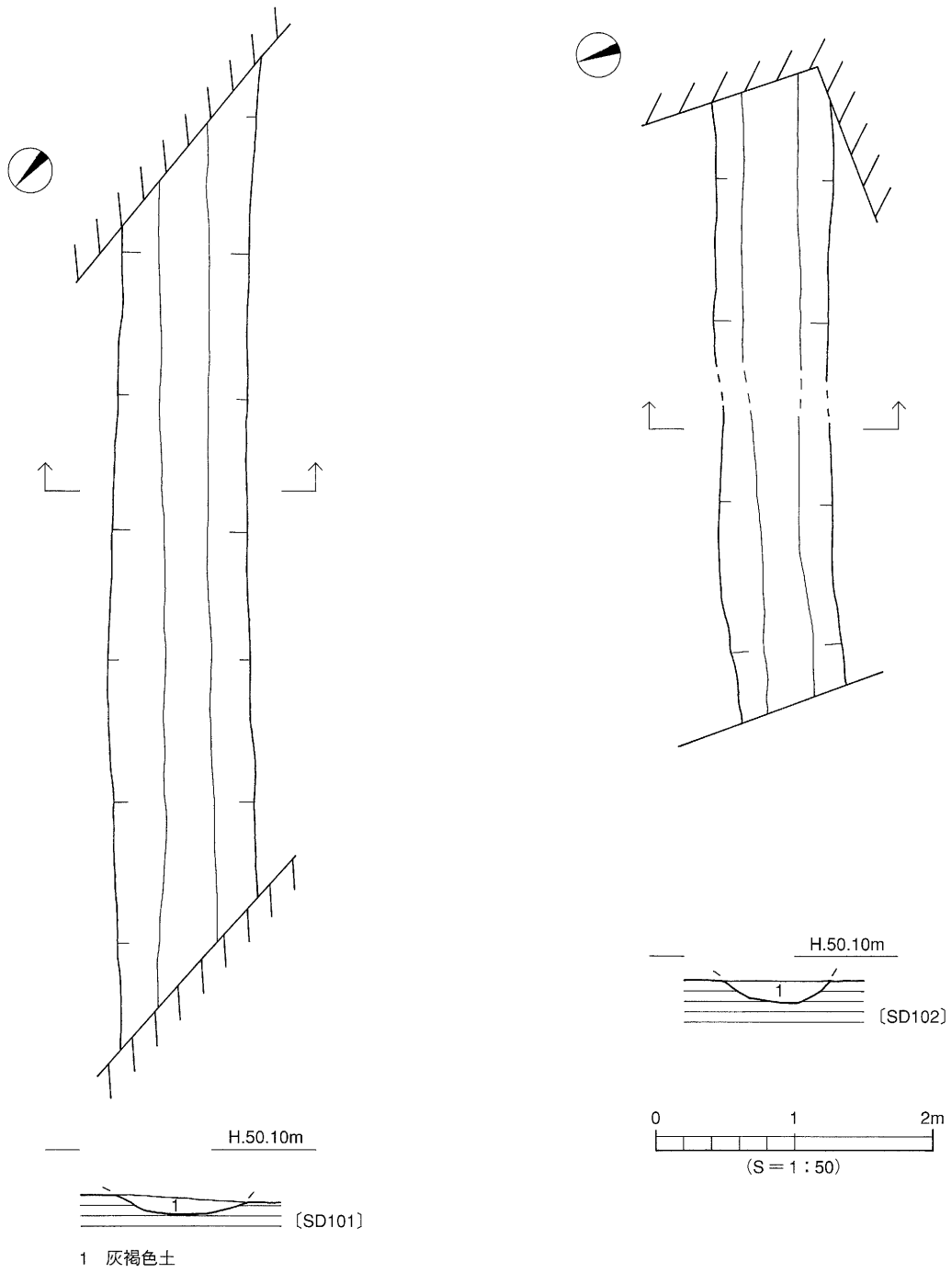
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土より概ね中世とする。

2) 自然流路

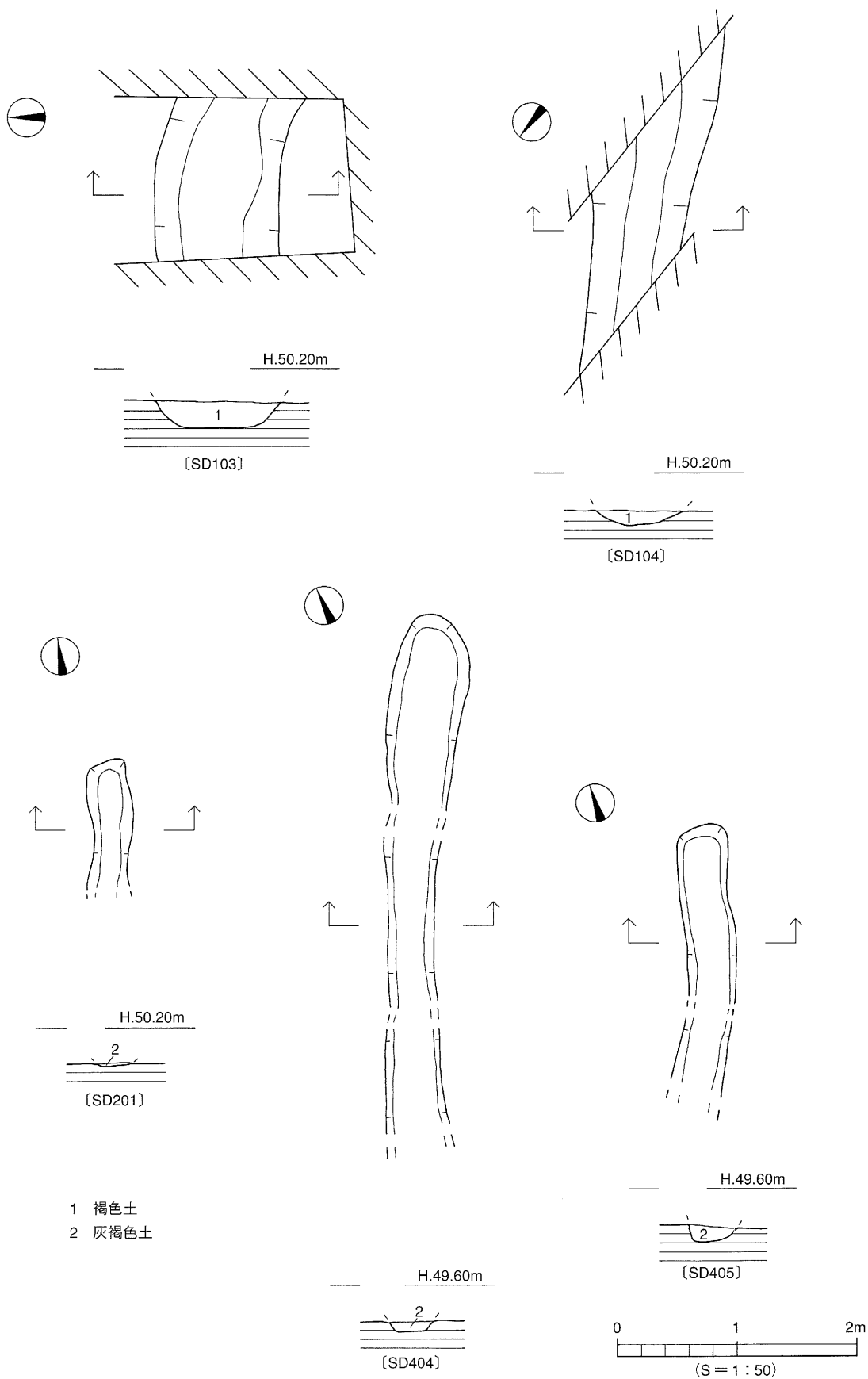
S R 101 (第78図)

1 C 区中央北寄り C 16~D 17 区で検出した東西方向の流路で、流路両端は調査区外に続く。第 VII 層上面で検出した。東西検出長 5.1m、幅 3.0~3.4m、深さ 82cm を測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は灰色砂に径 3~5cm 大の礫を含む。流路内からは土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

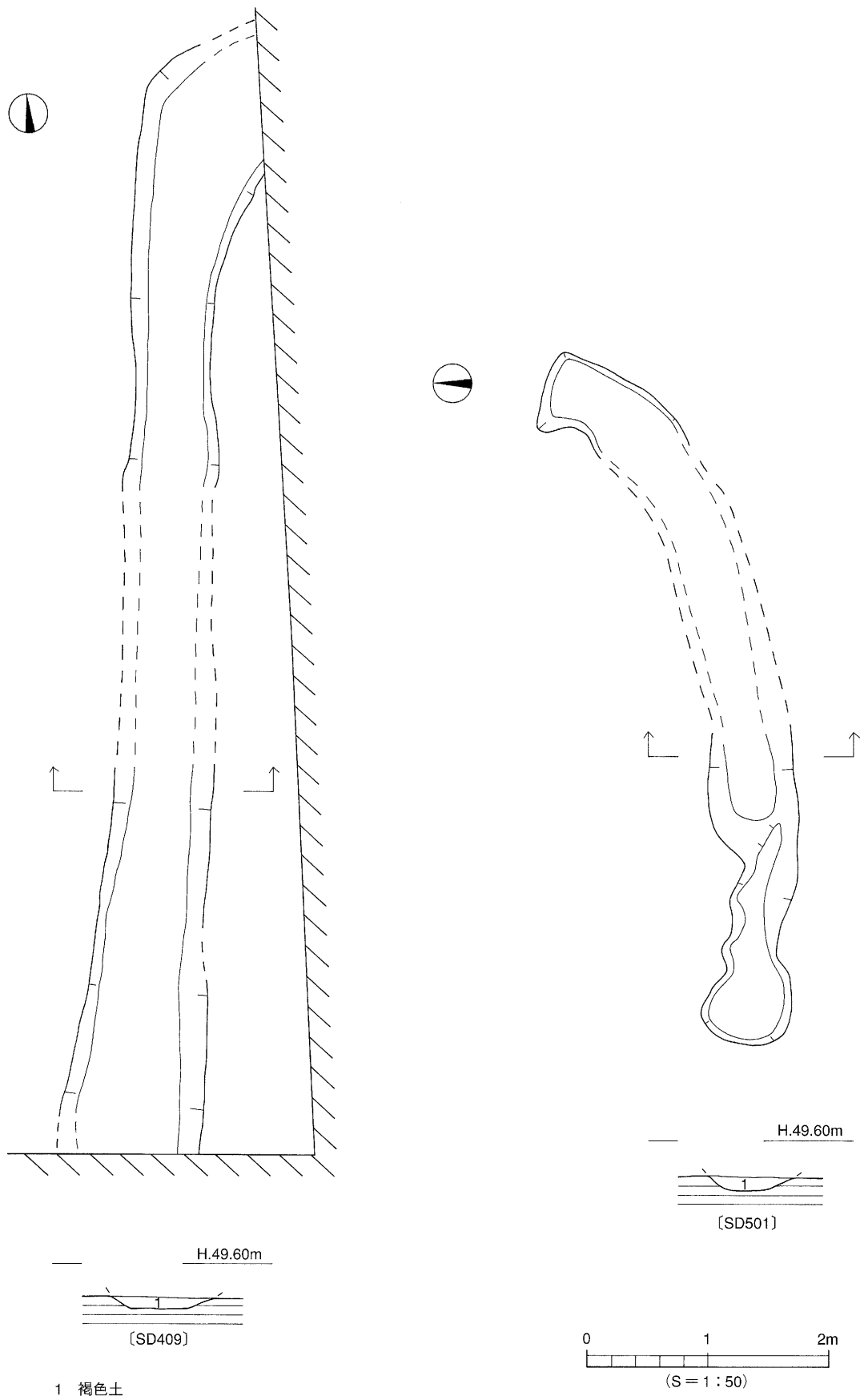
時期：出土遺物の特徴から、概ね中世とする。



第93図 S D 101・102測量図



第94図 S D 103・104・201・404・405測量図



第95図 S D 409・501測量図

3) 土 坑

S K 201 (第78・96図)

2 B区南東隅D26区に位置し、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.8m、東西検出長0.8m、深さ5cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：図化遺物はないが、遺物の特徴より概ね中世とする。

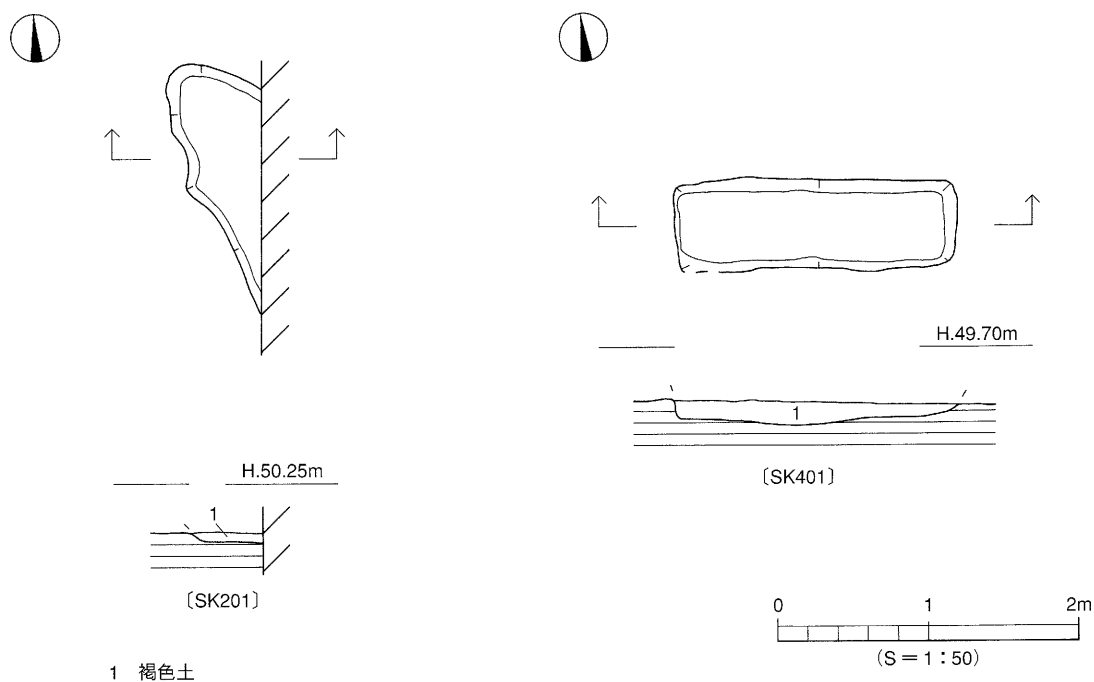
S K 401 (第81・96図)

4 F区中央南寄りC66区に位置する。第Ⅵ①層上面で検出した。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径1.8m、短径0.6m、深さ14cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は褐色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定は困難であるが、埋土より概ね中世とする。

4) 畝溝 (第77図)

畝溝は1 B・1 D・1 E区の第Ⅱ④層及び第Ⅱ⑤層上面でそれぞれ検出した。ここでは、層位別に説明をおこなう。なお、畝溝内からの遺物の出土はない。



第96図 S K 201・401測量図



## ① 第Ⅱ④層上面検出

畝101～105：1 B区中央北寄りD 7～D 9区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長1.9～5.9 m、幅0.3～0.9m、深さ3.0～12.0cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて明褐色砂である。

畝106～115：1 D区南側F 6～F 9区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長1.1～5.2m、幅0.2～0.8m、深さ1.0～7.0cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて明褐色砂である。

畝116～119：1 E区のF 11・12区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長2.4～4.4m、幅0.1～0.8m、深さ3.0～10.0cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて明褐色砂である。

## ② 第Ⅱ⑤層上面検出

畝120～127：1 B区北側D 5～D 8区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長2.1～6.1m、幅0.3～0.6m、深さ1.0～11.0cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて、にぶい褐色土と橙色砂の混合土である。

畝128～133：1 D区南側F 5～F 9区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長3.3～6.9m、幅0.4～0.8m、深さ3.5～7.5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて、にぶい褐色土と橙色砂の混合土である。

畝134～137：1 E区のF 11・12区で検出した北西－南東方向の畝溝で、検出長0.1～0.7m、幅0.1～0.7m、深さ2.5～7.0cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて、にぶい褐色土と橙色砂の混合土である。

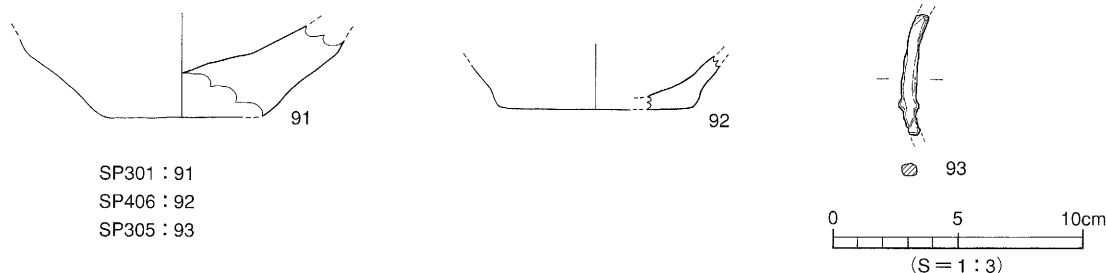
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね中世とする。

## (3) その他の遺構と遺物

本調査ではピット65基を検出した。黒褐色土を埋土にもつピットは57基〔3区：S P 301～312、314～331、4区：S P 401～407、409・411～413・415～425・427～429、5区：S P 512・513〕、褐色土を埋土にもつピットは8基〔2区：S P 201～204、3区：S P 313、4区：S P 408・426、5区：S P 501〕である。検出層位や出土遺物から時期は前者が概ね古墳時代、後者は中世以降と考えられる。このうち、遺物が出土したピットが数基ある。ここでは、ピット内から出土した遺物のほか、包含層及び出土地点不明遺物を掲載する。

## 1) ピット出土遺物 (第97図)

91はS P 301出土、92はS P 406、93はS P 305出土品である。91は弥生土器の壺形土器で、平底となる。弥生後期。92は土師器坏で、円盤高台状の底部をもつ。11～12世紀。93は鉄鏃の関部と思われ、厚さ5 mmを測る。



第97図 ピット出土遺物実測図

2) 包含層出土遺物

(i) 第Ⅱ①層出土品 (第98図、図版27)

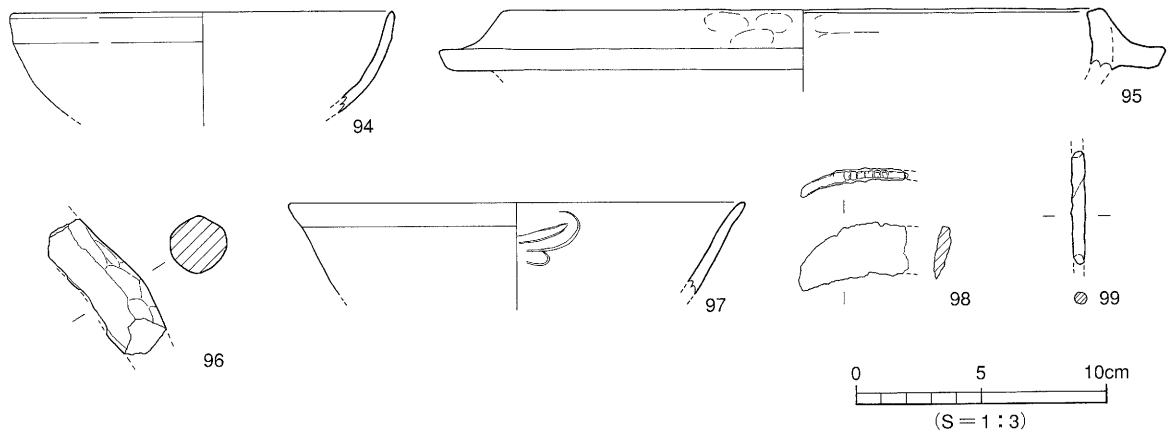
94は土師器坏で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。12世紀。95・96は土師器土釜で、95は水平にのびる鑊が付く。96は脚部片で、断面三角形状を呈する。14世紀。97は龍泉窯系青磁碗で、体部内面に陰印刻草花文を施す。14世紀。98は不明品、99は鉄釘である。近現代。

(ii) 第Ⅳ①層出土品 (第99図、図版27・28)

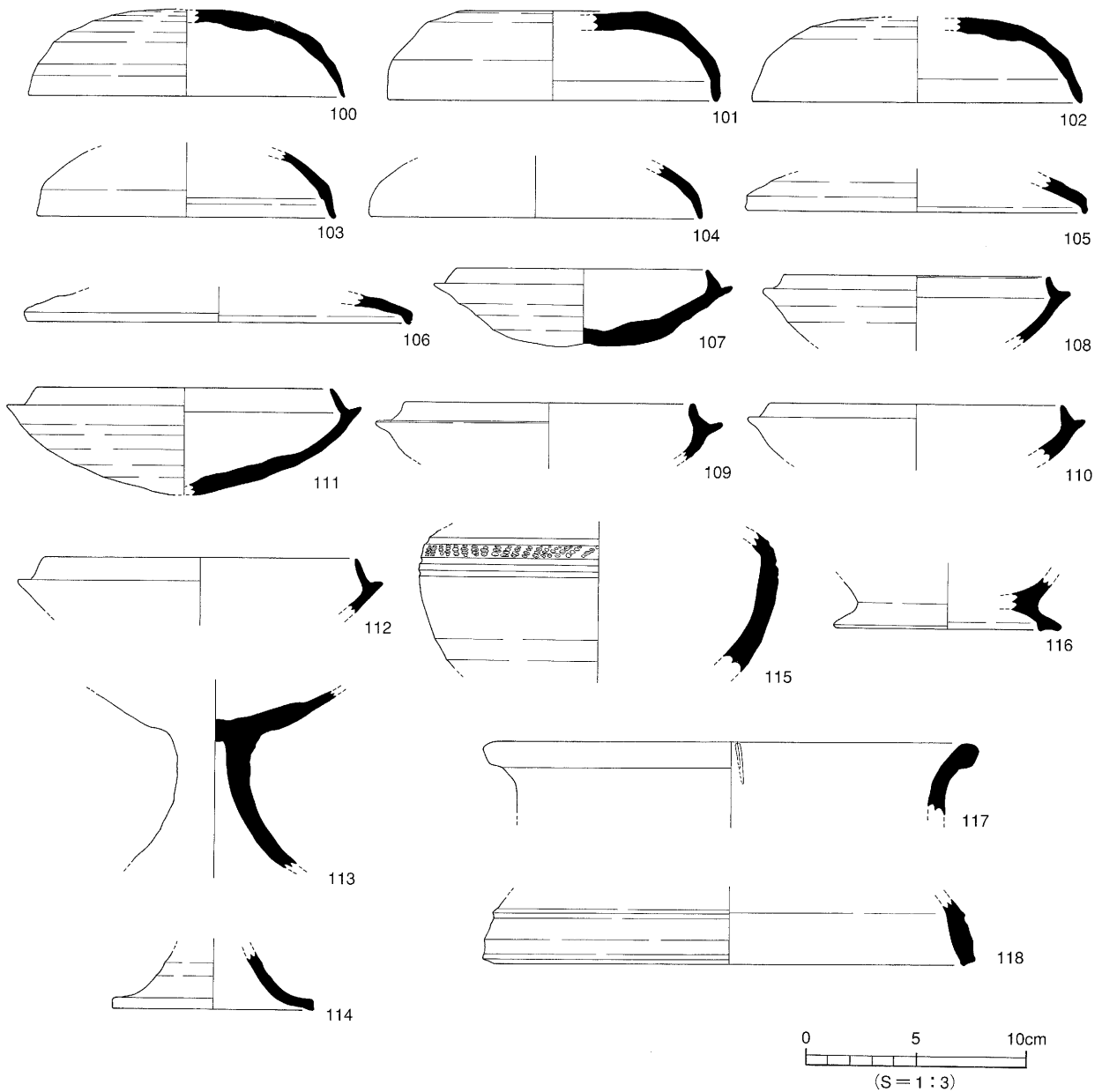
100~118は須恵器。100~106は坏蓋である。100~104は扁平な天井部からなだらかに口縁部に下がり、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。6世紀後半~7世紀前半。105・106は口縁部が下方に屈曲する。8世紀前半。107~112は坏身で、たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に仕上げる。6世紀後半~7世紀前半。113・114は高坏で、114の脚裾部は下方に屈曲する。7世紀。115は長頸壺の胴部片で、肩部に沈線と刺突文を施す。7世紀。116は脚付鉢の脚部で、脚端面は凹む。7世紀。117は甕で、口縁部は珠玉状に仕上げる。7世紀。118は器台の脚部で、凹線が巡る。6世紀後半。

3) 地点不明出土遺物 (第100図、図版28)

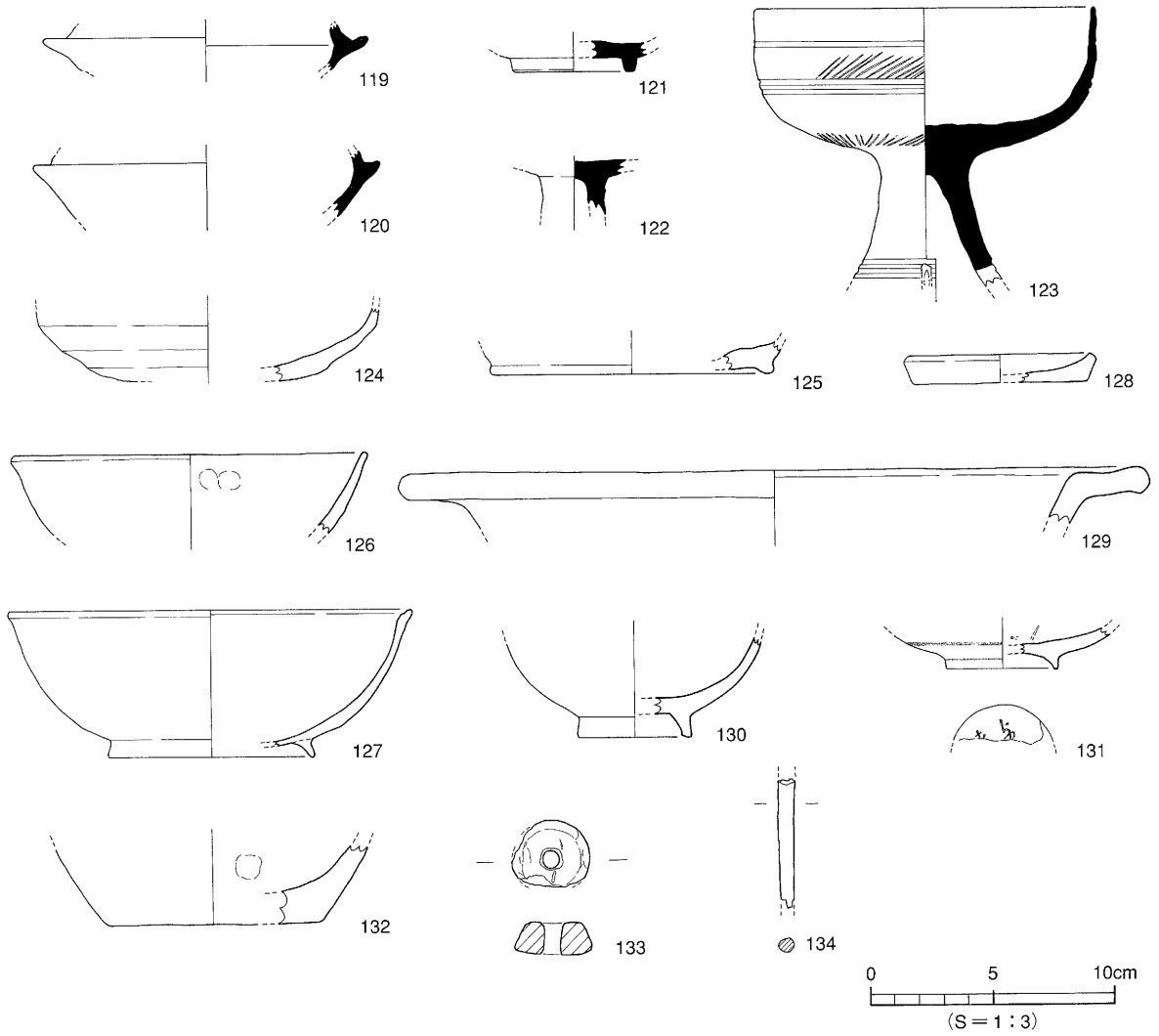
119~123は須恵器である。119・120は坏身で、たちあがりは低く内傾する。7世紀前半。121は高台付の坏で、高台は断面方形形状となる。8世紀。122・123は高坏で、123の坏部中位には沈線と斜線文、坏部下位には斜線文を施す。脚部には沈線と透かしを施す。7世紀。124・125は土師器坏で、125は丸みのある高台が付く。8世紀。126は土師器碗で、口縁部はわずかに外反する。127は内黒碗で、断面三角形状の高台をもつ。12~13世紀。128は土師器皿で、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。13世紀。129は土師器土鍋で、口縁上部は凹む。13世紀。130・131は碗で、131の内面には陰刻を施す。18世紀。132は弥生土器の壺形土器で、平底となる。弥生後期。133は土製の紡錘車で、形態は台形状を呈し、径9mm大の孔を穿つ。134は近現代の鉄釘である。



第98図 第Ⅱ①層出土遺物実測図



第99図 第IV①層出土遺物実測図



第100図 地点不明出土遺物実測図

## 4. 小 結

本調査では、弥生時代から中世までの遺構・遺物を確認した。遺構は古墳時代と中世のものである。

### 1) 層 位

調査では、基本層位である7つの土層をすべて検出した。このうち、中世層である第Ⅱ層は調査地ほぼ全域にみられ、特に1区では約1mの堆積が認められた。さらに、1区では第Ⅱ層中にて2面の畑址を確認した。古代層である第Ⅲ層は1区の一部のみにみられ、約80cmの堆積となる。一方、古墳時代の堆積層である第Ⅳ層は、調査地中央部付近、2区から4区にみられ、層厚10～30cmを測る。2区では本層中より石室や土坑を検出した。弥生時代の堆積層である第Ⅴ層は2区の一部のみにみられ、層厚15cmを測る。第Ⅵ層は調査地中央部から南側、3区から5区にみられ、特に5区では1mを超える堆積となる。また、本層上面は北から南へ向けて傾斜をなし、3区では標高約50.2m、5区では約49.3mとなる。第Ⅶ層河川氾濫堆積物は調査地ほぼ全域にみられるが、本層上面は起伏に富み、標高約50m前後となる。なお、5区では第Ⅰ層下に第Ⅵ層が検出され、5B区中央部付近には断層と考えられる土層のずれを確認した。

### 2) 遺 構

調査では、古墳時代と中世の遺構を検出した。

#### ① 古墳時代

古墳時代の遺構は石室、掘立柱建物址、溝、土坑を検出した。石室は調査地中央やや北寄り2D区で検出したもので、長さ約1m、幅50cmを測る小型の竪穴式石室である。出土遺物から6世紀後半の築造と考えられる。調査地周辺では、調査地の北東部に上苅屋遺跡1次調査地があり、同規模の石室が確認されている。また、調査地南方、4区から5区では掘立柱建物址や溝、土坑など集落関連遺構が検出された。竪穴式住居址は未検出ではあるが、おそらく、この地域周辺に古墳時代集落が展開しているものと推測される。

#### ② 中 世

中世の遺構は溝、土坑のほかに畑作に伴う畝溝を検出した。1区を中心に北西―南東方向の畝溝が部分的に検出された。畑の規模や形状は定かではないが、平面形状や調査壁の土層観察により、約35mの範囲の中に畝溝が構築されていることが判明した。なお、畑址は少なくとも二時期あることも判明した。ただし、畝溝内もしくは第Ⅱ層中からの遺物の出土が僅少であるため時期特定は難しいが、概ね中世段階の畑址と推測される。いずれの畝溝も砂を含む土壌で埋没していた。一方、土坑や溝などは2区より南側に点在して検出された。検出状況から、居住に伴う遺構とは考えがたく、おそらくは畑や水田耕作等に伴う生産行為に関連する遺構と考えられる。

本調査地では、古墳時代集落に関連する遺構や遺物を確認した。水南高井線関連調査においては、古墳時代集落の検出例は非常に少なく、今回の調査結果は、調査地内に古墳時代集落が存在したことを裏付ける貴重な資料となる。さらに、石室の検出は、ある時期に調査地が墓域として利用されていたことを物語るものであり、集落域のみならず、周辺地域における墓域の範囲確認をも今後の課題となる。いずれにせよ、本調査で確認した古墳時代遺構は、今後、高井町周辺における埋蔵文化財を解明するうえで重要な資料となる。

## 遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、天→天井部、頸胴→頸部～胴部、胴→胴部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1~4 mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表29 201号石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	壺	残高 12.0	短頸壺。口縁部一部欠損。	頸 <sup>○</sup> 回転ナデ 底 <sup>◎</sup> 回転ヘラケズリ	頸 <sup>○</sup> 回転ナデ 底 <sup>◎</sup> ナデ	灰色 灰色	密 ◎		27

表30 掘立501出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					縦直径(cm)	横直径(cm)	断面径(cm)	重さ(g)		
81	耳環	完存	銅他	淡青緑色	2.5	2.7	0.6	—		27

表31 S D 408出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
82	高坏	残高 5.8	脚部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

表32 S K 202出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
83	坏身	残高 1.9	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

表33 S K 202出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
84	鉄釘	破片	鉄	7.0	0.5	0.5	1.6		27
85	鉄釘	破片	鉄	3.4	0.5	0.3	0.6		27
86	鉄釘	破片	鉄	2.6	0.3	0.3	0.3		27
87	鉄釘	破片	鉄	1.5	0.4	0.3	0.3		27

表34 S K 403出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
88	甕	口径(21.2) 残高 3.4	外反口縁。	ヨコナデ ナデ	ハケ(5本/cm) →ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1~7) ◎		

遺物観察表

表35 S K 403出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
89	不明	完存	砂岩	4.7	2.8	2.5	39.8		27

表36 S K 501出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	坏蓋	口径(12.8) 残高 4.2	3/5の残存。天井部回転ヘラケズリ1/2。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	Ⓐナデ ⓐ回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		27

表37 ピット出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	壺	残高 3.6	小片。	ナデ(マメツ)	ナデ	褐黒色 褐色	石・長(1~2) ◎	SP301 黒斑	
92	坏	底径(7.6) 残高 1.8	底部小片。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	茶褐色 暗褐色	密 ◎	SP406	

表38 ピット出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
93	鉄鏃	関部片	鉄	4.8	0.7	0.5	2.8	SP305	27

表39 第II①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
94	坏	口径(15.0) 残高 4.0	1/5の残存。	ヨコナデ (マメツ)	ナデ	乳白橙色 乳白褐色	長(1) ◎		
95	土釜	口径(23.8) 残高 2.4	口縁部片。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1~2) ◎		
96	土釜	残高 5.4	脚部片。断面三角形。	ナデ	—	褐灰色	石・長(1~3) ◎		
97	碗	口径(18.1) 残高 3.5	青磁碗。内面に陰印刻草花文。	施釉	施釉	薄緑色 薄緑色	密 ◎	胎土: 灰色	27

表40 第II①層出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
98	不明	—	鉄	4.4	2.1	0.5	5.3	近現代	27
99	鉄釘	破片	鉄	4.5	0.5	0.4	2.2	近現代	27

表41 第IV①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
100	坏蓋	口径(14.2) 残高 3.9	1/2の残存。天井部回転ヘラケズリ1/2。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
101	坏蓋	口径(14.8) 器高 4.0	1/3の残存。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		27
102	坏蓋	口径(14.7) 残高 3.8	1/4の残存。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
103	坏蓋	口径(13.4) 残高 2.9	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
104	坏蓋	口径(15.0) 残高 2.4	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
105	坏蓋	口径(14.8) 残高 1.6	小片。口縁端面は凹む。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
106	坏蓋	口径(17.1) 残高 1.3	小片。口縁部は下方に屈曲。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
107	坏身	口径(11.4) 器高 3.5	1/2の残存。	ⓐ回転ナデ Ⓐ回転ヘラケズリ	ⓐ回転ナデ Ⓐナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		27
108	坏身	口径(11.9) 残高 3.0	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
109	坏身	口径(12.8) 残高 2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
110	坏身	口径(13.2) 残高 2.5	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

第IV①層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
111	坏身	口径(13.2) 残高 4.8	1/4の残存。	㊶回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	㊶回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	灰色 灰色	密 ◎		
112	坏身	口径(13.9) 残高 2.5	小片。	㊶回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
113	高坏	残高 7.9	脚部中空。	マメツ	マメツ	白黄色 白黄色	石・長(1) ○		28
114	高坏	底径(9.0) 残高 2.6	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
115	壺	残高 6.4	沈線間に刺突列点文。	㊶回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	28
116	鉢	底径(10.0) 残高 2.2	脚付鉢。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 黒灰色	密 ◎	自然釉	
117	甕	口径(22.2) 残高 3.3	珠玉状口縁。頸部に線刻あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		28
118	器台	底径(21.0) 残高 3.0	脚部片。	回転ナデ	回転ナデ	乳褐色 乳褐色	密 △		28

表42 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
119	坏身	残高 1.8	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
120	坏身	残高 2.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
121	坏	底径(5.0) 残高 1.2	高台付の坏。	回転ケズリ	ナデ	淡乳色 淡乳色	密 ◎		
122	高坏	残高 2.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
123	高坏	口径(12.6) 残高 11.3	沈線文+斜線文。脚部に透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	茶褐色 青灰色	密 ◎		28
124	坏	残高 3.4	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙褐色 乳褐色	密 ◎		
125	坏	底径(11.4) 残高 1.3	高台付の坏。	マメツ	マメツ	淡黄白色 淡黄白色	密 ◎		
126	碗	口径(14.2) 残高 3.2	小片。	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
127	碗	口径(16.2) 器高 5.9	内黒碗。口縁部は外反。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰茶色 黒灰色	密 ◎	煤?	28
128	皿	口径(7.4) 器高 1.1	底部回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白橙褐色 乳白橙褐色	密 ◎		
129	鍋	口径(19.4) 残高 1.8	口縁部小片。	マメツ	マメツ	褐黒色 橙褐色	石・長(1~2) 金◎	煤付着	
130	碗	底径(4.6) 残高 4.0	釉調は無色透明。	施釉	施釉	黄白色 黄白色	密 ◎	胎土: 灰色	28
131	碗	底径(4.4) 残高 1.6	内面に陰刻あり。	回転ナデ	回転ナデ	淡乳灰色 淡乳灰色	密 ◎		28
132	壺	底径(8.5) 残高 3.1	平底。	マメツ	マメツ	褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎	煤付着	
133	紡錘車	直径 3.1 厚さ 1.3	穿孔(φ0.9cm)。	ナデ(マメツ)	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		28

表43 地点不明出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
134	鉄釘	破片	鉄	5.2	0.6	0.6	4.3	近現代	28



第8章

# 南 高 井 遺 跡

— 2 次 調 査 —



## 第 8 章 南高井遺跡 2 次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2003（平成15）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には高井遺跡や水泥遺跡があり、弥生時代から中世までの集落関連遺構や生産遺構及び遺物が確認されている。

このことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2005（平成17）年6月1日から同年6月7日の間に試掘調査を実施した。その結果、土坑やピットのほか、土師器片や須恵器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2005（平成17）年8月1日より開始した。

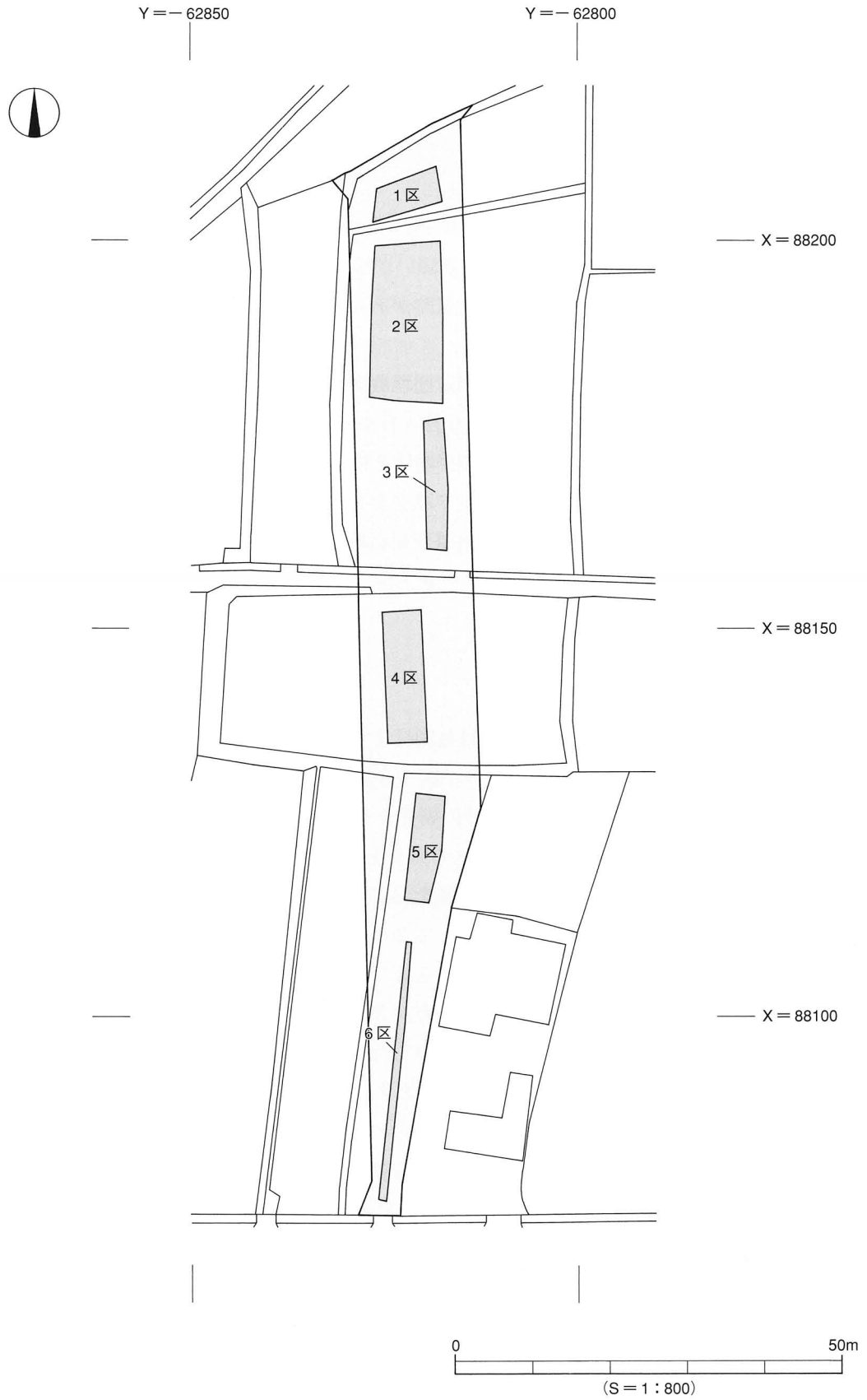
#### (2) 調査の経緯（第101図）

調査は2005（平成17）年8月1日から同年11月30日まで実施した。以下、調査工程を略記する。

まず、調査地内を北側から南側へ6つの区（1区～6区）に分け、1区から順に発掘調査をおこなった。廃土置き場の都合上、1区から3区までの調査をおこない、その後、調査地南端6区から北方4区までの調査をおこなった。8月4日、1区の調査を開始する。重機により表土層を除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。その結果、1区では鋤址状遺構とピットを検出した。8月5日、1区の調査と併行して2区の調査を開始した。さらに、8月19日からは3区の調査を1区や2区と同時進行で開始した。2区では遺構検出面が4面あり、検出面上位では鋤址状遺構や水田面、下位では溝やピットを検出した。3区では遺構検出面が2面あり、検出面上位では鋤址状遺構とピット、下位では溝とピットを検出した。9月29日、1区から3区までの遺構をすべて完掘し、高所作業車を使用して完掘状況写真を撮影する。その後、測量作業をおこない、10月4日、1区から3区までの調査を終了した。

10月20日より、6区の調査を開始する。重機による表土掘削作業をし、その後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出作業をおこなった。6区では溝や自然流路、ピットを検出した。11月1日、6区の調査を終了し、引き続き5区の調査を開始する。5区ではピット数基を検出した。5区と併行して、11月4日より4区の調査を開始する。4区では溝と掘立柱建物址を検出した。11月25日、4区と5区の調査を終了し、重機による埋め戻し作業を開始する。11月30日、発掘用具を撤去し、屋外調査を終了した。

南高井遺跡 2次調査



第101図 調査区測量図

### (3) 調査組織

所在地：松山市南高井町116 外

調査期間：2005（平成17）年8月1日～同年11月30日

調査面積：1,638.04m<sup>2</sup>

調査担当：水本 完児、宮内 慎一

## 2. 層 位

### (1) 基本層位（第102～106図、図版29）

調査地の基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅳ層、及び第Ⅵ層の5層であり、第Ⅴ層（弥生時代）と第Ⅶ層（砂礫層）は未検出である。調査以前は水田や既存宅地であり、現況の標高を測量すると調査地北側1区から4区では標高48.3m前後、5区では50.7m、6区では49.0mを測る。

第Ⅰ層－近現代の水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより3層に分層される。

第Ⅰ①層：近現代の開発に伴う造成土で、1区と4区から6区にみられ、地表下20～35cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ②層：灰色土で、水田耕作に伴う耕作土である。調査区全域にみられ層厚10～50cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ③層：明灰色土で、水田耕作に伴う旧耕作土である。2区を除く地区にみられ層厚5～25cmを測る。

第Ⅰ④層：黄褐色土で、水田耕作に伴う旧床土である。2区を除く地区にみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅰ⑤層：にぶい黄褐色土で、調査区ほぼ全域にみられ層厚3～10cmを測る。

第Ⅱ層－灰黄褐色土で、4、5、6区を除く地区にみられ層厚5～15cmを測る。

第Ⅲ層－土質、土色の違いにより3層に分層される。

第Ⅲ①層：灰黄色土で、調査区全域にみられ層厚10～25cmを測る。1区から4区では本層上面にて、鋤址状遺構や土坑、ピットを検出した。

第Ⅲ②層：灰黄色を呈する砂質土で、1区と6区を除く地区でみられ層厚10～20cmを測る。2区から5区では、本層上面にて掘立柱建物址や溝、ピットを検出した。

第Ⅲ③層：灰黄色を呈する粘質土で、2区から6区にみられ層厚10～20cmを測る。2区と3区では本層上面にて溝や土坑、畦畔を検出した。

第Ⅳ層－黒褐色を呈する粘質土で、1区と2区にみられ層厚5～20cmを測る。本層上面にて溝やピットを検出した。

第Ⅵ層－褐灰色を呈する砂質土で、3区と6区を除く地区にみられ層厚30cm以上を測る。本層上面が調査における最終遺構検出面となる。2区では本層上面にて土坑やピットを検出した。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3・・・27とし、A1・A2・・・C27といったグリット名を付した。

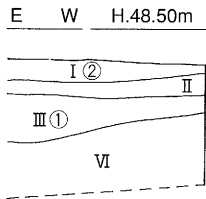
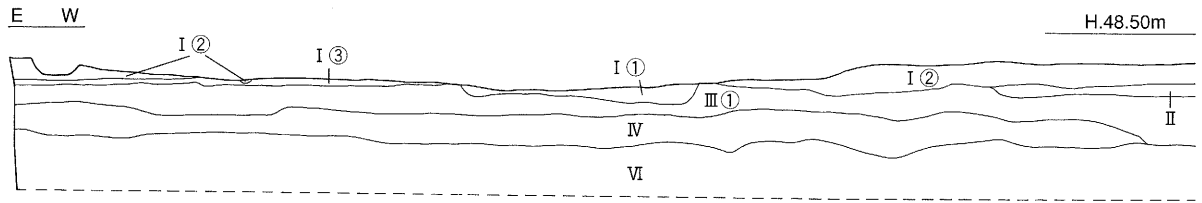
## (2) 検出遺構・遺物 (表44・図版30~32)

調査では掘立柱建物址 1 棟〔古代〕、溝 9 条〔古代〕、自然流路 1 条〔古代〕、土坑 7 基〔古墳：4 基、古代：2 基、中世：1 基〕、畦畔 2 条〔古代〕、鋤址状遺構 56 条〔中世〕、ピット 46 基、性格不明遺構 2 基を検出した。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。以下、時期別に遺構を紹介する。

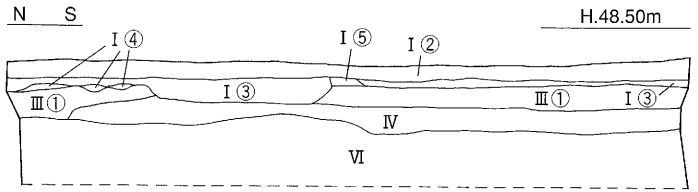
表44 検出遺構一覧

区	古墳時代	古 代	中 世
1 区			鋤址 2 条：鋤址101・102
2 区	土坑 4 基：S K203~206	溝 4 条：S D201~204 土坑 1 基：S K202 畦畔 2 条：畦201・202 性格不明遺構 2 基：S X201・202	土坑 1 基：S K201 鋤址35条：鋤址201~235
3 区		溝 3 条：S D301~303 土坑 1 基：S K301	鋤址19条：鋤址301~319
4 区		掘立 1 棟：掘立401 溝 1 条：S D401	
5 区			
6 区		溝 1 条：S D601 自然流路 1 条：S R601	

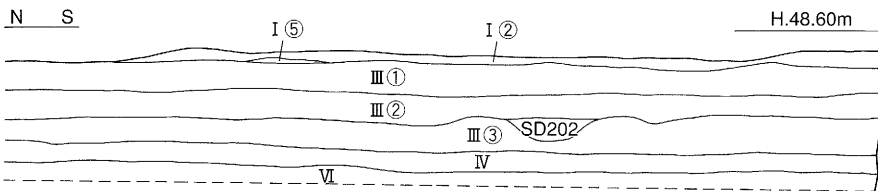
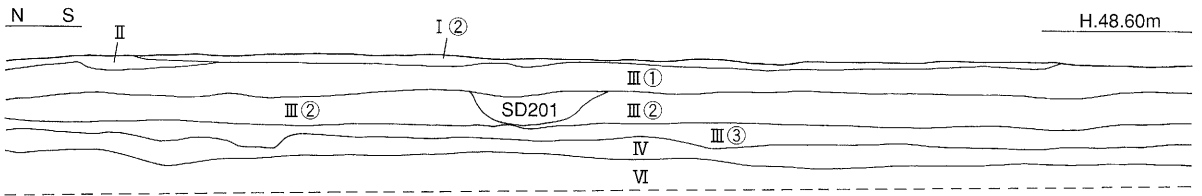
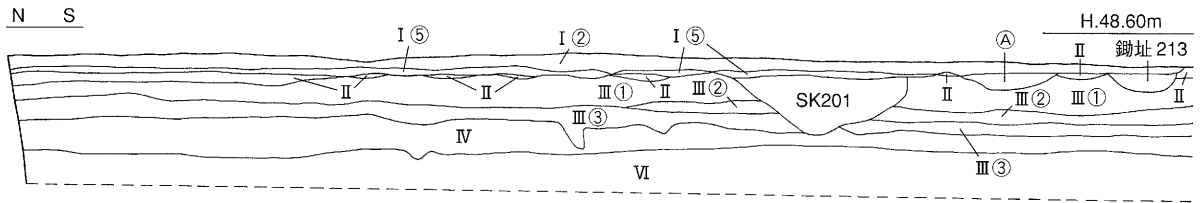
層 位



〔1区南壁〕

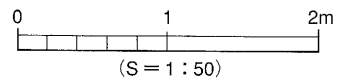


〔1区東壁〕



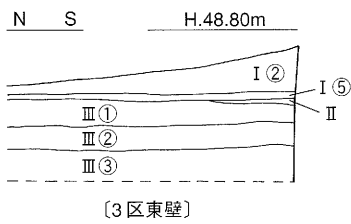
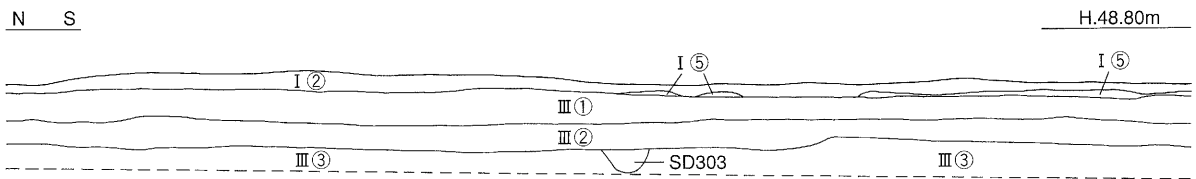
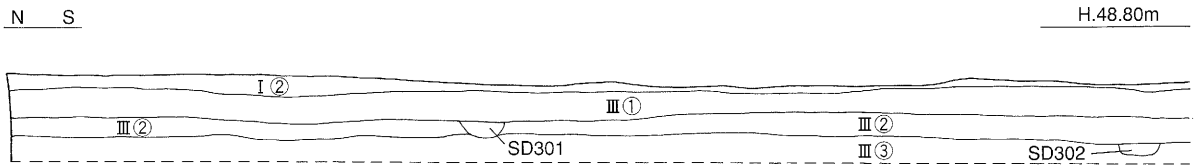
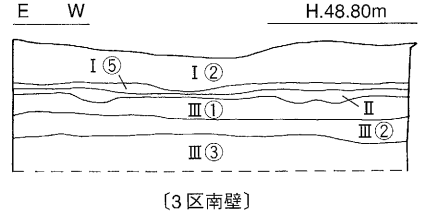
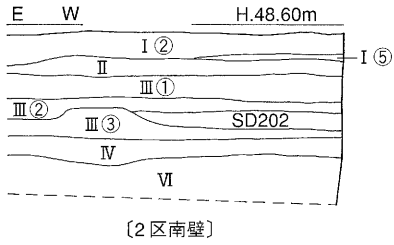
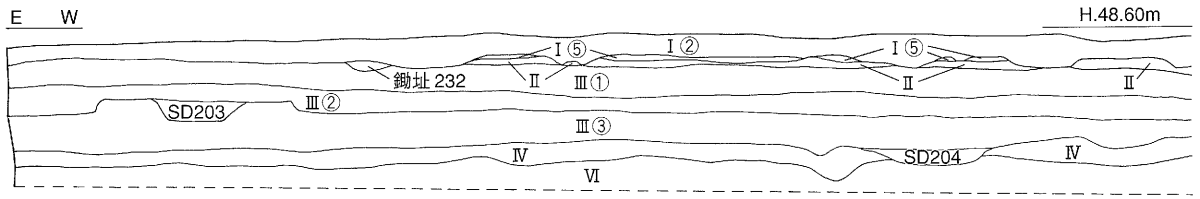
〔2区東壁〕

- |          |              |              |
|----------|--------------|--------------|
| I ① 造成土  | I ⑤ にぶい黄褐色土  | III ③ 灰黄色粘質土 |
| I ② 灰色土  | II 灰黄褐色土     | IV 黒褐色粘質土    |
| I ③ 明灰色土 | III ① 灰黄色土   | VI 褐灰色砂質土    |
| I ④ 黄褐色土 | III ② 灰黄色砂質土 | A 灰黄褐色土      |

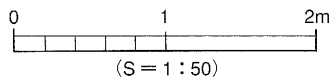


第102図 1区・2区(1) 土層図

南高井遺跡 2次調査



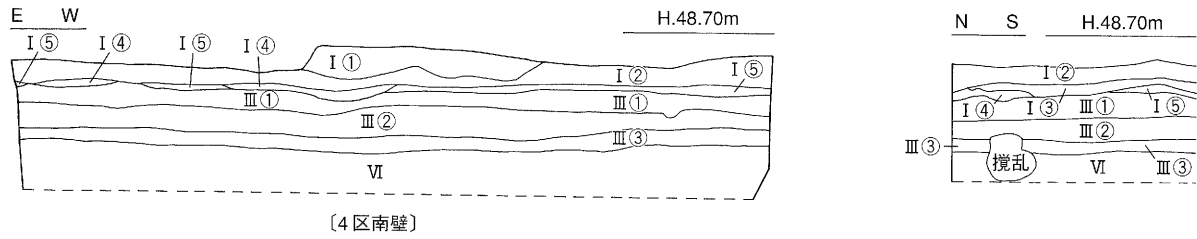
- |       |         |    |        |
|-------|---------|----|--------|
| I ②   | 灰色土     | IV | 黒褐色粘質土 |
| I ⑤   | にぶい黄褐色土 | VI | 褐灰色砂質土 |
| II    | 灰黄褐色土   |    |        |
| III ① | 灰黄色土    |    |        |
| III ② | 灰黄色砂質土  |    |        |
| III ③ | 灰黄色粘質土  |    |        |



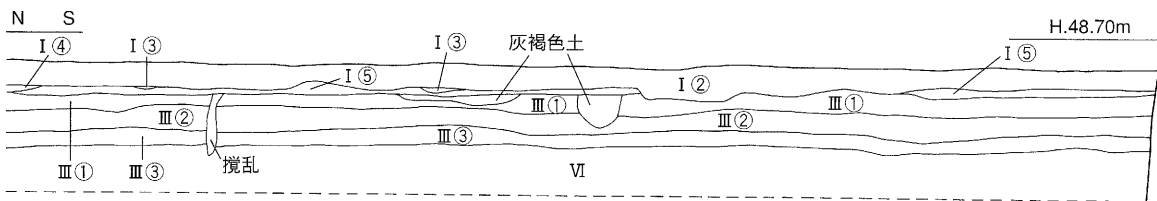
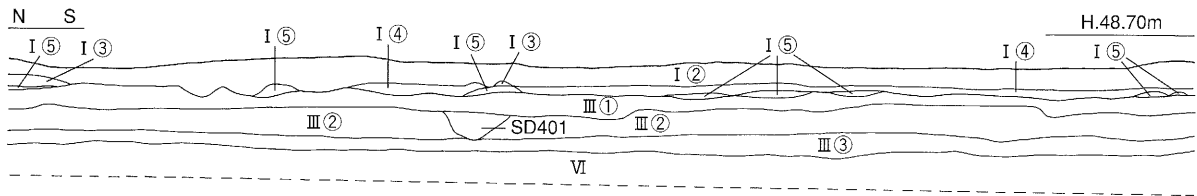
第103図 2区(2)・3区土層図



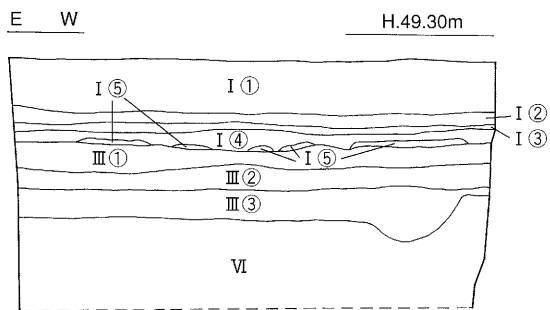
層 位



〔4区南壁〕

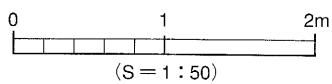


〔4区東壁〕



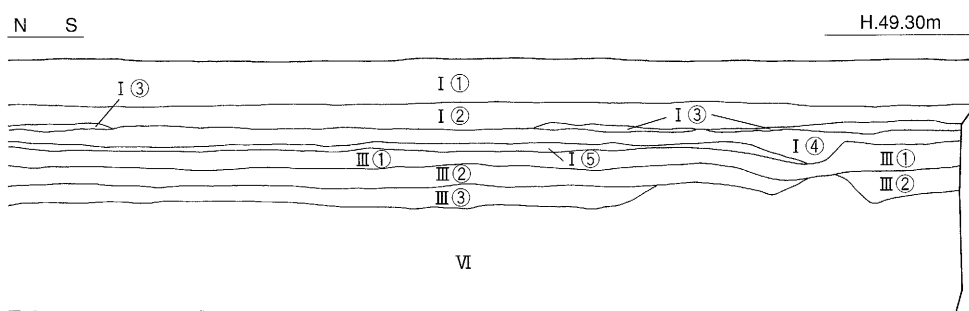
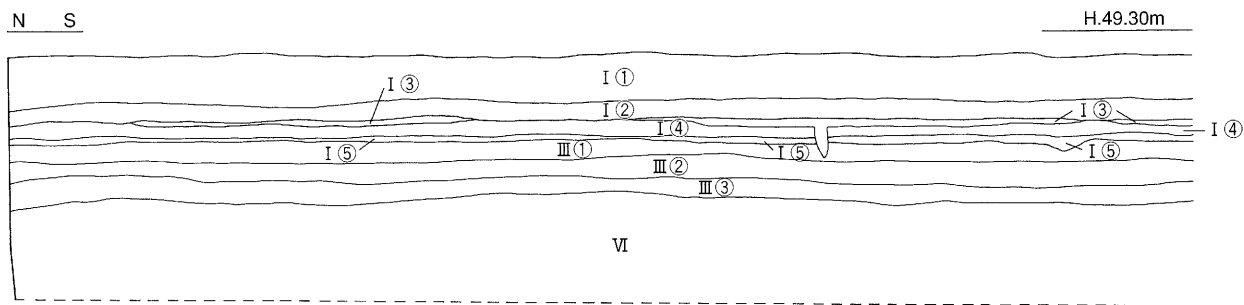
〔5区南壁〕

- |             |              |
|-------------|--------------|
| I ① 造成土     | III ① 灰黄色土   |
| I ② 灰色土     | III ② 灰黄色砂質土 |
| I ③ 明灰色土    | III ③ 灰黄色粘質土 |
| I ④ 黄褐色土    | VI 褐灰色砂質土    |
| I ⑤ にぶい黄褐色土 |              |

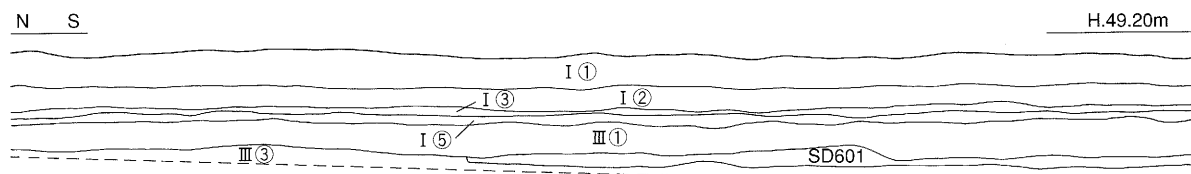
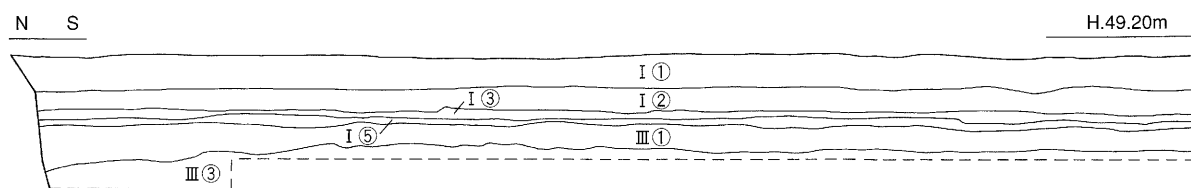


第104図 4区・5区(1)土層図

南高井遺跡 2次調査

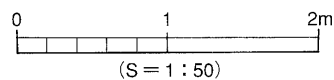


(5区東壁)



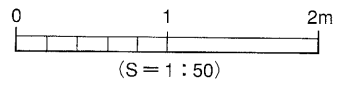
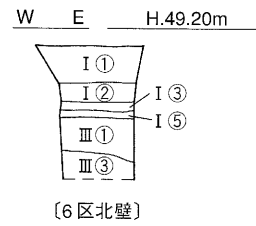
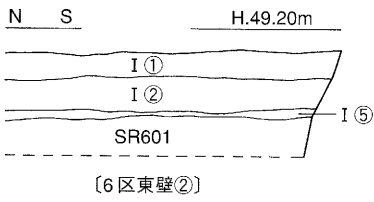
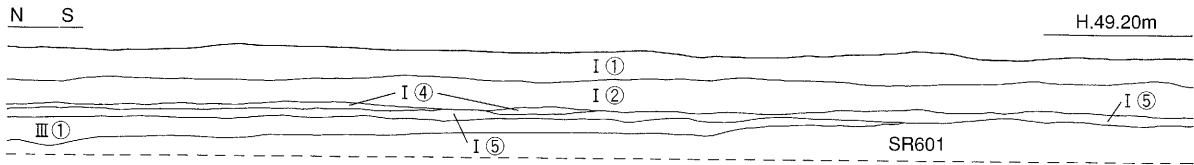
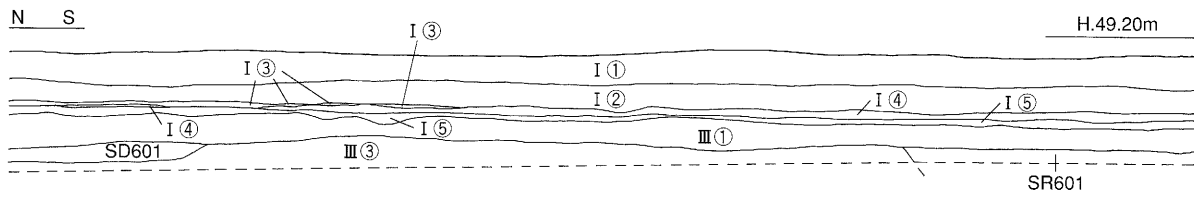
(6区東壁①)

- |             |              |
|-------------|--------------|
| I ① 造成土     | III ① 灰黄色土   |
| I ② 灰色土     | III ② 灰黄色砂質土 |
| I ③ 明灰色土    | III ③ 灰黄色粘質土 |
| I ④ 黄褐色土    | VI 褐灰色砂質土    |
| I ⑤ にぶい黄褐色土 |              |



第105図 5区(2)・6区(1)土層図

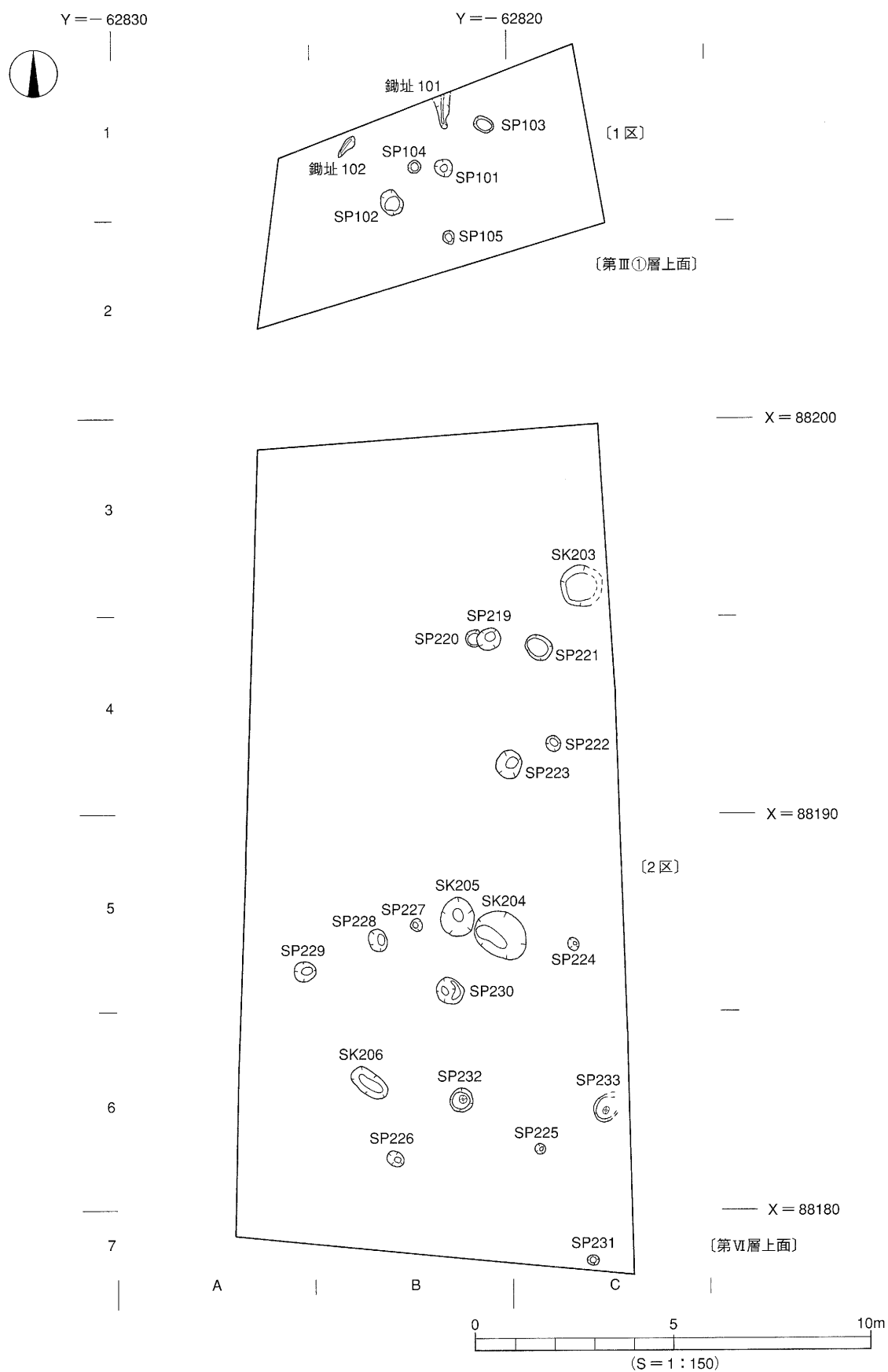
層 位



- I ① 造成土
- I ② 灰色土
- I ③ 明灰色土
- I ④ 黄褐色土
- I ⑤ にぶい黄褐色土
- III ① 灰黄色土
- III ③ 灰黄色粘質土

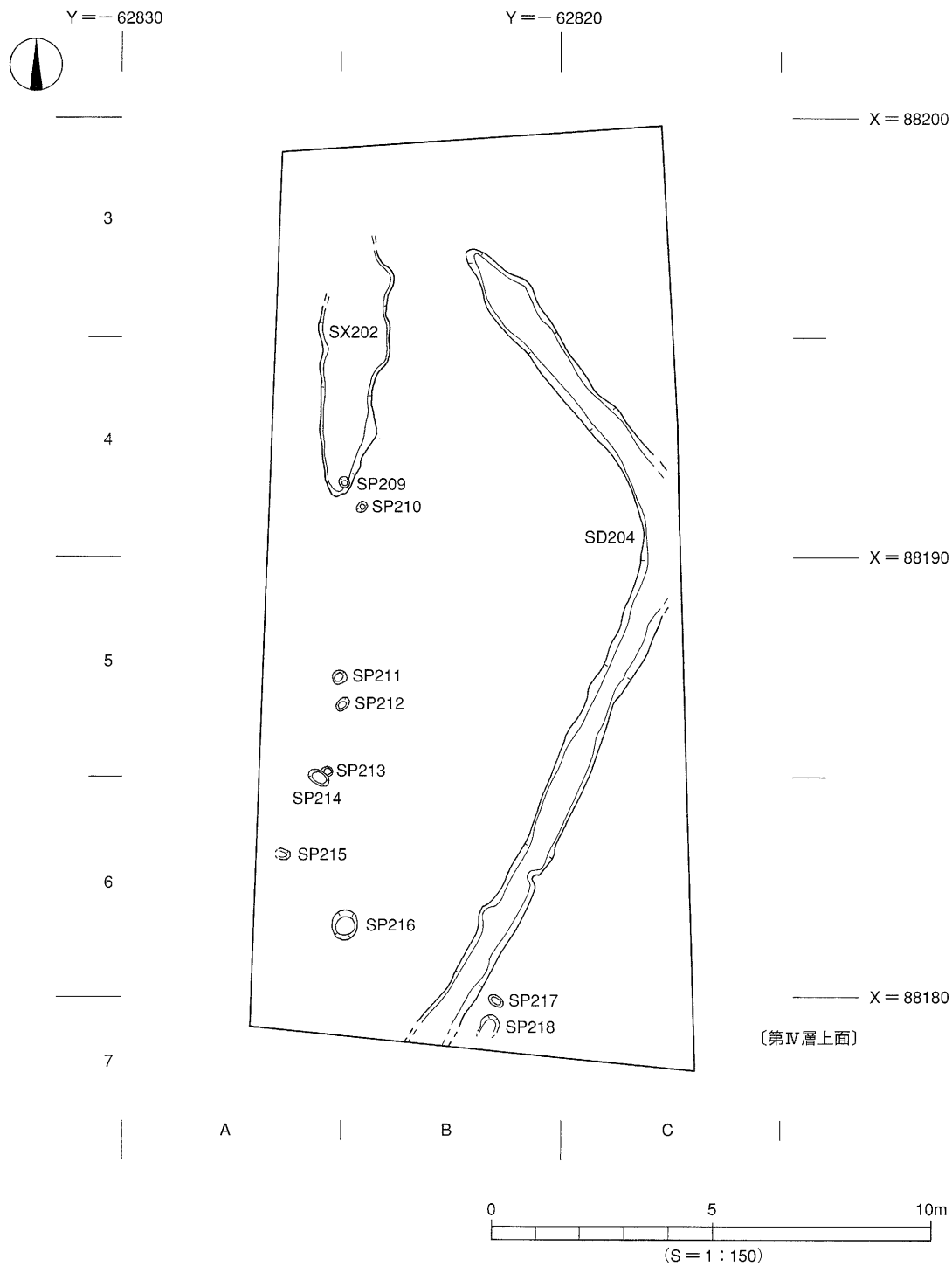
第106図 6区土層図(2)

南高井遺跡 2次調査



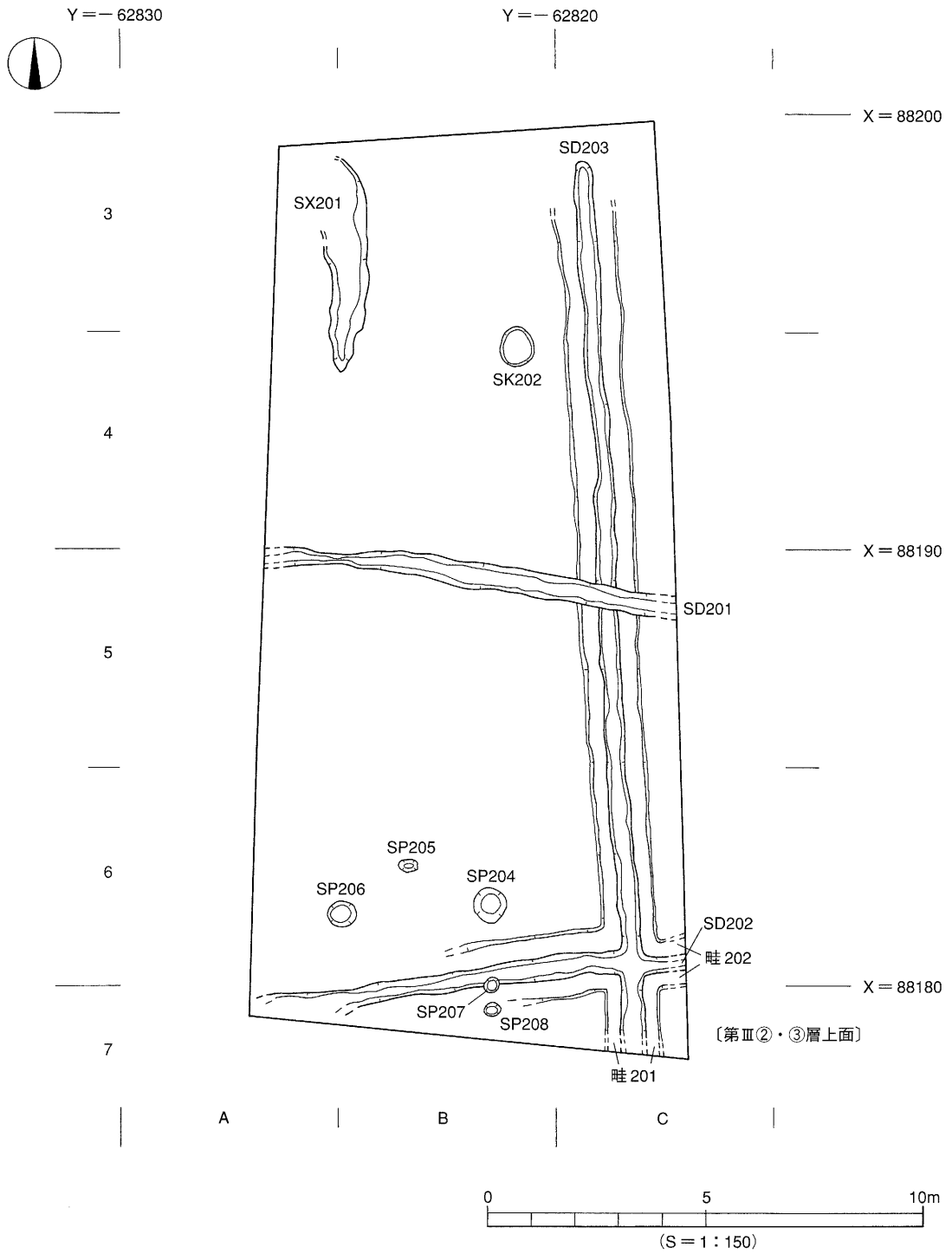
第107図 1区・2区遺構配置図(1)

層 位



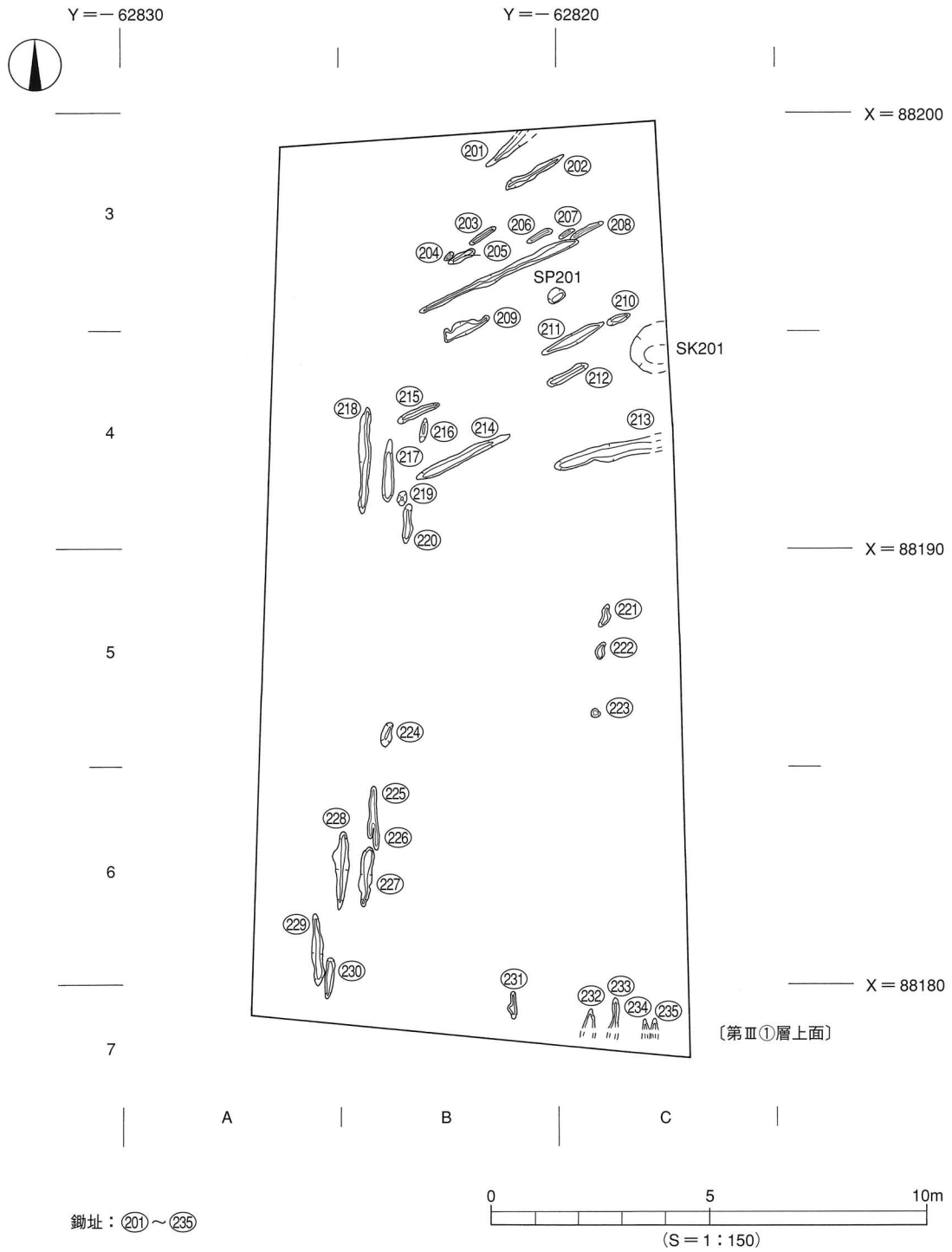
第108図 2区遺構配置図(2)

南高井遺跡 2次調査

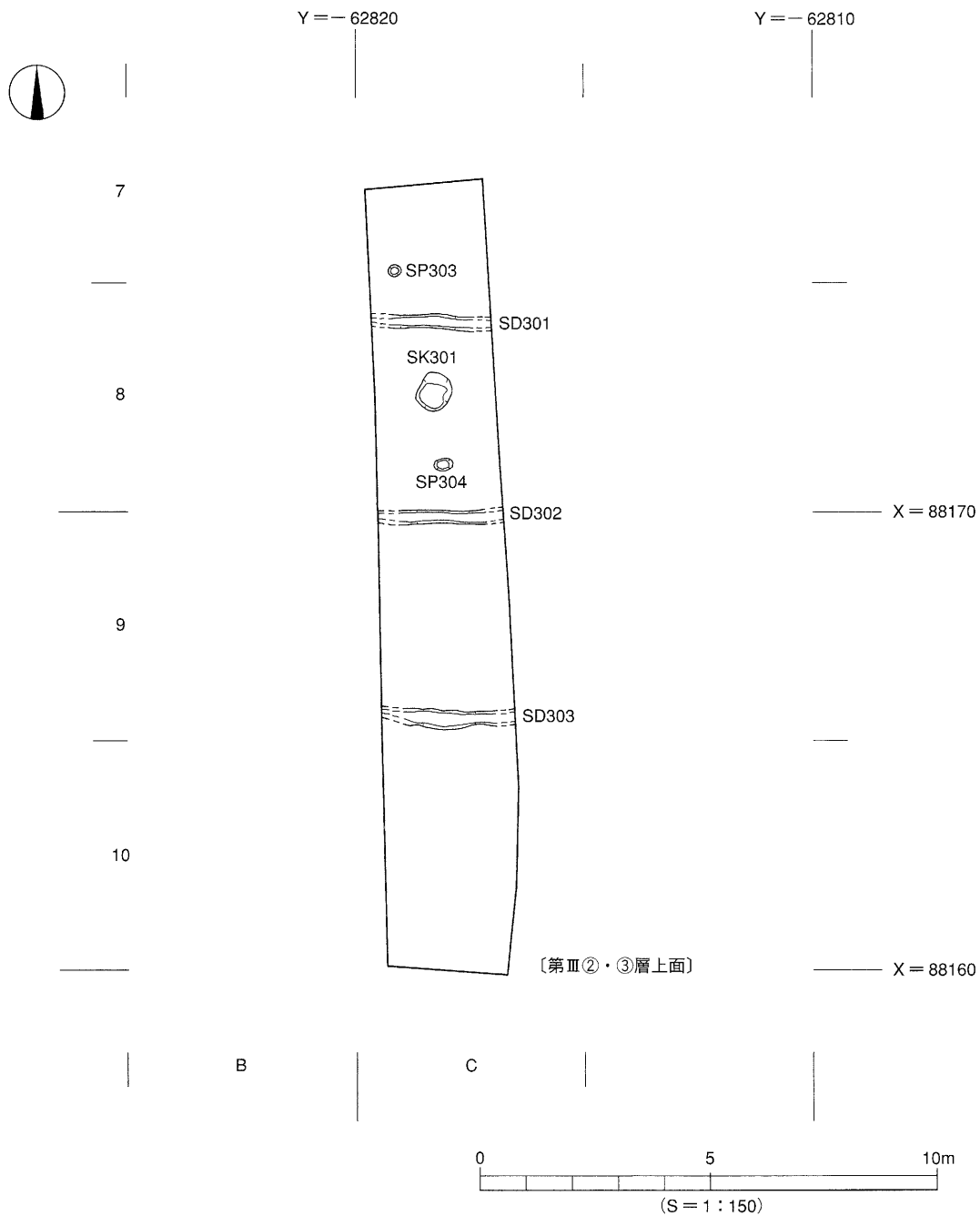


第109図 2区遺構配置図(3)

層 位



第110図 2区遺構配置図(4)



第111図 3区遺構配置図(1)

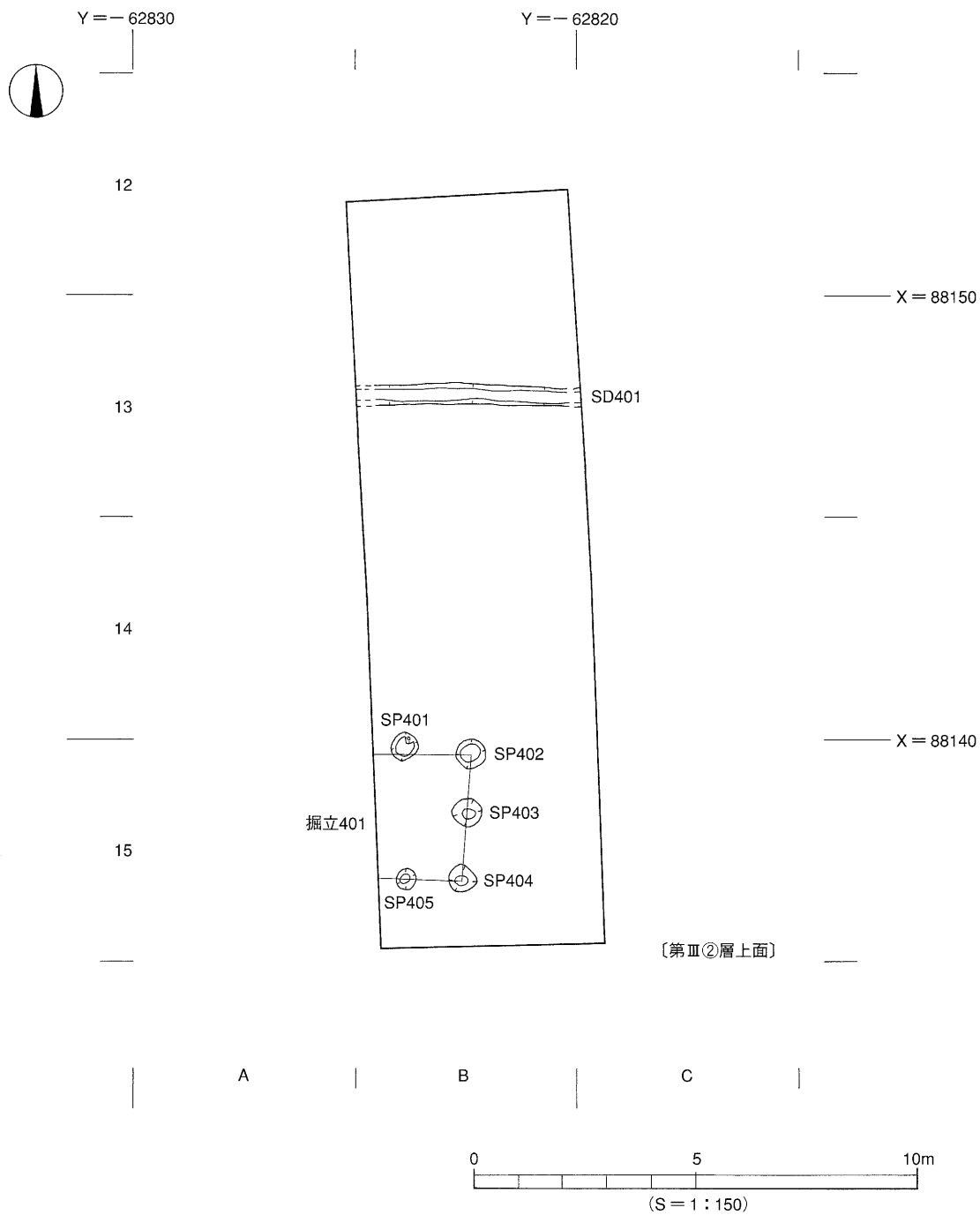


層 位



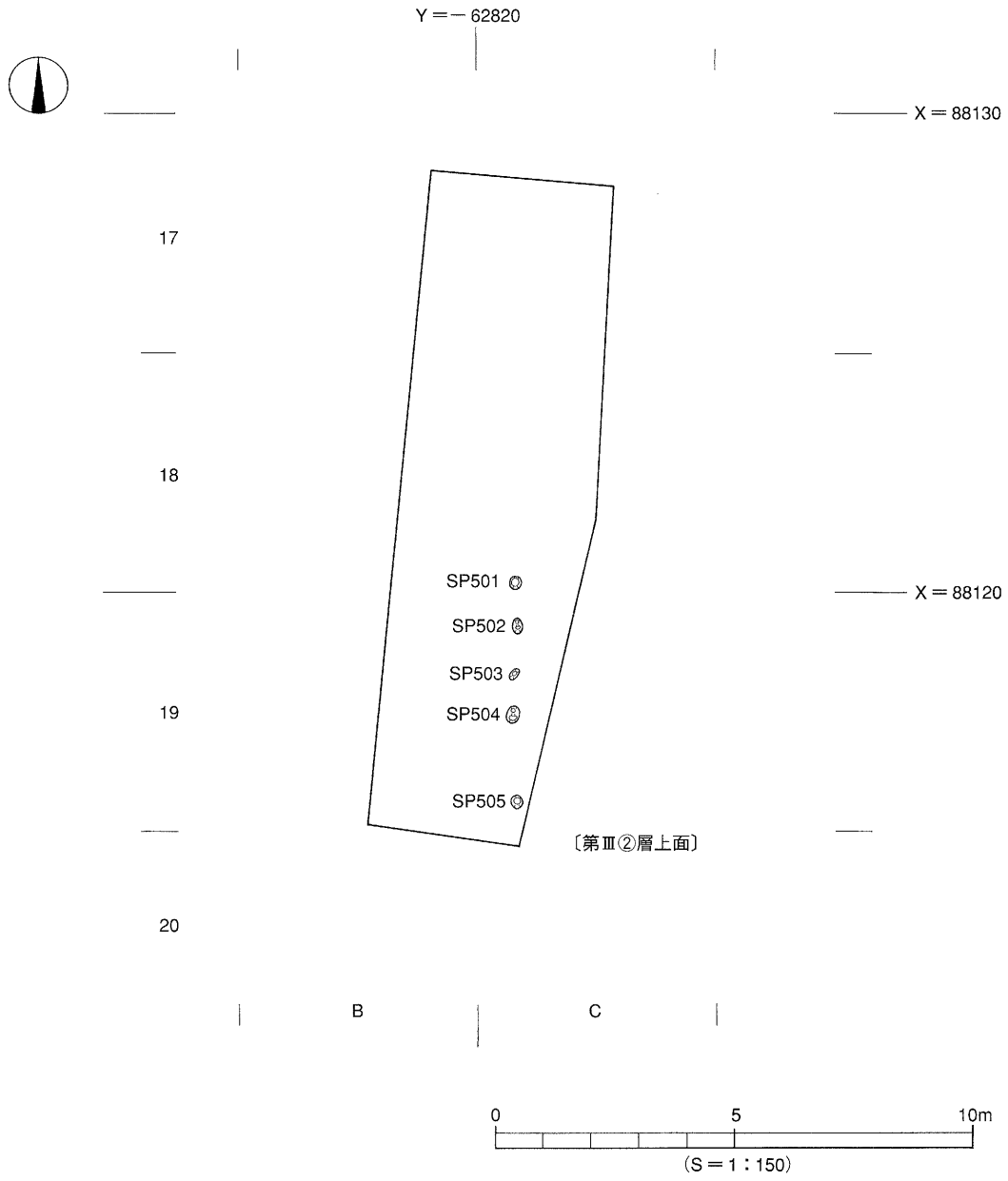
第112図 3区遺構配置図(2)

南高井遺跡 2次調査



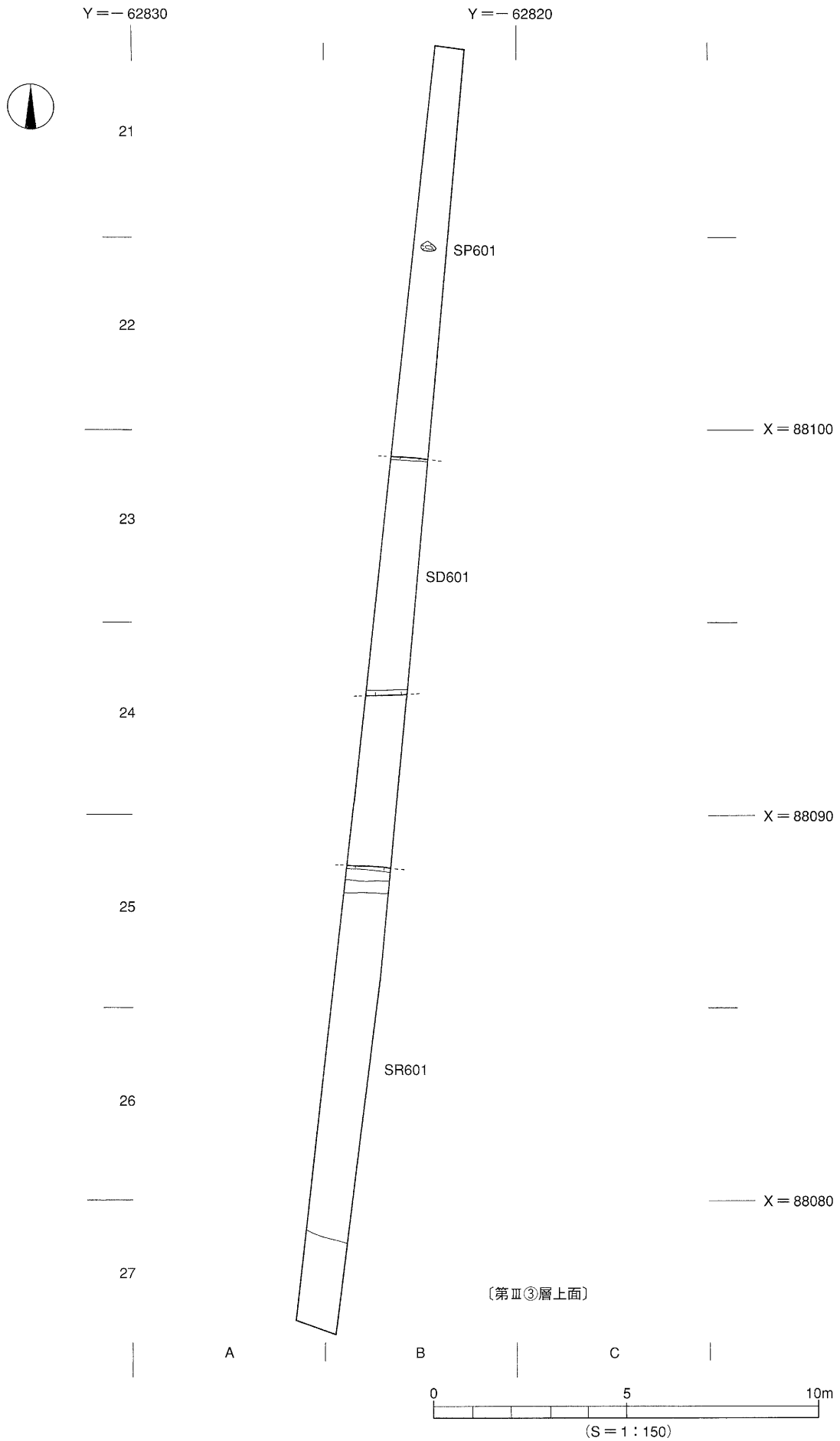
第113図 4区遺構配置図

層 位



第114図 5区遺構配置図

南高井遺跡 2次調査



第115図 6区遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

本調査では、古墳時代から中世までの遺構と遺物を検出した。遺構は掘立柱建物址1棟〔古代〕、溝9条〔古代〕、自然流路1条〔古代〕、土坑7基〔古墳：4基、古代：2基、中世：1基〕、鋤址状遺構56条〔中世〕、畦畔2条〔古代〕、ピット46基、性格不明遺構2基である。ここでは、時期別に概要を説明する。

#### (1) 古墳時代の遺構と遺物

##### 土坑

S K 203 (第107・116図、図版33)

2区北東部C3区に位置し、土坑東側は調査区外へ続く。第VI層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北長0.98m、東西検出長0.80m、深さは12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。土坑底面には凹凸があり、底面中央部やや西寄り部分が最も凹む。土坑東側底面にて、壺形土器が押しつぶされた状態で出土した。

出土遺物 (第116図、図版34)

135は土師器の壺形土器で、胴部最大径26.6cmを測る。胴部外面はハケメ調整後にナナメ方向のヘラミガキ調整を施す。底部外面は板状工具によるナデ調整を施す。底部は平底で、穿孔痕が残る。

時期：出土遺物の特徴より、古墳時代前期前半の遺構とする。

S K 204 (第107・117図)

2区中央部やや南東寄りB・C5区に位置する。第VI層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.36m、短径1.12m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、北側から東側壁体は緩やかに立ち上がる。断面形態は浅い逆台形状を呈するが、土坑北東部底面には、テラス状の高まりをもつ。埋土は、黒褐色粘質土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から、概ね古墳時代の遺構とする。

S K 205 (第107・118図)

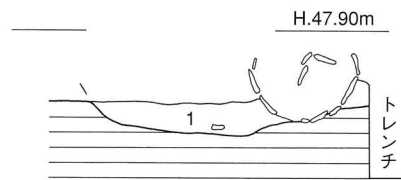
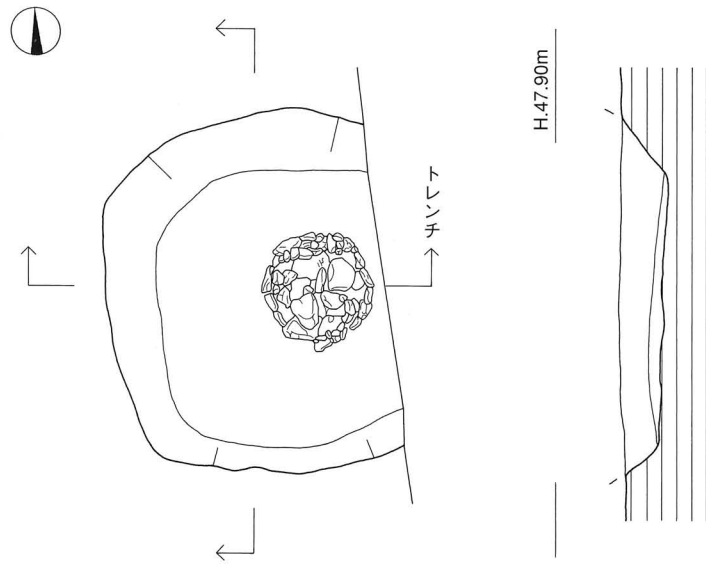
2区中央部南東寄りB5に位置する。第VI層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径0.85~1.00m、深さは14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は、黒褐色粘質土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から、概ね古墳時代の遺構とする。

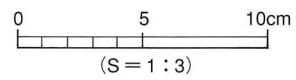
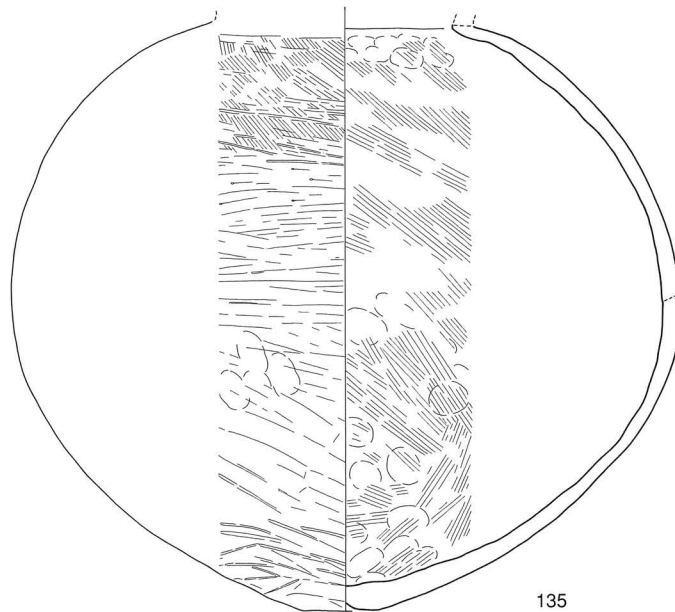
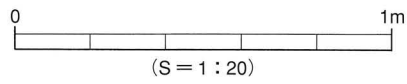
S K 206 (第107・118図)

2区南西部B6に位置する。第VI層上面で検出した。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.54m、深さは18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。土坑底面には凹凸がみられ、土坑西側底面が凹む。土坑内からの遺物の出土はない。

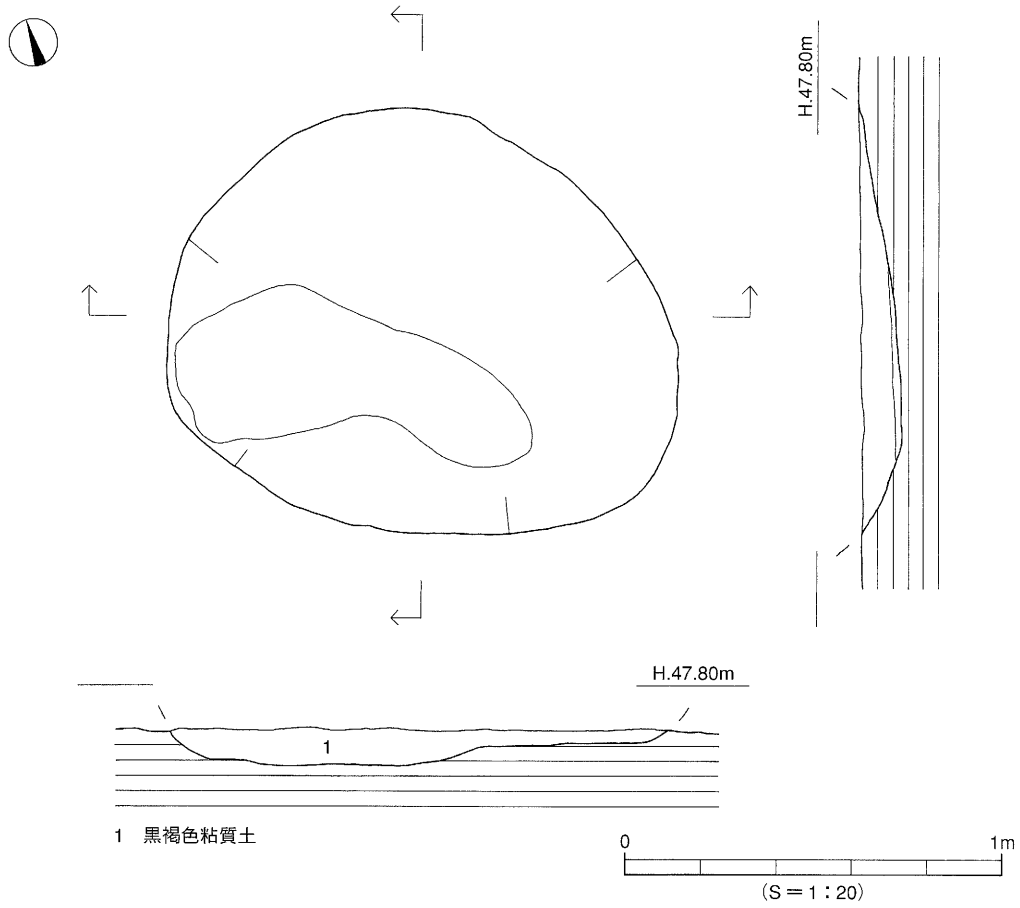
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や出土遺物から、概ね古墳時代の遺構とする。



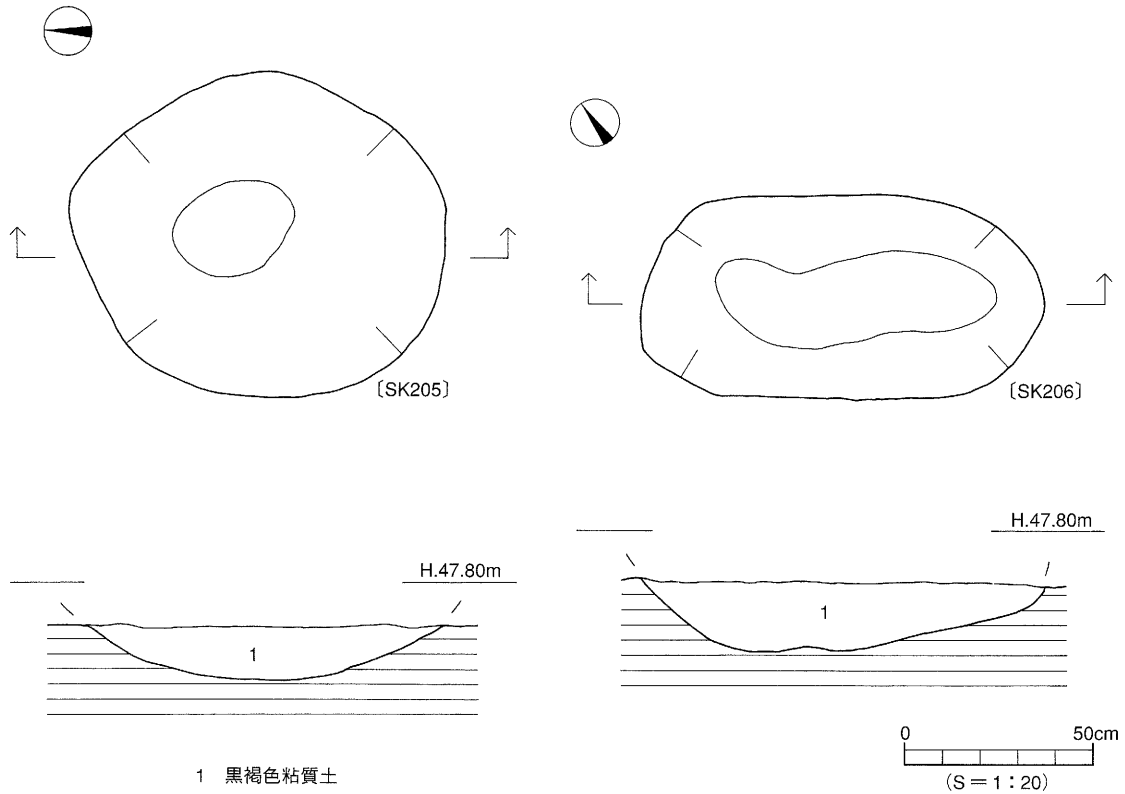
1 黒褐色粘質土



第116図 S K 203測量図・出土遺物実測図



第117図 S K 204測量図



第118図 S K 205・206測量図

(2) 古代の遺構と遺物

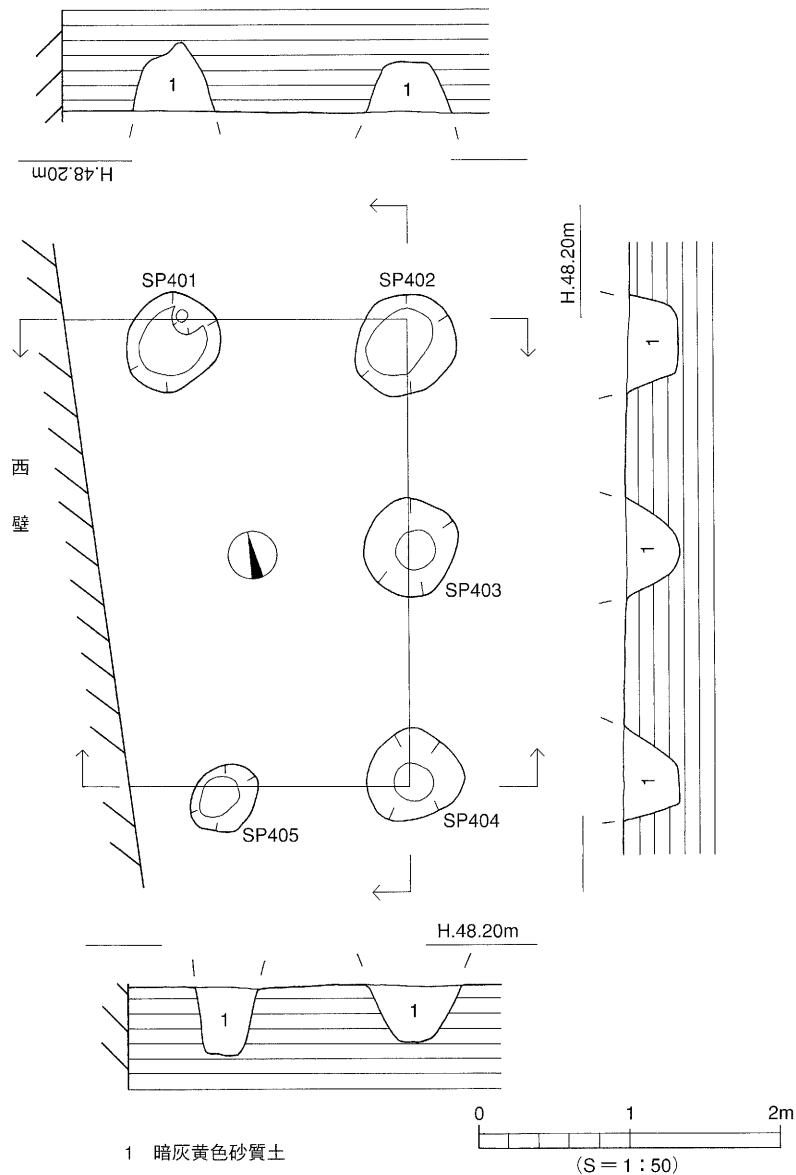
古代の遺構は掘立柱建物址 1 棟、溝 9 条、自然流路 1 条、土坑 2 基、畦畔 2 条である。

1) 掘立柱建物址

掘立401 (第113・119図)

4区南西部B15区に位置する建物址で、建物西側は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面で検出した。2間×1間以上の東西棟と考えられ、規模は桁行検出長2.3m、梁行長3.1mを測る。建物方位は真北より東側へわずかに振っている。建物を構成する5基の柱穴 (S P 401~405) は、平面形態が円形または楕円形を呈し、規模は長径0.65m、短径0.40m、深さは検出面35~45cmを測る。柱穴掘り方埋土は、暗灰黄色を呈する砂質土単層であり、建物北西部のS P 401底面にて径15cm、深さ10cm程度の柱痕跡を検出した。柱穴掘り方埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：検出層位や出土遺物から、概ね古代の建物址とする。ただし、時期の特定はできない。



第119図 掘立401測量図



2) 溝

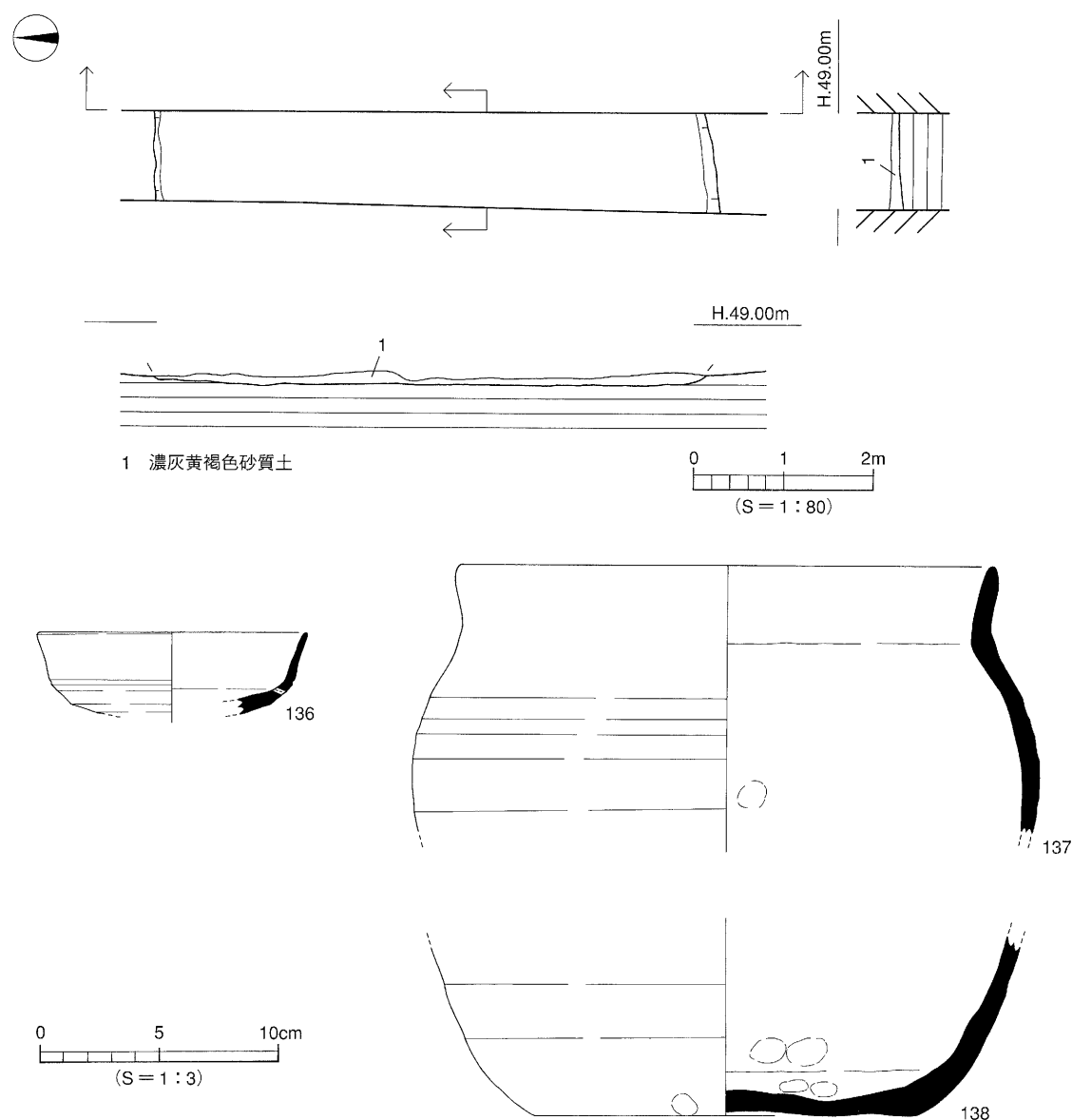
S D601 (第115・120図)

6区中央部やや北寄り南側B23・24区で検出した溝で、溝両端は調査区外に続く。6区は希少範囲の調査であるため、遺構の全体像を把握することが難しく、ここでは溝と報告する。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ①層が溝を覆う。東西方向の溝で、規模は東西検出長1.0m、南北検出長6.2m、深さは検出面下10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は濃い灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて、土師器片や須恵器片が散在して出土した。

出土遺物 (第120図、図版34)

136は須恵器坏で、体部下位には沈線状の凹みが巡る。137・138は同一個体の須恵器鉢で、口縁部は直立し、口縁端部は尖る。底部はやや上げ底となり、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。

時期：出土遺物の特徴と検出層位から、7世紀後半の溝とする。



第120図 S D601測量図・出土遺物実測図

S D 201 (第109・121図)

2区中央部A 5～C 5区で検出した東西方向の溝で、溝東側はS D 203と畦畔を切り、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長8.5m、幅0.2～0.6m、深さは検出面下9～12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面は東側から西側へ向けて、やや傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は、埋土中より土師器片と須恵器片が数点出土した。図化するものを1点掲載した。

出土遺物 (第121図)

139は、土師器坏で、円盤高台状の底部をもつ。

時期：出土遺物の特徴と検出層位から、11世紀代の遺構とする。

S D 202 (第109・122図)

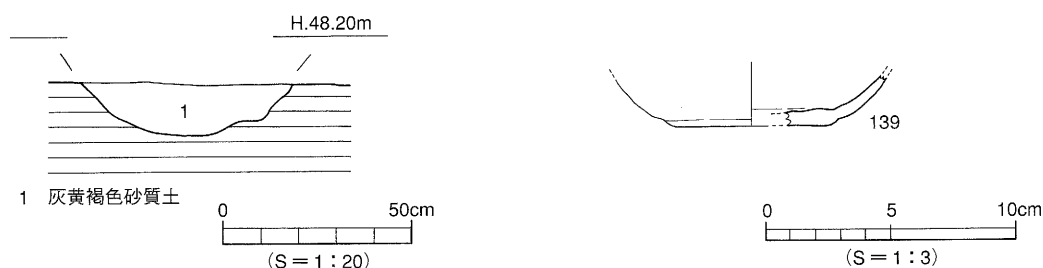
2区南側A 7～C 7区で検出した東西方向の溝で、溝東側はS D 203に接続し、溝両端は調査区外に続く。本溝は水田に伴う水路であり、溝両側には畦畔がとりつく。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が溝を覆う。規模は検出長8.0m、幅0.3～0.6m、深さは検出面下8～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面は東側から西側へ向けて、やや傾斜をなす(比高差3cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね古代、平安時代以前の遺構とする。

S D 203 (第109・122図)

2区東側C 3～7区で検出した南北方向の溝で、溝南側はS D 202に接続し、溝北端は消失し、南端は調査区外に続く。本溝はS D 202と同様、水田に伴う水路であり、溝両側に畦畔がとりつく。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長19.9m、幅0.3～0.5m、深さは検出面下7～12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面は北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差5cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位から概ね古代、平安時代以前の遺構とする。なお、S D 202とS D 203は同一の溝で、両者共に水田に伴う遺構である。



第121図 S D 201断面図・出土遺物実測図

S D204 (第108・122図)

2区東側B3～C5区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝北側は消失し、溝屈曲部と南端は調査区外に続く。第Ⅳ層上面での検出であり、第Ⅲ③層が覆う。規模は検出長20.8m、幅0.5～1.0m、深さは検出面下5～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底面には、わずかに凹凸がみられ、北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差5cm)。溝内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、埋土から概ね古代、飛鳥時代以前の溝とする。

S D301 (第111・122図)

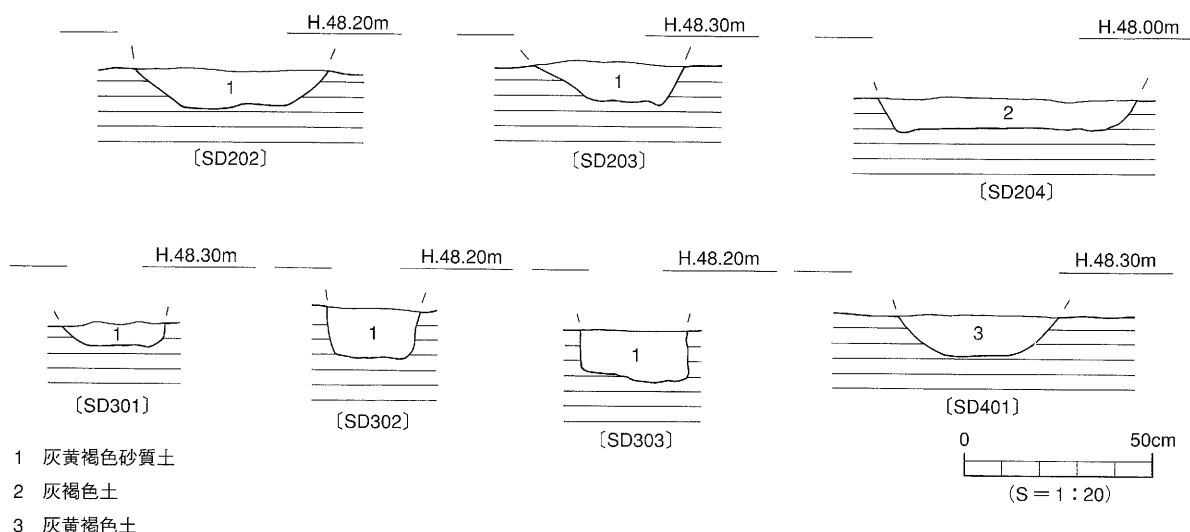
3区北側C8区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅲ②層上面から掘削されていることを確認した。溝上面は第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長1.9m、幅0.2～0.3m、深さは検出面下2～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面は、ほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土が2区検出のS D201と酷似することから、概ね古代、平安時代頃の遺構とする。

S D302 (第111・122図)

3区中央部やや北寄りC9区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が溝を覆う。規模は検出長2.0m、幅0.2～0.3m、深さ12～14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面は東側から西側へ向けてやや傾斜をなす(比高差2cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね古代、平安時代以前の溝とする。



第122図 S D202～204・301～303・401断面図

S D303 (第111・122図)

3区南側C10区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長2.1m、幅0.3～0.5m、深さ12～17cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。溝底面にはわずかに凹凸がみられ、東側から西側へ向けて傾斜をなす(比高差5cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね古代、平安時代以前の溝とする。

S D401 (第113・122図)

4区北側B13区で検出した東西方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅲ②層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。規模は検出長3.8m、幅0.4～0.5m、深さ6～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。溝底面は東側から西側へ向けて傾斜をなす(比高差4cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土がS D201と類似することから、概ね古代、平安時代頃の溝とする。

3) 自然流路

S R601 (第115図)

6区南側A25～B27区で検出した東西方向の流路で、流路南端は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ①層が覆う。6区は稀少範囲の調査であるため、遺構の全容は定かではないが、埋土中に砂や礫が多量にふくまれていたため、ここでは自然流路として報告する。規模は東西検出長1.2m、南北検出長9.6m、深さは20cm以上を測る。なお、流路は全掘しておらず、流路本来の深さや底面の状況は不明である。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色を呈する粗砂を基調とし、径3～5cm大の礫を大量に含む。流路内からは、土師器片や須恵器片が出土した。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位から概ね、古代の流路とする。

4) 土坑

S K202 (第109・123図)

2区北部B4区に位置する。第Ⅲ③層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.90m、短径0.74m、深さは4cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は比較的直立気味に立ち上がる。埋土は、暗灰黄色を呈する砂質土単層である。土坑底面には、やや凹凸がみられる。土坑中央部から北部の埋土中にて、厚さ2～3cmの焼土を数箇所検出した。また、土坑南側の埋土中にて、径2～4cm大の小礫が点在して出土した。なお、土坑内からの土器の出土はない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土から、概ね古代の遺構とする。

S K301 (第111・123図)

3区北部C8区に位置する。第Ⅲ③層上面で検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径0.82m、短径0.72m、深さは6cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は比較的直立気味に立ち上がる。埋土は、暗灰黄色を呈する砂質土単層である。土坑底面には、やや凹凸がみられる。土坑中央部付近の埋土中にて、広い範囲に炭化物層(厚さ1~2cm)を検出した。なお、土坑内からは、土器や石器の出土はない。

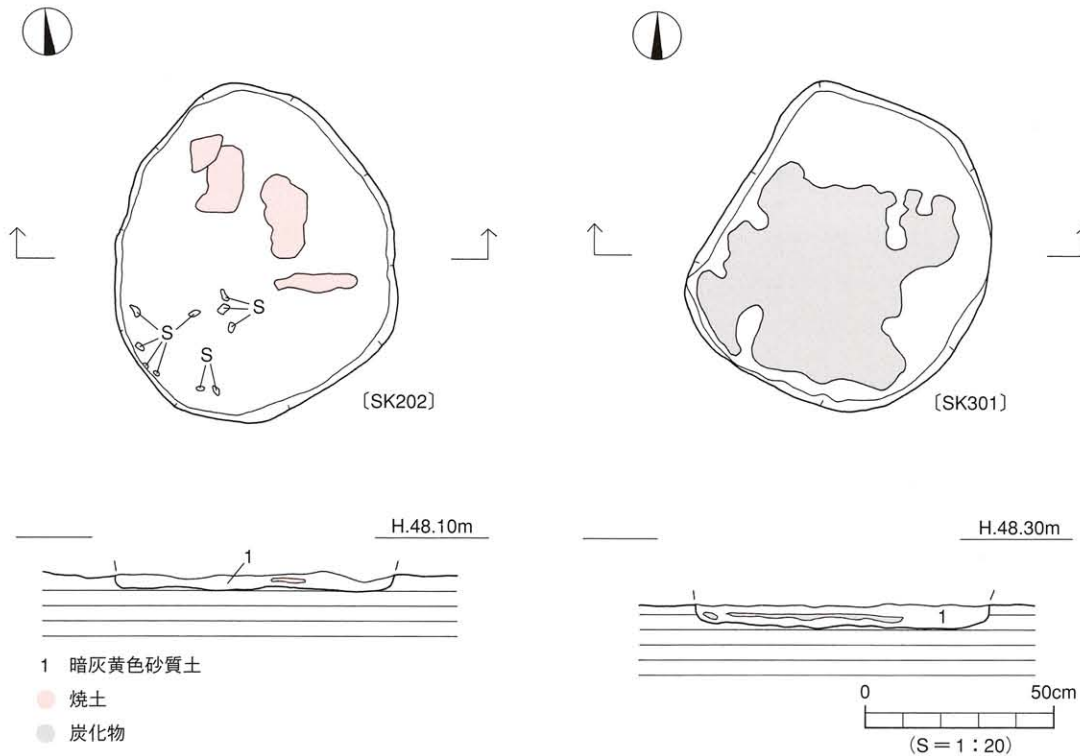
時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土がS K202と酷似することから、概ね古代の遺構とする。

5) 畦 畔

調査では、2区にて水田の畦畔を検出した。東西方向及び南北方向の畦畔で、一連のものではあるが、ここでは「畦」と呼称し、別々に説明をおこなう。なお、各畦畔の内側には、それぞれ溝(S D 202・203)が取り付いており、溝に取り付く両側の畦畔をそれぞれ、ひとつの畦畔として報告する。

畦201 (第109図)

2区東側C3~7区で検出した南北方向の畦畔で、北端は消失し、中央部は溝S D201に一部切られ、南端は調査区外に続く。なお、南側にて畔202に接続する。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が上面を覆う。調査壁の土層観察により、第Ⅲ③層と同様の灰黄色粘質土で構築されている。検出長20.6m、上場幅は各畦畔で約30~50cm、高さは検出面上3~5cm程度が残っていた。畦畔は第Ⅲ③層と土色が酷似しているが硬さが強く、その違いと土層観察により発掘調査時は畦畔として検出作業をおこなった。



第123図 S K 202・301測量図

畦202 (第109図)

2区南側A7～C6区で検出した東西方向の畦畔で、西側は消失し、中央部はSP207に切れ、東側は畦201と接続し、東端は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が上面を覆う。畦201と同様、第Ⅲ③層に酷似した灰黄褐色粘質土で構築されている。検出長5.0m、上場幅は各畦畔で約40～50cm、高さは検出面上3～6cmを測る。

時期：両畦畔共に検出層位から、概ね古代、平安時代以前の水田に伴うものと考えられる。なお、稀少範囲の調査であったため、水田区画の形状や規模は判断しえなかった。

(3) 中世の遺構と遺物

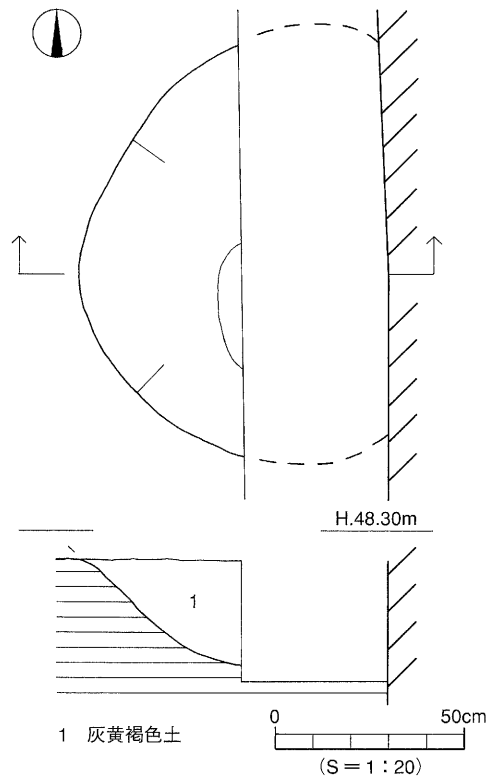
中世の遺構は、土坑1基、鋤址状遺構56条である。

1) 土坑

SK201 (第110・124図)

2区北東部C3・4区に位置し、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面で検出した。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.08m、東西検出長0.44m、深さは30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は、灰黄褐色土単層である。遺物は埋土中より、土師器片が数点出土したが図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位から概ね中世の遺構とする。



第124図 SK201測量図

## 2) 鋤址状遺構(鋤址)

調査では、1区から3区において鋤址状遺構56条を検出した。ここでは、区ごとに検出した遺構の説明をおこなう。

## ① 1区の調査(第107図)

1区北部B1区にて、鋤址2条(鋤址101・102)を検出した。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長0.6~0.8m、幅14~40cm、深さ4~8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。底面には、小ピット状の凹みがみられた。

## ② 2区の調査(第110図)

2区では調査区全域にて、鋤址35条(鋤址201~235)を検出した。すべて第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長0.3~4.0m、幅6~42cm、深さは1~8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土はすべて灰黄褐色土単層である。底面には数多くの凹みがみられた。なお、調査区北東部で検出した鋤址201~215は、掘削方向が北東-南西であるのに対して、調査区中央部から南側で検出した鋤址216~235は南北方向に掘削されている。

## ③ 3区の調査(第112図)

3区では調査区全域にて、鋤址19条(鋤址301~319)を検出した。すべて第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は検出長0.4~2.7m、幅6~36cm、深さ2~6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土単層である。底面には鋤による数多くの凹みがみられた。鋤址は、すべて南北方向に掘削されている。

時期：調査で検出した鋤址のうち、2区南側と3区で検出した鋤址は、掘削方向が同じであることから、同一時期の遺構である可能性が高い。また、2区北部で検出した鋤址は北東-南西方向に掘削されており、位置関係等から判断すると、2区の南部で検出した鋤址とは時期が異なる可能性があると考えられる。ただし、希少範囲の調査であるため、鋤址に伴う水田址の規模や形状は不明である。調査で検出した鋤址内からは、遺物の出土はないため、時期特定は困難であるが、検出層位等から概ね中世の遺構とする。

## (4) その他の遺構と遺物

調査ではピット46基のほか、包含層及び表採資料として遺物が出土した。

## 1) ピット(第107~112・114図)

調査では、46基のピットを検出した。ここでは、区ごとに説明をおこなう。

① 1区：5基のピット(S P 101~105)を検出した。すべて、第Ⅲ①層上面での検出である。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径32~64cm、深さ7~12cmを測る。埋土は2種類あり、S P 101・102は灰黄褐色土、S P 103~105は灰褐色土である。ピット内からは、遺物の出土はない。

② 2区：2区では31基のピット(S P 201・204~233)を検出した。それぞれ、検出面が異なることから、層ごとに説明をする。まず、第Ⅲ①層上面では調査区北東部C3区にて、ピット1基(S P 201)を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径42cm、短径33cm、深さ4cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。第Ⅲ②層上面では調査区南側A6~B7区にて、5基のピット(S P 204~208)を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径20~80cm、深さ3~30cmを測る。埋土は暗灰黄色砂質土である。ピット内からは少量の土師器片が出土した。第Ⅳ層上面では調査区西部A3~B

7 区にて、10基のピット（S P 209～218）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径15～75cm、深さ7～14cmを測る。埋土は、すべて灰褐色土である。ピット内からは、少量の土師器片が出土した。第Ⅵ層上面では調査区南西部 B 3～C 7 区にて15基のピット（S P 219～233）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径30～70cm、深さ5～22cmを測る。埋土は、すべて黒褐色土である。ピット内からは須恵器片や土師器片が数点出土した。

③ 3区：3区では4基のピット（S P 301～304）を検出した。第Ⅲ①層上面では調査区北西部 C 7・8 区にて2基のピット（S P 301・302）を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は12～27cm、深さ2～6cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。第Ⅲ②層上面では調査区北部 C 8 区にて、2基のピット（S P 303・304）を検出した。平面形態は円形と楕円形を呈し、規模は径26～40cm、深さ26cmを測る。埋土は暗灰黄色を呈する砂質土である。ピット内からの遺物の出土はない。

④ 5区：5区ではピット5基（S P 501～505）を検出した。調査区南側 C 19に位置し、すべて第Ⅲ②層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は径18～37cm、深さ4～24cmを測る。埋土は2種類あり、S P 501～504は灰黄褐色土、S P 505は暗灰黄色を呈する砂質土である。ピット内からの遺物の出土はない。

⑤ 6区：6区ではピット1基（S P 601）を検出した。B 22区に位置し、平面形態は楕円形を呈し、規模は径20～42cm、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色土であり、遺物は出土していない。

## 2) 包含層出土遺物（第125図、図版35）

### ① 第Ⅳ層出土遺物（140・141）

140は弥生土器の複合口縁壺で、櫛描き波状文8条を施す。141は弥生土器の甕形土器底部で、外面にタタキ調整を施す。弥生時代末。

### ② 第Ⅲ層出土遺物（142～155）

142～148は須恵器坏蓋で、142・143は天井部と口縁部の境界に明瞭な稜をもつ。7世紀前半。144～146はかえりをもつ坏蓋で、かえり端部は尖り気味に仕上げる。7世紀後半。147は口縁部が下方に屈曲し、口縁端面は凹む。8世紀前半。148は乳頭状のつまみが付く。7世紀中葉。149・150は須恵器坏身で、受部は上方にひねり出されている。7世紀前半。151は高台の付く坏で、高台内端面で接地する。8世紀前半。152・153は須恵器鉢、154は高坏で、152は体部中位に沈線状の凹みが巡る。7世紀。155は土師器高坏で、柱部は11面の面取りが施されている。8世紀。

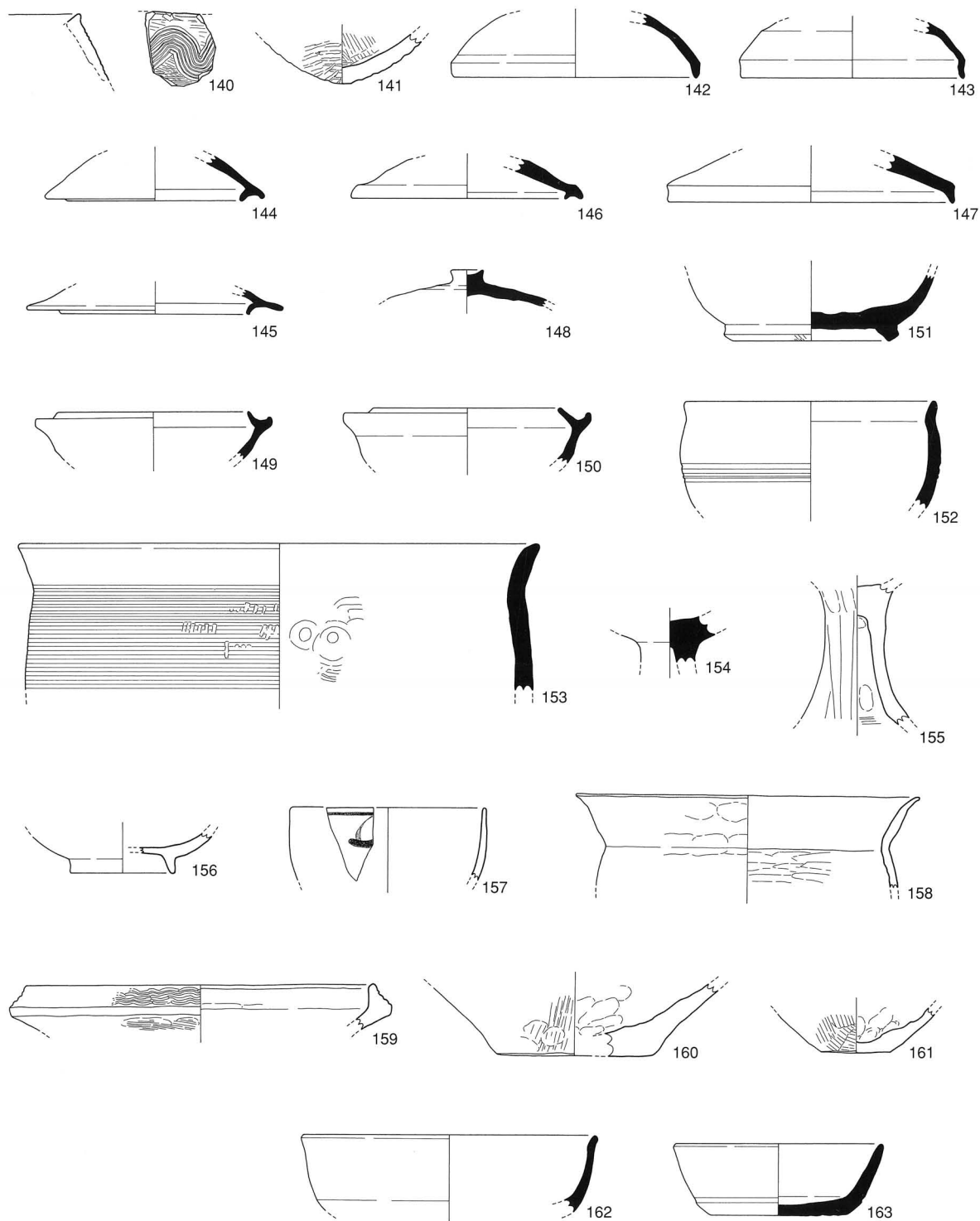
### ③ 第Ⅰ層出土遺物（156・157）

156・157は肥前系の碗である。18世紀。

## 3) 地点不明出土遺物（第125・126図、図版35・36）

158は土師器甕で、口縁部は外反する。5世紀。159は弥生土器の複合口縁壺で、櫛描き波状文4条を施す。弥生時代後期後半。160は弥生土器の壺形土器、161は甕形土器の底部で、平底となる。弥生時代後期後半。162・163は須恵器坏で、163の体部下位には沈線状の凹みが巡り、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。7世紀後半。164は須恵器壺で、口縁端部は外方に肥厚し、外面に自然釉が付着する。165～168は須恵器甕で、165は口縁端部が上方に肥厚する。166～168の外面には格子叩きを施す。8世紀。169は土錘で、径8mm大の孔を穿つ。170はサヌカイト製の剥片である。

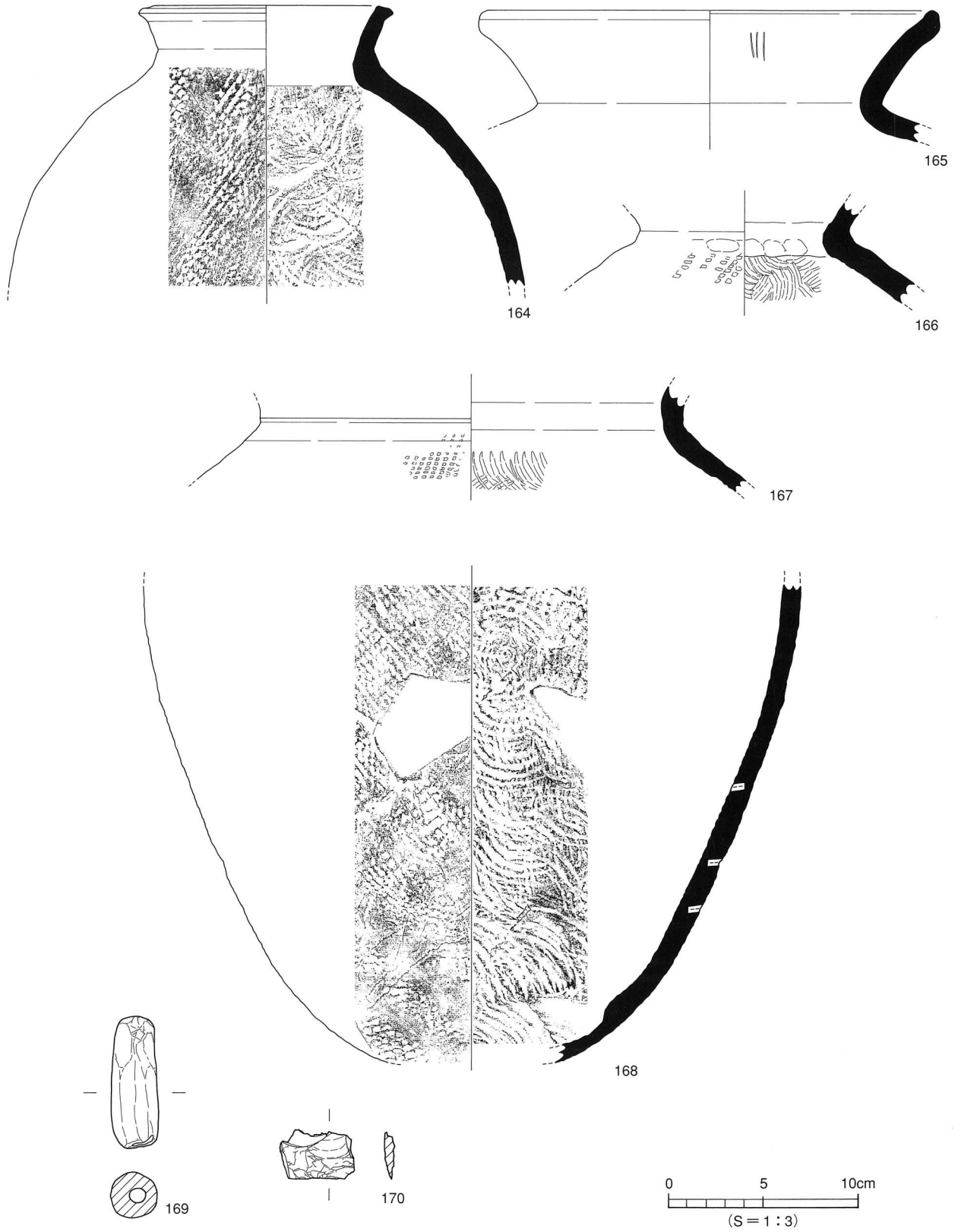




第IV層：140・141  
 第III層：142～155  
 第I層：156・157  
 地点不明：158～163

0 5 10cm  
 (S = 1 : 3)

第125図 包含層・地点不明(1)出土遺物実測図



地点不明：164～170

第126図 地点不明出土遺物実測図（2）

## 4. 小 結

調査では、古墳時代から中世までの遺構と遺物を確認した。

### (1) 層 位

調査では、弥生時代の堆積層（第Ⅴ層）と第Ⅶ層（礫層）を除く基本層位のうち5層の土層を確認した。中世の堆積層である第Ⅱ層は4・5・6区を除く地区にみられ、約10cmの堆積をなす。古代の堆積層である第Ⅲ層は比較的堆積が厚く、3区では60cm以上の堆積をなす。なお、本層中にて鋤址状遺構や水田耕作に伴う畦畔や溝を検出した。検出状況や出土遺物から、第Ⅲ③層は飛鳥時代、第Ⅲ②層は奈良時代から平安時代、第Ⅲ①層は平安時代までに堆積した土層と考えられる。古墳時代の堆積層である第Ⅳ層は、調査地北部の1区と2区にみられ、20cm程度の堆積をなす。第Ⅵ層は褐灰色を呈する砂質土で、本層上面が調査における最終遺構検出面となる。3区と6区を除く地区にあり、層厚60cm以上を測り安定した堆積をなす。

### (2) 遺 構

検出した遺構は、掘立柱建物址1棟、溝9条、自然流路1条、土坑7基、鋤址状遺構56条、畦畔2条、ピット46基である。ここでは、時代別にまとめをおこなう。

#### 1) 弥生時代

弥生時代の遺構は未検出である。ただし、包含層及び表採資料中に弥生時代後期の遺物が含まれている。これは、調査地北方にある水泥地区や高井地区において同時期の遺物が出土しており、調査地近隣地域に弥生時代集落の存在を示唆する資料である。

#### 2) 古墳時代

古墳時代では、土坑を検出した。古墳時代の堆積層である第Ⅳ層の検出と、これらの遺構の存在は、調査地北方にある高井地区と同様、古墳時代集落の広がりを示すものである。

#### 3) 古 代

古代では、掘立柱建物址や溝、自然流路、土坑のほかに鋤址状遺構や畦畔を確認した。このうち、2区では第Ⅲ層中にて、畦畔や溝を検出した。検出層位や出土品から平安時代以前に作られた水田遺構と考えられる。全体像の把握はできなかったが、方形区画をもつ水田と推測される。また3区では、2区検出の溝と同時期と思われる東西方向に延びる溝があり、古代水田域が南高井遺跡2次調査地北半部に展開していたものと考えられる。

#### 4) 中 世

中世の遺構は、土坑と鋤址状遺構を検出した。特に、鋤址状遺構は調査地北部、2区と3区にて検出され、南北方向または北東－南西方向に掘削されている。明確な時期特定はできないが、少なくとも、鎌倉時代以降の水田耕作にともなう遺構であり、中世段階の水田区画や形状を解明する好資料となる。

以上、簡単ではあるが調査のまとめをおこなった。南高井遺跡2次調査では、古代から中世にかけて水田耕作が営まれており、とりわけ平安時代以前の水田址の検出は、今後、古代の松山平野における水田遺構解明において貴重なものとなる。

表45 S K 203出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
135	壺	底径 3.0 残高 23.2	底部に穿孔痕あり。	㊦ハケ→ミガキ ㊧板ナデ状	㊨ハケ(7~8本/cm) マメツ	乳橙色 乳黄褐色	密・赤 ◎	黒斑	34

表46 S D 601出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
136	坏	口径 (11.2) 残高 3.4	体部下位に沈線1条。	㊩回転ナデ ㊪回転ハラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
137	鉢	口径 (22.4) 残高 11.0	1/5の残存。	ナデ マメツ	ナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ○		34
138	鉢	底径 (16.0) 残高 7.4	わずかに上げ底。	ナデ マメツ	ナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ○		34

表47 S D 201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
139	坏	底径 (6.0) 残高 2.0	円盤高台状の底部。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎		

表48 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
140	壺	残高 3.2	複合口縁壺。櫛描波状文8条。	ハケ→ ヨコナデ	ハクリ?	黒色 淡灰色	石・長(1~2) 安 ◎		
141	甕	底径 0.8 残高 2.4	尖り底。	タタキ	ハケ・ナデ (マメツ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎	黒斑	

表49 第Ⅲ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
142	坏蓋	口径 (11.5) 残高 3.0	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
143	坏蓋	口径 (10.6) 残高 2.7	天井部と口縁部の境界に稜あり。	㊫回転ハラケズリ ㊬回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
144	坏蓋	口径 (10.4) 残高 2.1	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
145	坏蓋	口径 (12.2) 残高 1.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
146	坏蓋	口径 (11.0) 残高 1.9	小片。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
147	坏蓋	口径 (13.6) 残高 2.3	口縁端面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
148	坏蓋	つまみ径 1.5 残高 1.7	小片。	㊭回転ナデ ㊮回転ハラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		35
149	坏身	口径 (9.0) 残高 2.3	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
150	坏身	口径 (9.0) 残高 2.6	小片。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	自然釉	
151	坏	底径 (8.3) 残高 3.1	高台付の坏。	回転ナデ	回転ナデ	白色 白色	密 ◎	自然釉	
152	鉢	口径 (12.0) 残高 5.1	体部に沈線3条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		35
153	鉢	口径 (24.8) 残高 7.0	小片。	㊯平行叩き →カキメ	㊰円弧叩き →ナデ	乳灰色 灰色	密 ○		35
154	高坏	残高 2.2	小片。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
155	高坏	残高 6.8	面取り (11面)。	ケズリ ナデ	ヨコナデ ハケ	橙色 淡橙色	長(1) ◎		35

遺物観察表

表50 第I層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
156	碗	底径 14.9 残高 1.7	肥前焼。小片。	施釉	施釉	乳黄緑色 淡緑灰色	密 ◎	胎土： 灰色	35
157	碗	口径 (9.4) 残高 3.4	肥前焼。小片。	施釉	施釉	青白色 青白色	密 ◎	胎土： 灰白色	35

表51 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
158	甕	口径 (16.4) 残高 4.4	「く」の字状口縁。	マメツ (ナデ)	◎マメツ ●工具ナデ	灰茶褐色 暗褐色	石・長(1~4) ◎		
159	壺	口径 (16.6) 残高 2.1	複合口縁壺。櫛描波状文4条。	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2) ◎		
160	壺	底径 (7.5) 残高 3.5	平底。	ナデ ミガキ?	ナデ	橙茶色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
161	甕	底径 (3.2) 残高 2.2	平底。	ハケ(6本/cm) →ナデ	ナデ	暗褐色 淡褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
162	坏	口径 (13.8) 残高 3.6	口縁部はやや外反。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
163	坏	口径 (9.8) 器高 3.4	底部外面回転ヘラ切り未調整。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
164	壺	口径 (11.9) 残高 14.5	口縁端部は外方に肥厚。	●格子叩き →ナデ	◎回転ナデ ●円弧叩き	緑灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
165	甕	口径 (24.0) 残高 6.8	口縁端部は上方にやや肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 白灰色	密 ◎		
166	甕	残高 5.2	小片。	●格子叩き ナデ	◎回転ナデ ●円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
167	甕	残高 5.5	肩部に沈線1条。	●格子叩き →ナデ	◎回転ナデ ●円弧叩き	緑灰色 淡灰色	密 ◎	自然釉	
168	甕	残高 24.8	長胴。1/5の残存。	格子叩き	円弧叩き	緑灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
169	土錘	長さ 6.9 幅 2.4	穿孔(φ0.8cm)。	ナデ	工具ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	35

表52 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
170	剥片	—	サヌカイト	2.5	3.9	0.5	6.9		35

表53 地点不明出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
171	鉄滓	—	鉄	3.5	4.0	2.9	34.2		36
172	鉄滓	—	鉄	2.5	3.9	2.0	27.0		36



第9章

# 南 高 井 遺 跡

— 3 次 調 查 —





## 第9章 南高井遺跡3次調査

### 1. 調査の経緯

#### (1) 調査に至る経緯

2003（平成15）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道「水泥南高井線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地北方には南高井遺跡2次調査地や高井遺跡、水泥遺跡があり、弥生時代から中世までの集落関連遺構や生産遺構及び遺物が確認されている。

このことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は道路建設課と委託契約を結び、2005（平成17）年11月7日から同年11月11日の間に試掘調査を実施した。その結果、土坑やピットのほか、土師器片や須恵器片を検出した。

この結果を受け、文化財課と道路建設課、及び埋文センターの三者は協議を重ね、道路工事によって失われる遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は道路建設課と埋文センターが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、2005（平成17）年12月1日より開始した。

#### (2) 調査の経緯（第127図）

調査は2005（平成17）年12月1日から2006（平成18）年3月31日まで実施した。以下、調査工程を略記する。まず、調査地内を北側から南側へ2つの区（1区・2区）に分け、さらに、2区は2A区から2D区までの4地区に細分して調査を実施した。12月1日より、2区の調査を開始する。なお、調査地は運送会社の敷地の一部であり、地表面にはアスファルトや近現代の建物基礎があり、重機によるこれらの除去と、表土層の除去に数日を費やした。12月8日より、作業員を増員し、遺構検出作業をおこなった。2A区の調査と併行して、2B区の調査をおこなった。2A区では自然流路、2B区からは自然流路と土坑、ピットを検出した。12月22日、2A区と2B区の調査を終了した。2006（平成18）年1月5日より、2C区の調査を開始する。2C区では遺構面が2面あり、上面では鋤址状遺構、下面からは自然流路や土坑、ピットを検出した。2月17日、2C区の調査を終了し、引き続き2D区の調査を開始する。2D区も2C区と同様に、遺構面が2面あり、上面では鋤址状遺構、下面からは自然流路とピットを検出した。3月9日より、2区の調査と併行して1区の調査を開始する。1区では自然流路を検出した。3月23日、1区と2区の遺構完掘状況写真を撮影し、重機による埋め戻し作業をおこなう。3月31日、屋外調査をすべて終了した。

#### (3) 調査組織

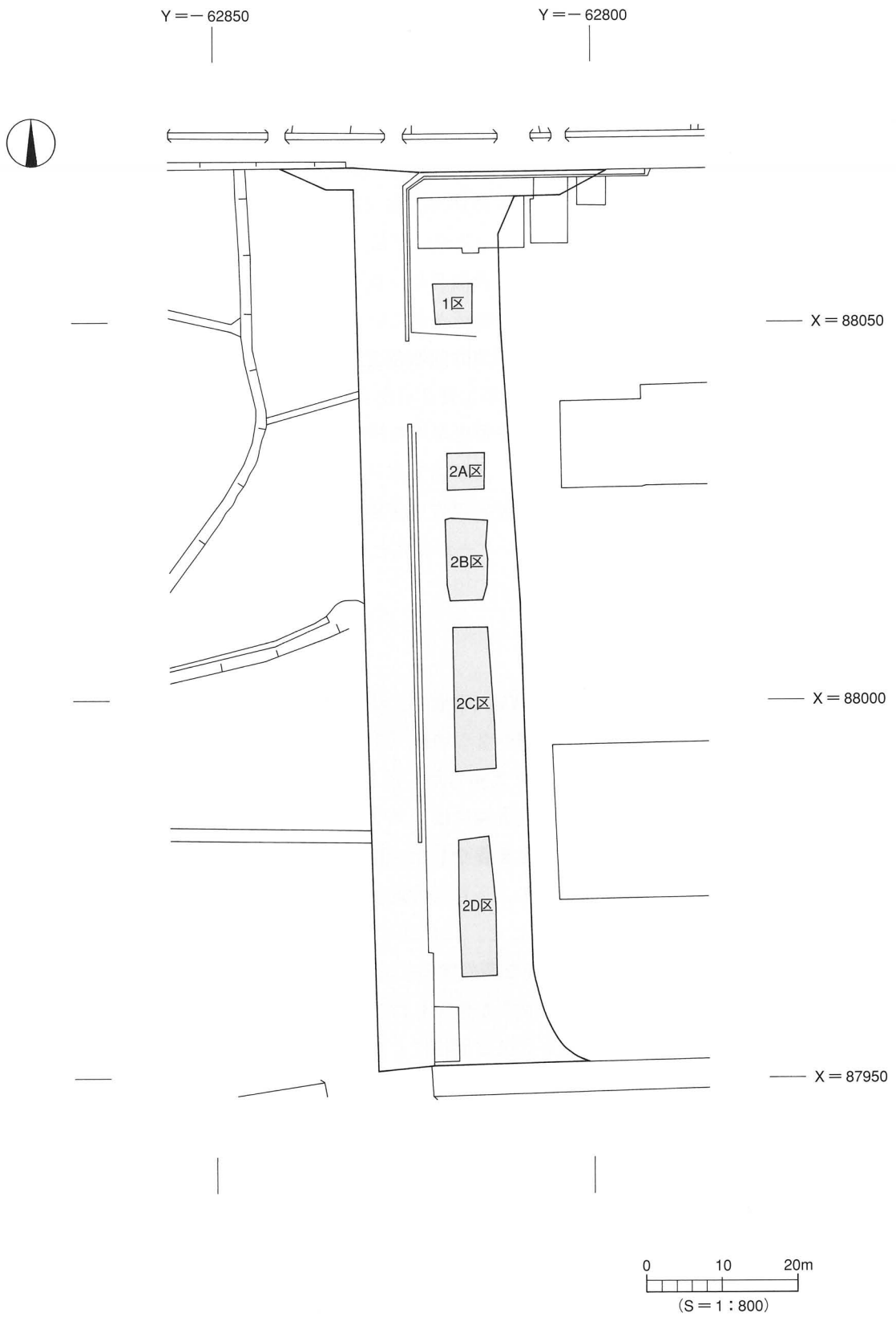
所在地：松山市南高井町173-4 外

調査期間：2005（平成17）年12月1日～2006（平成18）年3月31日

調査面積：1,646m<sup>2</sup>

調査担当：水本 完児、宮内 慎一

南高井遺跡 3次調査



第127図 調査区測量図

## 2. 層 位

### (1) 基本層位 (第128～132図、図版37)

調査地の基本層位は、第Ⅰ層から第Ⅲ層、及び第Ⅶ層の4層であり、第Ⅳ層(古墳時代)と第Ⅴ層(弥生時代)は未検出である。調査地は運送会社の敷地の一部であり、現況の標高を測量すると標高50.2m前後を測る。

第Ⅰ層—近現代の造成、及び水田耕作に伴う客土で、土質、土色の違いにより6層に分層される。

第Ⅰ①層：アスファルトや建物基礎等に伴う造成土で、調査地全域にみられ、地表下20～110cmまで開発がおこなわれている。

第Ⅰ②層：褐灰色土で、水田耕作に伴う耕作土である。調査地ほぼ全域にみられ層厚5～20cmを測る。

第Ⅰ③層：褐灰白色土で、水田耕作に伴う旧耕作土である。調査地ほぼ全域にみられ層厚5～10cmを測る。

第Ⅰ④層：黄灰色土で、水田耕作に伴う床土である。調査地ほぼ全域にみられ層厚3～20cmを測る。

第Ⅰ⑤層：黄褐色土で、水田耕作に伴う旧床土である。2区のみにみられ層厚3～15cmを測る。

第Ⅰ⑥層：黄橙色土で、水田耕作に伴う旧床土である。2C、2D区にみられ層厚3～10cmを測る。

第Ⅱ層—灰褐色土で、調査地全域にみられ層厚5～25cmを測る。2C区と2D区では、本層上面にて鋤址状遺構を検出した。

第Ⅲ層—土質、土色の違いにより3層に分層される。

第Ⅲ①層：灰黄色土で、2区のみにみられ層厚3～25cmを測る。2D区では、本層上面にて自然流路とピットを検出した。なお、本層中からは、平安時代に時期比定される遺物が出土した。

第Ⅲ②層：灰黄色を呈する砂質土で、2区のみにみられ層厚5～25cmを測る。本層中からは、奈良時代から平安時代までに時期比定される須恵器や土師器が出土した。

第Ⅲ③層：にぶい黄褐色土で、調査地ほぼ全域にみられ層厚5～30cmを測る。2A、2B、2C区では、本層上面にて自然流路や土坑、ピットを検出した。なお、本層中からは飛鳥時代から奈良時代までに時期比定される遺物が出土した。

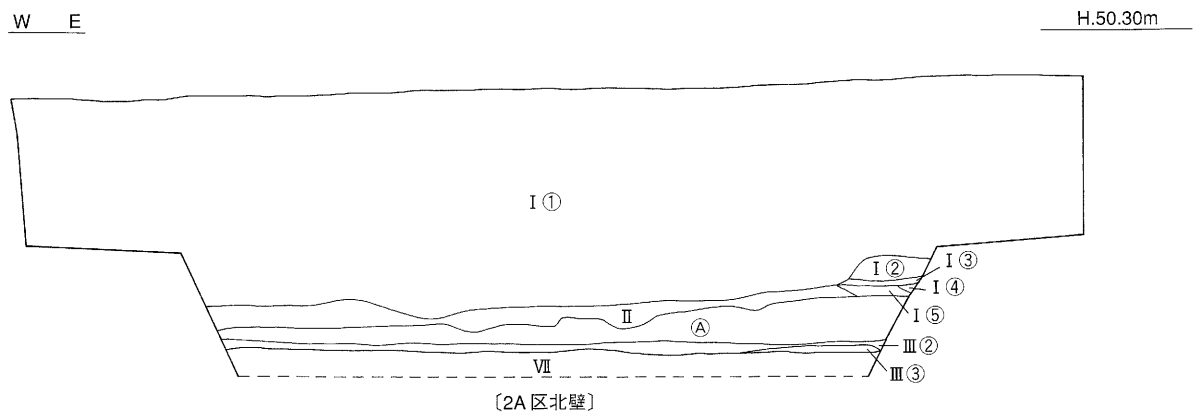
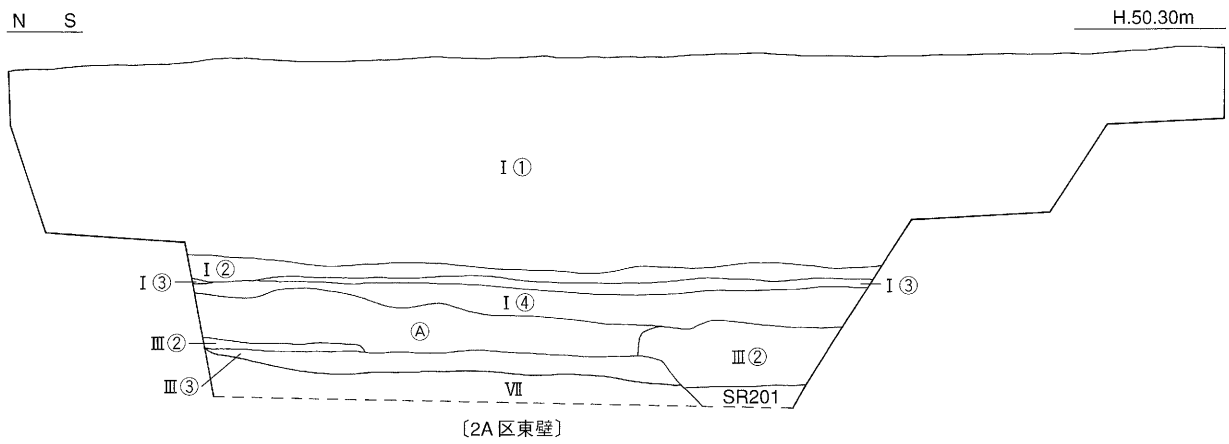
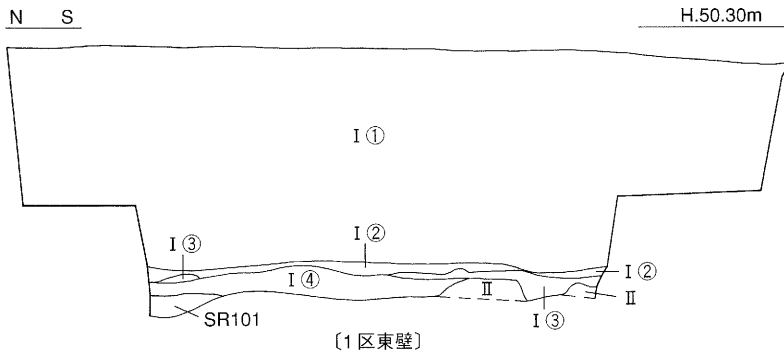
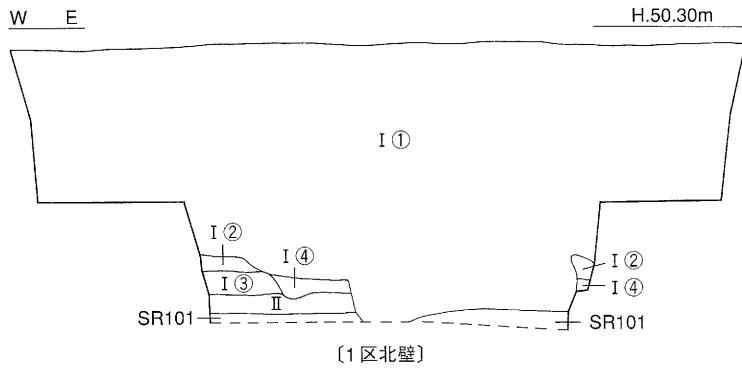
第Ⅶ層—灰色粗砂を基調とし、径5～20cm大の礫を含む砂礫層である。2区全域にみられる。本層上面はわずかに起伏があるが、標高48m前後を測る。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B・C、北から南へ1・2・3・・・19とし、A1・A2・・・C19といったグリット名を付した。

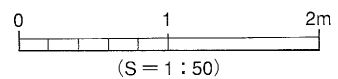
### (2) 検出遺構・遺物 (表54・図版38・39)

調査では自然流路5条〔古代：4条、中世：1条〕、土坑3基〔古代：2基、中世：1基〕、鋤址状遺構71条〔中世〕、ピット13基を検出した。遺物は遺構や包含層等からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器のほか管玉が1点出土した。以下、時期別に遺構を紹介する。

南高井遺跡 3次調査

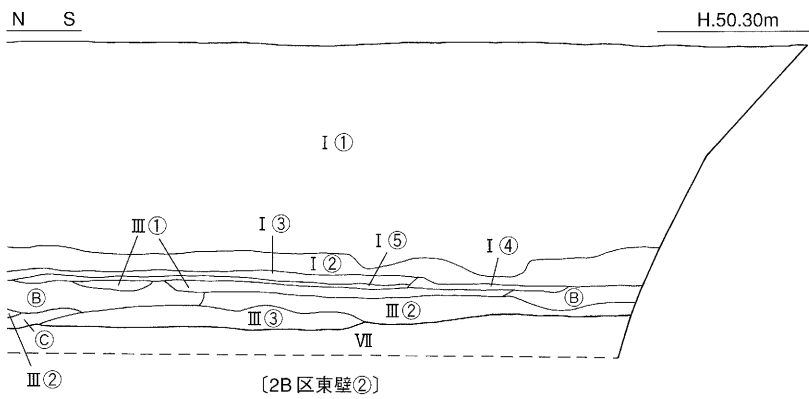
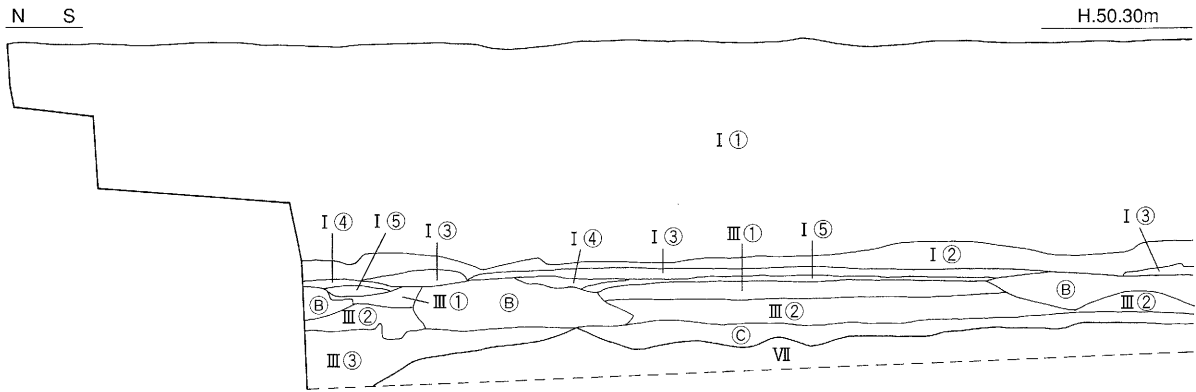


- |          |              |          |
|----------|--------------|----------|
| I① 造成土   | I⑤ 黄褐色土      | VII 灰色砂礫 |
| I② 褐灰色土  | II 灰褐色土      | (A) 灰色砂  |
| I③ 褐灰白色土 | III② 灰黄色砂質土  |          |
| I④ 黄灰色土  | III③ にぶい黄褐色土 |          |

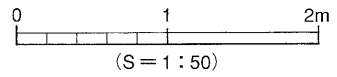


第128図 1区・2A区土層図

層 位

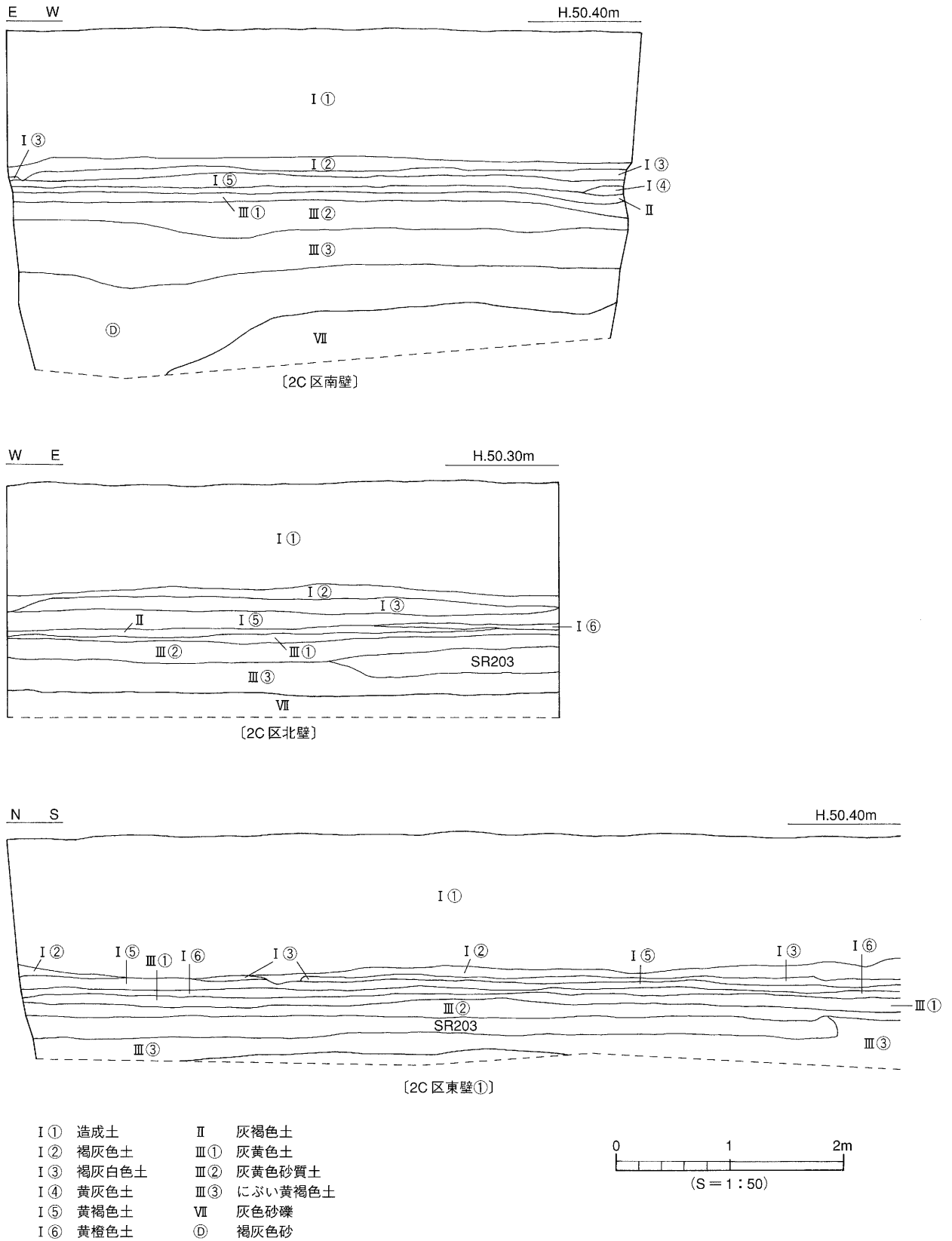


- I ① 造成土
- I ② 褐灰色土
- I ③ 褐灰白色土
- I ④ 黄灰色土
- I ⑤ 黄褐色土
- III ① 灰黄色土
- III ② 灰黄色砂質土
- III ③ にぶい黄褐色土
- VII 灰色砂礫
- B 灰白色砂
- C 灰色砂



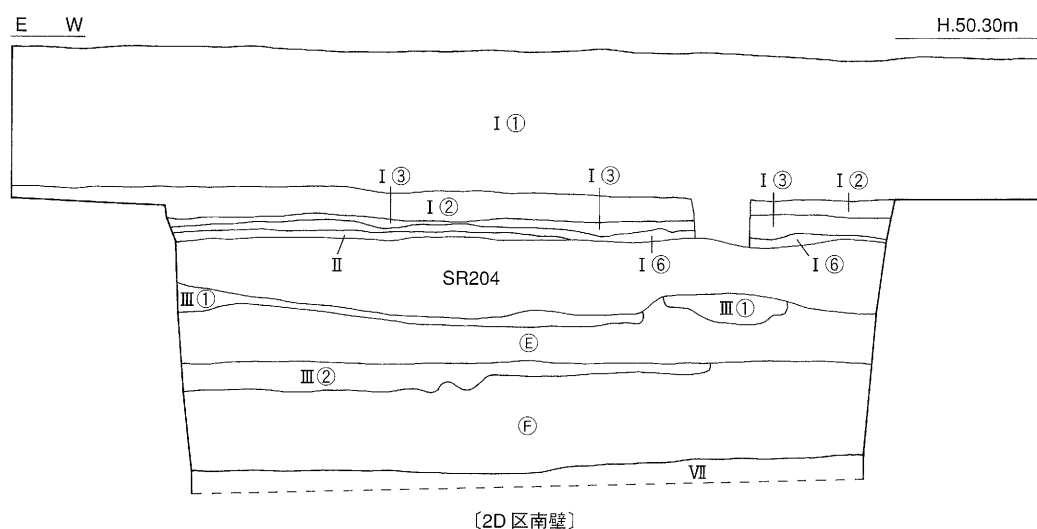
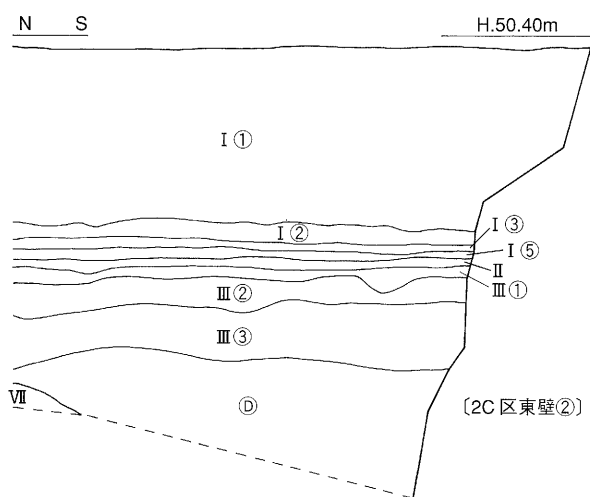
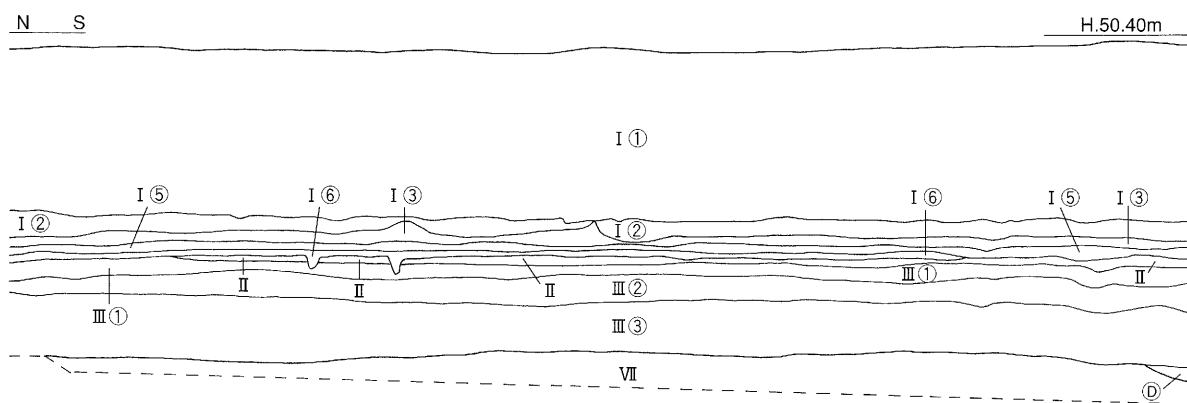
第129図 2B区土層図

南高井遺跡 3次調査

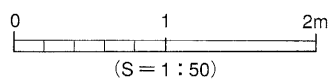


第130図 2C区土層図(1)

層 位

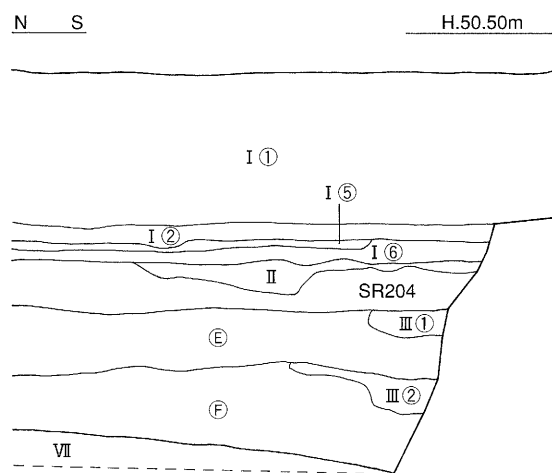
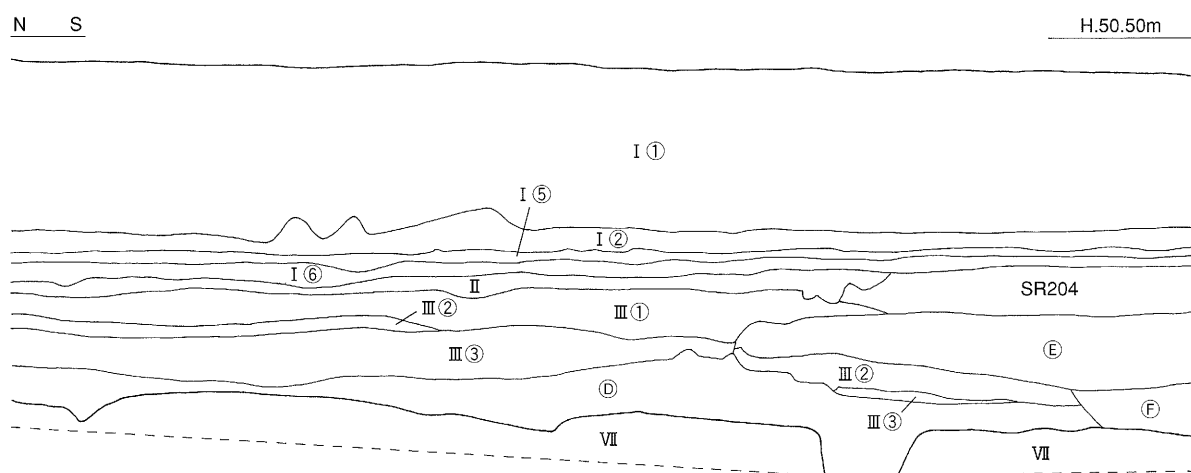
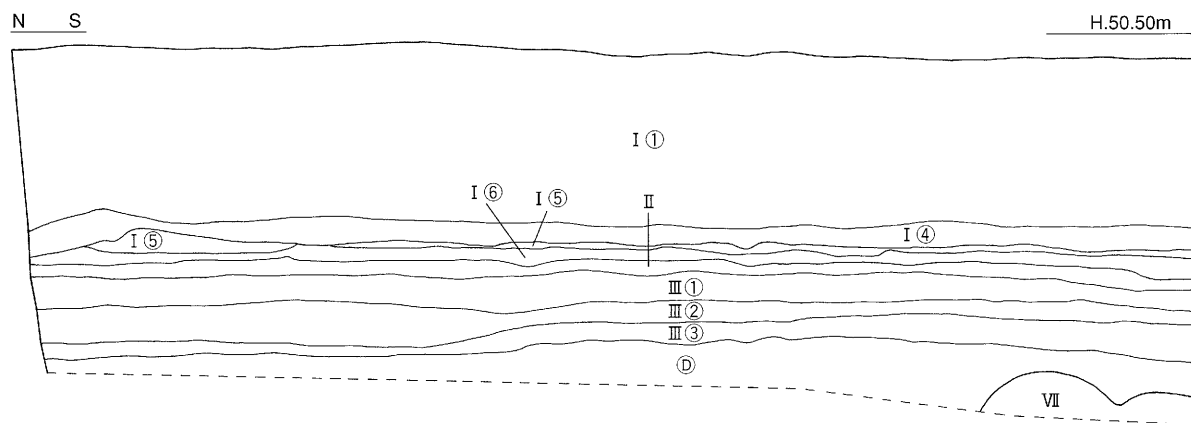


- |           |               |        |
|-----------|---------------|--------|
| I ① 造成土   | II 灰褐色土       | ④ 褐灰色砂 |
| I ② 褐灰色土  | III ① 灰黄色土    | ⑤ 灰色砂  |
| I ③ 褐灰白色土 | III ② 灰黄色砂質土  | ⑥ 灰褐色砂 |
| I ⑤ 黄褐色土  | III ③ にぶい黄褐色土 |        |
| I ⑥ 黄橙色土  | VII 灰色砂礫      |        |



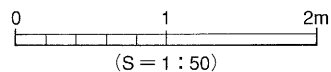
第131図 2C区(2)・2D区(1)土層図

南高井遺跡 3次調査



- |          |               |        |
|----------|---------------|--------|
| I ① 造成土  | II 灰褐色土       | ⓓ 褐灰色砂 |
| I ② 褐灰色土 | III ① 灰黄色土    | ⓔ 灰色砂  |
| I ④ 黄灰色土 | III ② 灰黄色砂質土  | ⓕ 灰褐色砂 |
| I ⑤ 黄褐色土 | III ③ にぶい黄褐色土 |        |
| I ⑥ 黄橙色土 | VII 灰色砂礫      |        |

[2D区東壁]

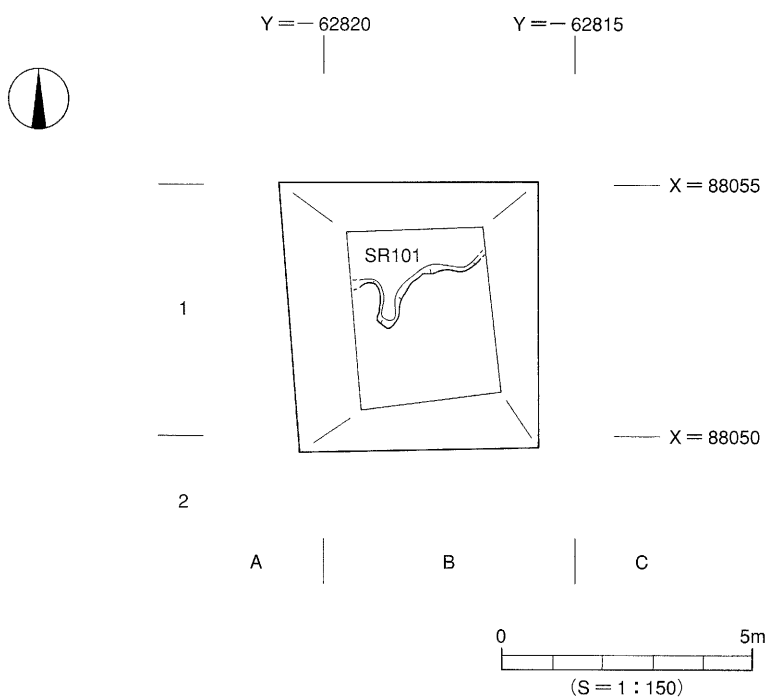


第132図 2D区土層図(2)



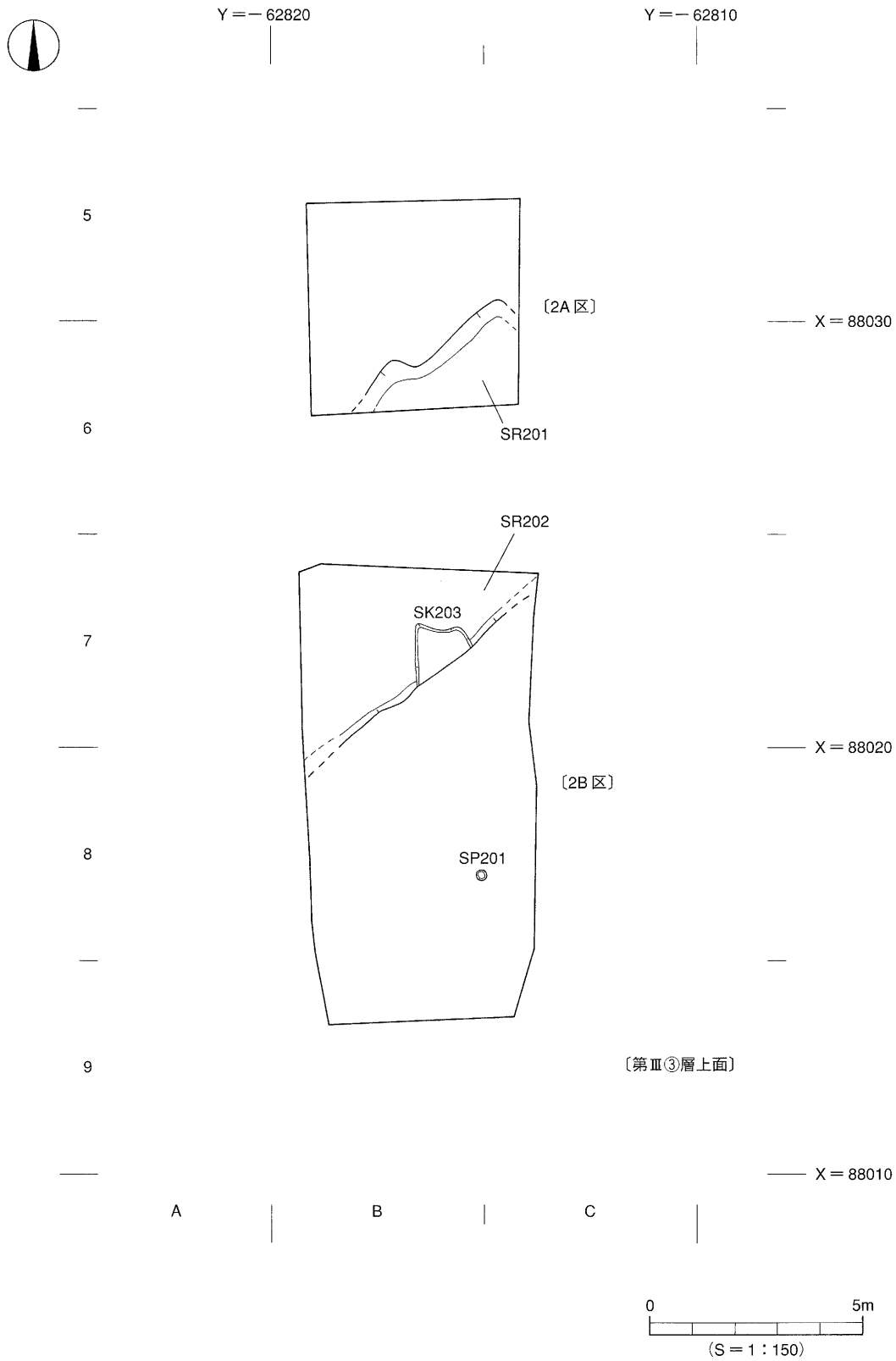
表54 検出遺構一覧

区	時期	古 代	中 世	その他
1 区		自然流路1条：S R101		
2 A区		自然流路1条：S R201		
2 B区		自然流路1条：S R202	土坑1基：S K203	ピット1基：S P201
2 C区		自然流路1条：S R203 土坑2基：S K201・202	鋤址23条：鋤址201～223	ピット8基：S P202～209
2 D区			自然流路1条：S R204 鋤址48条：鋤址224～271	ピット4基：S P210～213



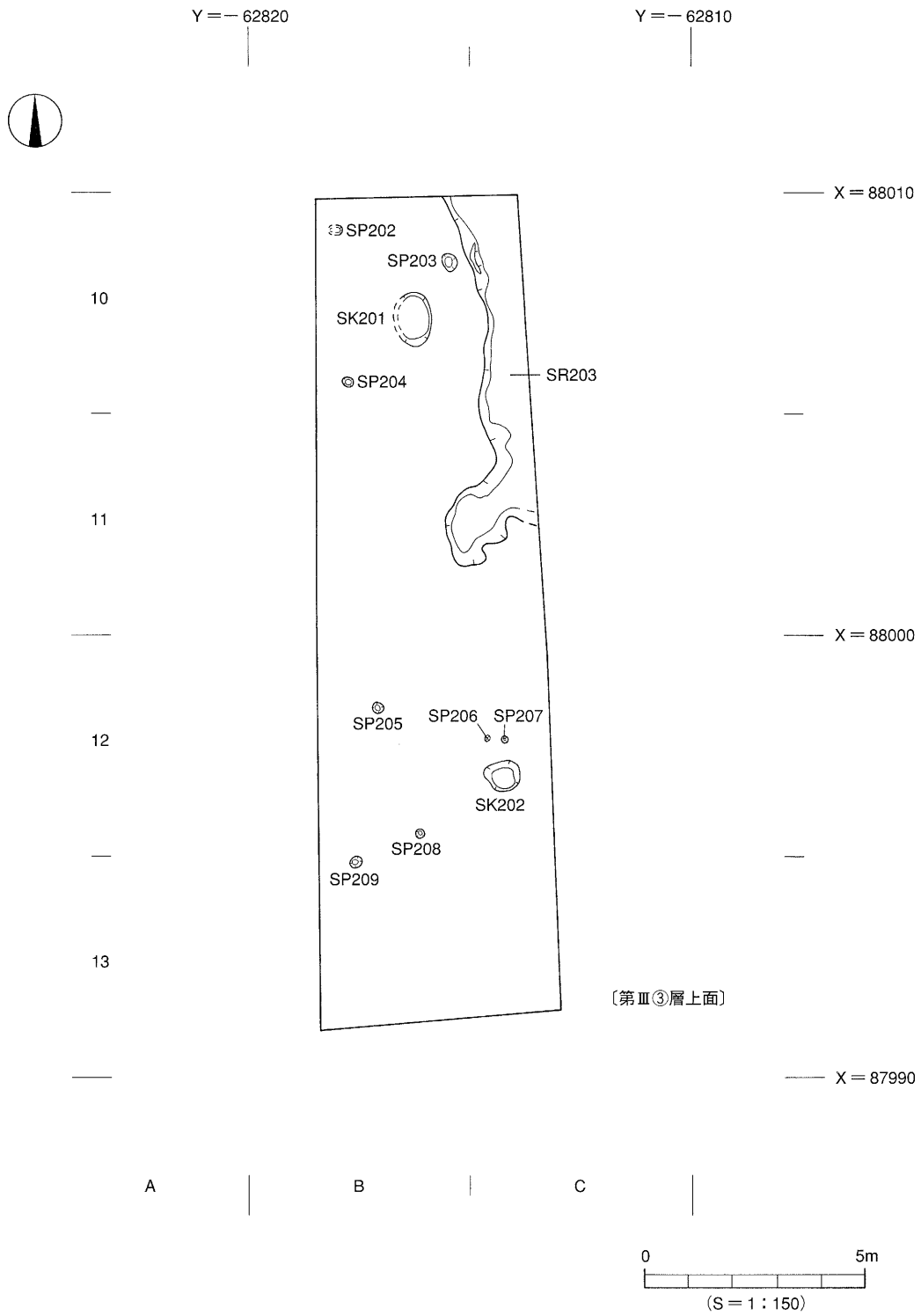
第133図 1区遺構配置図

南高井遺跡 3 次調査



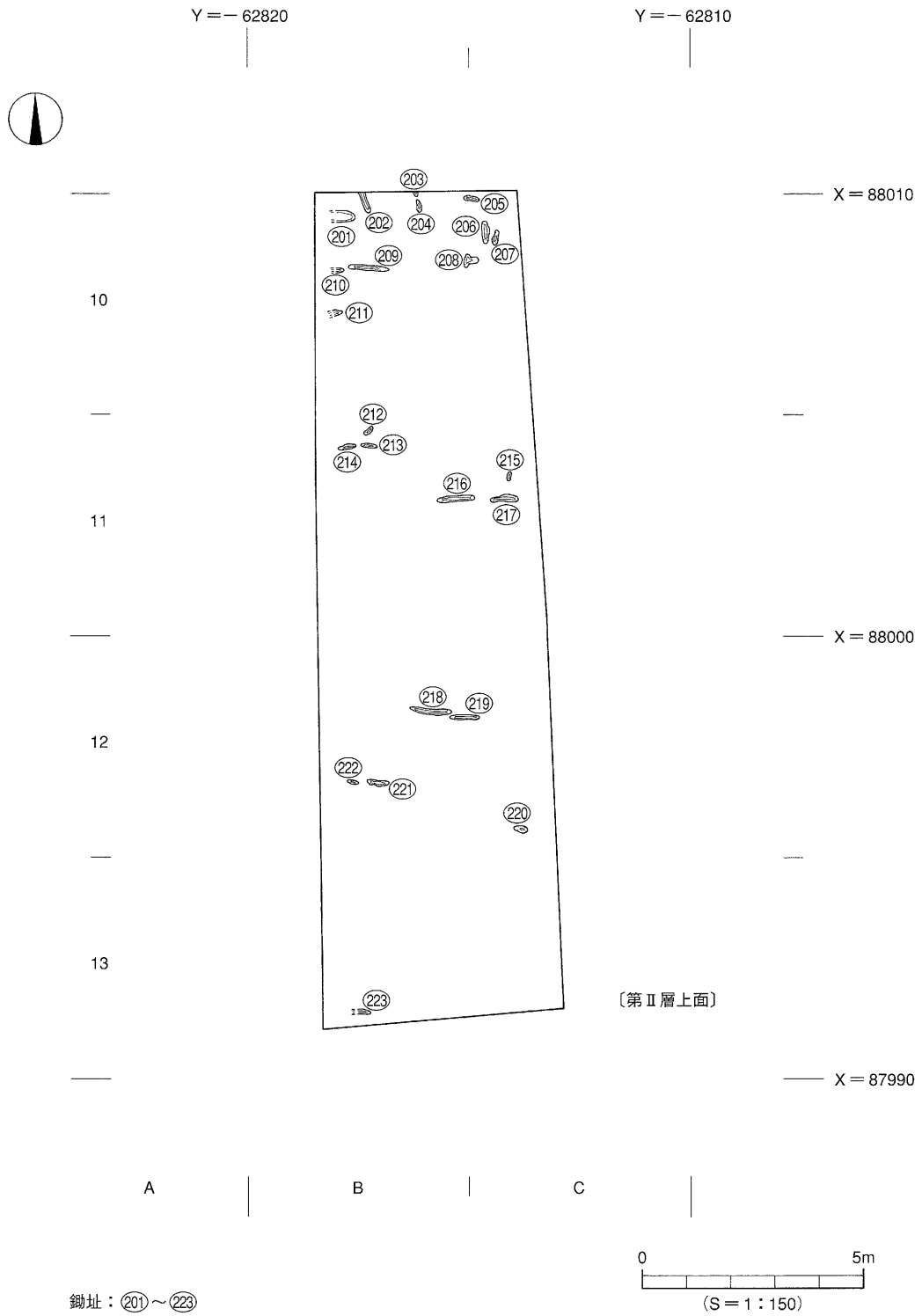
第134図 2 A区・2 B区遺構配置図

層 位



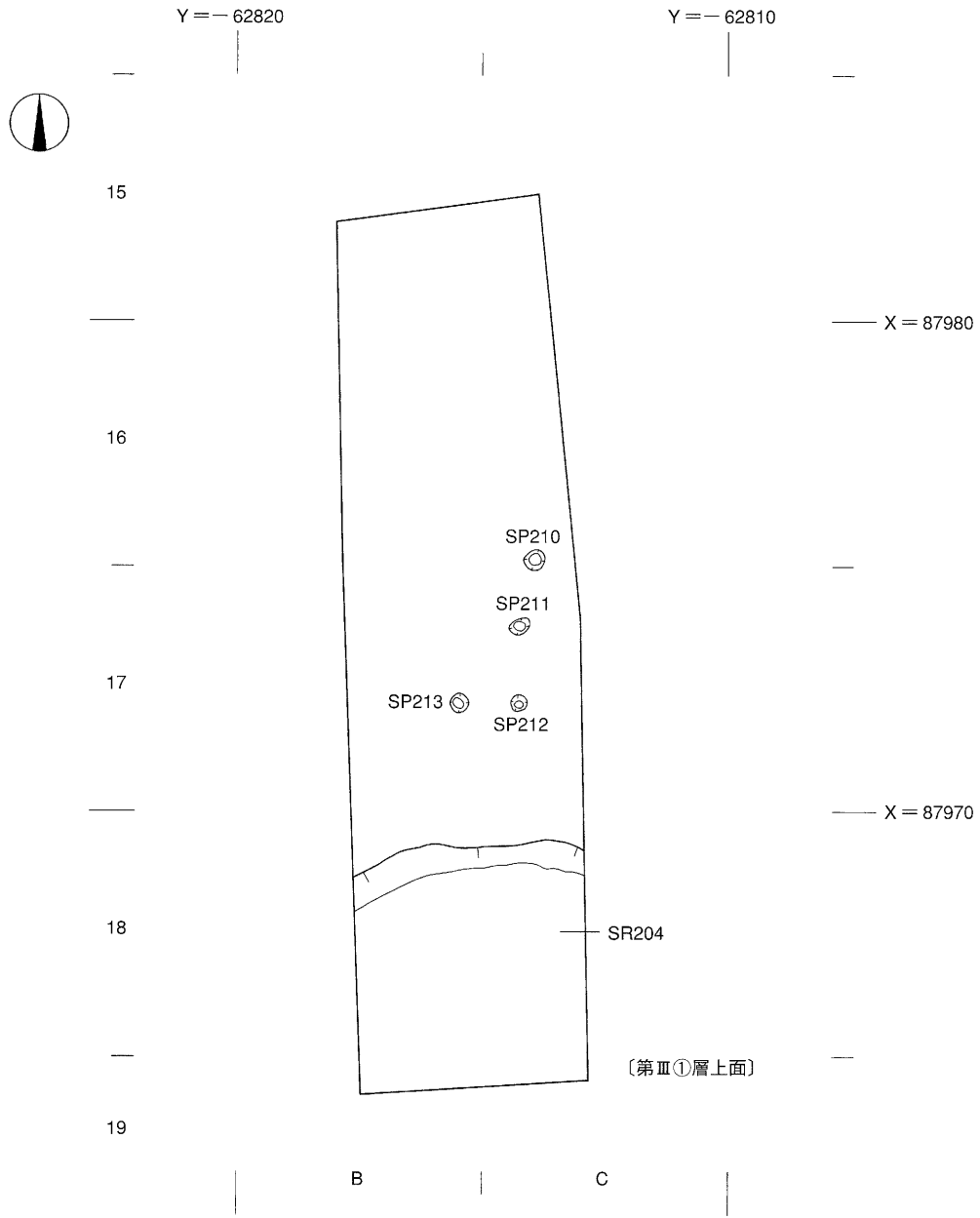
第135図 2C区遺構配置図(1)

南高井遺跡 3 次調査



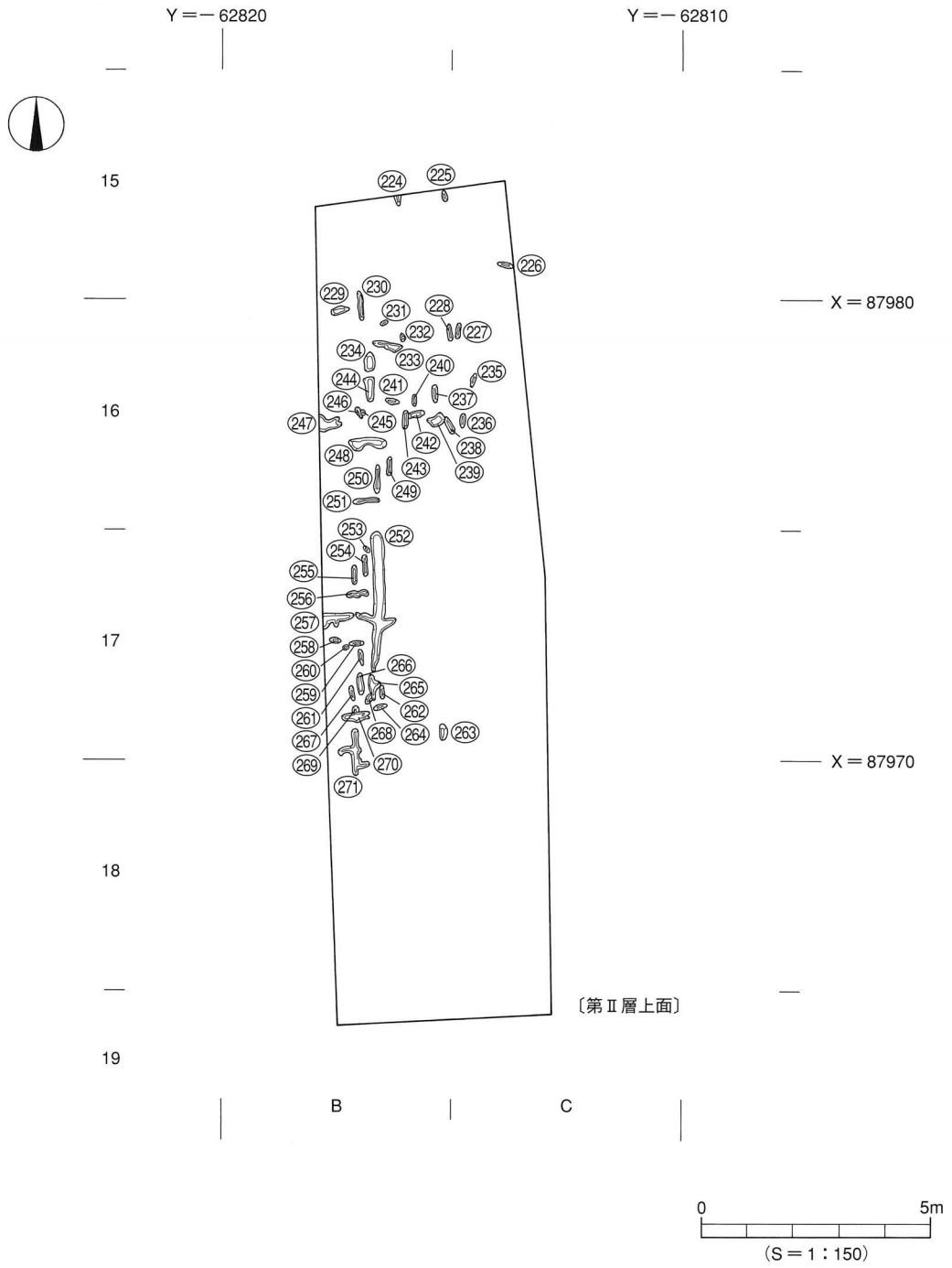
第136図 2 C区遺構配置図(2)

層 位



第137図 2 D区遺構配置図(1)

南高井遺跡 3 次調査



鋤址：(224) ~ (271)

第138図 2D区遺構配置図(2)

### 3. 遺構と遺物

本調査では、古代から中世までの遺構と遺物を検出した。遺構は自然流路5条、土坑3基、鋤址状遺構71条、ピット13基である。ここでは、時期別に概要を説明する。

#### (1) 古代の遺構と遺物

##### 1) 自然流路

##### S R 101 (第133図)

1区北部B1区で検出した東西方向の流路で、流路北側は調査区外へ続く。第Ⅱ層下面で検出した。規模は東西検出長2.8m、南北検出長1.8m、深さは15cmを測る。埋土は灰色砂を基調とし、径3～5cm大の礫を含む砂礫である。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や出土品から、概ね古代の流路とする。

##### S R 201 (第134図、図版39)

2A区南東部B5～C6区で検出した北東－南西方向の流路で、流路南側は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面で検出した。規模は東西検出長4.0m、南北検出長3.7m、深さは検出面下25cmを測る。埋土は灰色粗砂を基調とし、径3～5cm大の礫を含む砂礫である。流路壁体はやや蛇行し、流路底面には凹凸がみられる。遺物は埋土中より、須恵器坏身や坏片のほか、土師器片が少量出土した。図化しうる遺物を2点掲載した。

##### 出土遺物 (第139図、図版41)

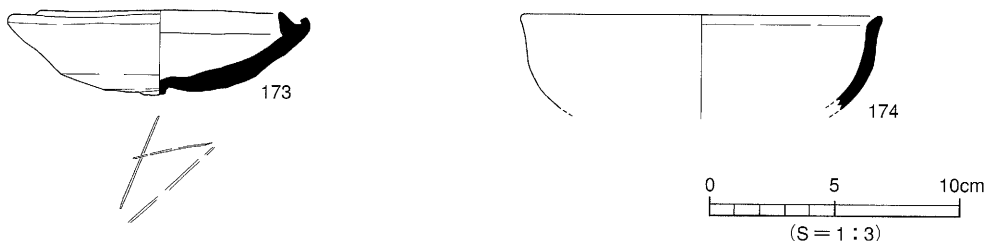
173は須恵器坏身の完形品。たちあがりは短く内傾し、たちあがり端部は尖る。受部は上方にひねり出されており、底部外面には回転ヘラケズリ調整を施すほか、ヘラ記号と思われる線刻が残る。

174は須恵器高坏の口縁部片で、口縁端部は外反する。

時期：出土遺物の特徴と、検出層位や埋土から古代、7世紀前半の流路とする。

##### S R 202 (第134図)

2B区北西部B・C7区で検出した北東－南西方向の流路で、流路壁体中央部は土坑S K 203に切られ、流路北側は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面で検出した。規模は南北検出長5.0m、東西検出長5.6m、深さは検出面下22cmを測る。埋土は灰色粗砂を基調とし、径3～5cm大の礫を含む砂礫である。遺物は埋土中より、須恵器片が少量出土したが、図化しうるものはない。なお、溝の形状や埋土、検出層位から、S R 202は2A区検出の流路S R 201と同一流路と考えられる。



第139図 S R 201出土遺物実測図

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土から、概ね古代7世紀代の流路としておく。

S R 203 (第135図)

2 C区北東部C10~11区で検出した南北方向の流路で、流路東側は調査区外に続く。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。規模は南北検出長8.4m、東西検出長2.3m、深さは検出面下15cmを測る。埋土は灰色粗砂を基調とし、径3~10cm大の礫が少量混入する。流路壁体はやや蛇行し、流路底面は北側から南側に向けて傾斜をなす(比高差8cm)。流路内からは、少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や出土品から、概ね古代の流路とする。

2) 土 坑

S K 201 (第135・140図、図版40)

2 B区北部B10区に位置する。第Ⅲ③層上面での検出であり、第Ⅲ②層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北長1.2m、東西検出長0.76m、深さは検出面下18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側壁体は直立気味に立ち上がる。埋土は、灰黄褐色を呈する砂質土単層である。土坑東側壁体中央部には、4×10cmほどの張り出し部があり、土坑埋土と同様の土で埋没している。遺物は埋土中位より、須恵器坏や甕のほか、土師器片が出土した。

出土遺物 (第140図、図版41)

175は土師器坏で、口縁端部は内傾する面をもつ。176は口縁部が一部欠損するものの、ほぼ完形の須恵器坏で、高台は「ハ」の字状に開き、高台端面は凹む。177・178は須恵器甕で、内外面の調整や形状から同一個体と考えられる。177の口縁部は長方形に肥厚し、頸部には線刻を施す(ヘラ記号か)。178は底胴部で、外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。

時期：出土遺物の特徴より、7世紀後半の遺構とする。

S K 202 (第135・141図、図版40)

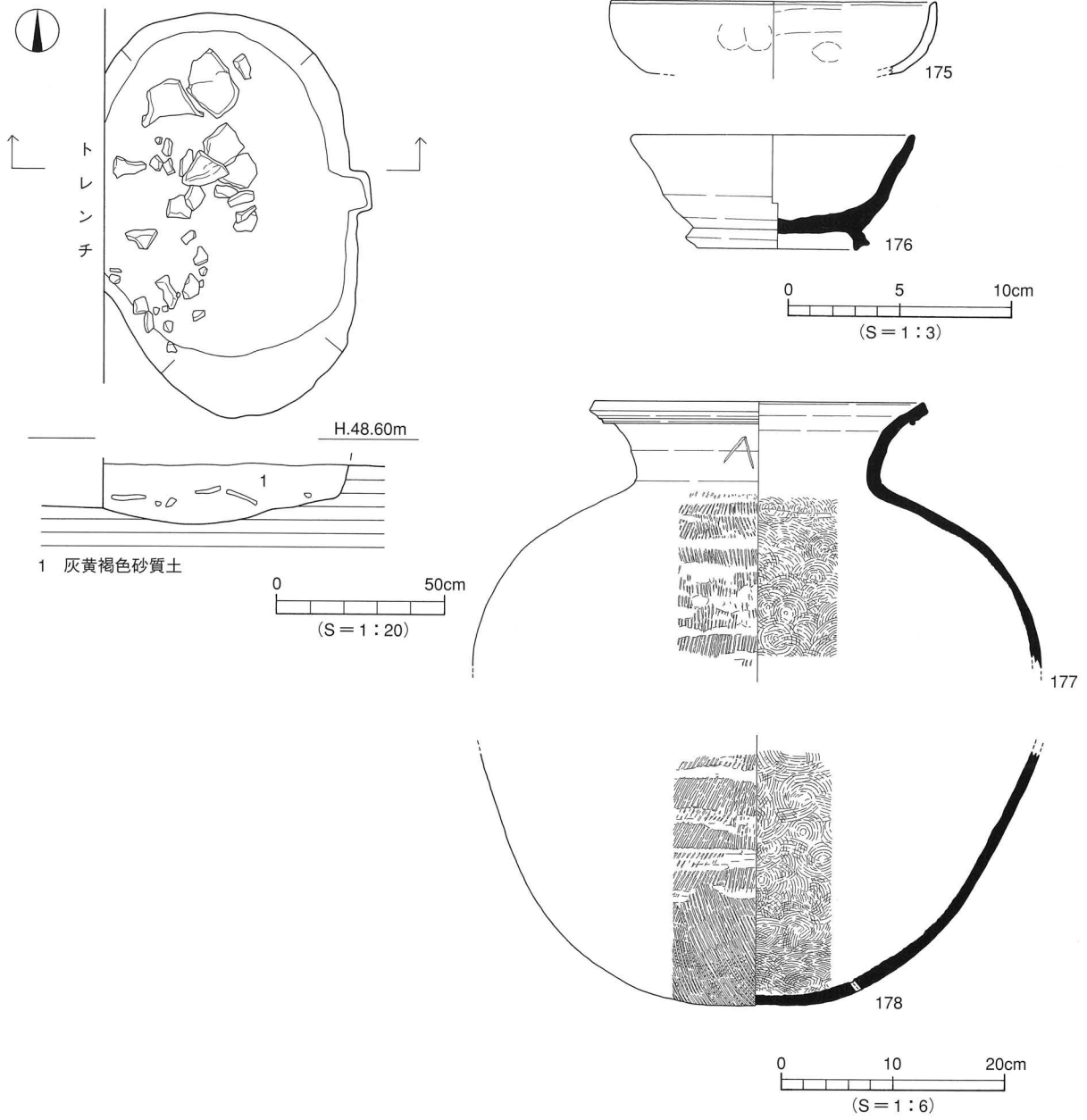
2 C区南側C12区に位置する。第Ⅲ③層上面で検出した。平面形態は不整形円形を呈し、規模は径0.68~0.80m、深さは24cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色を呈する砂質土単層である。土坑西側壁体は、一部突出し、土坑底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中位付近より、須恵器や土師器のほか、石斧が出土した。

出土遺物 (第141図)

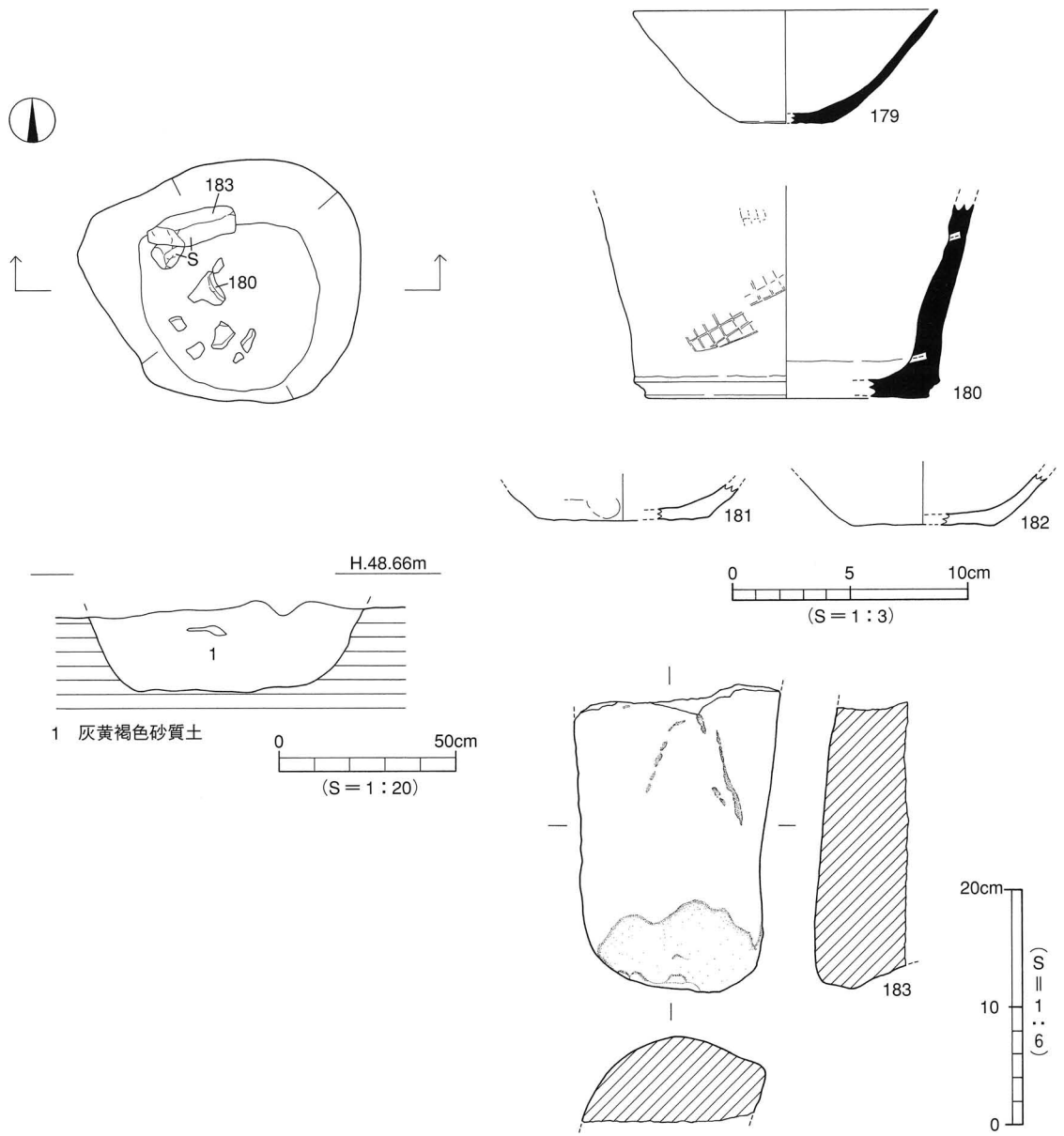
179は須恵器坏で、口縁部は直立気味に立ち上がる。180は須恵器壺の底部で、外面に格子叩きを施す。181・182は土師器坏の底部で、182は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。183は器種不明の石器である。安山岩製。

時期：出土遺物の特徴より、平安時代、9世紀頃の遺構とする





第140図 S K 201測量図・出土遺物実測図



第141図 S K 202測量図・出土遺物実測図

(2) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は自然流路1条、土坑1基、鋤址状遺構71条である。

1) 自然流路

S R 204 (第137図)

2 D区南側B・C18区で検出した東西方向の流路で、流路南側は調査区外に続く。第Ⅲ①層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は東西検出長4.7m、南北検出長5.0m、深さは検出面下30cmを測る。埋土は灰色粗砂を基調とし、径3～6cm大の礫を含む。流路内からの遺物の出土はない。

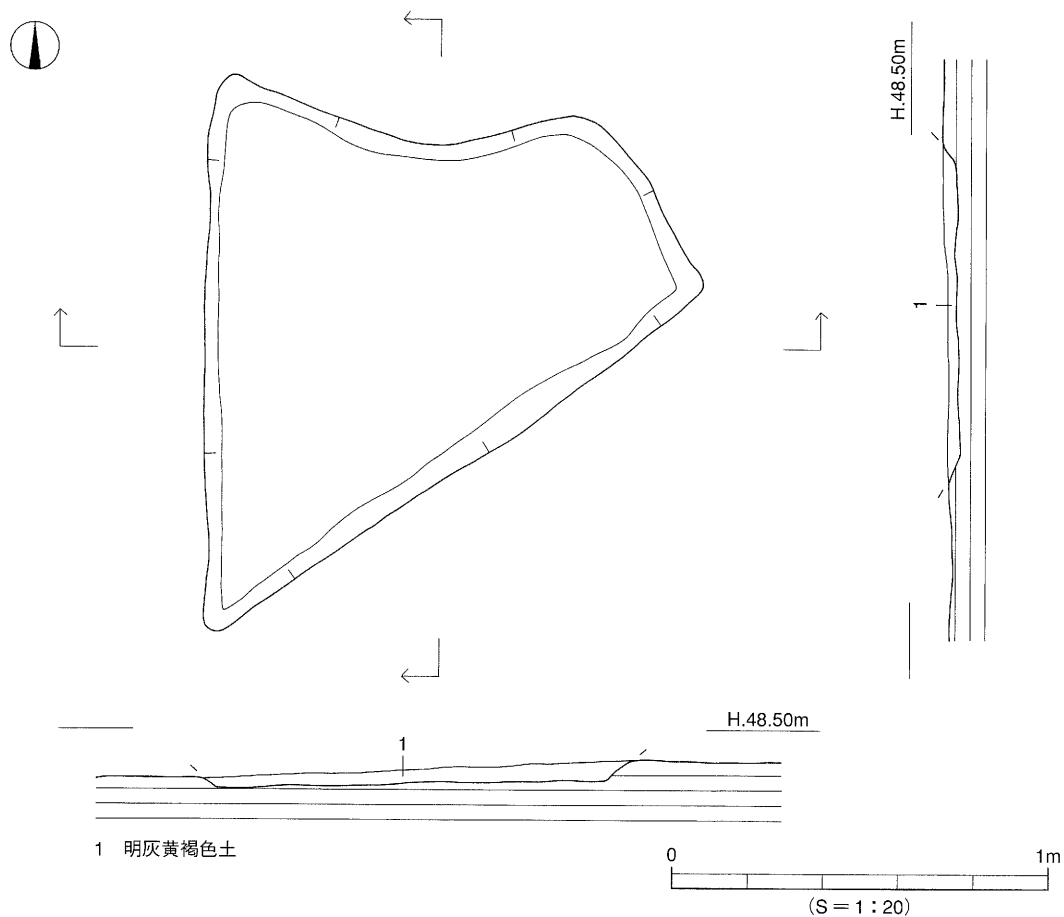
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位より概ね、中世の流路とする。

2) 土坑

S K 203 (第134・142図)

2 B区北部B7区に位置し、S R 202を切る。第Ⅲ③層上面で検出した。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長1.3m、南北長1.5m、深さ6cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は明灰黄褐色土単層である。土坑底面には、やや凹凸がみられる。土坑内からは、土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、概ね、中世の遺構とする。



第142図 S K 203測量図

3) 鋤址状遺構

調査では、2C区と2D区で鋤址状遺構を検出した。ここでは、区ごとに説明をおこなう。

① 2C区 (第136図)

2C区では第Ⅱ層上面にて、鋤址状遺構23条(鋤址201~223)を検出した。調査区ほぼ全域にあり、規模は検出長0.1~3.0m、幅4~36cm、深さは検出面下1~6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は明灰黄褐色土に、鈍い黄橙色土が少量混入する。鋤址底面には、小ピット状の凹凸が多数みられた。鋤址は真北方向に直交または平行するようにして、東西及び南北方向に掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

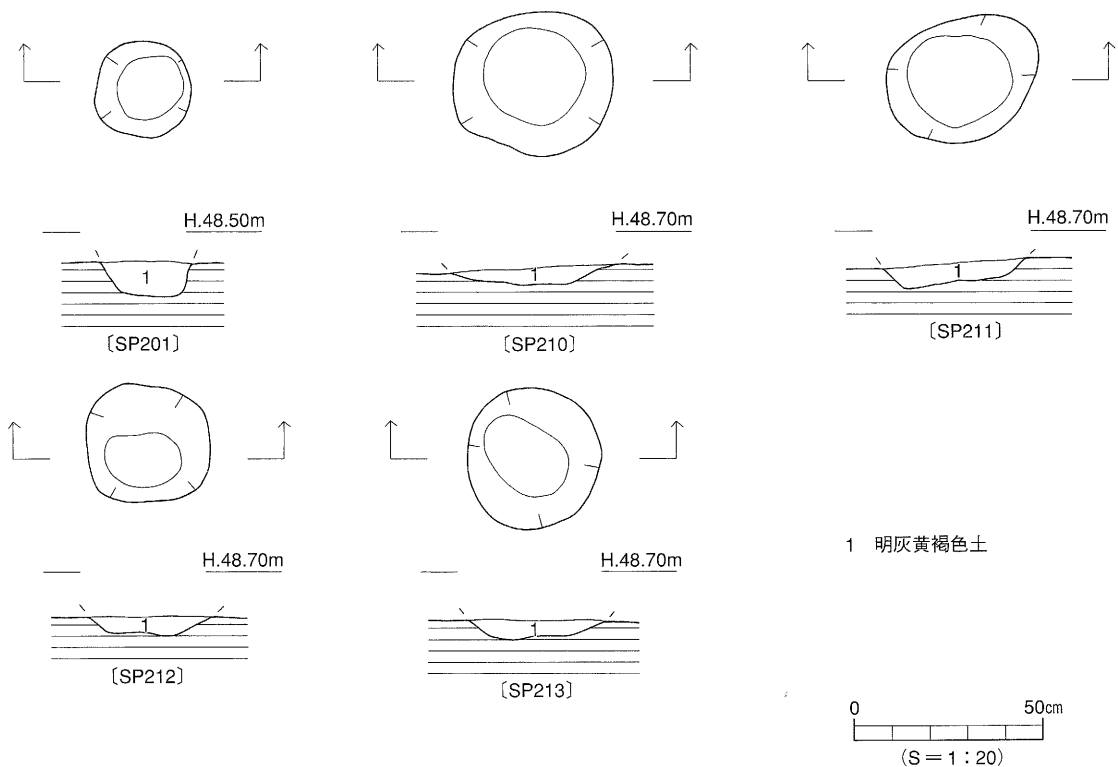
② 2D区 (第138図)

2D区では調査区中央部から北部にかけて、第Ⅱ層上面にて鋤址状遺構48条(鋤址224~271)を検出した。規模は検出長0.4~3.0m、幅6~30cm、深さは検出面下1~5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は明灰黄褐色土に、鈍い黄橙色土が少量混入する。鋤址底面には凹凸があり、一部、中には直交する部分がみられた。なお、2C区と同様、鋤址は東西または南北方向に掘削されている。鋤址内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出層位や埋土から概ね、中世の遺構とする。

(3) その他の遺構と遺物

調査では、ピット13基のほか第Ⅲ層及び表採資料として古墳時代から中世までの遺物が出土した。



第143図 S P 201・210~213測量図

1) ピット

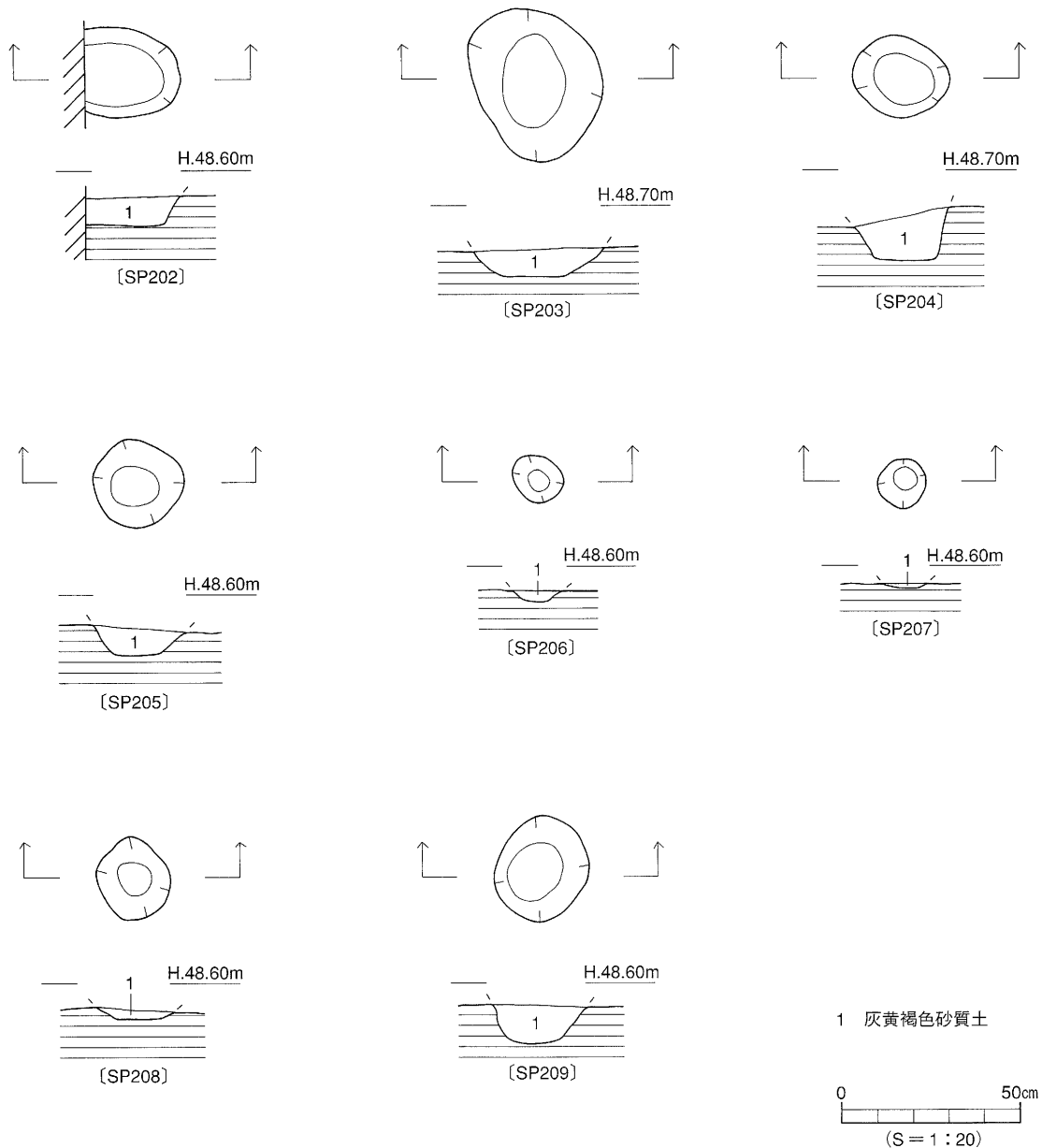
調査では、2区においてピット13基を検出した。ピット埋土は明灰黄褐色土と、灰黄褐色砂質土の2種類があり、ここでは、埋土別にピットの説明をおこなう。

① 埋土：明灰黄褐色土（第134・137・143図）

2B区の第Ⅲ③層上面にて、ピット1基（SP201）と、2D区の第Ⅲ①層上面にてピット4基（SP210～213）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径24～40cm、深さは検出面下4～8cmを測る。ピット内からの遺物の出土はない。

② 埋土：灰黄褐色砂質土（第135・144図）

2C区の第Ⅲ③層上面にて、ピット8基（SP202～209）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径12～42cm、深さは検出面下2～14cmを測る。ピット内からは、土師器片が少量出土した。



第144図 S P 202～209測量図

2) 包含層出土遺物 (第145・146図、図版41・42)

① 第Ⅲ③層出土遺物 (184～192)

184～186は須恵器坏蓋で、184は天井部と口縁部の境界に凹線が巡る。184は6世紀後半、185は7世紀前半、186は7世紀後半に時期比定される。187は須恵器坏で、高台は直立し、体部と底部の境界には明瞭な稜をもつ。8世紀前半。188は須恵器高坏で、脚裾部は下方に屈曲する。7世紀前半。189は須恵器壺で、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。6世紀。190は須恵器甕で、頸部に沈線と斜線文を施す。胴部外面は平行叩き、内面には円弧叩きを施す。7世紀後半。191は土師器坏、192は椀である。10世紀。

② 第Ⅲ②層出土遺物 (193～210)

193～195は須恵器坏蓋で、口縁部が下方に屈曲する。8世紀前半。196～202は須恵器坏で、197は口縁部が直立し、201・202は体部と底部の境界に明瞭な稜をもつ。7～8世紀。203～210は土師器坏である。205・206は平底、207～210は円盤高台状の底部となる。10～11世紀。

3) 地点不明出土遺物 (第147図、図版41)

211は須恵器坏蓋、212～214は須恵器坏である。211は口縁部が下方に屈曲し、213・214は高台端面が凹む。8世紀。215は須恵器高坏で、脚裾部は下方に屈曲する。7世紀。216は土師器坏、217は椀で、216は口縁端部が内傾する。7世紀。218は土釜の鐙、219は脚部である。14～15世紀。220は碧玉製の管玉で、径1～2mm大の孔を穿つ。221は石英粗面岩製の砥石で、3面の研磨面をもつ。

## 4. 小 結

調査では、古墳時代から中世までの遺構と遺物を確認した。

### 1) 層 位

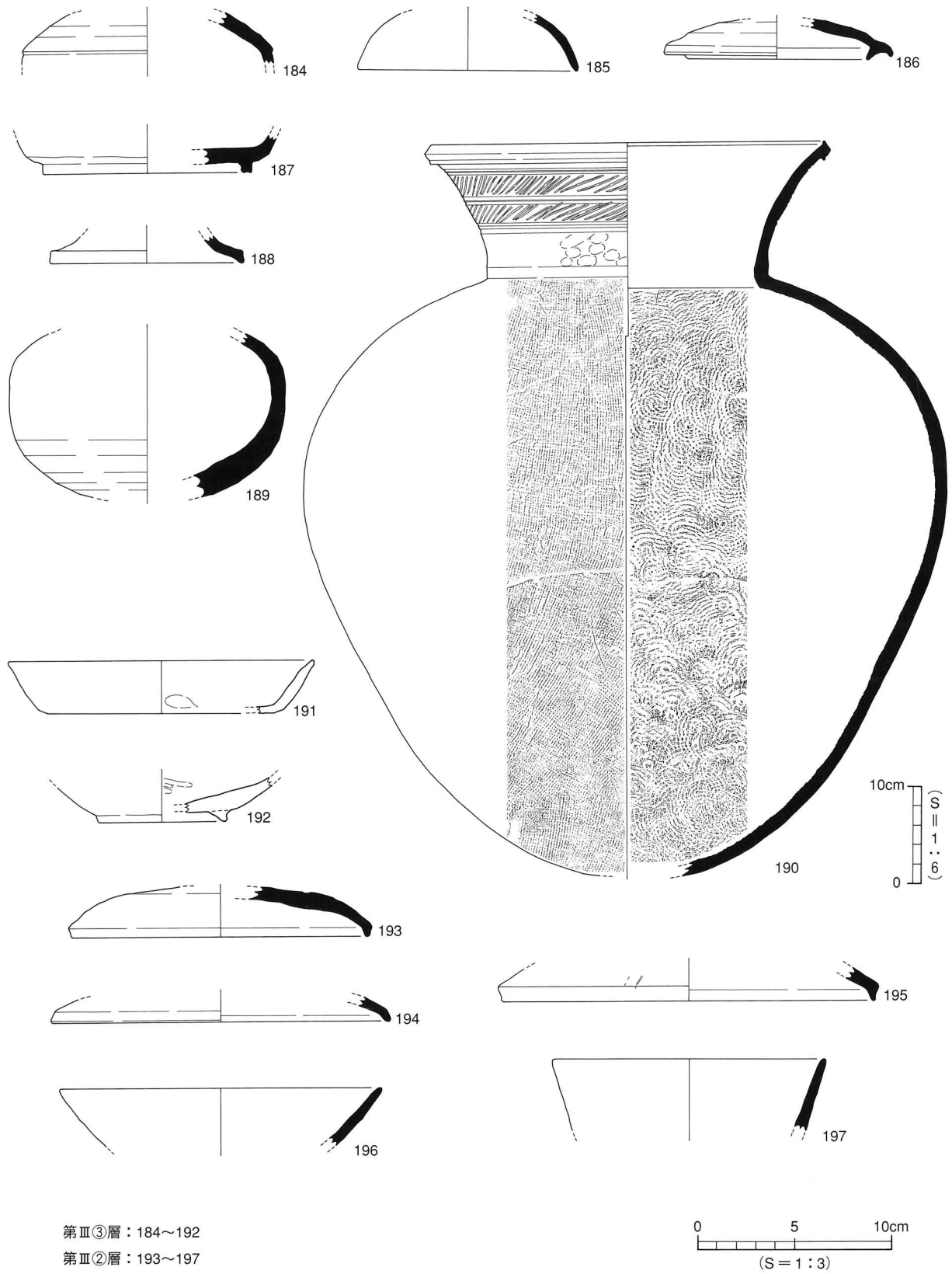
調査では、弥生時代(第Ⅴ層)と古墳時代(第Ⅳ層)の堆積層及び第Ⅵ層を除く基本層位のうち4層の土層を確認した。第Ⅱ層は調査地全域にあり、最大層厚30cmを測る。第Ⅲ層は2区全域にみられ、最大層厚60cmを測り、比較的安定した堆積をなす。第Ⅲ層上面や第Ⅲ層中からは、鋤址状遺構や土坑、ピットを検出した。なお、第Ⅲ層は3つの土層に分層され、各層からは飛鳥時代から平安時代までの土器類が、比較的層位ごとに出土した。第Ⅶ層は2区全域にみられ、標高48mを測る。調査地北側に隣接する南高井遺跡2次調査地では、第Ⅶ層上面の標高が51m前後であるため、やや本調査地内では第Ⅶ層上面はやや下がっている。

### 2) 遺 構

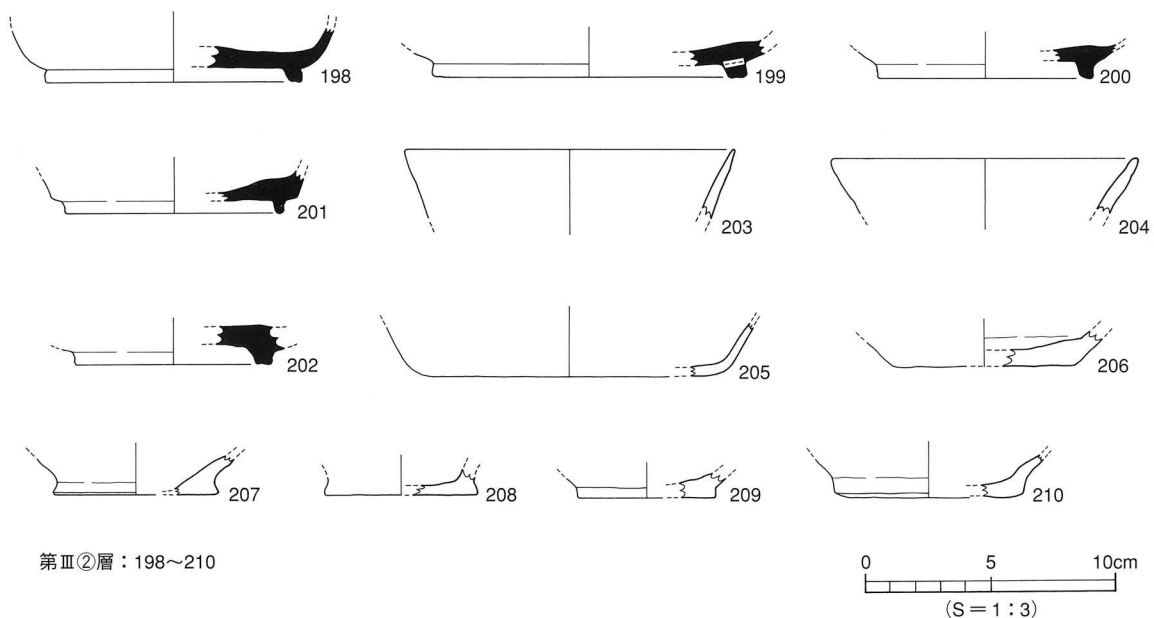
検出した遺構は、古代から中世までのもので自然流路、土坑、鋤址状遺構、ピットである。弥生時代や古墳時代の遺構は未検出であるが、表採資料の中には該期の遺物が含まれており、特に管玉の出土は調査地周辺における古墳時代集落の存在を示唆するものである。

古代では、土坑内から7世紀後半に時期比定される遺物が出土し、さらには第Ⅲ層中からも須恵器甕が出土しており、これらは調査地及び近隣地域に7世紀代の集落が存在していることを物語るものである。さらに、奈良時代や平安時代に時期比定される遺物が比較的多く出土していることから、奈良時代から平安時代まで、調査地周辺では集落が営まれていたものと推測される。中世では、鋤址状遺構を検出した。調査地北側に隣接する南高井遺跡2次調査においても中世段階の鋤址が検出されており、内川より南側の地域には中世段階に水田耕作等の生産域が広く展開していたものと考えられる。

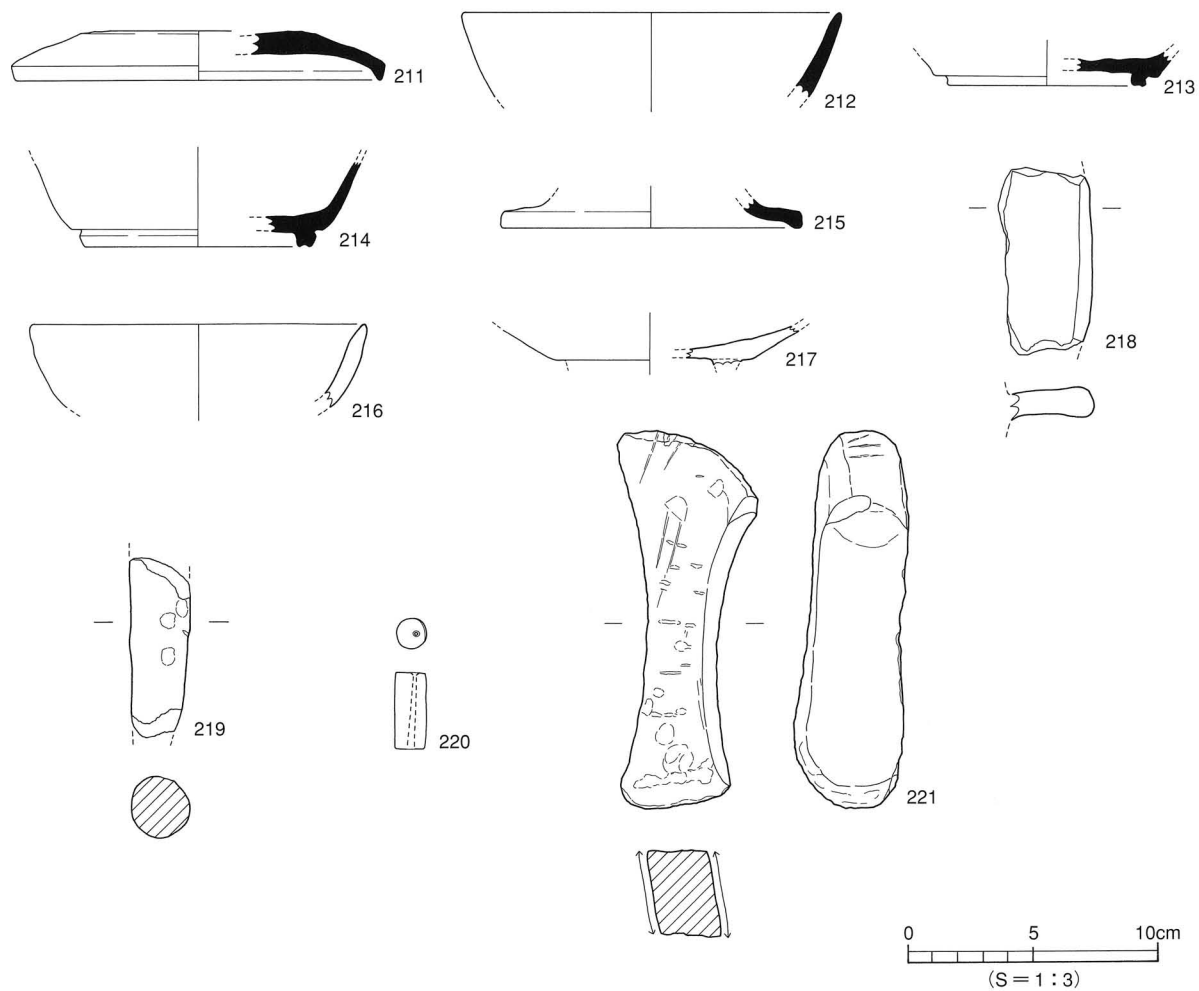
小 結



第145図 包含層出土遺物実測図（1）



第146図 包含層出土遺物実測図(2)



第147図 地点不明出土遺物実測図



遺物観察表

表55 S R 201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
173	坏身	口径 9.4 器高 3.4	ほぼ完形品。底部外面に記号あり。	㊦回転ヘラケズリ →ナデ	㊧回転ナデ ㊨ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		41
174	高坏	口径(14.0) 残高 3.7	無蓋高坏の坏部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

表56 S K 201出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
175	坏	口径(14.3) 残高 3.2	小片。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	乳橙褐色 橙褐色	石・長(1) 金◎		
176	坏	口径 12.3 器高 5.1	口縁部一部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		41
177	甕	口径 28.8 残高 23.5	頸部に記号あり。	㊩回転ナデ ㊪叩き→回転ナデ	㊫回転ナデ ㊬円弧叩き	青灰色 灰色	密 ◎		41
178	甕	底径(8.6) 残高 22.6	1/3の残存。	平行叩き →回転ナデ	円弧叩き	黒灰色 灰色	密 ◎		

表57 S K 202出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
179	坏	口径(12.8) 器高(4.7)	小片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	密 △		
180	壺	底径(11.9) 残高 8.2	平底。底部未調整。	㊭格子叩き →回転ナデ・ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
181	坏	底径(7.2) 残高 1.5	小片。	ナデ・ヨコナデ (マメツ)	ナデ(マメツ)	橙褐色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
182	坏	底径(6.0) 残高 2.1	底部回転ヘラ切り。	回転ナデ (マメツ)	回転ナデ (マメツ)	淡乳灰色 淡乳灰色	密 ◎		

表58 S K 202出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
183	不明	—	安山岩	25.8	17.3	7.6	4850.0		

表59 第Ⅲ③層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
184	坏蓋	残高 2.6	天井部と口縁部の境界に凹線あり。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
185	坏蓋	口径(11.1) 残高 2.8	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
186	坏蓋	口径 9.1 残高 2.1	つまみ欠損。	㊮回転ヘラケズリ ㊯回転ナデ	㊰ナデ ㊱回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		41
187	坏	底径(10.6) 残高 1.9	直立高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
188	高坏	底径(9.7) 残高 1.4	小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	密 ○		
189	壺	残高 8.3	1/3の残存。扁球形の胴部。	㊲D回転ナデ ㊲下回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
190	甕	口径(39.7) 残高 74.5	頸部に沈線と斜線文。	㊳平行叩き →カキメ	㊴同心円叩き 円弧叩き	青灰色 青灰色	密 ◎	火だすき	42
191	坏	口径(15.5) 器高 2.7	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	褐色 褐色	長(1) 金◎		
192	椀	底径(6.4) 残高 2.2	断面三角形の高台。	回転ナデ (マメツ)	ミガキ (マメツ)	淡橙黄色 淡橙黄色	密 ◎	煤付着	

表60 第Ⅲ②層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
193	坏蓋	口径(14.9) 残高 2.6	口縁部は下方に屈曲。	㊵回転ヘラケズリ →ナデ	㊶ナデ ㊷回転ナデ	灰色 淡青灰色	密 ◎		
194	坏蓋	口径(17.1) 残高 1.2	口縁部は下外方に屈曲。小片。	マメツ	マメツ	灰色 灰色	密 ○		
195	坏蓋	口径(18.8) 残高 1.7	口縁端面は凹む。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

第Ⅲ②層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
196	坏	口径(16.3) 残高 3.0	小片。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 暗灰色	密 ◎	煤付着	
197	坏	口径(13.6) 残高 3.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
198	坏	底径(10.0) 残高 2.1	直立高台。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎		
199	坏	底径(12.2) 残高 1.5	高台接地面は凹む。	マメツ	回転ナデ ナデ	白灰色 白灰色	密 △		
200	坏	底径(8.4) 残高 1.3	高台は外端面で接地。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 △		
201	坏	底径(8.6) 残高 1.7	体底部境界に稜あり。	マメツ ナデ	回転ナデ ナデ	乳白色 乳白色	密 ○		
202	坏	底径(7.8) 残高 1.5	小片。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
203	坏	口径(12.9) 残高 2.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
204	坏	口径(12.0) 残高 2.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
205	坏	底径(11.1) 残高 2.1	小片。	マメツ	マメツ	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎		
206	坏	底径(7.2) 残高 1.4	底部回転ヘラ切り。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
207	坏	底径(6.5) 残高 1.5	円盤高台状の底部。	ナデ	ナデ (マメツ)	乳白褐色 橙乳褐色	密 ◎		
208	坏	底径(6.0) 残高 1.0	底部回転糸切り。	マメツ	ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	密 ◎		
209	坏	底径(5.4) 残高 1.0	小片。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	密 ◎		
210	坏	底径(7.4) 残高 1.7	小片。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎		

表61 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
211	坏蓋	口径(14.3) 残高 1.9	口縁部は下方に屈曲。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	㊦ナデ ㊧回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
212	坏	口径(15.0) 残高 13.3	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
213	坏	底径(7.8) 残高 1.4	高台接地面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
214	坏	底径(9.0) 残高 3.3	体底部境界に稜あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
215	高坏	底径(11.8) 残高 1.1	小片。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
216	坏	口径(13.1) 残高 3.3	小片。	回転ナデ	回転ナデ	淡橙褐色 淡橙褐色	密 ◎		
217	碗	残高 1.5	高台部はハクリ。	マメツ	マメツ	淡乳褐色 淡褐色	密 ◎		
218	土釜	残高 1.3	土釜の鏝。	ナデ	—	茶褐色	石・長(1~3) 金◎	煤付着	
219	土釜	残高 7.1	脚部片。断面三角形。	ナデ	—	暗褐色	石・長(1~3) ◎		

表62 地点不明出土遺物観察表 玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
220	管玉	ほぼ完形	碧玉	黄緑色	1.2	3.0	8.2		41

表63 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
221	砥石	ほぼ完形	石英粗面岩	14.9	5.5	3.4	316.4		41

# 第10章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I. 高井遺跡1次調査における植物珪酸体分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

### 2. 試料 (表64、第148図)

分析試料は、基本土層断面においてⅡ層からⅦ層までの層準から採取された計9点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図 (第148図) に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1g に対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g 添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型 (チマキザサ節・チシマザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

## 4. 分析結果 (表64、第148・149図)

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表64および第148図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、ブナ科 (アカガシ亜属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、その他

## 5. 考察

### (1) 稲作跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (プラント・オパール) が試料 1 g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山, 2000)。ただし、密度が 3,000 個/g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g とし検討を行った。

基本土層断面では、II 層から VII 層までの層準について分析を行った。その結果、II 層 (試料 2) から VI 層 (試料 10) まで各層からイネが検出された。このうち、II 層 (試料 2) と III 層 (試料 3) では密度が 5,700 個/g、8,100 個/g と高い値であり、IV 層 (試料 6) と V 層 (試料 8) でも 2,900 個/g、3,800 個/g と比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

VI 層 (試料 9、10) では、密度が 700 個/g と低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類 (穎の表皮細胞) は、IV 層 (試料 6) と VI 層 (試料 9) から検出された。密度はいずれも 700 個/g と低い値であるが、穎 (籾殻) は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場

合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

Ⅶ層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、および樹木（その他）なども検出された。Ⅵ層では、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ミヤコザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科が出現している。Ⅴ層では、イネが増加しており、キビ族型、ススキ属型、チマキザサ節型も出現している。Ⅳ層でも、おおむね同様の結果であるが、Ⅲ層ではイネの増加に伴ってネザサ節型などが大幅に減少している。

以上の結果から、Ⅶ層の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、比較的乾燥した堆積環境であったと推定される。Ⅵ層の時期には、ヨシ属などが生育する湿地的なところが見られるようになり、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

Ⅴ層～Ⅳ層の堆積当時は、おもに水田稲作が行われており、周辺にはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと推定される。その後、Ⅲ層の時期には集約的な稲作が行われるようになり、ネザサ節などのイネ科植物はあまり見られなくなったと考えられる。

## 6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、Ⅱ層～Ⅴ層の各層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Ⅵ層でも稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、Ⅳ層とⅥ層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

Ⅶ層の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、比較的乾燥した堆積環境であったと推定される。Ⅵ層の時期には、ヨシ属などが生育する湿地的なところが見られるようになり、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

Ⅴ層～Ⅳ層の堆積当時は、おもに水田稲作が行われており、周辺にはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと推定される。その後、Ⅲ層の時期には集約的な稲作が行われるようになり、ネザサ節などのイネ科植物はあまり見られなくなったと考えられる。

## 文 献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.  
 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），  
 p.109-123.  
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

表64 高井遺跡1次調査における植物珪酸体分析結果

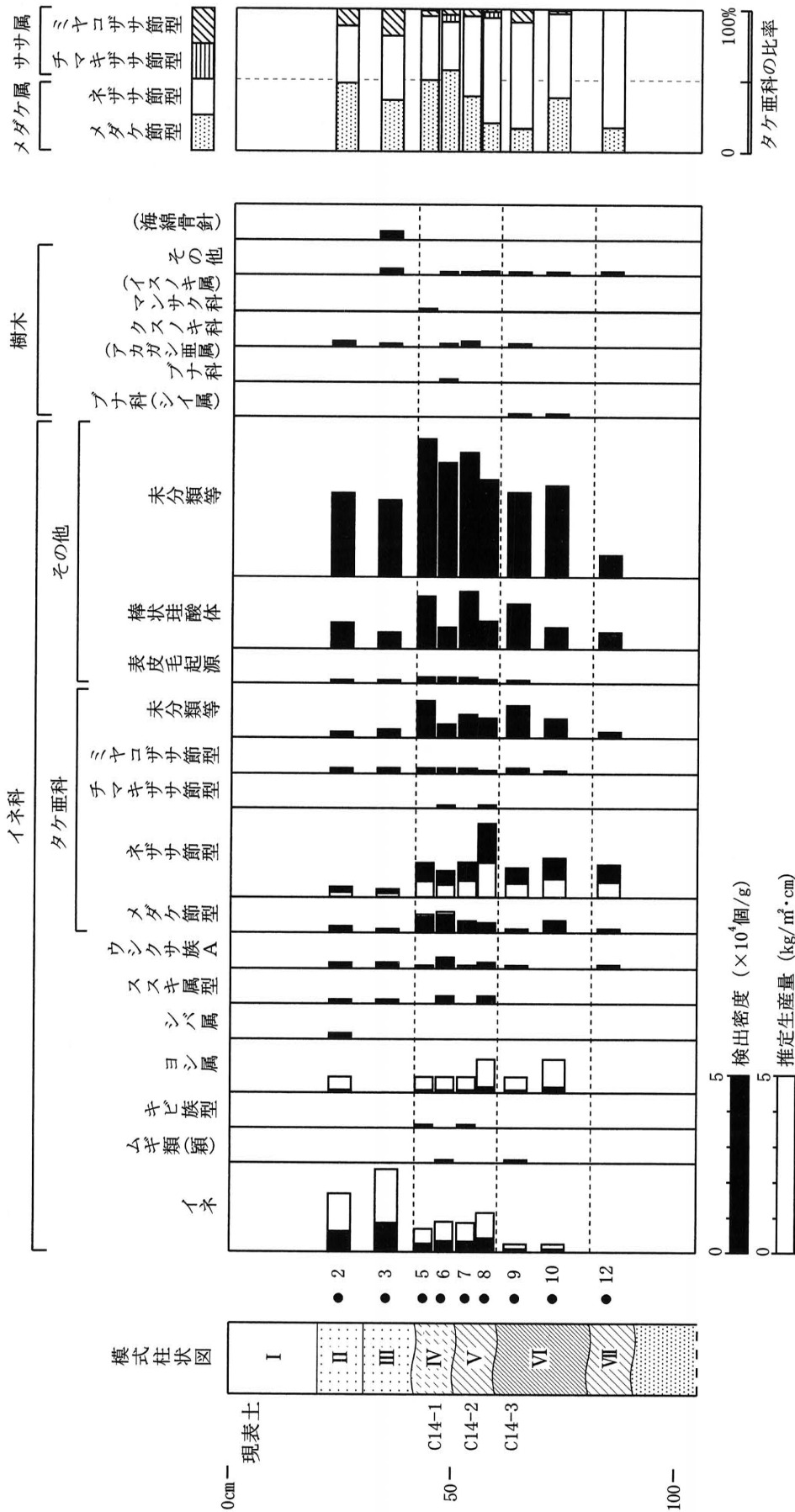
検出密度 (単位: ×100個/g)		基本土層断面									
分類群	地点・試料 学名										
		2	3	5	6	7	8	9	10	12	
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	Oryza sativa	57	81	22	29	28	38	7	7		
ムギ類 (穎の表皮細胞)	Hordeum-Triticum (husk phytolith)				7			7			
キビ族型	Panicaceae type			7		7					
ヨシ属	Phragmites	7		7	7	7	15	7	15		
シバ属	Zoysia	14									
ススキ属型	Miscanthus type	7	7		15		15				
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	14	15	7	29	7	15	7		8	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	14	7	44	51	28	23	7	29	8	
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	28	22	95	73	97	204	81	109	90	
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.				7		8				
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	14	15	15	15	14	8	15	7		
未分類等	Others	14	22	102	36	63	63	88	51	15	
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	15	15	14	8	7			
棒状珪酸体	Rod-shaped	71	44	146	58	160	76	125	58	46	
未分類等	Others	234	214	386	319	348	272	235	255	60	
樹木起源	Arboreal										
ブナ科 (シイ属)	Castanopsis							7	7		
ブナ科 (アカガシ亜属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis				7						
クスノキ科	Lauraceae	14	7		7	14		7			
マンサク科 (イスノキ属)	Distylium			7							
その他	Others		15		7	7	8	7	7	8	
(海綿骨針)	Sponge		22								
植物珪酸体総数	Total	497	457	853	682	793	740	609	545	233	

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

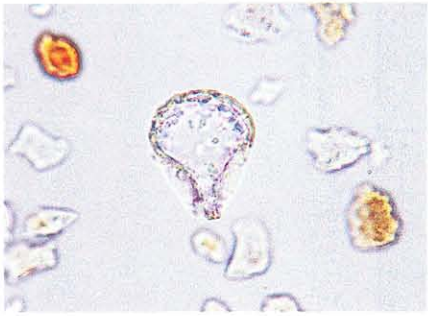
イネ	Oryza sativa	1.67	2.38	0.64	0.85	0.82	1.11	0.22	0.21	
ヨシ属	Phragmites	0.45		0.46	0.46	0.44	0.95	0.46	0.92	
ススキ属型	Miscanthus type	0.09	0.09		0.18		0.19			
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.16	0.09	0.51	0.59	0.32	0.26	0.09	0.34	0.09
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.14	0.11	0.45	0.35	0.47	0.98	0.39	0.52	0.43
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.				0.05		0.06			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.02	0.04	0.02	

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	48	36	50	57	39	20	16	38	17
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	40	45	45	34	56	74	75	59	83
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.				5		4			
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	12	19	4	4	5	2	9	2	



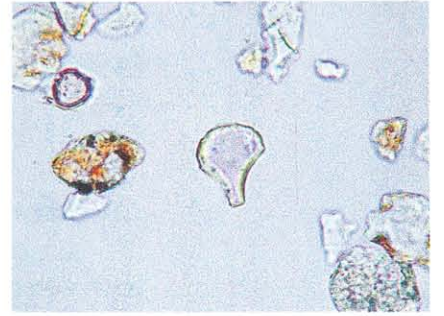
第 148 図 高井遺跡 1 次調査における植物珪酸体分析結果



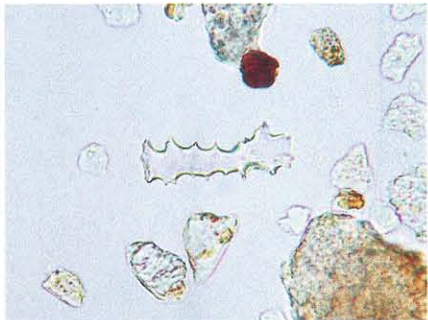
イネ  
試料7



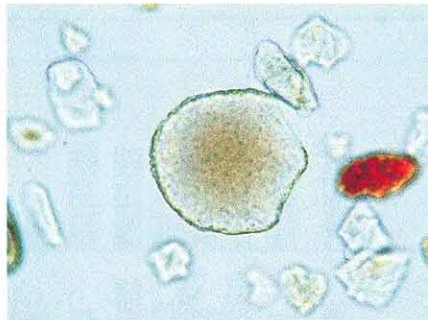
イネ  
試料8



イネ  
試料5



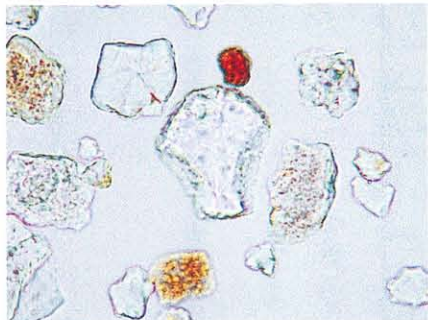
ムギ類(穎の表皮細胞)  
試料6



ヨシ属  
試料2



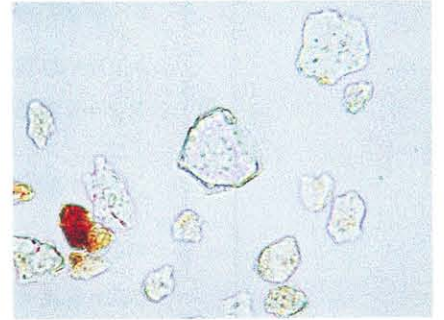
ウシクサ族A  
試料3



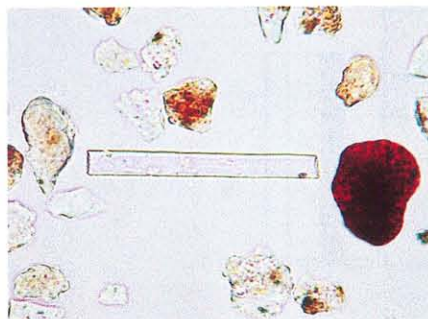
メダケ節型  
試料6



ネザサ節型  
試料9



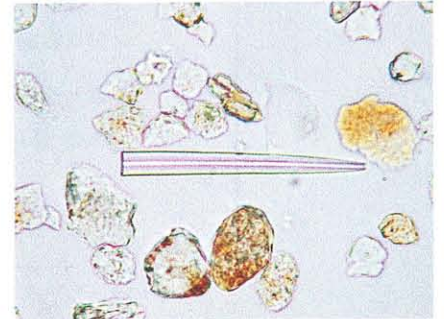
ミヤコザサ節型  
試料8



棒状珪酸体  
試料2



クスノキ科  
試料7



海綿骨針  
試料3

50 μm

第149図 植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真



## Ⅱ. 高井遺跡 1 次調査における花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### 2. 試料

試料は、3 B 区の S P 310、S P 311、東壁基本土層から採取された No. 1 ~ No. 8 の 8 点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

### 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 2、草本花粉 6、シダ植物孢子 2 形態の計 10 である。分析結果を表 65 に示し、主要な分類群について顕微鏡写真 (第 150 図) を示す。なお、寄生虫卵についても観察したが、まったく検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

マツ属複維管束亜属、スギ

[草本花粉]

イネ科、アブラナ科、セイ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

## (2) 花粉群集の特徴 (表65)

### 1) S P 310

埋土上層 (No. 1) と埋土下層 (No. 2) では、花粉は検出されなかった。埋土下面 (No. 3) では、樹木花粉のスギ、草本花粉のアブラナ科、シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。

### 2) S P 311

埋土上層 (No. 4) ではシダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、埋土下層 (No. 5) では草本花粉のキク亜科、ヨモギ属、シダ植物胞子のシダ植物三条溝胞子、埋土下面 (No. 6) では草本花粉のタンポポ亜科が検出されたが、いずれも少量である。

### 3) 東壁基本土層

Ⅲ層 (No. 7) では、草本花粉のイネ科、アブラナ科、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。Ⅳ層 (No. 8) では、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、シダ植物三条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。

## 5. 考察

### (1) S P 310・S P 311

7世紀以前とされるS P 310およびS P 311の試料では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

### (2) 東壁基本土層

7世紀代とされるⅣ層および7世紀以降とされるⅢ層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。なお、Ⅲ層では少量ながらアブラナ科が認められることから、周辺でアブラナ科が栽培されていた可能性が示唆される。アブラナ科には、アブラナ、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

## 文献

中村 純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

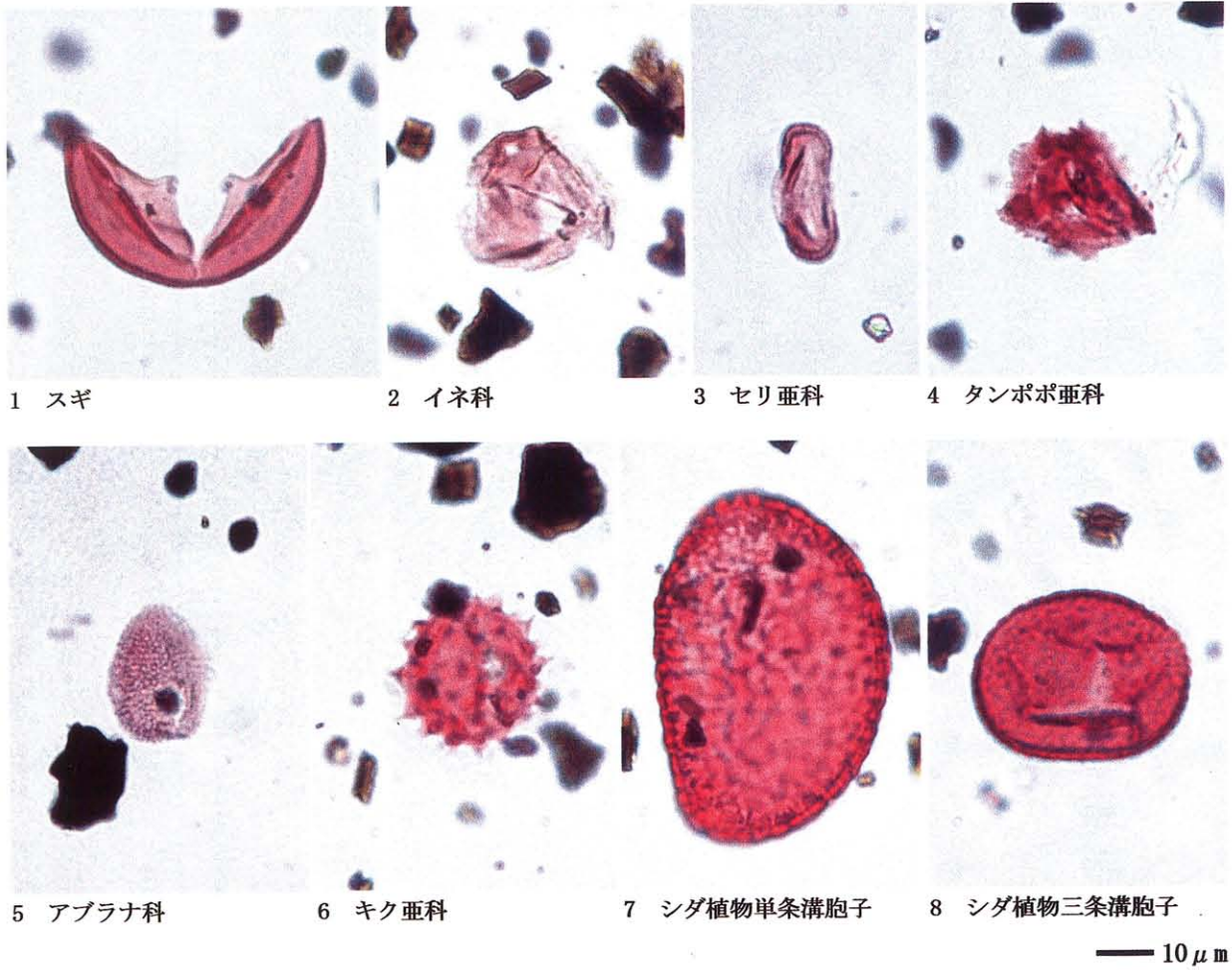
金原 正明 (1993) 花粉分析法による古環境復元. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60 p.

中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91 p.

表65 高井遺跡 I 次調査における花粉分析結果

学名	分類群	3B区SP310			3B区SP311			3B区東壁土層	
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8
Arboreal pollen	樹木花粉								
pinus subgen Diploxyton	マツ属複雑維管束亜属								1
Cryptomeria japonica	スギ		1						
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科							1	1
Cruciferae	アブラナ科		1					1	1
Apioidae	セリ亜科							1	1
Lactuoidae	タンポポ亜科					1			
Asteroidae	キク亜科				3			1	1
Artemisia	ヨモギ属				2			2	2
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子			1	1			1	1
Trilate type spore	三条溝胞子					1			1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	1	0	0	0	0	1
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	1	0	5	1	6	2
Total pollen	花粉総数	0	0	2	0	5	1	6	3
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	1	0	1	1	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	1	1	1	0	1	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



第150図 高井遺跡1次調査の花粉・胞子

### Ⅲ. 高井遺跡 1 次調査における放射性炭素年代測定結果

#### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
C14-1	基本土層断面, IV層下部	土壌	酸洗浄, 石墨調整	AMS
C14-2	基本土層断面, V層	土壌	酸洗浄, 石墨調整	AMS
C14-3	基本土層断面, VI層上部	土壌	酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

#### 2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代 (西暦) (1 $\sigma$ : 68%確率, 2 $\sigma$ : 95%確率)
C14-1	199189	3890 $\pm$ 50	-22.0	3940 $\pm$ 50	交点: cal BC 2460 1 $\sigma$ : cal BC 2480~2400, 2380~2360 2 $\sigma$ : cal BC 2570~2290
C14-2	199190	3720 $\pm$ 40	-23.0	3750 $\pm$ 40	交点: cal BC 2140 1 $\sigma$ : cal BC 2210~2130, 2080~2060 2 $\sigma$ : cal BC 2290~2030
C14-3	199191	3820 $\pm$ 40	-22.5	3860 $\pm$ 40	交点: cal BC 2310 1 $\sigma$ : cal BC 2430~2280 2 $\sigma$ : cal BC 2460~2200

##### (1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

##### (2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

##### (3) 補正<sup>14</sup>C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

#### (4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ （68%確率）と2 $\sigma$ （95%確率）は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ ・2 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

### 3. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、IV層下部の土壌（C14-1）では3940±50年BP（1 $\sigma$ の暦年代でBC2480～2400, 2380～2360年）、V層の土壌（C14-2）では3750±40年BP（同BC2210～2130, 2080～2060年）、VI層上部の土壌（C14-3）では3860±40年BP（同BC2430～2280年）の年代値が得られた。

考古学的所見では、IV層～V層は中世、VI層は古代～古墳時代と推察されている。また、植物珪酸体分析では、これらの層準から栽培植物のイネやムギ類が検出されており、考古学的所見と符合している。今回の年代測定結果は、土壌が生成された当時の年代を示すものであり、遺物包含層の年代観とは必ずしも一致しないと考えられるが、洪水による二次堆積や地震による土層攪乱など、何らかの原因で古い時代の土壌（炭素）が混入した可能性も考えられる。

#### 文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

# 第11章 考 察

## 遺跡にあらわれた中央構造線・活断層帯・重信断層の古地震

後藤秀昭（広島大学大学院文学研究科）

### 1. はじめに

中央構造線は、西南日本の内帯と外帯を分ける主要な地質構造線であり、紀伊半島以西ではこれに沿って第四紀にも活発な断層活動が認められ、中央構造線活断層帯と呼ばれている。この断層帯は、四国だけでも約190kmに及び、日本で最も長大な断層のひとつである。断層に沿って累積的な右横ずれ断層変位地形が連続しており、横ずれ平均変位速度は5～10m/千年にも及ぶ（Okada, 1980）とされる世界第一級の活断層である。

松山平野周辺では、地質構造線としての中央構造線は、平野の南に分布する定高性のある丘陵の南にあり、重信川水系と太平洋に注ぐ河川との分水界付近を通っている（第151図）。第四紀に活動している活断層は、それよりも数km北側に位置している。活断層は東から川上断層・北方断層が、高縄半島と石鎚山地の間を通り、重信川の谷口がある松山平野北東部の山麓部に連続している（第151図）。また、松山平野南西部にある北東－南西走向の直線状の山麓線に沿って、伊予断層が延びている。これらの間に位置する松山平野では、長く活断層が存在しないとされてきたが、後藤ほか（1999）によって、長さ約6kmの明瞭な低断層崖の地形が見出され、重信断層と命名された。重信断層は、N75～85° Eの走向をもち、沖積面を南落ちに変位させている（第152図）。直線的な低断層崖は旧重信町志津川から松山市高井町まで連続し、旧河道や侵食崖の屈曲（第152図の①や②など）から、これに沿って右ずれの変位が認められる（第153図）。

### 2. 重信断層におけるこれまでの古地震調査

重信断層では、これまでに古地震を明らかにするための調査が3カ所で行われた（第152図）。地点Aでは、後藤ほか（1999）により重信断層の断層露頭が初めて確認され、約5000年前以降に活動があったことが明らかにされている。地点B、Cでは、愛媛県（1999）による調査が実施されており、最新活動時期は990～260 yrBP（AD990～1950）、それに先立つ活動は5220～1500 yrBP（6世紀）にあり、さらに8000 yrBP前後にも活動があったと結論づけ、活動間隔は3500～4000年のオーダーと推定している。これらの調査結果を受け、政府の地震調査研究推進本部（2003）は、「最新活動が11世紀以後にあったと推定され、約6千2百年前以後、最新活動よりも前に少なくとも1回の活動があった可能性がある」という評価を公表している。

今回の発掘調査は、これらの調査の後に行われたものである。発掘調査地点は、重信断層の西部に位置し、明瞭な低断層崖が認められる西端から約1kmの場所で、これまで古地震調査がなされた地点AとCの間に位置する（第152図）。

### 3. 発掘調査で現れた断層付近の地層の特徴と堆積年代

この発掘は重信断層を南北に横切るように行われており、東西両壁面に活断層による地層の変位が現れた。最近の地層が連続的に観察できる東壁を中心に観察を行った。遺跡内の層序を連続的に観察して命名されている地層名を踏襲しながら、断層周辺の地層について簡単に記述する（第154図）。

最上位層のⅠ層は、耕作土、耕作土の床土、中世の耕作土、中世から近世の土器包含層からなり、これらの境界は断層周辺では現在の地形とほぼ平行しているように見える。Ⅱ層は人工改変層で、断層を挟んで南北両側に分布するが、断層を挟んで異なる特徴を持っている。南側は一部シルトの塊が混じる緻密な砂層、北側は斑点模様をなす主に砂からなる地層である。断層より南側のⅡ層の下面境界は断層から1.2m以南で波状となっており、中世の畑の溝跡とみられている。自然堆積層のうち最も上位にあたるⅩ層は、主に細砂からなるが、上部では粗砂～細礫からなる。下位のⅡ層とは傾斜不整合の関係にあり、Ⅱ層を一部削り混んでいる可能性もある。Ⅵ層は砂質シルトからなり、土壌や腐植層によっていくつかの地層に細分することができる。顕著な腐植層であるⅠ層の放射性炭素年代は約4100 yrBP、4500 yrBPの年代値を示す（表66）。Ⅴ層は弥生時代の土器を包含する古土壌であるが、層序から考えてⅥ層上位のⅡ層を起源として生成されたものである可能性がある。断層から南側約20m付近で、Ⅴ層は古墳時代に構造物を建設するために掘削されているのが観察されている。16層は、断面形が紡錘形をなす層厚5～10cm程度のシルト層が複数挟まる地層からなり、人工的に埋めた地層である可能性が高い。

## 4. 地層の変位と断層の活動時期

### 1) 最新活動時期

東壁面で観察された断層は1条のみで、Ⅰ層を除く地層を変位させている。人工改変層であるⅡ層、Ⅴ層、16層も変位を受けており、この断層は歴史時代に活動したと考えられる。それぞれの地層の堆積年代から、中世以降で、中世～近世以前と考えられる。

### 2) 最新活動の前の活動

断層より北側でⅥ層（Ⅱ層を含む）とⅩ層との間に傾斜不整合があり、この間に断層変位があった可能性が高い。Ⅵ層上部およびⅩ層ともに堆積年代を知る直接的な資料はない。ただし、Ⅴ層がⅡ層を起源として生成された古土壌である可能性があり、Ⅴ層は弥生時代の遺物を含む地層であることから、弥生時代以降に活動した可能性がある。これによれば、最新活動の前の活動は、弥生時代以降、中世以前と考えられる。

16層は断層付近にのみ分布する特異な人工改変層であり、断層の動きと関連している可能性がある。特に、断層付近を埋めているようにみえることから、断層活動によって形成された凹地を人工的に埋め立てたと解釈することも可能である。埋め立てられた年代は不明であるが、調査場所付近で本格的な定住が確認できるのが、建造物の建設が認められる古墳時代であること、16層の上限はⅤ層とほぼ同レベルにあり、Ⅴ層が古墳時代に掘削されていることから考えて、古墳時代である可能性がある。地震直後に埋め立てたとすれば、最新活動の前の活動は古墳時代であったと考えることができる。



### 3) さらに古い活動

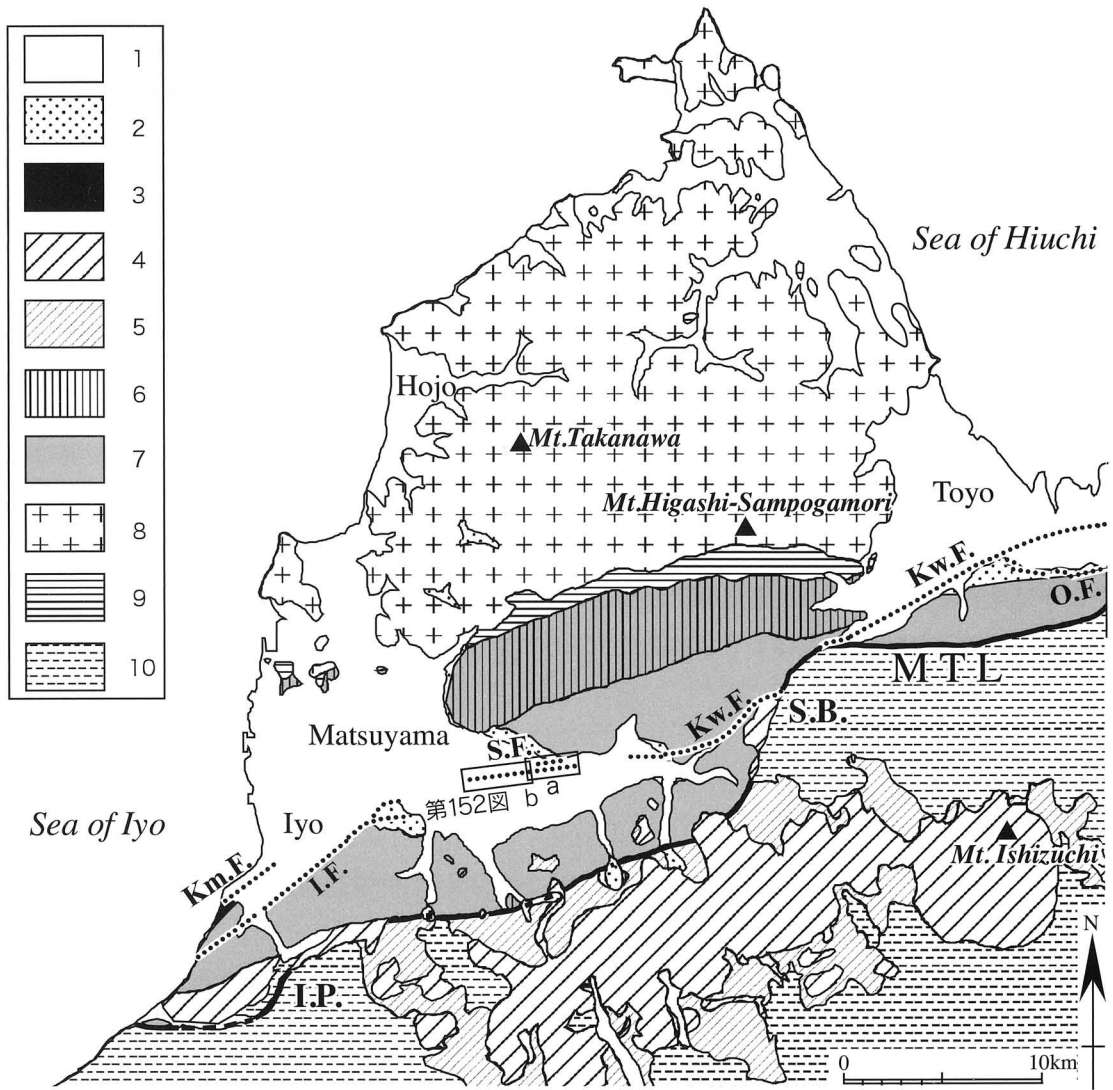
同時代の地層である可能性のあるB層とV層の下限は、断層を挟んで約20cm上下に食い違っている。一方、A層は壁面では断層より南側に対比される地層が観察できないが、トレンチ底から抜き取ったGeoslicer試料によって、断層を挟んで80cm上下に食い違っているのが確認されている(第154図)。また、A層の断層による変形の度合いは、B層のそれよりも大きいように見える。したがって、A層はB層よりも多くの回数の変位を受けている可能性が高い。A層の炭素年代から判断して、4500~4100 yrBP以降に活動があったと考えられる。

### 4) 調査地点における重信断層の活動間隔

本遺跡では4500~4100 yrBP以降に3回の古地震を読み解くことができた。この断層は明治時代以降の観測記録に活動したことが記されていないことを勘案すれば、活動間隔は1300~1500年となり、川上断層(堤ほか、2000など)や四国東部の断層(岡田・堤、1997など)の活動間隔と大きな差はないように見える。四国の中央構造線活断層帯は16世紀ごろに全体が活動した可能性が高いとされたおり(後藤ほか、2001;後藤ほか、2003など)、それを最新活動とすれば、活動間隔は1200~1400年程度となる。

### 文献

- 愛媛県(1999):『平成10年度地震関係基礎調査交付金 中央構造線断層帯(愛媛北西部・石鎚山脈北縁)に関する調査成果報告書』愛媛県, 416 p.
- 後藤秀昭・中田 高(2000):『四国の中央構造線活断層系—詳細活断層線分布図と資料—』広島大学総合地誌研究資料センター研究叢書, 35, 135 p.
- 後藤秀昭・中田 高・奥村晃史・池内 啓・熊原康博・高田圭太(1999):中央構造線活断層系・重信断層の変位地形と活動履歴. 地理学評論, 72, 267-279.
- 後藤秀昭・中田 高・堤 浩之・奥村晃史・今泉俊文・中村俊夫・渡辺トキエ(2001):中央構造線活断層系(四国)の最新活動時期から見た活断層系の活動集中期. 地震, 第2輯, 53, 205-219.
- 後藤秀昭・堤 浩之・遠田晋次(2003):中央構造線活断層系・畑野断層の最新活動時期と変位量. 地学雑誌, 112, 531-543+口絵 2 p.
- 地震調査研究推進本部(2003):中央構造線断層帯(金剛山地東縁—伊予灘)の長期評価について.  
[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/03feb\\_chuokozo/index.htm](http://www.jishin.go.jp/main/chousa/03feb_chuokozo/index.htm)
- Okada, A. (1980): Quaternary faulting along the Median Tectonic Line of Southwest Japan. Mem. Geol. Soc. Japan, 18, 79-108.
- 岡田篤正・堤 浩之(1997):中央構造線活断層系父尾断層の完新世断層活動—徳島県市場町でのトレンチ調査—. 地学雑誌, 106, 644-659.
- 堤 浩之・岡田篤正・後藤秀昭・松木宏彰(2000):中央構造線活断層帯川上断層の完新世後期における活動履歴. 活断層研究, 19, 77-86.

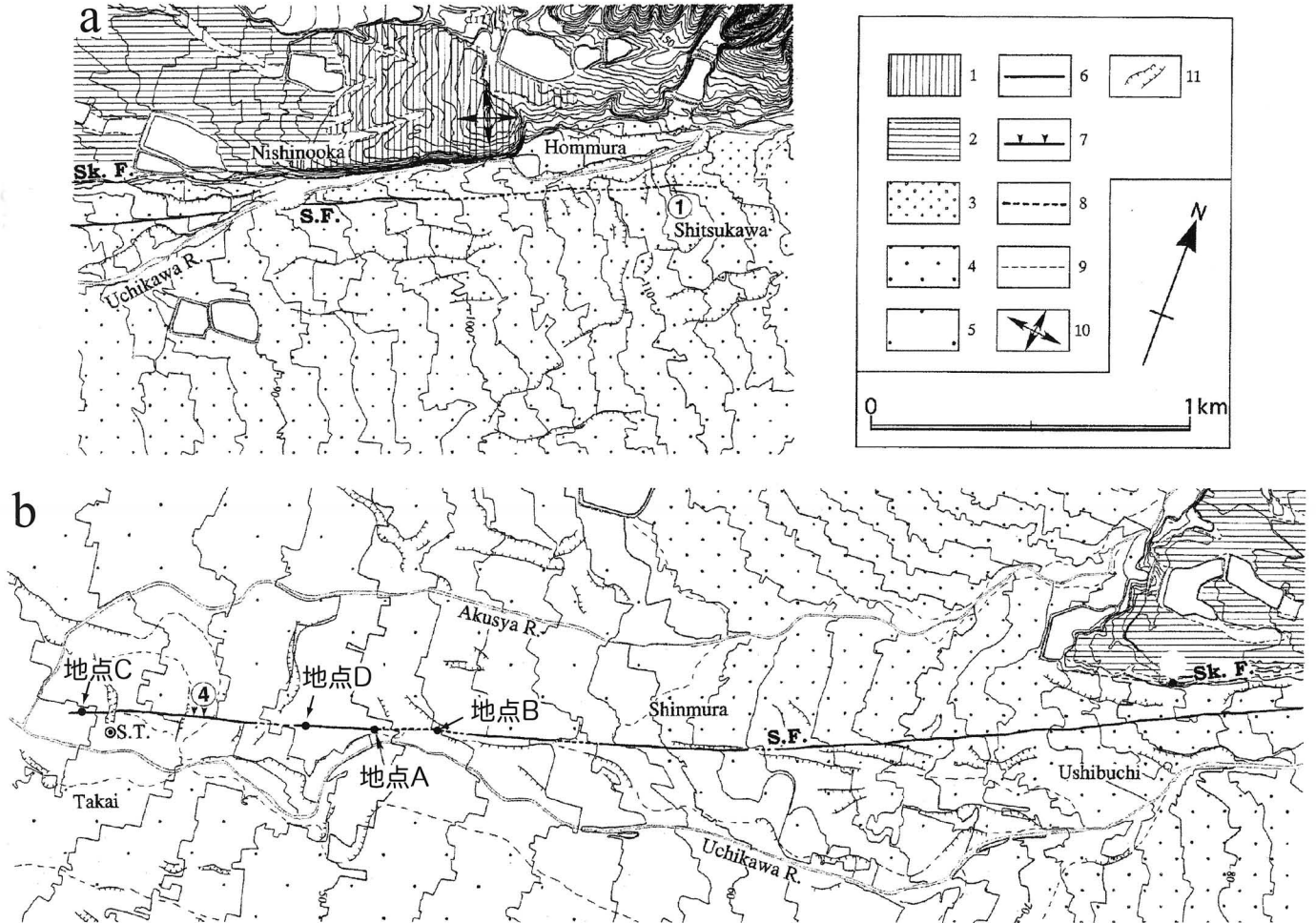


第151図 四国北西部の地質と活断層の分布

1. 沖積層, 2. 段丘・旧期扇状地堆積物, 3. 郡中層・岡村層, 4. 石鎚層群, 5. 久万層群, 6. 和泉層群上部, 7. 和泉層群下部, 8. 領家花崗岩類, 9. 領家変成岩類, 10. 三波川結晶片岩類

M.T.L.: 中央構造線, O.F.: 岡村断層, Kw.F.: 川上断層, S.F.: 重信断層, I.F.: 伊予断層, Km.F.: 米湊断層, S.B.: 桜樹屈曲, I.P.: 犬寄峠. 永井浩三ほか (1967) を簡略化して作成

後藤・中田 (2000) に加筆



第152図 重信断層周辺の詳細地形分類

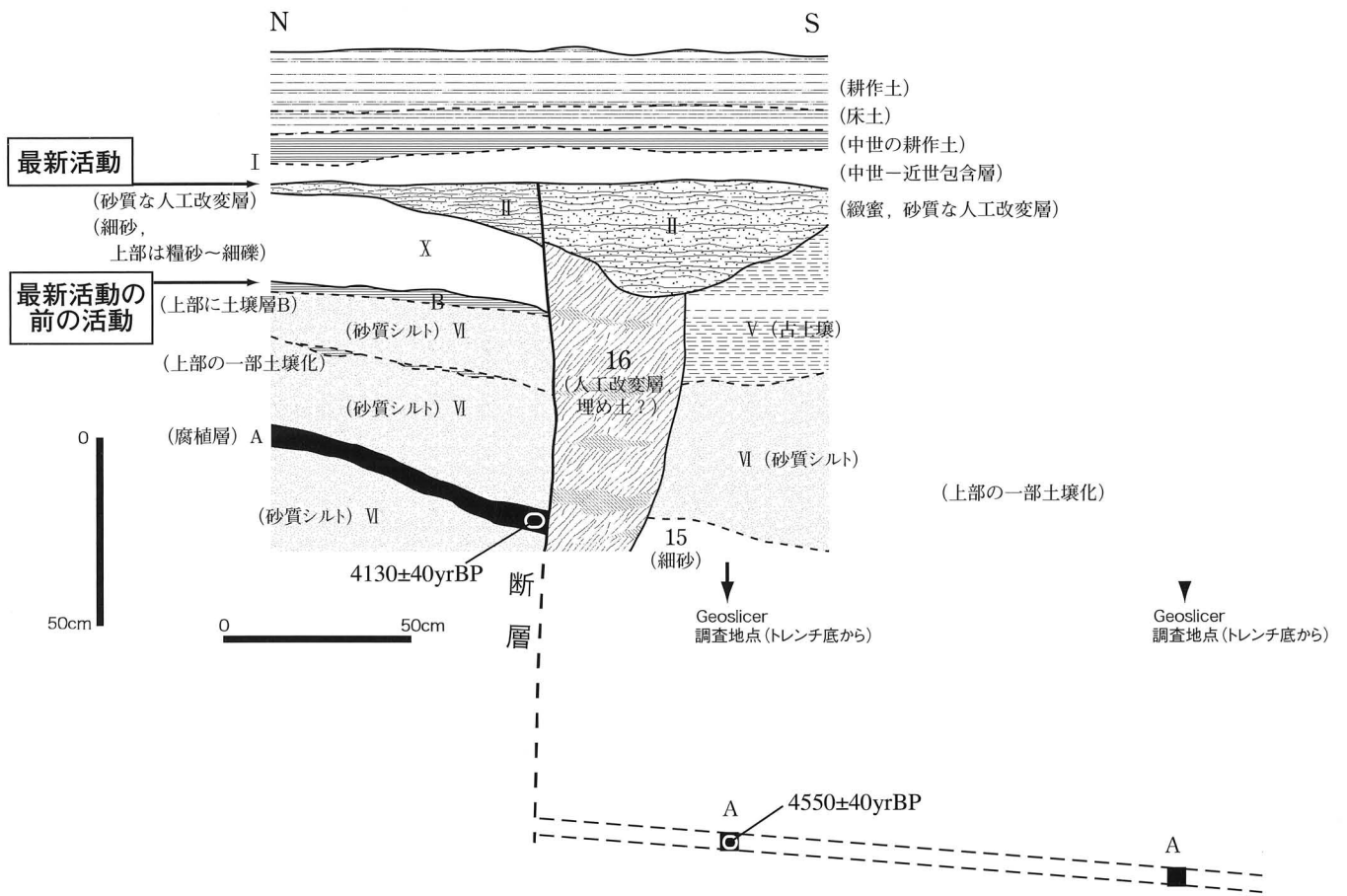
1. 中位段丘1面, 2. 中位段丘2面, 3. 低位段丘2面, 4. 低位段丘3面, 5. 低位段丘4面, 6. 低断層崖, 7. 撓曲崖, 8. 活断層 (位置不明確), 9. 活断層 (推定), 10. プレッシュャーリッジ, 11. 旧河道・侵食崖,  
 S.F.: 重信断層, Sk.F.: 重信北断層, S.T.: 西林寺  
 地点A-Cは古地震調査の行われた場所 (地点A: 後藤ほか, 1999; 地点Bおよび地点C: 愛媛県, 1999)  
 地点Dは本遺跡調査の場所

後藤ほか (1999) に加筆



第153図 発掘地点周辺のステレオ空中写真

矢印は断層を示す。国土地理院撮影S I-67-3 X, C13-7~8を使用  
 後藤・中田 (2000) に加筆



第154図 高井遺跡1次調査地5B区東壁に現れた重信断層周辺のスケッチ

表66 放射性炭素年代測定結果

Sample No.	Material	Labo. No. IAAA- *	$\delta^{13}\text{C PDB}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ age** (yrBP $\pm 1\sigma$ )
04101401	humus	41039	-22.94	4130 $\pm 40$
04101402	humus	41040	-22.94	4550 $\pm 40$

\*測定方法はAMS法, 測定機関は加速器分析研究所. \*\* $^{14}\text{C}$ 年代値は $\delta^{13}\text{C}$ で補正し, I半減期はLibbyの5568年を用いた.

## 第12章 調査の成果と課題

今回報告した4遺跡7次調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。松山平野南東部の松山市水産町、高井町、南高井町では、これまで開発に伴う発掘調査はあまり行われておらず、遺跡の存在はもちろん、集落様相や旧地形など解明されていない地域であった。今回の市道水産南高井線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査により、当該地域における遺跡の様相が明らかになってきた。ここでは、調査地全体をとおして遺跡の様相を地形変遷と集落変遷とで時代別に整理し、まとめをおこなう。

### (1) 地形の変遷

調査地は小野川、悪社川、内川の3河川によって形成された扇状地上に立地する。現況では調査地北端、平井遺跡2次調査地が最も高く、標高約52.4mを測り、南側へ向けて傾斜をなし、調査地南側、南高井遺跡2次調査地では標高約48.5mを測る。

調査地が南北に長い形状をなし、全長約1.7kmに及んでいることや、各遺跡に堆積する土層（土質・土色）が異なっていることから便宜上、中世、古代、古墳時代、弥生時代の堆積層または水田や畑耕作に伴う耕土をそれぞれ第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層として基本層序を設定した。

#### ① 弥生時代以前

弥生時代の遺構検出面である第Ⅵ層は、主に黄色を呈するシルト層で調査地南側を除く地域で検出した。本層上面は調査地北側から南側へ向けて傾斜をなし、調査地北側では標高約51.4m、南側では標高約47.8mを測り、標高差3.6mを測る。なお、第Ⅵ層下には前述した3河川の氾濫に起因すると考えられる砂礫層を検出した。

#### ② 弥生時代

弥生時代の遺物包含層である第Ⅴ層は茶色から黒色を呈する粘質土で、調査地北端、平井遺跡2次調査地と調査地中央部、高井遺跡1次調査地で主に検出された。特に、平井遺跡2次調査地では50cm前後と比較的厚い堆積がみられ、安定した地盤を形成している。それに伴い、弥生時代後期後半から末に時期比定される遺構や遺物が検出されたことから、同遺跡周辺には該期の集落が営まれていたことがわかる。

#### ③ 古墳時代

古墳時代の堆積層である第Ⅳ層は暗褐色から黒褐色を呈する粘質土で、調査地中央部から南側の地域に堆積がみられた。特に、高井遺跡1次調査地では厚さ40cmを測る。なお、高井遺跡1次調査地では古墳時代後期の竪穴式石室や掘立柱建物址、土坑、南高井遺跡2次調査地では古墳時代前期の土坑を検出した。このことは、古墳時代において、調査地中央部付近が居住域または墓域として土地利用されたものと推測される。

#### ④ 古代

古代においては第Ⅲ層が堆積し、地表面を形成する。第Ⅲ層は土質、土色の違いにより7層に分層される遺跡があり、特に調査地南側にある南高井遺跡2次調査地や3次調査地では厚さ40cm以上の堆

積をなし、安定した地盤を形成している。その結果、南高井遺跡2次調査地では水田耕作に伴う畦畔や溝、鋤址が確認されたほか、調査地中央部やや北寄り、水泥遺跡1次、2次、3次調査地においても多数の鋤址を検出した。このほか、小野川から内川までのエリアでは古代、飛鳥時代から奈良時代にかけて多数の流路が存在する。このことから、古代において、調査地内には部分的に流路が流れ、その中で人々は水田耕作や畑耕作を営んでいたものと考えられる。なお、高井遺跡1次調査地では石室や掘立柱建物など古墳時代の遺構が検出されていることから、本来、同エリア内に存在していたと思われる第Ⅳ層や第Ⅴ層は、これらの流路により削平された可能性が高いものと考えられる。

#### ⑤ 中世

中世では調査地全域に、中世段階の堆積層である第Ⅱ層を検出した。調査地北側、水泥遺跡1次、2次調査地と調査地南側、南高井遺跡2次、3次調査地では水田が営まれ、調査地中央部、水泥遺跡3次調査地や高井遺跡1次調査地では畑が営まれている。水田埋土や検出層位から、少なくとも2時期以上にわたり、継続的に水田や畑が営まれ、調査地ほぼ全域が生産域として土地利用されていたことがわかる。

## (2) 集落の変遷

### ① 弥生時代

調査地内において、集落経営が始まる時期である。遺構、遺物は主に調査地北側、平井遺跡2次調査地と調査地中央部、高井遺跡1次調査地に分布する。これは第Ⅵ層の堆積に起因するものであり、土地の安定化に伴い集落が形成されたものといえる。

平井遺跡2次調査地で検出した弥生時代の遺構は、溝2条、自然流路4条、性格不明遺構1基である。これらの遺構内からは弥生時代後期後半から末に時期比定される遺物が出土した。一方、高井遺跡1次調査地ではピット内や第Ⅴ層中より弥生時代後期に時期比定される遺物が出土した。竪穴式住居址は未検出であるが、平井遺跡2次調査地の北方にある下苅屋遺跡や古市遺跡で弥生時代の遺構が検出されていることから、同調査地を含め小野川以北の地域には、弥生時代集落が広く存在しているものと考えられる。

### ② 古墳時代

古墳時代の遺構は、調査地中央部から南側に点在する。検出した遺構は石室1基、掘立柱建物址1棟、溝11条、土坑12基である。特に、悪社川と内川に挟まれたエリアにある高井遺跡1次調査地では第Ⅳ層が安定して堆積しており、古墳時代後期の竪穴式石室や掘立柱建物址などが検出された。201号石室は長さ1.65m、幅1.02mを測る小型の竪穴式石室で、楕円形の墓坑に2段または3段の石積み遺存していた。石室内の出土品から、古墳時代後期後半、6世紀後半の築造と考えられる。掘立501は2間×3間を測る建物址で、建物を構成する柱穴内からは須恵器片、土師器片のほか、完形の耳環（銅製）が1点出土した。このほか、同遺跡内からは数条の溝や土坑を検出したが、概ね古墳時代後期の遺構と考えられるものである。このほか、南高井遺跡2次調査地では古墳時代前期の土坑を1基検出した。S K 203は1辺1mを測る円形土坑で、土師器の壺形土器が埋置された状態で出土した。底部には穿孔痕があり、形態の特徴から古墳時代前期前半の遺構と考えられる。

古墳時代においては、竪穴式住居址は未検出であるが、弥生時代と同様、石室や建物址等の遺構を検出したことより、少なくとも調査地南半部には古墳時代集落が営まれていたものと考えられる。こ

のことから、水泥町や高井町周辺に古墳時代集落が存在することが明らかとなった。

### ③ 古代

古代の遺構は、畦畔2条、鋤址20条、掘立柱建物址1棟、溝14条、自然流路8条、土坑4基、性格不明遺構3基である。このうち、畦畔は南高井遺跡2次調査地にて検出した。第Ⅲ③層上面にて南北方向に沿って直交する状態で検出され、幅30～50cm、高さ3～5cm程度の遺存であった。なお、畦畔に沿って幅30～60cm、深さ8～10cmを測る溝が検出された。水田の形状は方形区画を呈するものと考えられるが、稀少範囲の調査であるため規模は不明である。検出層位や出土遺物から、平安時代以前の水田址と推測される。このほか、同遺跡からは東西方向または北東-南西方向に流れる数条の溝を検出した。検出層位は前述の水田址とは異なっており、第Ⅲ③層や第Ⅲ②層上面から掘削されている。これらの溝も水田耕作に伴う可能性があり、古代における水田耕作は飛鳥時代から平安時代にかけて継続的に営まれた可能性が高いものと推測される。

### ④ 中世

中世の遺構は、溝22条、自然流路2条、土坑5基、性格不明遺構2基のほか、鋤址225条、畝溝44条である。遺構は調査地ほぼ全域にあり、その大半は水田や畑耕作に伴うものである。水泥遺跡2次調査地では、北東-南西方向及び北西-南東方向に直交する溝と、北東-南西方向の鋤址を検出した。溝S D401～408は幅10～90cm、深さ2～14cmを測るもので、灰色粘質土で埋没する。一方、鋤址は幅10～20cm、深さ1～6cmを測るもので、灰黄褐色土で埋没する。これらの溝や鋤址は、検出層位や埋土の違いから、少なくとも二時期以上の水田が営まれていたものと推測される。なお、溝の形状からは一辺7m程度を測る方形区画水田と推測される。このほか、水泥遺跡1次調査地や南高井遺跡2次、3次調査地では南北方向に掘削された鋤址を検出した。

水泥遺跡3次調査地と高井遺跡1次調査地からは、畑耕作に伴う畝溝を検出した。畝溝は水泥遺跡3次調査地では第Ⅲ①層上面にて北東-南西方向、高井遺跡1次調査地では第Ⅱ④層及び第Ⅱ⑤層上面から北西-南東方向に掘削されており、これらの状況から少なくとも三時期以上にわたり畑耕作が営まれていたことが考えられる。

### ⑤ 近世

近世の遺構は、水泥遺跡3次調査地より経塚1基を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長さ4.5m、幅3.6mを測り、検出面上、高さ1mまで盛土をし、表面には径1～8cm大の礫が敷き詰められていた。盛土中からは江戸時代の陶磁器片や瓦片が出土した。その一方では古墳時代後期の須恵器片は基底部付近の土層中から出土しており、経塚構築以前には古墳もしくは古墳に関する遺構が存在した可能性がある。

## (3) まとめ

今回の調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。今回の調査成果は、松山平野南東部の松山市水泥町、高井町、南高井町における埋蔵文化財の有無や様相及び旧地形を復元・解明するうえで貴重な資料となる。特に、古墳時代においては石室の検出、古代では7世紀代の自然流路をはじめ、飛鳥時代から平安時代まで営まれたと考えられる水田遺構の検出、さらに中世では水田や畑遺構の検出など、様々な時代の遺跡様相が明らかとなった。また、高井遺跡1次調査で検出した断層跡は、広島大学 後藤英明准教授の指導により重信断層と呼ばれる活断層であることが判明した。発

掘調査の成果と分析の結果、断層の最新活動時期は中世から近世以前、最新活動時期以前の活動は古墳時代であることがわかった。

一方、古代や中世における水田の形状や規模など、稀少範囲の調査であったため、それらの解明には課題を残す結果となった。今後、調査地周辺における調査事例の増加により、遺跡様相をさらに明確にし、集落動態や変遷、及び生産遺構等の解明が急務となる。



写 真 图 版

## 写真図版データ

1. 遺構は、一部については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影しているが、大部分は35mm判による。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85mm他
フィルム	白黒	ネオパンSS・アクロス	
	カラー	RAP-F	

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G	
レンズ	ジンマーS240mm F5.6他	
ストロボ	コメット/C A32・C B2400	
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101	
フィルム	白黒	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RCペーパー

- |       |          |
|-------|----------|
| 4. 製版 | 写真図版175線 |
| 印刷    | オフセット印刷  |
| 用紙    | マットコート   |
| 製本    | アジロ綴じ    |

【参考】『埋文写真研究』Vol.1 1～18

『報告書制作ガイド』

[大西朋子]



1. 調査地全景（北より）



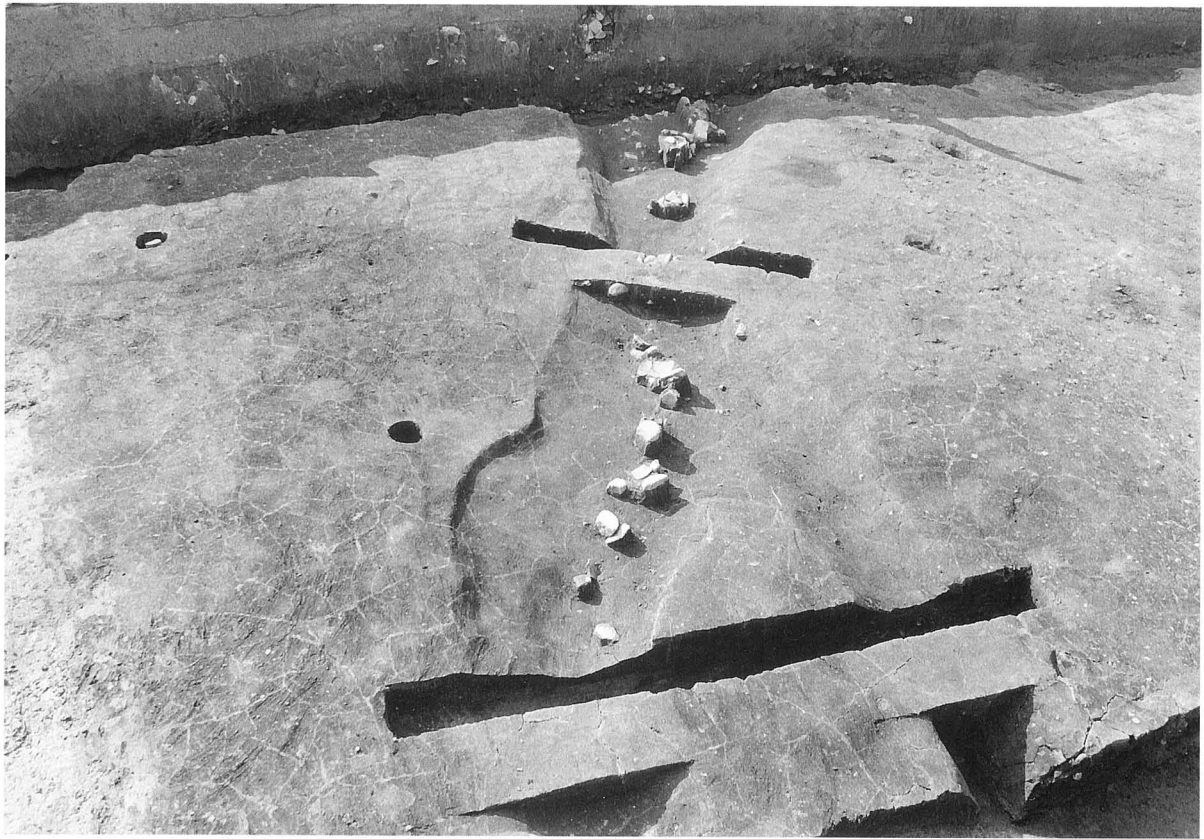
2. 東壁土層（西より）



1. 遺構検出状況（北より）



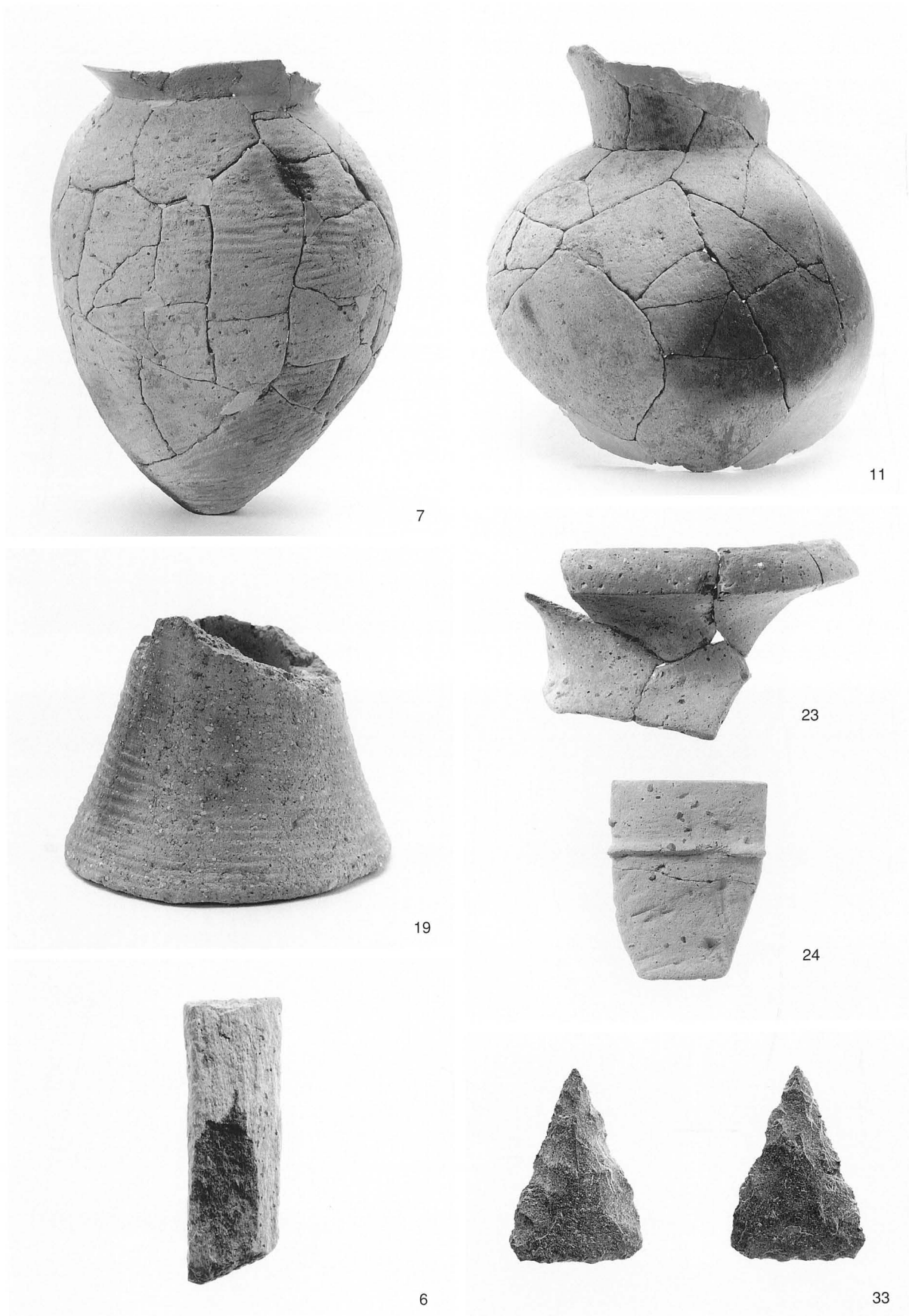
2. 完掘状況（南より）



1. S D 101検出状況（東より）



2. S X 101検出状況（西より）



1. 出土遺物 (S X101 : 7・11・19、S R101 : 6、第V①層 : 23・24、地点不明 : 33)



1. 調査地全景（北より）



2. 3区東壁土層（南西より）



1. 1区完掘状況（北より）



2. 2区完掘状況（南より）

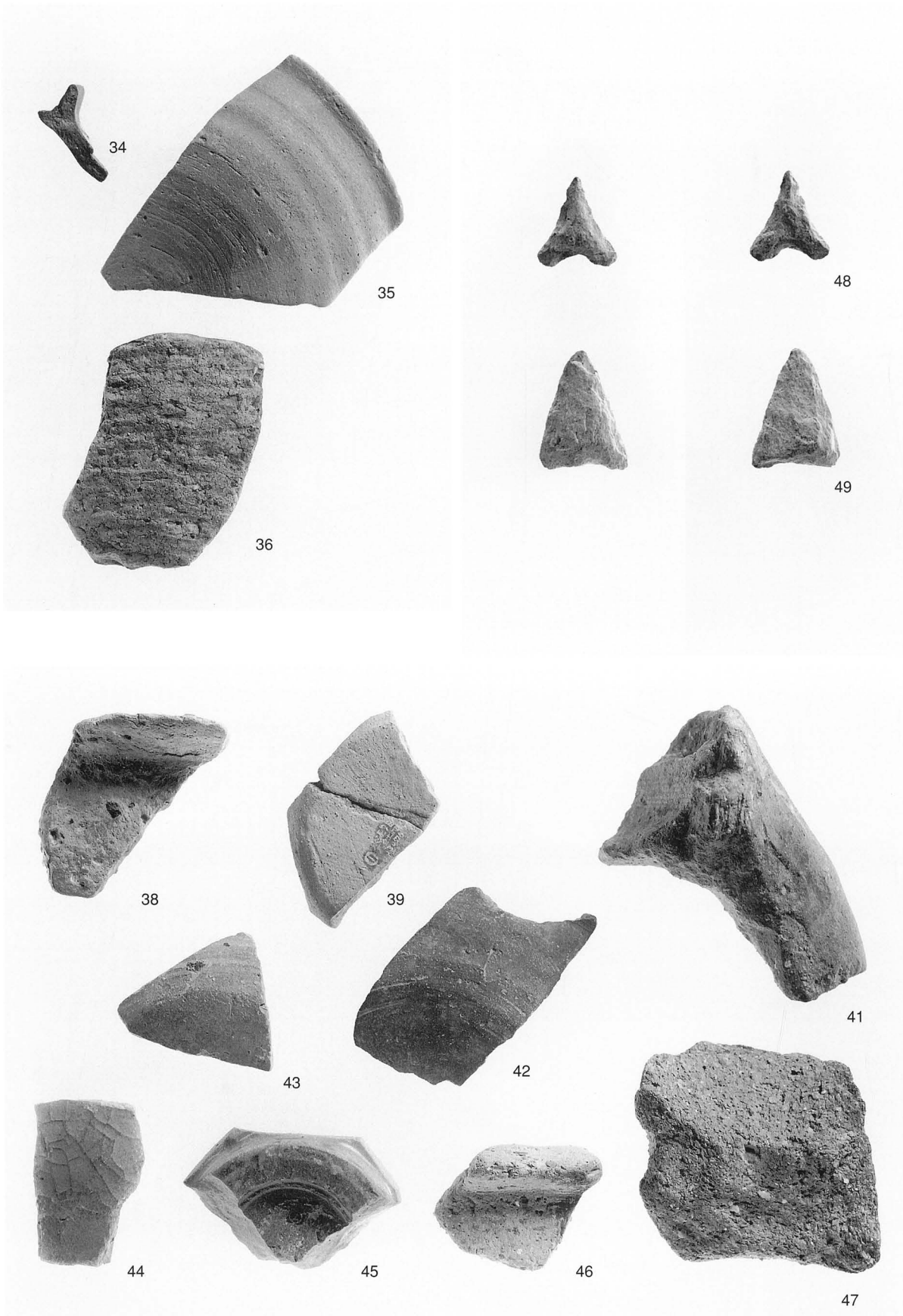




1. 3区完掘状況（南より）



2. 4区完掘状況（南東より）



1. 出土遺物 (S D 301 : 34~36、第Ⅱ②層 : 38・39・41~49)



1. 調査地全景（北より）



2. 4区西壁土層（東より）



1. 1区完掘状況（南より）



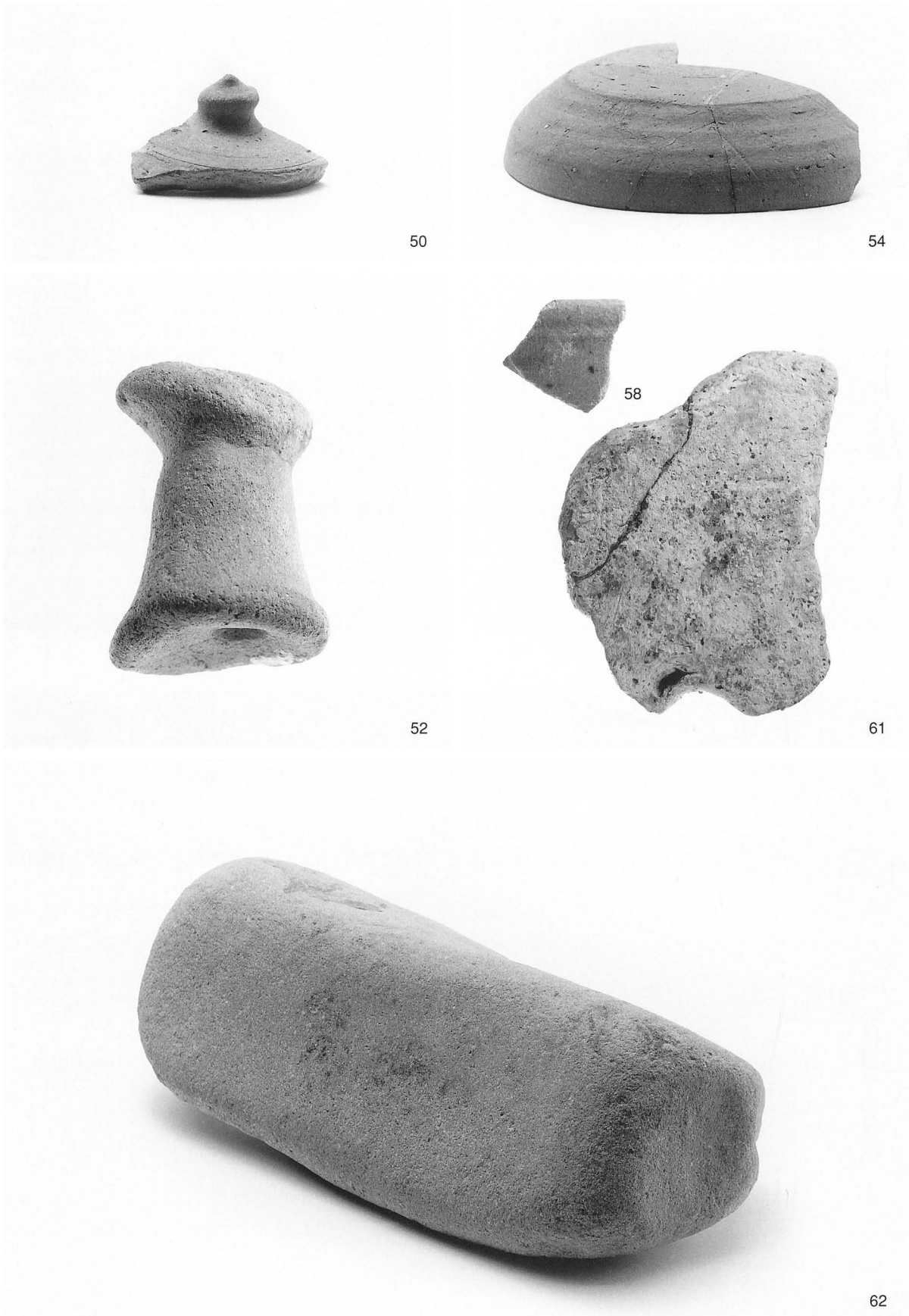
2. 2区完掘状況（南より）



1. 4区遺構検出状況（南より）



2. 4区完掘状況（南東より）



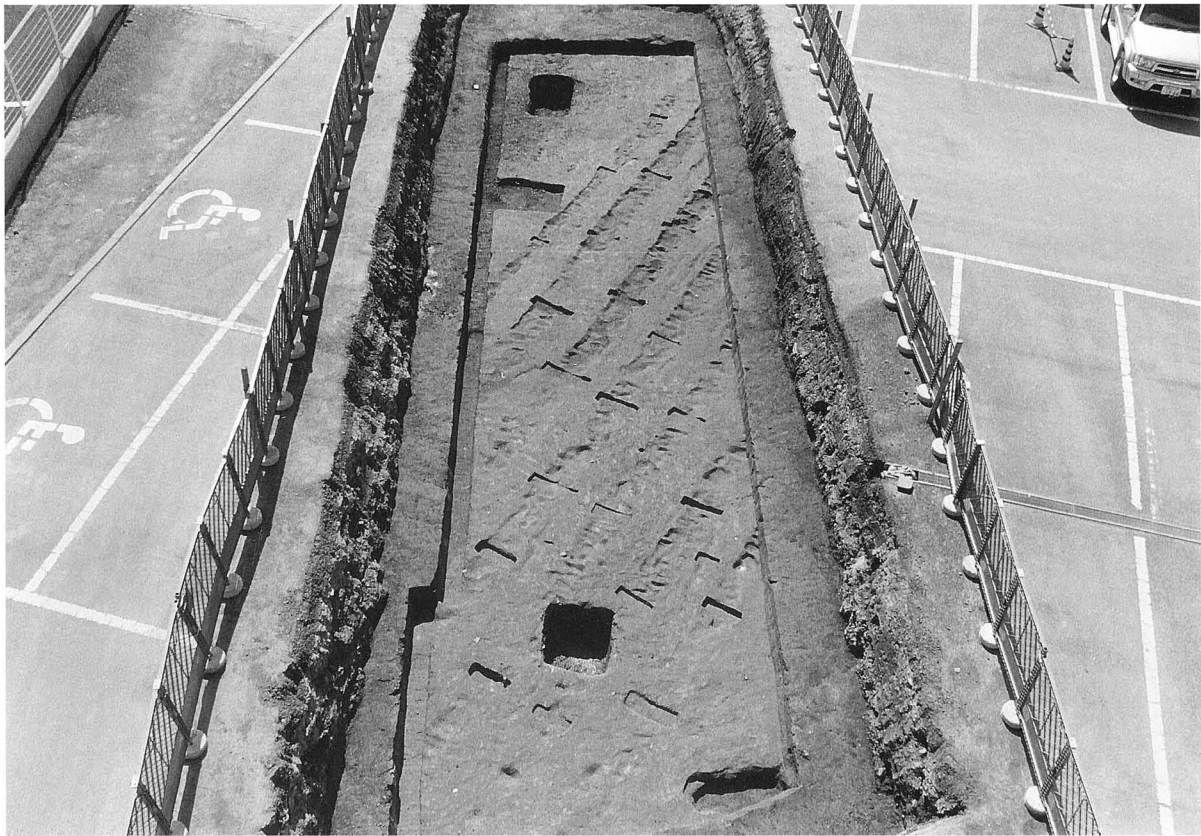
1. 出土遺物 (S R 201 : 50・52、第Ⅲ①層 : 54、地点不明 : 58・61・62)



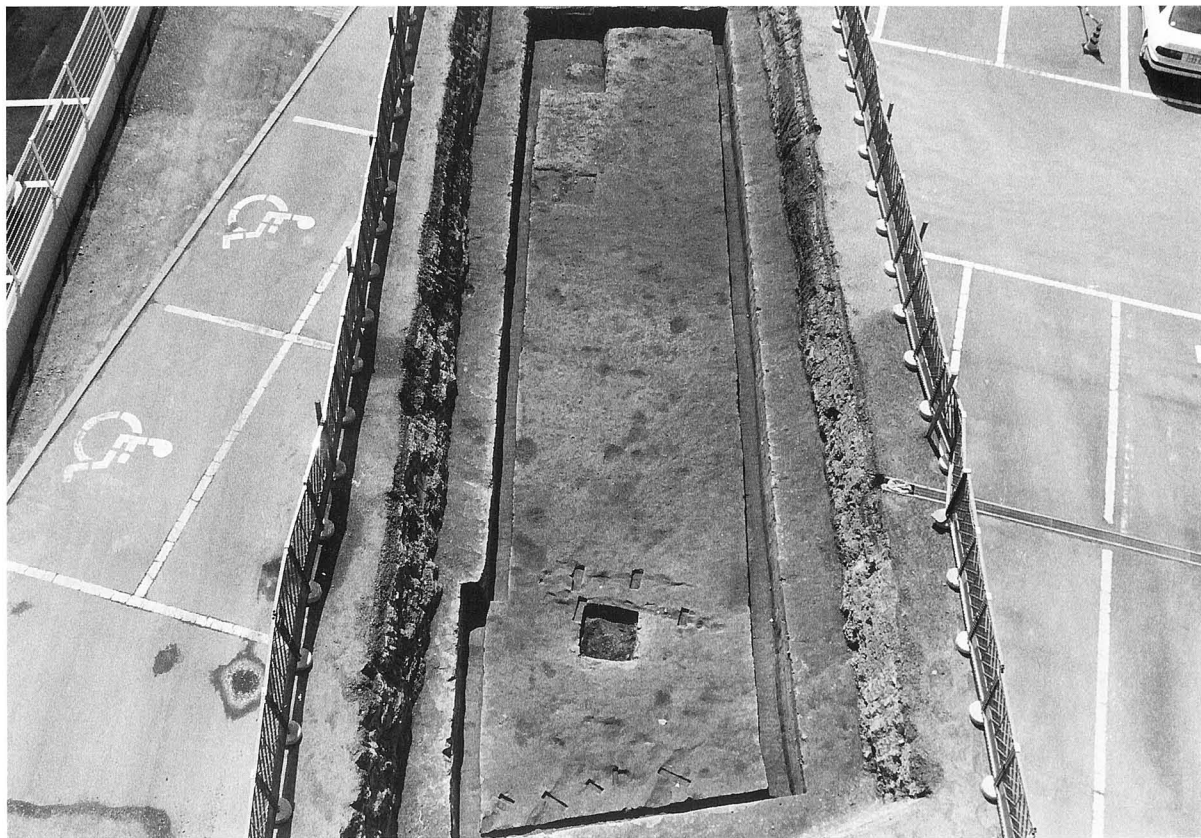
1. 調査地全景（北より）



2. 1区東壁土層（西より）



1. 1区完掘状況(1)(北より)



2. 1区完掘状況(2)(北より)





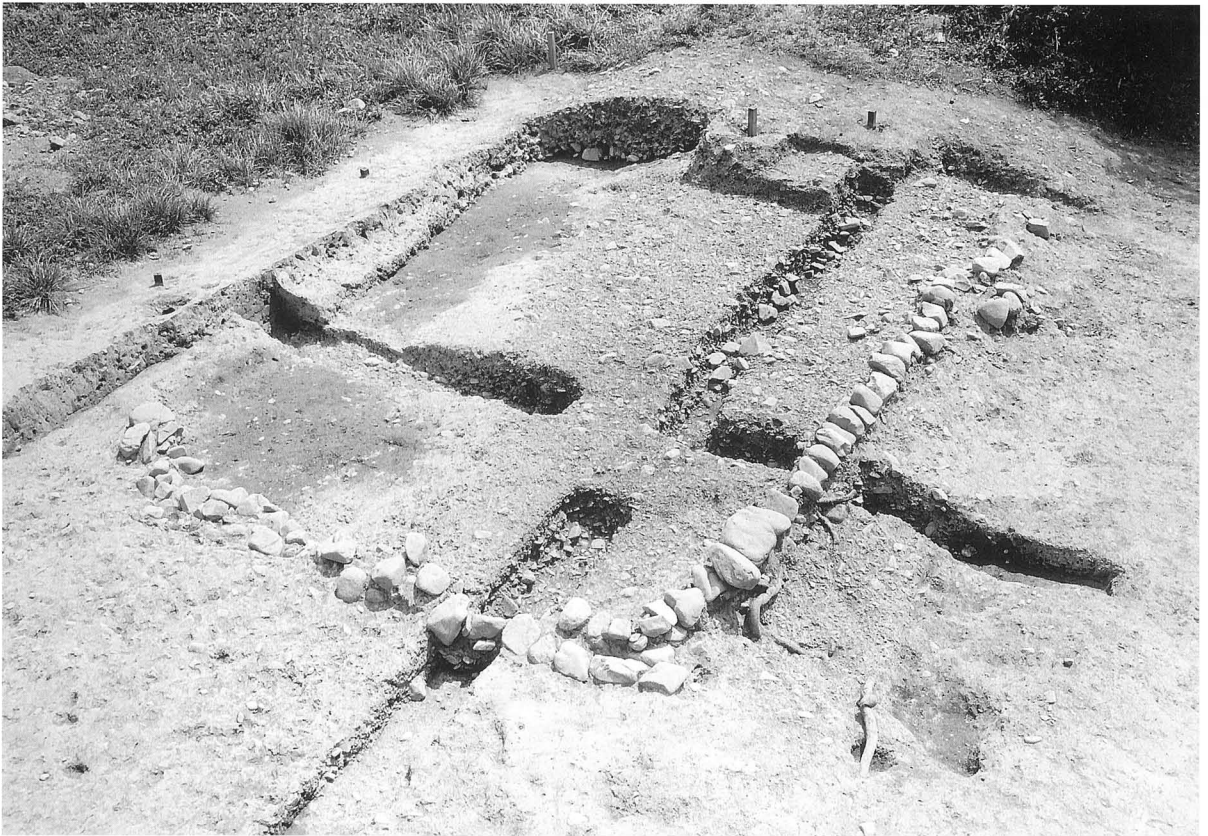
1. 2区完掘状況（北より）



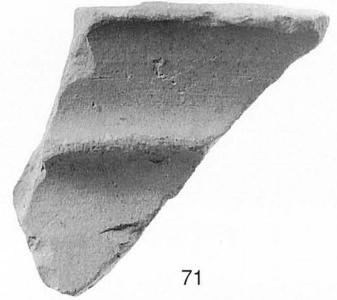
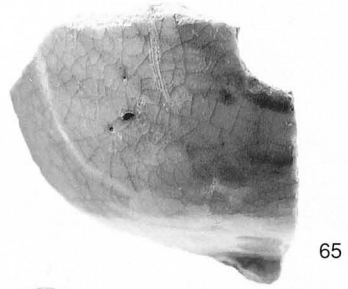
2. 301号経塚検出状況（東より）



1. 301号経塚半截状況（南より）



2. 301号経塚最終面検出状況（南西より）



1. 出土遺物 (S D 202 : 63、301号経塚 : 65~67・70・71、骨 1、第IV層 : 74、地点不明 : 79)



1. 調査地全景（北より）



2. 1D区東壁土層（西より）



1. 1B区完掘状況（北より）



2. 1D区完掘状況（南より）



1. 1E区完掘状況（南より）



2. 1C区完掘状況（北より）